
SAO 戦士達の物語

鳩麦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S A O 戦士達の物語

【Nコード】

N 5 5 9 3 T

【作者名】

鳩麦

【あらすじ】

・この物語は電撃文庫より発売中のライトノベル、「ソードアート・オンライン」の二時創作小説です

・この物語はフィクションです、実際の人物、団体（以下略）
・オリジナル主人公メインの物語ですが、基本ストーリーは原作に乗っ取ります。

・キャラ間の視点変更時、side等
の警告は作者の望む作品の雰囲気上、存在しません。あしからず。

- ・ 主人公はやけに強いです。（要は俺TUEEEEEEEEEEE有り
- ・ 作者の自己解釈による語り（？）が入る可能性があり、読者の方
- ・ にとって納得の出来ない解釈が成されるかもしれません。

プロローグ

それは、とある世界の物語。

この現実と言う世界にとても近い場所に有り、同時に果てしなく遠い場所にある世界の物語。

……昔から、ゲームは好きだった。

きっかけは、何だっただろうか……多分、両親が離婚した時だったと思う。

何でも、単なるすれ違いだったそうだ。別にお互いに憎しみ合ったわけでもなく、でもあっさり、さっぱりと離婚した。……子供がいたのに。

別に恨んでいるわけではないが、後々の事をもう少し考えてほしかったとは今でもたまに思う。

まだ五歳と幼かった俺と年の離れた姉は母方に引き取られ、その頃から俺は父親がいない寂しさを紛らわすように、ゲームを始めた。俺がゲームを始めるようになった時にはもうグラフィックなんかもちよっとしたもんで、俺はそれから、勉強そしてゲームを立てる事を目的に生きていた。

その内に、コンピュータにも興味が出て来て、俺はどんどんデジタルの世界が好きになった。

将来は苦勞をかけた母に、この技術で恩返ししよう決めていた。

中学二年生の夏、その母が死んだ。

それまでの無理がたたったせいか、ある日突然倒れ、そのまま遺言みたいな事を言っただけという間に逝ってしまった。

身寄りを亡くした俺達姉弟はどうなったかと言うと、姉は既に大学生で、自分で生きていけるからと母の貯金と保険金を殆ど俺に譲ってくれた。そして俺は、母の兄の家に転がり込んだ。

この叔父たちも良い人たちで、既に子供に二人の兄妹がいるにもかかわらず、俺の事を快く迎え入れてくれた。

此処から俺は、母へしようと思っていた分までこの人たちに恩返ししようと思ひ、ますますデジタルの世界に入り込んでいった。

家の兄妹二人とは幼いころから仲が良く、特に俺とは二つ下の兄の方は俺に負けず劣らずデジタルっ子で俺とも良く話が合ったし、彼らの母親もその手の方向の人間だったので資料等や話し相手に困る事もあまりなく、俺はどんどんと知識を蓄えていった。

その甲斐あってか、俺は中学を卒業する時には姉の通う大学のその手の専門講師と同じくらいか、それ以上にコンピュータには詳しくなっていた。(姉曰くだが)
そして、その全ての意欲の根本になっていたのはゲームだと言っていい。

だからこそ……だろう。

俺がSAO……「ソードアート・オンライン」と言う名の世界初のVRMMORPGに引き込まれたのは。

プロローグ（後書き）

どうも、作者の鳩麦です。

さてこの作品ですが、もともとは、

友人「なんか二次書いてみないか？」

鳩麦「なんだ突然」

友人「いやなんとなく」

こんな流れで、書店をぶらついていたらSAOと出会いました、そこから始まった物語です。

まだまだ未熟な点多く、お目汚しになるところも多いかと存じますが、作者自身も研究して、徐々にでもよい作品に仕上がるよう努力しますので、よろしく願います。

ご意見ご感想お待ちしております。

一話 楽園（前書き）

とりあえずは、プロローグと一話を投稿です。

一話 楽園

2022年11月6 san 午後4時42分頃

「らっあー!!」

振り下ろされた白いライトエフェクトを纏った両手槍が敵モンスターの紫色で丸太のような身体をまともにとらえ、赤いエフェクトが飛び散る。

敵モンスター、名称「ワーム」は苦しげに身体をのけ反らせ、ほんの少しの時間硬直する。俺はそのままライトエフェクトの消えない槍を、振り下ろした勢いを殺さずに身体ごと回転させ、連撃を見舞う。

重両手槍、初級連撃技「クロス」

槍を文字通り十字を描くように縦横に薙ぎ払う技で、初級の技だが一発の威力がなかなか高く、二撃とも命中すれば相手を若干硬直させる事が出来る優秀な技だ。

……外すと隙がでかく、ほぼ間違いなく一撃もらうのが玉に傷だが。

瞬間、ワームの頭上のHPバーが消滅し、ワームはのけ反った体制のまま一瞬硬直すると、ガラスを割り砕くような音と共にその身体を完全に消滅させた。

「…………ふう」

だいぶ剣技ソードスキルにも慣れてきたか。とか思いつつ、俺は槍を地面に突き立てて指先の人差し指と親指を揃えて縦に振り、緑色のメニューウィンドウを開く。

俺がこのゲームに入ってから、そろそろ四時間近くが経とうとし

ていた。

その間に俺は、初めて使うソードスキルの初動をほぼ完璧にマスターしていて、モンスターとの戦いも慣れた物になってきていた。(それが結構凄い事だったと理解するのはだいぶ後になってからなんだが。)

『そろそろいったん戻って、手に入れたドロップ品を売るのもいいか。』

だいぶ溜まってきたモンスターの素材などを見ながら、俺はそんな事を思いメニューから顔を上げ……と。

「ん？」

再びメニューに顔を戻す。なんとなく、さっきまで見ていたメニュー画面との微妙な違和感があった様な気がしたからだ。

……が、すぐには「それ」に気がつけなかった。当然「それ」が、俺がどうしようもなく不幸な事件に巻き込まれている事を知らせている事にも、俺は気がつくわけも無かった。

第一層の主街区、「始まりの町」

ファンタジーゲームの代名詞を思わせる、中世ヨーロッパ風のレンガと木で造られた建築物が大通りから裏通りの細い路地まで軒を連ね、このゲームの中で、名実ともに全てのプレイヤーが最も初めに訪れる事になる町だ。

そこは、今も今とてたくさんプレイヤーやNPC商人の声で賑わっていた。

皆、今日正式サービスが始まったばかりのこのSAOの世界を存分に楽しんでいる。

「これが仮想だなんてなあ……」

信じられない。そう思ってしまうほどこの世界はリアルだ。

建物や草木や人々等、目に見えるものはもちろん。足の裏の石の感

触や、屋台の旨そうな臭い、回復用ポーションの味まで。唯一NPCが奏でる街のBGMと、上を見上げると存在する巨大な鉄の天幕以外に此処がバーチャルな世界だと感じる外部からの刺激はほとんどない。恐らく、このゲームの舞台である浮遊城アインクラッドの全百層全て、いや、それがこの世界なのだ。

それは自分の身体にしても同様だ。アーガス社が開発した、「ナーヴギア」と言うヘッドセットをつけることで「完全ダイブ」と呼ばれる状態に入ったプレイヤーは、現実世界の自分の肉体から抜け出し、この世界での肉体を持つことになる。

分かり易くに言うなら、現実の世界で自分の脳から身体へと送り出された電気信号がナーヴギアによって脊髄に伝わる前に延髄でデジタル信号に変えられて、現実の身体の代わりにこの世界での自分の身体を動かすのだ。

そしてその、現実との完全な隔絶によって作り出されたこのバーチャルの世界で、何千、何万ものプレイヤーが共に冒険することができる。そんな数年前まで空想の話でしか無かった様な事を今俺は、世界初という早さで自分の身をもって体感している。

ちなみに、今日は初回限定の一万本を買う事の出来た者たちしかこの世界には入ってきていない。そしてその一万人は大体が、このゲームソフトを買うために徹夜してまで並ぶような重度のネットゲーム中毒者だ。かく言う俺も学校休んでまで土曜発売ソフトをの木の曜から二日間並んだので人のことは言えないのだが……。

まあ、それだけの魅力があるソフトだったのだ。そして期待通り、この世界は俺達ネットゲーマーにとって正に「楽園」だった。

だがしかし
駄菓子菓子。

俺のその認識はすぐに真逆の認識にすり替わる事になる。
その最初のきっかけは、そんな事を思いながら従兄弟に教えてもら
っていた安売り武器屋の戸を叩こうとした時だ。

一話 楽園（後書き）

はい、鳩麦です

さて、ここまで読んでいかがだったでしょうか。

自分的にはやや説明的な感じになっている感が否めないなとか思
ってるんですが……（なら直せって話ですね、スイマセン）

次もがんばり中です。

ご意見ご感想をお待ちしております。

二話 初めての友人（前書き）

今回は、説明会の前のちょっとした出来事です。

じいじ。

二話 初めての友人

俺が簡素な木製の扉のノブに手をかけ押し開こうとする……と、殆ど同時に内側から扉が開かれ、俺はそのままつんのめってしまふ。

「おっと！」

「うわっ！」

俺の声とドアを開けた人物の声とが重なる。

「すみません、まさか向こう側に人がいるとは……」

申し訳なさそうにしゃべっている声が聞こえ、そちらを向くと、シンプルで軽そうな革が主体の鎧と、ヘルメットの様な頭の上部を守る兜に身を包んだ青年が立っていた。

人が良さそうな顔で、なかなかの美形だ。まあこの世界にいる人間は皆作られたアバターなので、むしろブサイクに遭遇する方が難しいが。(それどころか性転換している奴もいるから性質が悪い)

「ああ、いや。俺も不注意でしたから、気にしないでください。」
俺はそう言っ頭を下げ、「では。」と通り過ぎようとする。が、

「あ、あの！」

急に呼び止められ、俺はあわてて振り返る。そこには先程の萎れた顔とは打って変わって目を輝かせている青年が居た。

「な、何か？」

突然全く違う雰囲気になった彼の前に俺は多少たじろぐ。すると。

「あ、いや、その武器もしかして、ドロップ品かなあ……って」

「え？あ、ああ、はい。」

うなずいた俺を見て青年は「やっぱり！」と、笑顔になる。

確かに今俺の持つ槍は、一時間くらい前に倒したモンスターからドロップした物だ。性能が初めに買った物より良かったので装備したのだが……

『見ただけで判別付くって……武器収集者 アームコレクタ か？』
話を聞くと、青年のHNはスデンリイハンドルネームというらしく。結論からい
えば俺の予想どおりだった。

何でも、他のMMORPGでも武器集めが趣味で、SAOでも、自分のメインで使う予定である槍だけでもなるべく沢山集めるつもりらしい。ちなみに、既に此処「始まりの街」の武器屋も回りまくった後なのだとか。

話を聞いて（まあほぼ聞き役だったが）俺はちよつと気になったことを聞いてみた。

「そんなに武器ばつか集めてどうすんだ？」
既にタメ語なのはVRMMOなればこそだろう。歳も近そうだったし。

「そりゃあ、僕だけの至高の一振りを見つけるのさ！何しろ、《剣がプレイヤーを象徴する世界》だからねー。今からどんな武器に出会えるか楽しみだよ！」
目を眩しいほどにキラキラさせながらスデンリイは言う。

《剣がプレイヤーを象徴する世界》と言うのは、SAOの歌い文句の一つで、文字通りこの世界にはそれこそプレイヤー一人一人が全員別々の武器を持てるほど多くの武器が設定されているらしい。それらを集めていけば、いずれ自分だけの一振りも見つかる。と言う事だろう。

「なるほどな。俺も探してみようかな、自分だけの一振り。」
「リヨウも？うん！絶対そうした方がいいよ！いや、そうしなきゃ

もつたいない！」

拳を握りしめて熱弁するステンリイに苦笑しながら、俺はステンリイとフレンド登録を提案した。

少し癖があるが、悪い人物ではないらしいし、こういうやつが知り合いにいるのも悪くないだろう。

ステンリイも快く了承してくれ、俺はめでたくこの世界に来て初めての友人を持つ事になった。

言い忘れていたが、俺のHNはリヨウコウという。みんなは略してリヨウと呼ぶが。

その後、俺は此処（武器屋）に来た本来の目的を思い出し、いったんステンリイと別れることにした。が、店の奥へ行こうとするとステンリイがこんな事を聞いてきた。

「そついえばその武器はどのモンスターから？」

元々それを聞くために話しかけて来たんだろう。いつの間にか有耶無耶になっていた初めの質問に、俺もステンリイも苦笑する。

「ああ、これは……」

俺が答えようとした、刹那、ステンリイのアバターが一瞬硬直し、ばしゃあ！と言うガラスを割り砕くような音と共に……消滅した。

「……は？」

二話 初めての友人（後書き）

はい、いかがでしたでしょうか。

色々と展開は考えたのですが……ぬう。

次回からは、萱場氏の説明会です。

いやあ、長いつす説明会。

ご意見ご感想お待ちしております。
ではっ！

三話 狂い始める世界（前書き）

どうもです。

では今回から、萱場さんの果てなき説明タイム入ります。

すげー長い……

三話 狂い始める世界

「……は？」

ステンリイが消滅した。目の前で起きた事実には俺は、突然の事で瞬間抜けな声を出してしまったが、すぐに正気に戻る。

今自分がいるのはあくまでネットゲームの中なのだ、突然回線の不具合で接続が中断されるなど、別にあっても何ら可笑しいことは無い。

「それにしても、このサーバー落ちの仕方は性質悪いな」
そう嘆きながら俺は苦笑する。

いくらただのサーバー落ちだと分かっているけど、目の前で突然人が消えるのは見て気分の良い物ではない。嫌な物を見たなと思うが、まあそのうち復帰して、フレンドメッセージが来るだろう。

結論付けて、俺はNPC相手にアイテムの売却を始める。
が、売却をしながら俺は何となく、背筋に拭いきれない霞の様な物を背負っていた。

『なーんか、嫌な予感がするっつーか、当たらないといいんだけど』

売却を終え店を出た俺は、とりあえずステンリイに連絡を取ろうとメニューウィンドウを開こうとした。

直後。

世界はその有りようを、
永久に変えた。

リンゴン、リンゴン

鐘のような音が鳴り響く。

「ん!？」

同時に、俺の周りを青い光の柱が包みこむ。

『強制転移!?!』

この現象は何度か見た事がある。プレイヤーが使用する結晶アイテムにやって引き起こされる。転移 テレポート だった。だが俺が何もしていないのに引き起こされたと言う事は、これは運営が使用した強制転移と言う事になるが……

そんな事を考えている内に転移が完了し、俺の視界は武器屋のある裏通りではなく、全てのプレイヤーがゲームをスタートさせる場所、「始まりの町」の中央広場が変わっていた。そしてそこには既に多くのプレイヤーが人混みを作っていた。間違いなく百人や千人では無い。もしかすると、ゲームのプレイヤー全員が……?

周りのプレイヤーたちは口々に、「これでログアウトできるのか?」とか、「早く返してくれよ」とか言っている。はて?

『ログアウトしたいならメニュー開けばいいのでは?』

そう思い、自身のメニューウィンドウを出現させるとあらびっくり、メニュー画面下部にあるはずの《LOG OUT》のボタンが綺麗に消えていた。と、俺はさっきの違和感の意味にやっと気がついた。

「つーか何で気がつかなかったんだ俺」

苦笑しつつボソツとそんな事を言っただけで視線を前に戻すと、プレイヤーたちはだんだん苛立ってきたようで、「ふざけんな」だの「さっ

さとしろ」だのと言った暴力的な言葉も出始めた。おお、怖い怖い。そして唐突に誰かが「あつ……上を見る！」と言った事で、皆が上を向き、広場は静かになった。

【Warning】

【System Announcement】

俺達の頭上には真っ赤なフォントでそんな文字が表示されていた。それは紛れもなく、システムを管理する運営側からのアナウンスが始まることを示している。誰もが、これで万事解決だと、そう思った。

そしてそんな皆の予想は、物の見事に裏切られることになる。主に、いや。全面的に悪い意味で。

空に、血のように赤いローブの巨人が出現した。ただし、顔無しだが。

『ああ？』

不気味なローブの男をみて、他のプレイヤーたちも次々に疑問の声を上げる。そしてざわつき始めたプレイヤーたちを圧するようになり、低く、良く通る（システムのおかげだと思うが）男の音が、頭上から降り注いだ

「プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ」

『私の世界？何言ってるんだこいつ。』

俺は反射的に疑問を持った、私の世界って、まるで自分個人の世界の様な言い草だ。運営側のアナウンスが言う言葉としてどうなのかと思っただが、そんな俺の疑問はしかし、あつという間に消え去る事になる。

「私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ」

「なっ………！」

俺は耳を疑った。茅場晶彦だと!?

俺は一度、色々あって茅場に会った事があった、そして今日の前にいる妖怪顔無しフード男の話し方は、紛れもなく茅場晶彦だ。ゲームデザイナーで量子物理学者、ナーヴギアの基礎設計者でもあり、若き天才と名高いあの茅場の話し方その物だった。だが……

『何やってんだ……あのオッサン? (失礼っ!) っていうか……』
あの男は人前に出て目立つ事を極端に嫌うタイプのはずだ、それがこんなところでいったい何を?

そんな事を思ってる間にも茅場のアナウンスは続く。

曰く、ログアウトボタンが消えているのは本来の仕様だの、今後この城の頂を極めるまで自動的にログアウトはできないだの……って『本当に何言ってるんだ?』

意味不明だ、わけがわからない。こいつは何を言ってる? そんな俺のパニックは無視して茅場の話は続く。

「……また、外部の人間の手による、ナーヴギアの停止あるいは解除も有り得ない。もしそれが試みられた場合」
ほんの一瞬、息継ぎをするように間が空く、だが俺達は全員息を止めていた、そして。

「ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが、諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる。」

空気が凍りついた。冗談だと、そう思いたかった、だが俺は、残

念ながら即座にそう思う事が出来なかった。ナーヴギアは、大きなバッテリーを内部に埋め込んであり、人間の脳を焼き尽くす事など朝飯前だと、その事実を俺は知っていたからだ。

そしてその一瞬に出来た間は、俺自身の頭のどこかに、茅場の言っている事が事実だと突き付けていた

他のプレイヤーもざわつき始める、しかしその顔は一様に青ざめていて、恐怖と不安に満ちた顔だ。茅場のアナウンスは続く。

「より具体的には、十分間の外部電源切断、二時間のネットワーク回線切断、ナーヴギア本体のロック解除または分解または破壊の試み 以上のいずれかの条件によって脳破壊シークエンスが実行される。この条件は、すでに外部世界では当局及びマスコミを通して告知されている。ちなみに現時点で、プレイヤーの家族友人等が警告を無視してナーヴギアの強制除装を試みた例が少なからずあり、その結果」

そこでアナウンスにひと呼吸が入る、同時に、俺はその先を無性に聴きたく無くなった、絶対に聞いてはいけないような気がした。しかし容赦なくアナウンスは続き、俺はその先を、聴いてしまった。

「 残念ながら、既に二百十三名のプレイヤーが、アインクラッド及び現実世界からも永久退場している。」

どこかで細い悲鳴が上がり、俺はその瞬間背筋に強烈な寒気を覚えた。

該当するかもしれない例を、俺は知っていたからだ。そして俺は必死に、先程消えたそいつ…… スデンリーの姿を周りを見回して探す。皆頭上を見上げているため、顔を確認するには困らないが、それでも一万人は数が多すぎる。全員を確認するのはとても無理だ。だが

俺はそこで、簡単にステンリーの行方を知る方法に気がついた。

『そうだ！フレンドリスト！』

即座に俺はメニュー画面を開きそこからフレンドリストを見る操作をしようとした、が、そこで手が止まる。

言いようのない不安と、恐怖が俺の手を動かす事を拒んでいる。

あり得ない、そう思いながらも拭いきれない恐怖を無理矢理振り切つて、俺は指を動かし、そして、見てしまった。

フレンドリストに唯一登録されたステンリーの名前が、連絡不能を表すグレーに染まっているのを。

「あ……」

自分の出した、悲鳴とも嘆きともつかない声が、ざわつきの中で妙に大きく聴こえた気がした。

世界が、狂い始める。

三話 狂い始める世界（後書き）

はい、いかがでしたでしょうか。

前半のフレーズは原作そのままです。

やっぱり必要性があると思ったし、雰囲気的にもびったりだったので。

というか、なんか、一人称なのか三人称なのが今一曖昧だった様な……

次話はなんとか。

それでは、次の話も萱場さんの説明大会です。

ご意見ご感想をお待ちしております。

四話 GAME START (前書き)

今回で、萱場さんの大説明会は終わりです。

今一心情の表現がうまくいかない……

四話 GAME START

時間が止まった。

今日の前にあるフレンドリストの中にあるスデンリイの名前は、どこをどう見てもグレーに染まっていた。そしてそれは、連絡不能である、つまりログアウト状態を示している。だが茅場の言うとおりになら、それはつまり……

「ア、イツ、は、……死んだ？」

信じられない、信じられるわけがない、信じろと言う方が無理だ。たった十分前だ、たった十分前まで俺と一緒に、これからプレイするゲームへの期待を苦笑してしまうほど熱弁していたあいつが、ログアウトどころかこの世から消えただと？ふざけるのもいい加減にしてくれ、そんな……そんな事、ある、わけが……

無い、と言いきるのは簡単だ。現実世界に戻れない以上、確認する術は無いのだから。だが、そう思いながらも俺にはどこか確信めいた予感があった。

あの男なら、茅場晶彦ならやりかねないと。以前一度だけ会ったあの男は本当にそう思わせるような、そんな人物だったのだ。

どこまでも冷静で、物腰は柔らかだがその実、自分の目を向ける世界以外には興味が無いような雰囲気で、何を考えているのかわからない様な所が有りながらもどこか人を引き付ける。一度会った限りではそういう男だった。

そして、そんな俺の葛藤をあざ笑うようにあくまで冷静な声で、現実的な口調で……そう、正に俺の知っている茅場本人の口調でアウンズは進む。

「諸君が、向こう側に置いてきた肉体の心配をする必要は無い。現在、あらゆるテレビ、ラジオ、ネットメディアはこの状況を、多数の死者が出ている事も含め、繰り返し報道している。諸君のナーヴギアが強引に除装される危険は既に低くなっていると云ってよからう。今後、諸君の現実の身体は、ナーヴギアを装着したまま二時間の回線切断猶予時間のうちに病院その他の施設へと搬送され、厳重な介護態勢のもとに置かれるはずだ。諸君には、安心して……ゲーム攻略に励んでほしい」

分からない、こいつは本当に阿呆なのか？（いや、まあ頭はいいんだが）プレイヤーたちにログアウトは無理だと言い、外からの助けは死神の手だと言い、俺の友人を殺して、拳銃の果てにはその状態でゲームを攻略しろと言っ。

こんな状況でのんきに遊べと、こいつはそう言いたいのだろうか？

うまく働かない頭でそんな事を考えていた、その認識はしかし、間違いであると、意外に早く分かることになる。

「しかし、充分に留意してもらいたい。諸君にとって《ソードアーツ・オンライン》は、既にただのゲームではない。もう一つの現実と言っべき存在だ。……今後、ゲームにおいて、あらゆる蘇生手段は機能しない。ヒットポイントがゼロになった瞬間、諸君のアバターは永久に消滅し、同時に」

働いていなかった頭は、この言葉で完全に覚醒していた、次に続く言葉が、容易に頭に浮かぶ。

「諸君らの脳は、ナーヴギアによって破壊される」

予想どおりであり、できれば聞きたくない答えだった。つまりH
Pがゼロになれば、本当に死ぬと、そう言われたのだから。

さらに、アナウンスは続く。

「諸君がゲームから解放される条件は、たった一つ。先に述べたと
おり、アインクラッドの最上部、第百層まで辿り着き、そこに待つ
最終ボスを倒してゲームをクリアすればよい。その瞬間、生き残っ
たプレイヤー全員が安全にログアウトされることを保証しよう」

プレイヤーたちは、水を打ったように静かになる。

ゲームをクリアする。それは、たしかにゲームをプレイする物に
とっては当然の最終目標だ。だが、ログアウトも出来ず、一度でも
HPをゼロにすれば本当に命すらも失う状況で、それを行えと言わ
れたプレイヤーたちは、未だにこの状況を受け入れきれないでいる。

それが自分達の知る現実と言う世界の常識からあまりにも外れてい
るがゆえに、言葉の持つ意味を理性で理解しても感情が受け入れる
事を拒んでいるのだ。

「これが本当に現実なのか？」と、「自分達は今、悪い夢を見て
いるだけなのではないか？」と、そんな心境がこの場にいる彼らの
表情からは見てとれた。

それは、かく言う俺も同じだ。

まあ、たった数時間前まで、彼らも、俺も、「自分達の知る現実と
言う世界」に居たのだから当然だ。

そんな俺達に、茅場は今やこの世界が俺たちにとっての現実だと

言っている。そしてそれを構成する要素をもう一つ、茅場は俺達にたたきつけた。

「それでは、最後に、諸君にとってこの世界が唯一の現実であるという証拠を見せよう。諸君のアイテムストレージに、私からのプレゼントが用意してある。確認してくれ給え」

皆一斉にメニューウィンドウを開く。俺もフレンドリストから、アイテム欄に切り替え、プレゼントとやらを確認する事にした。表示されていたアイテムは、「手鏡」

『おいおい……』

俺は、これから起こる事がなんとなく予想できた気がした。

そして、周りに居るプレイヤーの顔が白い光に包まれ、俺の視界も一瞬ホワイトアウトする。

それが終わるとそこには、先程とは違う容姿、違う体つき、一部に至っては違う性別をしたプレイヤーたちが立っていた。俺も自分の顔になっている。

恐らく、ナーヴギアの信号素子によるスキヤニングやキャリブレーションなどで、身体を再現したのだろう。

「やっぱりか……」

ためしに声に出してみると、案の定、声も元の俺の声になっていた。もはや、この世界の子の身体が自分自身のもう一つの身体だと言う事は受け入れざるを得ないようだ。後は……

「何故こんな事をするのか、だな。」

今のところそれは語られていないが、恐らくこれまでの流れから見てそれも今から説明してくれるのだろう。そしてそれは予想どおりに起こった。

「諸君は今、なぜ、と思っっているだろう。何故私は S A O 及び
ナーヴギア開発者の茅場晶彦はこんなことをしたのか？これは大規
模なテロなのか？あるいは身代金目的の誘拐事件なのか？」と
少しだけ、茅場の言葉に感情のかけらが見えた気がした。
気のせいかもしれないが。

「私の目的は、そのどちらでもない。それどころか、今の私は、既
に一切の目的も、理由も持たない。なぜなら……この状況こそが、
私にとつての最終的な目標だからだ。この世界を作り出し、”観賞
”するためにのみ私はナーヴギアを、S A O を造った。そして今、
全ては達成せしめられた」

一拍置いて、また感情の薄い声。

「……以上で《ソードアート・オンライン》正式サービスのチュ
ーリアルを終了する。プレイヤー諸君の 健闘を祈る」

最後の一言が消え、ローブの巨人も消えた。
そして

「ふざけんなあ！！どうなってんだよおお！！」

「冗談だろ！？嘘だろお！！？」

「出してよ！ねえ出してよお！！」

「イヤアアアアアア！！！！！！」

周りに居るプレイヤーたちが次々に咆哮し、広場は空気が震える
ほどの大音響に包まれる。

ある者は泣き叫び、ある者は他人を罵り、ある者は茫然とへたり込
む。

そんなこの世の終わり（ある意味正しいかもしれない）の様な状態になる広場の中で、俺は妙に落ち着いていた。

今茅場が語った事は全て現実だとすぐに受け入れる事が出来た。それはもしかしたら、茅場という人物を元から少しでも知っていたからかもしれない。

そして同時に、言いようもないほどの怒りも感じていた。

『ふざ……けんな……』

観賞？観賞だと？そんな物のために、俺達は今このあり得ない状況に立たされていると言うのか？

茅場個人の娯楽としかとる事の出来ないその行動。そんな、物のために……！！

『アイツは、死んだつてのかよ……！！』

俺は出会って間もなかった友人の姿をもう一度思い浮かべる。

まだアバターの变化前だったから、本当の姿ではなかっただろう。

しかしあの目の輝きや、期待と希望に満ちていたあの言葉は、間違はなく彼自身の物だったはずだ。それを永久に消し去って置きながら。その理由が自身の娯楽のためだと！？

「上等だ……」

いつの間にか声に出して俺は言っていた。

「お前を必ず見つけ出して、絶対にぶん殴ってやる。」

出来れば殺してやりたいが、それではあいつと同じなので止めておく。それは法に任せる。

だが、絶対に一発は殴らないと気が済まない。そのためには……

「必ず生き残ってやるぞ……」

先ず生き残る。そして必ずいつかゲームをクリアする。どれだけの

時間がかかろうとも、ゆっくりとでも必ずゲームをクリアする。そう俺は心に誓った。

『ステンリイ……』

もう一度フレンドリストを見た俺は、ステンリイの名前を削除しようか迷ったが、止めた。

この誓いと、とても短い間でも楽しい時を共に過ごしたの友人を忘れないために。

『現実 そっちに戻ったら、墓参りにでも行ってやるからさ。だからしばらく、待っててくれ……』

そうして俺は、これから起こる事を予測して少しでも有利な状況を造り出すためスタートダッシュを早くしようと考えた。

喧噪のなか、従兄弟からの情報を頼りに「はじまりの町」の北西ゲートへと走り出す。目指すのはフィールドをこえた先にある次の村だ。

ここから先は、ほんの少しの油断が命取りとなる本物のサバイバル。
限りなく現実リアルな偽りヴァーチャルな世界でのデスゲームが……始まった。

2022年11月6 san 午後5時45分

VRMMORP、D、G 《仮想現実多人数同時参加型オンラインロールプレイング、デス、ゲーム》

ソードアート・オンライン
SAO

G
A
M
E

S
T
A
R
T

四話 GAME START (後書き)

というわけで、ようやく主人公の冒険の始まりです。

まあしばらくはのんびり勝手に歩かせて様子を見ようと思います。

基本的には展開は原作に沿って行きます、

ただし、時間軸は月夜の黒猫団、背教者ニコラスのイベントを除き、
時間軸通りに進みます。

次回から数話は、少しだけオリジナルです。

ご意見ご感想お待ちしております！

五話 偶然の必然（前書き）

今回は少々短いかもです。

その代わりと言ってはなんですが、今回は原作キャラが約一名合流します。

時間軸はまだ飛びません。とりあえず、第1層の攻略までが最初の物語です。

つてもかなり短いですが。

では、どうぞ

五話 偶然の必然

「さてさて……」

俺は現在、始まりの町から出て北西に向かっている。

目的地は次の村。少しでも早くスタートダッシュをしておかないと、原則的に、全体として限りある物の奪い合いと言つに近い事をするMMORPGにおいて、ソロで力を得るのは難しいと判断したからだ。

ちなみに初めからソロを選んでいるのは、確かにリスクはでかいが、それを補って余りあるほどリターンも大きいからだ。高い経験値、前線の情報、レアアイテムなど。うまくいけば、しっかりと自分の身は自分で守れるようになるだろう。

そのためには、直ぐに狩り尽くされるであろう始まりの町の中心は捨て、少し離れた所に拠点をかまえる方が良い。………と、

前方に、色の茶色いワームと向き合っている少年片手剣士プレイヤ―を一人見つけた。距離はさほど遠くない。恐らく彼も……

俺は彼の向き合っているワームが、大きさや色、そして剣士の猛攻を耐えきっている点からこの階層ではレアな、ワームの上位種だろうと推測した。しかしそれと互角以上に戦っている彼の方も大した物だ、（しかも仮にもこの状況で。）

そして……ソードスキルが命中し、ワームの身体が可笑しな姿勢で硬直した。

終わった。と、俺もそう思った。剣士の方も、構えて居た剣から力を抜いている。

だが、そう簡単ではなかった。

運悪く移動中にエンカウントした相手の上位ワームの身体が不自然な姿勢で硬直したのを確認した俺は、自身の勝利を確信し、持っていた片手用直剣から力を抜く。

だが、ワームの身体が消滅するまでの時間が、やけに長く感じられていた。……たと思った時には俺の脚元の地面が土くれのデータと共に弾けていた。

「なっ！？……しまっ！？」

驚きつつも俺の頭は状況を理解する。あの硬直は消滅の前動作ではなく、地中に隠した尾の奇襲に気がつかれないためのブラフだったのだろう。ご丁寧に、HPバーをやられる寸前まで減らしての、文字通りワームの捨て身の策だったわけだ。

『まさかモンスターが、こんな見事な策を使うとは……』

おれのHPは、通常種よりもしぶとく、攻撃力の高いこいつとの戦闘で既に残り三割近くまで減らされている。無防備なこの状態で此奴の攻撃を諸に受ければ、これまでの被ダメージから考えて、俺は多分一撃でポリゴンを散らす事になるだろう。

そんな状況に有っても、俺は訪れようとする死への恐怖よりも、そんな、純粋な驚きを覚えていた。

『ベータテストの時も此処まで見事な策は使ってこなかったのに……もしかしたらモンスター達も、実際のゲームが始まったことで命への危機感が出てきたのかもしれないな。』

「キシエアアアアア！」

そんな事を考えている間に、低空とはいえ空中に居るので身体を動かせない俺に喰らい付こうと、ワームは容赦なく首をのばしてくる。

『ああ、死ぬのか此処で……結局、クラインの事も見捨てておいてこのざま。情けない、な……』
やけにゆっくりと、ワームが自分の首に喰らい付こうと近付いて来るのが見える。剣はさっきの奇襲で石に腕を弾かれて飛ばされたので、防ぐこともできない。

『スグ、母さん父さん、ごめん。リョウ兄、頑張ってくれよ……』
俺は今此処にいない家族と、俺と同じくこのゲームに囚われているはずの従兄弟の事を思い浮かべながら目を閉じようとした。だが、

「アアアグゴギヤ!?!」

俺の頭に喰らい付こうとするその瞬間、今度はワームが横から来た『何か』に吹っ飛ばされた。

「……は?」

「おつオオオ!!」

横から来てワームを吹っ飛ばした『何か』、両手槍使いの青年は、突然の事に呆けた俺の事を無視してワームに白のライトエフェクトを纏った右斜め上からの槍の振り下ろしをたたき込む。

重両手槍 初級単発技「スラッシュ」

大上段からの一撃は、初級技だがこの層のモンスターには十分すぎる攻撃力を持つ。それをもろに受けたワームは、今度こそ大音量と共にその命を無数のポリゴンにして散らしたのだった。

「無事か!? あんた!」

ワームを倒し、振り向いた両手槍使いの青年が片手直剣使いの少年の安否を確かめるために小走りで少年に近付く。どちらからも相

手の顔はよく見えなかったが、とりあえず自分の命の恩人に感謝を伝えなければと思い、少年は頭を下げておく。

「何とか大丈夫です……。ありがとうございました。貴方の援護が無ければ今頃俺は死んでいた。」
すると青年は驚いたように、

「おいおいよしてくれ。助けられる所に、今にも殺されそうな奴が居るのに放っておけて方が無理な話だ。頭を上げてくれ。」

気さくで軽い感じだが、それでいてどこか真面目で不快感の無い話し方。どこかで聞いたような……？

そう思いつつ顔を上げると、そこには少年が、ある意味必ずいつかは会うだろうと思っていた人物が立っていた。

「リヨウ兄？」

少年がリヨウ兄と呼んだ人物は、背の高い、どちらかと言うと引き締まった感じの細身の青年だった

「え、カズ？」

そして青年の方も少年の顔を目を真ん丸くして凝視している。

『確かにいつか会うだろうとは思っていたが、だがまさかこんなに早くとは……。偶然にしても出来すぎだろ。』

従兄弟の目を丸くした顔を見ながら、少年こと桐ヶ谷 和人、HN、『キリト』は思っていた。

五話 偶然の必然（後書き）

はい、というわけで、原作キャラ、というか原作主人公、桐ヶ谷和人君、

通称、「キリト」君の登場です。

プロローグで言っていた従兄妹（兄）というのはキリト君の事です。この年齢の分かりずらい少年をうまく書けるか……今から甚だ不安であります。はい。

ご意見ご感想お待ちしております！

では！

六話 従兄弟同士（前書き）

一週間ギリギリセーフ！！

では、どいぞー！

六話 従兄弟同士

俺は丸テーブルの前に座っていた。

ここは、アインクラッド第一層、始まりの町北西の小さな村の宿、その一階にある食堂だ。

今、俺の前には一人の少年が座っている。

先程俺が戦闘に割り込んで、結果的に助けた形になった少年。

正体は現実世界で俺の従兄弟である、カズ……キリトだ。顔が現実世界の顔なのですぐ分かった。

その後、俺達は特に何ら問題なくこの村まで辿り着く事が出来た。キリトも俺と同じく、ゲーム内でスタートが重要である事を知っていてこの村を目指したらしい。が、運悪くあのワームに見つかり戦闘を余儀なくされたのだそうだ。

宿の外はもうとっぷりと暗くなっており、SAO初めての夜が過ぎようとしている。

始まりの町に居るであろう一万人近い人数の人たち。彼らも個々の夜を過ごすのだろうが、まあ大半は大混乱するだけ。泣くか叫ぶか呆然とするかして朝を迎えるだろう。

「大変なことになったもんだなあ……」

「……ああ」

誰に言うでもなく嘆いた俺の声にキリトが答える。

正直、あのアナウンスからは此処まで一気に来たので、今更ながら大変な事態に巻き込まれたという実感が湧いてきた。

ゲームオーバー一発でこの世からも退場のデスゲーム。

正に過去に例のない事態だと言っていていいだろう、世界的にも俺の人

生的にも。

ふと、前に座る従兄弟を見てみる。

女にも見えるが、世間一般的に見て整っている部位に入るだろう顔の少年は視線をじつと目の前の「紅茶っぽいお茶」に注ぎ、何かを考えているようだった。

「……大丈夫か？」

「……え？」

「さつきから、ずっと心此処に在らずって感じだぞお前」

「ああ……ゴメン」

「まあ、気持ちは分かるがな、俺もこんなことになるとは思ってなかったし。」

そう言っただけ俺は天井を仰ぐ。此処まで予想もしなかった事態に遭遇すると、なんと言うか、逆に何も言えなくなる。

何というか、『理解はしているし、頭では現実だと受け入れているにも関わらず現実味が未だに薄い。』という奇妙な状態だ。

「そうじゃ、無いんだ」

「ん？」

始めて自分からしゃべりだしたキリトに俺は再び視線を向け、話を聞く姿勢になる。

「俺、始まりの町に友達を置いてきたんだ。」

「……」

「クラインンって言ってさ、気の良い奴で、VR初心者だからって俺にレクチャー頼んで来て……」

「それで？」

「アナウンスも一緒に聞いた。それで……俺はクラインンにも一緒に付いて来るように言ったんだ。けど、クラインンは他のMMOで知り

合って一緒に来た仲間たちを見捨てられないって言って、付いてこなかった。結局俺はこっちで始めて出来た友達を切り捨てて、前に進んだ。」

「成程な。」

「俺はあくまで利己的に行動して、自分だけのために今も此処にいる……」

そこまで言ってキリトはまた黙りこむ。

要は後悔しているのだろう、たった数時間前の自分の行動を。

元々こいつは、あまり人と交わるのが得意な奴ではない。小学校でも友人と呼べる奴は数人しかいなかったようだし、中学に入ってから一年時は話し相手になる奴を見つけないかなり苦労していたようだ。(実はそれは二年になった今でもほとんど変わっていないかったのだが、そのことを俺は知らなかった)

それはどうやら、顔の違うとはいっても見た目どう見ても人間な奴と会話するこの世界でも同じだったらしく、ベータテスト参加中は「やっぱり人と接するのは難しいな」とか、夕飯の時に俺に愚痴っていた。

そんなこいつが、四半日足らずで自分から友達と言うほどの奴なのだ。恐らく、かなり人好きのする良い奴なんだろう。

だがそれだけに、そいつを見捨てたというキリト自身の自責の念が強くなってしまっている。

ふーむ。

他人の悩みに意見を言うのだから、あまり軽々しい事は言えない。口調はのんびりと、だが軽く見えないように相手の目を見て。

「いいんじゃないの？利己的で」

「え……？」

面喰ったような顔をしている従兄弟に俺はさらに続ける。

「今はもうこの世界はサバイバル、生き残り合戦の世界なんだ。生きるための選択はそいつの自由。利己的な行動なんかごく当たり前さな。ソロで行くも、チームで行くもよし。結果としてお前はソロ、クラインはチームを選んだってだけの話だろ。」

「そういう事を言ってるんじゃない……」「それにだ」
何か言おうとする従兄弟の言葉を悪いと思いつつも遮らせてもらう。

「お前はそいつにレクチャーしてやったんだろ？」

「え、ああ、うん」

「じゃ、何とかなるだろう。」

ある程度知識を持つていれば、まあ初期の混乱は生き抜けるだろう。

そして初期さえ抜けてしまえば、後は全体の流れに乗って多分何とかなるはずだ。まあ勘だが。（後の話だが、この予想は間違っていた）

それはキリトも予想していたらしく、反論が少し止まる。

「けど……」

しかしそれでも何か言おうとする自分の優しい従兄弟に、俺は今度は真っ直ぐな口調で告げた。

「どうしても罪悪感が拭えねえなら、生き残ったそいつらと会って、またレクチャーなり、一緒に狩りなりを試してみるといいさ。多分、お前の中でも元の友達に戻れるぜ。」

「あいつ等が生き残れるかはまだ……」

まだキリトの瞳は揺れていた。確かにこれでクラインとやら達がすぐに死んだらキリトはかなりシヨックだろう。本人もそれを一番恐れているんだと思う。

俺は、そんなキリトに断言してやった

「大丈夫だ、必ずそいつらは生き残るさ。むしろ直ぐにボス攻略なんかで嫌でも会う事になるだろうから、それまでに俺らも精いっぱい強くなつとかねえとな。」

「……何でそんな事断言できるんだよ？」

軽く危惧するような視線を向けて聞いて来るキリトに、俺はいつも現実でも言っている答えを返した。

「……勘だ!!」

「やっぱりか。」

いつも通りのやり取り成立。

軽くならないようにと意識したのに、結局軽い感じになってしまった感じが否めない。

そんな事を考えていると、不意にキリトが自嘲気味に笑った。

「まあ、でも、リョウ兄の勘はよく当るからな、少しは信用できるか。」

「そうだろ、むしろきつちり信用していいぞ。」

「所詮は勘だから無理だ。」

即答で、しかし先程よりか幾分明るい声でキリトはつつこんでくる。どうやら、何とか少しは励ませたようだ。

「じゃあそれを信用してもう寝るよ。お休み」

言って、宿のキリトは二階へと続く階段へと向かう。

「ああ、しっかり寝る。お休み。」

見えなくなる背中に俺は声をかけると、そのまま店の窓の外を見る。

見えるのは上層への鋼鉄の天井だけ、空や星は見る事が出来ない。まさに牢獄のような風景だ。

あれでしつかり立ち直れば、明日からもキリトは大丈夫だろう。
生き残っていけるはずだ。

この世界は既に一瞬の油断やほんの少しの精神的な変化でも全てが
終わる世界に豹変している（本来のMMOの死亡率ってのも結構そ
ういうものだ）あの状態で、外に出したら死にかねない。

無論、純粹に従兄弟に立ち直って欲しいというのもあったのだが。

本当はスデンリイの事をキリトにも言おうかとも思ったが、タイミ
ングを逃してしまった。

「俺もそろそろ寝るとすつか。」
そう言っつて、俺も宿屋の二階へと上がる。

色々な事があつたため、疲れていたのもあるだろう。その日は意外
にも、しつかりと寝られた。

六話 従兄弟同士（後書き）

はい、いかがでしたでしょうか？

今回は主人公がいかにキリト君を説き伏せられるかが焦点だったんですが。

いかんせん、中々思うようにリヨウを喋らせることが難しいと実感しました。

次と、その次は、第一層ボス、攻略戦の予定です。
何が出るかはお楽しみで

でわ!!

2011/6/17

一部変更しました

七話 大舞台への道のりにて（前書き）

どうもです。

今回は少々短いかな？

ちなみに、原作キャラ二人目が登場します。

まあ、この状況でなら誰だか予想はつくと思いますが。

では、どうぞ！

七話 大舞台への道のりにて

衝撃的な初日から一カ月と少し。

俺とキリト、そして現時点でフロアを攻略しようとしている前線メンバーの多くは、第一層の迷宮区画にいた。

あのゲーム開始から此処までの一カ月で、約二千人が死んだ。

死因は色々だ、主なものとしては、自殺とかモンスターとの戦闘とか。開始後二日後のは始まりの町は、泣く物や叫ぶ者たちでごった返していたし（少々買物でぞいた）、全プレイヤーの方針が決まるまでは、さらに数日間を要したそうだ。

そんな混乱を極めた一カ月を生き抜き、なおかつ自分達で命がけ攻略を進めてこの世界から脱出しようとする少数派の者たちが、ここに募っている。

「さてさて、ボスってのはどんな奴なのかねえ。」

のんびりとしやべるのは、赤みがかった髪を、バンダナで逆立てた野武士のような面の男。

ひと月前、俺とキリトの話に出てきた男、クラインである。

こいつは、俺の勘の通りと言うか、友人達ことギルド「風林火山」のメンバーを守りきりながら此処まで生き残っており、一週間前再会した時には、キリトに「本当にリョウ兄の勘は当るよな。」と、呆れられた。無論、喜ばしい事なのだが。

「余裕だなクライン。油断して死ぬようなことだけは避けるよ。」
軽口をたたくクラインに注意を飛ばすはキリトだ。

再会した折、俺はキリトにもう一度クライン達とフィールドに出るよう勧めた。

キリトは渋っていたが、クラインにもまだ慣れきっていないメンバーの指導のために来てほしいと言われ、断り切れずに陥落。

俺も付いて行き、まあ、こちらもおおむね俺の勘どおり。レクチャ―が終わるころには、キリトも俺から見れば（あいつ自身がどう思っているのかは聞かないでいる。）ギルドのメンバーと、『クラスメイト』位の仲になっていた。（まあ要は普通に話せるくらいのことだ）

その後、クラインにギルドに入らないかと誘われたが、俺もキリトも断った。

俺達は、ソロで進むのを基本方針にするつもりだった。

原則、ソロで進むにはベータテスターのような連中の持つ圧倒的な情報量の差によるスタートダッシュが必要だが、そこは俺はキリトと行動を共にすることで切り抜けていた。

情報は共有し、レベル上げ等はPTは組まずに単独で行う。

これが今日までの俺とキリトのプレイスタイルだ。

正直、キリトに寄生　パラサイト　する様なこの方法は良心がとがめたのだが、この世界でそんなことも言ってもらえないと思っだし、キリト自身も「お礼だから気にするな」と言ってくれたので、お言葉に甘えることにした。……何のお礼だ？

大体、ベータテストの到達点である第六層まで行くと、その時点でベータテスター達の情報量の差は殆ど意味を成さなくなる。

つまり、その到達するまでにどこまでレベル等で他と差をつけられるかが勝負だ。

ちなみに俺とキリトは、攻略が第7層に到達した時点で分かれて進むつもりだった。（無論しよっちゅう会うだろうし協力もするだろうが。）

さて、そんな俺とキリトはだが、実は血縁と言う事もあってか既に少し特殊な関係性を持っていた。(変な意味じゃない) 簡単に言うと、俺とキリトは義兄弟になっていたのだ。

「義兄弟システム」

ゲーム内の人間関係を示す関係性の一つで、結婚やフレンド登録とは違う、少し特殊な関係性だ。

まあ、今説明すると長いのでその内説明しよう。

ただ、これを結んだ時から、何故かキリトの俺の呼び方が「リヨウ兄」から「兄貴」に変わった事だけ追記しておく。

「別に油断してるわけじゃねえけどよう。なんつうか、なあ？」

「なあ？つて……俺はテレパスじゃないからな。わかんねえよ。」

「見たこと無い奴と今から戦うからテンションあがって来たんだろ？」

クラインの曖昧な説明に戸惑っていたキリトに俺がクラインの言いたいであろう事を告げる(勘だが)

「そうそう、それだぜリヨウ！なんつーか、ワクワクっつーかようこつ、俺は今高ぶって来てんだよ！！」

「うむ、気持ちは分かるぞクライン」

そう言っつてうなずくクラインと俺にキリトは呆れ顔をしている。

「兄貴まで……あのなあ、遊びじゃないんだから、もっと気を引き締めろよ。」

「まあ、元々ここはゲームの中なんだ。少しはそういうワクワクがあっても、悪くはないだろう？」

それに恐らく、クラインとてそれだけではないのだろう。恐らく

怖いだろうし、不安もあるはずだ。

だが、彼の後ろには自分が守るべきギルドのメンバーがいる。リーダーが不安を見せれば、チームメンバーも不安になる。それが分かっているからこそ、多少無理にでもテンションをあげているのだと思う。

俺から見てもキリトから見ても、クラインは良いリーダーだ。

「まあ、良いけどさ。……そろそろ付くぞ。」

俺もクライン&風林火山メンバーも。キリトの言葉を待っていたように聴こえて来た闘いの音。

即ち、剣戟の音、怒号、地響き、そして悲鳴に、気を引き締める。

通路の奥にある巨大な鉄の門。

そこは各フロアに有る、次の階層へと続く階段を守護するボスの部屋であり、あの中にいるボスを倒さなければ次の階層には進めない。その門は大きく開かれていた。既に先発隊のメンバーが、ボス（情報によると、大型のイノシシ型モンスター）と、戦闘しているのだ。報告が無いという事は、どうやらまだ倒せていないらしい。そう、今日は第一層のボス攻略の日なのだ。

先発隊は、大規模ギルドなどで構成され、後発隊はソロや小規模ギルドなどで構成された保険の様な物で、戦闘せずに終わるかもしれない簡単お仕事。と、出発前大規模ギルドの攻略リーダーは言っていたのだが……

「いきなり予定狂ってんじゃんか……」
と、部屋の中を見た俺は嘆く。

大規模ギルドで構成された連中は、いつものモンスター達に挑む

のと同じように、盾持ち等を前衛にして、その後ろから、長槍や槌
メイス 等で攻めるつもりだったようなのだが……

「ブヒヤア!!」

「ひいひいひい!!」

「うわぁ!」

力強い突進を執拗に繰り返す茶色の巨大なイノシシ（おっこぬし
位あるだろうか）に見事に前衛の盾持ちが崩されてしまい、戦線は
各自がバラバラに戦う羽目になってしまっていた。

イノシシの頭上に表示されている名称は《The Wild bo
ar》イノシシ……ってまんまだな。

「被害は!?!」

後発隊のリーダーが怒鳴って聞くと、結構最悪の答えが返ってきた

「既に二人死んだ!何とかしてくれ!」

泣きそうな顔で叫び返してくる。

「くそっ!」

「つたく、いきなりかよ。」

悔しそうな顔をするキリトの横で俺も悪態をつく。

とんだ簡単お仕事が合ったものだ。

「とにかく、戦線を立て直すぞ!無理はするなよ!」

「おう!」「うっし!」

キリトの声を合図に俺達はイノシシに挑みかかった。

七話 大舞台への道のりにて（後書き）

いかがでしたか？

……説明が多かったですね。結構。

本日はちょっとしたおまけを。

友人A「持ってきたか？」

鳩麦「うっす」

友人A「よし、みせてくれ。」

つ一次話以降の原稿――

友人「……………」 文芸部

鳩麦「……………」 吹奏楽部

友人「とりあえずこっからここまでが……………それに此処と此処と……………」

鳩麦「マジか！？となると此処も……………」

友人「そだな、後こっちも……………」

競技そつちのけで友人のアドバイスをもとに推敲に熱中する、平日の我が校の体育祭……………

ご意見ご感想、おもちしております！

では！

2011 / 6 / 17

文章追加しました。

八話 暴走生物を止める（前書き）

よし、二日連続！

ただしこの後少し間が空くかもですが。

あ、ちなみに言いますと、初ボスですが自分的にはほとんど瞬殺な感じがします。

八話 暴走生物を止める

「ブヒヤヒヤア！」

「うおっ！」

「くっ！」

「ぬぐげっ！」

さて、勇んで挑みかかったは良い物の、正面に立てば強烈な突進、かといって横や後ろに付くと、巨大な身体を振り回してまとわりつく奴らを吹き飛ばそうとするイノシシに、俺達も苦戦する。

それでも、ギルド連中の平均レベルが5〜7なのに対して、クライオン達は6〜9、俺達に至っては、キリトは14、俺は15なので、先程までよりはよっぽどでしたが。

『決定打が欲しいな……』

そんな事を思っているとまたイノシシが突進。左右に二本ずつ長く太いのとその下に細く小さいの（付いた牙で、次々に立ちふさがる連中を吹き飛ばしていく）。

そんな様子を見て、俺はふとある事に気がついた。

「やってみるか。」

多少博打だが、決まればでかい。やってみる価値はあるだろうと、俺は動きだす。

先ず、体力をポーションで全快。そして、

「おいコラ豚あ！こっち来い！」

イノシシに思い切り呼び掛ける。ただし、殆ど部屋の端から端に呼びかける感じだが。

「ちよ、兄貴!？」

キリトが驚いているが今は無視!

「ブヒ?...ブヒヤア!！」

言葉が分かったわけでは無いだろうが、声に反応したイノシシは狙いどおり、真っ直ぐに俺に突っ込んでくる。

その姿はまさしく暴走特急だ。ただし動力は生物式だが。

そして、その勢いが、ある一定の距離を通過した所で少しだけ「緩んだ」。

さっきなんとなく「見えた」のだ。だから気付けた。

そして、正面から突っ込んできたイノシシに向かって、俺は槍の矛先を向けるのではなく、地面に水平に、真横に構える。

緩んだとはいえ、確かに早い。だが、

「慣れたぜ、その速さ」

言うと同時に、突進してきたイノシシの上下の牙の間に槍が挟み込まれ、突進を受け止める。受け止めた余波で体力が一割ほど減ったが、なんとか武器防御出来たようだ。

内心、うまく行ってガッツポーズ。

「なあ!？」

「はあ!？」

キリトとクラインが素っ頓狂な声をあげてるけど今は無視!

今俺の身体は、左右の牙の間。

鼻の目の前の位置にいたので、突進その物の威力は受けない。そのまま、俺は思いつきり踏ん張ってイノシシの突進を無理矢理押しとめる。

「ぬおおおおおおお……!!」
靴が火花をあげてるけど今は無視!!

そして何とか、壁で押しつぶされる前にイノシシの巨体が停止。
それでもなお押しこようとすするイノシシを、何とか抑えつける。
筋力値上げといてよかったよ。

さて、しかしこのままではギリ貧である。

俺も攻撃できないのだから、どちらかが力尽きるまでこの体制を続けなければならぬ。そして力尽きるとすれば、十中八九俺だろう。
まあそれは俺一人ならの話なのだが。

「キリトお!!」

「……はっ!!」

まるで俺が叫ぶタイミングを狙っていたかのように見事なタイミングでキリトが背中から切りかかる。

イノシシが怯んで牙を振り上げるが、ギリギリで俺は槍を抜いているので、槍が持つていかれることも無い。そして憤って振り向こうとするイノシシに、

「ちよいと待ちな!!」

そういつて今度は俺が「クロス」をぶち込むそれに怯んだイノシシが今度は俺に反応すれば今度は硬直から回復したキリトが、次は俺が、という風に、互いに互いの硬直時間をカバーしながらイノシシのHPを削っていく。

その内に他のプレイヤー達も互いをカバーしながら戦い始め、途中何度か抜け出されながらも、またその方法を繰り返し、(一応学習していたようだったが、やはりイノシシだけに突進を封じられた事は痛かったのだろう)

そして……

「……とりあえず消えとけ!!」

「重砲手槍 初級連発刺突技「トライアングル」

三角形を描くように繰り出される俺の突きが決まった瞬間、巨大イノシシはその身を大きく硬直させ、絶叫と共に巨大なプログラムの破片となつて、その身を散らした。

「おおおおおお!!!!」

「やった!やったぞ!!」

「イヤツホオオオ!!」

そんな歓声がボス部屋を包み、戦闘は終わった。

「ふう……」

「超疲れたな。」

槍と剣を杖に座り込みそうな状態で立っている俺達に、近くにいたクラインが話しかけて来る。

「だなあ、にしてもお前らは特にだろ?特にリョウなんかよ。初めは何する気かと思つたぜ?」

「それはそうだよな、いきなりあんなことするとは思わなかつたぞ?兄貴。」

軽くジト目で睨んで来るキリトとクラインに俺は苦笑を返す。

「すまんすまん。伝えてる暇なんか無かつたからなあ。」

「まあ、あの方法のおかげで被害が少なくなつたのも事実だしな。今回は不問にするけど、次はやめてくれよ?」

厳しく注意してくる我が義弟に笑いながら返事。

「はいはい」

「ほんとに分かつてんのかよ?」

多少怪しむような目で見られたが、まあ信用してくれたようだ。それ以上は何も言われなかった。

「さて、んじゃあ二階層つてのがどんな所なのか見つつ今夜の宿を取るかね？」

「だな、流石に今日は疲れたぜ」
伸びをするクラインを見つつキリトに。

「では、主街区の案内は頼むぞ？義弟 おとうと よ。」
「え、ちよと、」

「そうだな、おいキリト、お前は情報多いんだから俺達に安い店、教えてくれよ？」

「厚かましすぎだろ！？……まあ、わかったよ。その代わりなんか奢れよ？」

要求してくるキリト、何故俺の方を向く？

「……フランクツポイ（フランクフルトっぽい屋台の食べ物）でいいか？」

「……OK」「……」
キリトとクライン、そして何故か風林火山のメンバー全員が返事を返してきた

「おい！？ちよつとまで！！何でお前らまで俺が奢らにやいかんだ！こら！無視して進むんじゃない！」

最後には緊張感のかけらもない会話になったが何にせよ、こうして、アインクラッド第一層は突破され、プレイヤー側の反撃とも言える攻略が、ゆっくりとした速度で始まったのだった。

八話 暴走生物を止める（後書き）

初のボス戦。いかがでしたか？

えー、軽くリヨウの筋力値が暴走してますがお気になさらず。
つてか後半グダリましたね。スイマセン。

とりあえず、

よっしゃあ！！第一層突破あ！

次回からやつと時間軸を少し飛ばします。

ちなみに飛んだ先の物語は……お待ちかね！原作で言う所の「黒の
剣士」編です！

ただし、この物語ではキリト君はこのエピソードにほとんど関わり
ません。

基本、この物語の中では原作と展開をあまり変えない部分と、大き
く変える部分があるのですが、次回からの話は後者です。

主人公はあくまでリヨウで行きます。

つかやつとヒロイン勢の登場の兆しが見えてきたぞお……

ご意見ご感想お待ちしております！では！

九話 依頼（前書き）

此処からは、原作で言う所の黒の剣士編が始まります。

ただし、シリカはまだ出て来ません

九話 依頼

第一層攻略から大体、一年と三ヶ月。

その間にもプレイヤーたちはゆつくりと、しかし確実に攻略を進め、現在の最前線は 層まで来ていた。

今の俺のレベルは83。

軽く、仲間内では「馬鹿か」とか、「やりすぎだろ」とかからかわれているが、無視することになっている。

ちなみに、未だにソロだ。

そんな俺だが、その日もその日で主街区で偶然会ったキリトと最前線55層のフィールドへのゲートへと向かっていた。その時だ。

「お願いです！誰か力を貸してください！！仲間の無念を晴らしてください！！」

ゲートの前で、通り抜ける攻略組プレイヤーに何かを頼みこむ一人のプレイヤーを見つけた。

「あれは……」

「なんだ？」

キリトと俺は同時に声を発する。

通り抜ける攻略プレイヤーたちは、無視するか、憐れむような視線を向けて足早に男の前を通り抜ける。だが俺とキリトは、遠目からその姿を見ていた。

「……」

訂正しよう、キリトがどうにもその男から目を離そうとしなかった。あの男の言ってる「仲間」とはおそらく、ギルドの仲間の事だろう。その仇、と言う事は……大体予想は付く。

そして俺もキリトも、ギルドという組織にはある事件以来ちょっとした因縁の様なものがある。

まあ、あの男は哀れだがしかし、彼の叫びを無視している攻略組の面々が薄情と言う訳でもない。

あの男は言っていることから察するに、最前線の攻略組である者たちの高いレベル、つまりは戦闘能力を必要としてあそこまで来たのだろうが、残念ながら俺を含めた攻略組が必死にレベルを上げているのは人助けのためではない。

あくまでも、自分の生き残りの確立を上げるためだ。したがって、彼らがあの男を助けなければならぬ理由も存在しない。

それに最前線では、少し参加の間を開けるだけでも他とレベルや経験値の差が開いてしまったりする。

そしてそれらはギルドなどでは、戦闘するべき相手への対応の仕方が変わったり、全体のレベル上げ等に支障をきたすなど、協力しなくなるとなる理由が満載だ。

故に彼らは実に合理的だ。

個人的な情だけで、全体にデメリットがある事をしてそれを無視できるほど、この世界は甘くは出来ていないのだから。

「……………」

「はあ、まったく……………ん？」

いつまでも視線をそらさない従兄弟に軽くため息をついた、その時、俺は地面に跪いても頼みこんでいる男に、妙な感覚を覚えた。

どこかで会った、ような……………

「……………っ！…！」

「兄貴？」

俺はダッシュで跪いている男に近寄りその側へと向かう。
近づくほど、疑念は確信に変わった。そして。

「ロレント！」

おれは自分の知り合いに声をかける。

こいつの名は「ロレント」。ギルド「シルバーフラグス」のリーダーで、他のMMOでの俺の知り合いでもある男だ。

こいつのギルドは、結構こんな状況でもゲームをじっくり楽しんで
いる感じの雰囲気の間層ギルドで、モットーは過剰ほど安全マ
ージンを取った楽観プレイ。
少しかったが、この世界でも俺はこいつと付き合いがあった。

こいつが何故ここに？

俺の中にはその疑問が立ったが、そんなことは問うまでも無かつた
し、むしろ俺の持つこの疑問こそがおかしいのだ。

先程までの俺は、ちゃんとそれを冷静に分析していたじゃないか…
…。

こちらに気付いたららしいロレントは立ち上がり、呆けたような顔を
してこちらを見ている。

「リヨウ……か？」

「ああ、俺だ。」

「リヨウ、リヨオオオオオ。」

俺の名前を叫びながらロレントはその場に崩れ落ちる。

予想した事態が現実になった事を知りショックだったが、俺は勤め
て平静を維持した声でロレントに尋ねる。

「何があったんだ？」

話によると、ロレント達は犯罪者 オレンジ ギルドの襲撃に有つたらしい。

38層で狩りをしていたロレント達のもとに、数週間前新しくギルドに入りたので体験させてほしいと言う女が現れた。メンバーは快く彼女を迎え入れ、数日間共にパーティーを組んで狩りを続けた。だが、それが間違いだった。

これが終わつたら正式にギルメンになるという約束を交わしてその日ロレント達は狩場に出た日。

最初は、些細な違和感だった。なんとなく、その女に狩場のルートを誘導されている様な気がしたのだ。そしてその違和感が確信に変わった時には、もうすべてが遅かった。

いつの間にか袋小路に誘い込まれたロレント達の周りには、既に女の部下達が展開しており、逃げ場などどこにもなかった。

襲いかかって来る奴らを前に、ロレントは必死に結晶アイテムによる緊急脱出転移をするように叫んだが、転移中のわずかな時間に攻撃を受けると、転移が中断されると言う特性のせいで殆どの物は転移出来ず、結局逃げられたのはロレントだけ。

彼が転移する直前最後に見たのは、凶刃に貫かれる四人の仲間達の背中だったそうだ。

「……………」
「つつ、くう…………ふぐうう。」

話し終わり、跪いて尚も泣き続けるロレントを見ながら、俺はおかしな感覚がするのを自覚した。

怒りの様な、哀しみの様な。
憐れみの様な、恐怖の様な。

そんな感情が、胸の中で複雑に混ざり合い、どれか一つが突出するわけでもなく、しかし逆に消えるわけでもなく。
自分の感情なのに、正確な判断が下せないでいた。

彼らと付き合いがあったのはそこまで長い期間では無い。当然、ロレントのように大仰な感情を持つ事も出来ないのだが、それでもその感情を無視することなど到底できそうになかった。

ただ、妙な冷静も頭の中にはしっかりと残っていて、思考もいつもどつりに働いている。
そして……

「その女の情報を教えろ。」

「え？」

その思考の結果として、俺は言葉を紡ぐ。

二度目は聴こえるようにゆっくり、はつきりと。

「その女の情報を教えろ。キャラ名、出会った階層、そいつから聞いた話、使う武器、癖、性格、何でもいい。」

「じゃあ……」

間の抜けた顔をするロレントに導き出した結論を告げる。

別に、正義感に目覚めたとかじゃないし、仇討ちとか、そんなことはあまり考えていない。

ただ、彼らと関わり合いになった中で、最も確実にその仕事をこなせるのが自分だったと言うだけだ。

「その依頼、俺が引き受けた。」

九話 依頼（後書き）

はい、いかがでしたでしょうか。

というわけで今回は、リヨウが依頼を受けたところからがスタートです。

この場面書く意味あったのか？と思われた方には、申し訳ありません。

過程が欲しかったです。

今回は……まだシリカ出ません。【正確には、描写でのみ登場します】

やばい、いい加減怒られる……。つーか十話まで行ってもヒロインの出ないSAOって……

ご意見ご感想お待ちしております
では！

十話 迷いの森にて追跡を（前書き）

はいどうもです。やっと迷いの森に入りますが……
まだシリカは出ないです。

しかしいい加減女子出さないと……

十話 迷いの森にて追跡を

リヨウは今、森の中を全力疾走していた。それはもう過去に例が無い程に。

だが、別に今回の依頼の対象である女を追っているとか、そういう状況ではない。

というか、大体一時間と数十分前まではその状況だったのだ。しかし……

「あのガキは何処だあ！！」

現在彼は、名前も知らない少女を追って第三十五層「迷いの森」内を走り回っていた。

ロレント達を襲った女、ロザリアを探すために先ずリヨウは、自分の伝手の情報屋や、知り合いなどに、とにかく訪ねて回ることにした。

すると女の名前は、意外と有名で、情報屋に金を払うまでも無く、知り合いへの伝手で見つかった。

犯罪者 オレンジ ギルド「タイタンズハンド」リーダー、ロザリア

最近、30〜40層で被害の増えてきた犯罪者ギルドで、メンバーの一人が目標のパーティ（またはギルド）に忍び込み、待ち伏せ場所に誘導してから目標の持ち物を奪い惨殺する、犯罪者ギルドの中でもおよそ性質の悪い部類のギルド。

この情報を見るに、要はその忍び込むメンバーと言うのが、意外にもリーダー本人だったという訳だ。

さて、その情報を元にリヨウは今度こそ情報屋に依頼をし、範囲を限定指定して探させることで、比較的安い値段でロザリアの居場所を特定することが出来た。

そして、依頼を受けてから4日目の朝、リヨウはロザリアの入り込んだ六人のパーティを追って、第三十五層の「迷いの森」へと侵入した。

一日、隠蔽能力の非常に高いマントにくるまって、パーティを見失わないように見張っていた限りは、このパーティは此処があまり踏破されていないエリアだからか、（攻略組は此処の様なサブダンジョンにはあまり目を向けにくい）たっぷりの金とアイテムを稼いでいたようだ。

明日か明後日辺り襲撃をかけてきそうだと思い、もう少し見張り生活を覚悟した時、急に目の前のパーティがもめ始めた。

以前、面白がって上げた聞き耳のスキルを使った所では、どうやらロザリアと、珍しい「フェーザードラ」（水色つばいの羽毛を持つ、小型のドラゴン種）をタイム（特定のモンスターを、使い魔として仲間にする事）して使っているらしいダガー使いの少女（本当子供だ。12、3歳だろう）がアイテム分配の事で口論になっているようだ。

リーダーらしき剣士が必死に仲裁しようとしているが、完全に焼け石に水である。

確かあの少女は、その容姿からこの辺りの中層圏では結構有名な、アイドル的な存在の人物だと情報屋からは聞いている。

そして恐らく、今回のロザリアの一番の狙い目があの子だろうとも。

だが流石に、この下手したら出られなくなるダンジョンで、パーティーから離れるような真似はしないだろうとリヨウは思っていた。いや、高をくくっていた。

アイテムなんかありません。あなたとはもう絶対に組まない、あたしをほしいうっていうパーティーは他にも山ほどあるんですからね！

「なっ!?!」

しかし子供と言うのは怖いもので。痼癩を起した竜使いの少女は、一人で森の中へと走って行ってしまった。

リーダーの剣士も止めはしていたが、聞く耳持たずだ。というか……

「あれはまずいだろ!?!」

此处、迷いの森は、この時間だと薄暗く、背の高い木々鬱蒼と茂った不気味な雰囲気のある森である。

同時に名前に変わらず、晷盤の目のように分かれた”数百”のエリアが一つのエリアに踏み込んでから一分周期で東西南北の連結をランダムで入れ替えると言うえげつない仕様のダンジョンでもあるのだ。それゆえ一度迷ったら、出てくるためには森を一直線に走り抜けるか、街で売っている高額な地図を見るしかない。

が、先程まで見ていた限り、彼女が地図を持っている様子はなかった。

そして、駆け抜けるのは恐らく不可能。

薄暗い中で、曲がりくねり、所々木の根や枝が突きだしたりしている森の小道を全速力で駆け抜けるのがどれだけ難しいかは読者諸君の想像に任せるしかないが、とりあえず慣れていない者は五分に

一回くらいのパースで強制的に足を止めざるを得なくなる。とだけ明記しておく。

ということはまあ単純な話、出られなくなってモンスターに消費させられ、いずれ力尽きるだろう。というわけだ。

どうするか、一瞬迷った。

依頼だけを達成しようとするのなら、此处で少女を追いかけていくメリットはない。

自力で抜け出すかもしれないし、あの子が死んだ所で自分には何の不利も生じないのだから。

だが、殺された人間のために行動しているとも言える状況の今、これから殺されるかもしれない少女を見捨てる事ははたしてどうなのだろう？

『本末転倒だわな』

答えは決まった。

そして冒頭へと戻る。

「くそつ、こつもしょつちゅう移動されるんじゃきりが無い!」

一応あのパーティのメンバーには全員策敵スキルから派生するマップ追跡をかけていたので、あの少女がどこにいるのかはマップ上に表示されるが、彼女も移動している上に、その移動先がランダムなので、引つ切り無しに向かうべき方向、距離が変化してしまう。

特に前半はひどく、相手も森の中を走るもんだから、レベル的にいくら勝っていても追いくのは不可能に近かった。

ようやく数十分前から歩き始めてくれたのだが……結果だけ言うと、リヨウは未だに少女に追いつけていなかった。

「またかつ！」

再び別エリアへ移動した反応を見てリヨウは髪グシャグシャと掻きながらリヨウは荒い声を出す。

しかも移動した先はまた無茶苦茶に遠い位置だ。幾らこの世界では体力的に疲れにくいとはいっても、こつもずつとだと精神的に疲れてくる。

何しろもうすぐこれをやり出して二時間近いのだから。

どうも今日の自分には運が無いらしく、此処までことごとく少女の反応が遠くに飛ばされまくってきたのだ。

『もうやめるかあ？なんかこのまま続けてもロリコンのストーカーっぽいなあ……』

先程も行った通り、彼女がどうなるうが知ったこつちゃないし、自分でも何でこんな必死になってるんだかさっぱり……ではないにしろいい加減見捨ててもいい様な気がして来た。

まあ、良い訳は無いのだが、それほど疲れていたのだ。

だが転移先のエリアで少女を示す赤い光点が止まり、小刻みに動いているのを見て気が変わる。

恐らく、モンスターにエンカウントしたのだろうからだ。

此処までにも何度もエンカウントしていたが、すべて対して長期戦にもならず切り抜けていた。(だから追いつけなかったのだが) 今度こそ追いつくという気合を込めてダッシュ。隣のエリアへと飛び込む。

走り始めて三分数十秒、未だに追跡中の少女は戦っているようだ、反応が移動していない。

「やばいか？」

その場に行かないと分からないが、彼女もそろそろ疲労してくるころだろう。

この世界の闘い中での勘が鈍ったり、反射的な動きが遅れることは、致命的な敗因になりかねない。

そして今の自分でさえこれなのだから、彼女も相当のはずだ。

「くそっ、死ぬなよ……」

勘だが、嫌な予感がする。自分の勘がよく当たる事はよく知っているので、自然と焦りも増す。

リヨウは走る。

足の動きはより速く、地を蹴る力はより強く

十話 迷いの森にて追跡を（後書き）

はい、いかがでしたか？

なんとか此処までは来れましたよお……
つかもともとヒロインが一番の魅力の一つの小説なのに、此処まで出ないってどうなんでしょうねホント。

次回はついにシリカが登場します！！（短いですが）

おっし！気合入ってきたあ！

ご意見ご感想を心よりお待ちしております。

では！

十一話 小さな勇者（前書き）

はい、どうもです。

ようやくここまで来た。

やっと（短いけど）ヒロイン一人目です。

ある意味、本編ってここからかもしれないw

十一話 小さな勇者

全速力で、リヨウは先程から少女の居るエリアへと走り込んだ。既に戦闘が始まってから七分近く、これまでのエンカウント時は少女は開始後二分くらいで再び動き出していたから、明らかに長い。

『居たっ！』

目の前に地面に倒れた少女を見つける。その目の前にいるのは、この三十五層では最強と言われる、猿人型モンスター「ドラクエイブ」が三体。

とは言え最強と言うのはあくまでもこの層での話、目の前のリヨウが相手では話にならない程度の雑魚だ。

と言つか目の前の少女も、中層プレイヤーなら十分すぎるほどの安全マージンを取っているはずだし、対処できない事は無いと思う、が、どうやら遠目から見ても分かるほど足がすくんでいるようだ。理由は、おおよそ見当がついた。

と、その間にもドラクエイブは少女に向かって棍棒を使ったソードスキルのモーションに入る。

『まずいつ！』

注視した所、少女のHPは既に黄色の注意域に達していた。

幾らレベル差があっても、無防備な状態でソードスキルのクリティカルを受ければ、一瞬で全てのゲージを持っていかれる可能性のある所にあの少女は居るのだ。

その恐怖が、少女の足をすくませているのだらう。恐らくあの子は、死への恐怖を諸に味わうのは初めてなのだ。

『くそっ、この距離じゃ間に合わん！』

此処からでは投擲スキルを使っても、後が続かない。クリティカルにならない事を祈るしかない事を齒がゆく思いながらも、何とか次の攻撃には割り込もうと走り始めようとする。

が、この瞬間信じられない事が起こった。

少女の側に浮かんでいたフェザーリドラが、突如ドラクエイブと少女の間に割り込み、主人を護ったのである。

『なっ!?!』

地面にたたきつけられたリドラは、そのままポリゴンを撒き散らして消滅する。

その光景を見ながら、リヨウの頭には『ありえない』という言葉が浮かんでいた。

これがドラマか何かだと言うならこの展開も有り得るかもしれないが、この世界において、あのリドラのような「使い魔モンスター」と呼ばれるモンスター達のAIには、残念ながら主人を護るどころか自らモンスターに襲いかかると言う行動パターンすら存在しない。

……はずなのだ。

だが、さっきのあのリドラの動きは、どう見ても自らの意思で主人を護るための行動を起したようにしか見えなかった。

それは偶然か、それとも……

そのまま思考の海に潜ろうとしたが、そうもいかなくなる。へたり込んでいた少女が、三体のエイブの群に対して猛然と襲いかかり始めたからだ。

「わあああああ!?!」

此処まで聞こえるほどの叫び声。

ただしその動きは勇猛ではなく蛮勇。

明らかに、自分へのダメージを警戒していない無茶苦茶な攻め方だ。完全に怒りで我を見失っている。

彼女にとつてあのリドラがそれほどまでに大事な存在であったと、その思いの表れだろうが、あのままでは全てのエイブを倒す前に彼女自身が倒れるだろう。

今度こそリヨウは全力で走り出す。

自分の此処までの苦労と、あの小さな勇者の行動を無駄にしないために。

今、シリカは自分の中で何かが暴走しているのを感じていた。

家族同然だったピナの身体がポリゴンとなって消滅し、小さな水色の羽が地面に落ちたのを見た瞬間、頭の中で何かが切れた。

頭の中に真っ先に浮かんだのは自分への怒り。

小さな喧嘩でへそを曲げて、自分一人で森を突破できると思いがかった拳句、たった一撃受けただけで死への恐怖とパニックから動けなくなり、結果最も大切に思っていた仔を殺した、自分への怒り。

その怒りをたたきつけるようにピナを殺したエイブを、ダメージも無視して徹底的に狙う。

そして、その一体のエイブが懐に潜られた所に渾身の一撃を受け、クリティカルヒットのエフェクトと共に消滅しても、シリカは止まらなかった。

今度は振り返ると残りの二体に向かって突撃する。既にHPは赤の

危険域、即ち命の危険を知らせるレベルだが、それすらも無視する。間欠泉のごとく吹きあがる怒りは、もはやシリカから理性どころか、本能的な死の恐怖さえも奪っていた。目の前に移るのは只々殺すべき敵の姿。

殺す殺す殺すころすころすころすコロスコロスコロスコロ「気持ち
は分からんでも無いが、取りあえず落ち着け。」

不意に自分の感情とは正反対の、そんなのんびりとした声が耳に届いた。

直後、自分の攻撃がエイブに到達するよりも早く、エイブの迎撃がシリカに到達するよりも早く。

圧倒的な間合いを持った武器が二匹のエイブの身体を横一線に薙ぎ、その一撃で二体のドラクエイブは消滅した。

シリカは、いつの間にか自分の前に一人の男の背中がある事に気がついた。

奇妙な格好で、日本人なので黒髪はともかく、来ている服はまるで、男性が夏祭りに着ていく様なおおよその場所では不自然としか言いようのない、灰色の袖の長い浴衣の様な服を着ていた。

不思議な浴衣で、角度によって光の反射からか一部が緑色にも見える。

背は結構高く、大体180？前半位はあるのではないかと思えた。

こちらを振り向こうとするその男は、間の抜けた姿であるにもかかわらず何処か凄まじい威圧感を放っていて、シリカはようやく戻つて来た本能的な恐怖からか、自分でも気付かない内に二、三步後ずさっていた。

振り返った男と目が合った。

瞬間に、自分の首が飛んだ。
なんてことは無かったが、シリカの身体は相変わらず緊張で固まったままだった。

男が片手に持っていた柄の長い薙刀の様な武器を手の中できると器用に回すと、みるみる内に柄が短くなり、最終的には腰に下げてもあまり違和感のない長さ、大きさになってしまった。
男が口を開く。

「えーと、大丈夫……では無さそうだな、あんまり。」

そう言っただけで頭をかいた青年の声を聞いたとたん、シリカの強張っていた全身から力が抜ける。

小さな水色の羽が無造作に落ちていた。その前にかくりと膝をついた時には、既に自分の頬を涙がとめどなくなっていた。

既に怒りは消え去り、胸の中には大きな哀しみと喪失感だけが残る。いつの間にか自分は地面に手をつけていて、絞り出すような声、しかし自然と漏れていた。

「お願いだよ……あたしを独りにしないでよ……ピナ……」
小さな嘆きに水色の羽は答えを返す事は無く、せめてもと言うように少し揺れただけだった。

十一話 小さな勇者（後書き）

はい、いかがでしたか？

やあつと一人目。此処からは暑苦しさから解放されて……行くかな？
リアルの方はどんどん夏になって行っております今日この頃。

皆さん熱中症には気を付けてください。

一度熱こもった体育館でなっただけありますが、マジで死ぬますよあれは。

さて、次回からはシリカとの語り合いが多くなる「予定」です。

SAOの中で最も年齢が低いとされるヒロインキャラシリカ。

主人公との歳の差は5歳と結構離れてますが、不自然なところが無いようがんばります。

ご意見ご感想、心よりお待ちしております。

では！

十二話 涙が苦手な男（前書き）

はい、どうもです。

今回からは、いよいよシリカとの本格的な会話シーンに入ります。基本的に原作のシリカの台詞に沿いますが、主人公が違うので本来とは違う会話もたまに盛り込むと思います。そのさい、もしかしたらシリカのキャラが少し崩れてしまうようなことがあるかもしれませんが、申し訳ありません。

では、どうぞ

十二話 涙が苦手な男

目の前で、少女が泣いている。

嗚咽を漏らし、目からあふれ出す涙を自分の意思では止めることも出来ずに流れるがままにして、泣いている。

正直言つて、嫌な気分になる。

それは、苛立ちや、怒りなんかの激しい感情では無い。

嫌悪や、疑念なんかの黒っぽい感情でも無い。

ただ、嫌なのだ。

目の前で女性が涙を流すと、それが誰であれ何故であれ、たまらなく心がモヤモヤして気持ちが悪い。(嘘泣きは見分けがつくが) しかも、こんな状況からは普通の俺なら即刻立ち去る所なのに、そんな事が出来る流れでも無い位置に今の俺は居るわけで。

仕方が無い……か

「その、悪かった、間に合わなくて……」

何とか話してみないと、この子が泣き止むことは無さそうなのでとりあえず謝る。

多分俺がもうちょっと敏捷度を上げていけば、この涙は防げただろう。

或いは投擲スキルをうまく使っていれば。

或いは初めの一瞬の躊躇が無ければ。

いずれにせよ、もしかしたら防げたかもしれないこの状況に罪悪感を感じた俺は、自然と謝罪の言葉を口にしていった。

「……いいえ……あたしが……バカだったんです……。ありがとう
ございます……助けてくれて……」
と言われても、必死に泣くのを堪えてる顔ではむしろこっちが苦
しくなるばかりだ。

ああああ！駄目だ！どんどんモヤモヤが増してきた！

とりあえず何か逃げ道は無いかと考える……ふと、彼女の足元に落
ちている水色の羽が気になった。

俺は少女の前に跪いて、正面から目を合わせられるようにする。

「なあ、その羽……アイテムだったりするか？」

普通に考えればあの小さな竜の遺品なんだろうが、この世界に置
いてそんな気のきいたシステムは無い。

死ぬ時はきれいさっぱり砕け散って消滅するのがこの世界だ。逆に
いえば、何か残して逝ったという事は意味があるかもしれない訳で。

戸惑ったように少女が顔を上げる。

髪は薄い亜麻色で、左右を赤い玉のような装飾が成された髪飾りで
結んでいる。

顔立ちは整っているが、やはりというか……幼く、多分12〜4歳
だろう。

改めて正面から見ると可愛らしい顔をしている。中層プレイヤーた
ちのアイドルにもなるわけだ。

アイテムの名称などを見るには、シングルクリックの要領でその
アイテムに触れるのが最も手っ取り早い。

ゆっくりと、恐る恐るといった様子で少女の指が羽に触れ、半透明
のウィンドウにアイテム名と、何故か重量が表示される。

「ピナの心」

「0、2 pg」

軽いな、ピナの心。

いや、そういう状況で無い事は分かっているが何と無く思ってしまったんだ。うん。

と言うかこの子また泣きそうになってるし！ああっ！くそっ！

「待った待った！なんか思いだしそうなんだ、頼むから泣かんでくれ！」

「え……？」

後半が本音なのは認めるが、前半も決して口からでまかせでは無い。キョトンとした顔の少女を尻目に俺は必死に思考を巡らせる。確か最近どこかで……

『思い出せ、思い出せ思い出せ……早く思い出さないと精神的に俺がきつい……』

心、心、心……

考えている内に、俺の頭の中に三週間ほど前に俺の行きつけの店で義弟とした会話が思い出される。

『そう言えば最近47層で』

『へえ、でも俺使い魔居ないし関係な』

我が義弟に感謝だ。今度茶でも奢るとしよう。

「もしかしたらその使い魔、蘇生できるかも知れんぞ。」

「えー!？」

キョトンとした顔が、今度はぼかんとした顔に変わる。口が半開

きだぞ少女よ。

「俺も最近聞いた話なんだがな、47層にある《思い出の丘》って所に咲く《プネウマの花》ってのが、何でも使い魔蘇生用のアイテムらs」

「ほんとですか!?!」

最後まで言わせるよ。

まあしかし、先程までと違って彼女の顔には光が灯っていた。良い兆候だ、泣いて無いし。

駄菓子菓子^{だかしかし}

「……47層……」

またしても少女は落ち込む。まあ、この層(35層)であの戦闘内容なら当然だろう。

正直な話、とても一人で47層を突破できるとは思えない。というか、また泣きそうになってる。ああもう……

「あーっと……報酬さえもらえりや俺が行ってくるが、本人が行かんとその花が咲かんそうなんだよな。」

これも事実である。そして問題はもう一つ。

「いえ……情報だけでも、とつてもありがたいです。頑張つてレベル上げすれば、いつかは……」

「あーすまん、あまり言いたくないんだが、そう都合よくも行かないんだよ。」

この上更に追い打ちをかけるような事を言うのは非常に心苦しいんだが、言わずに頑張らせたなら事実を知った時に自殺でもしかねん。

「蘇生にはタイムリミットがあるらしくてな、3日以内に蘇生を行わないと、「心」が「形見」に変化して二度と蘇生できなくなるそ

うなんだよ。」

「そ、そんな……!」

まあ、さつきも言ったように35層である内容なのだ。恐らくこの子のレベルはせいぜい47層では適正レベル（階層数と同じ数字のレベル）かそれ以下。間違っても安全レベル（階層数に+10レベル程度）ではないだろう

「う、く……」

分かつてはいたが、やはり絶望させてしまったらしい。

目の前の少女は、地面に落ちていた水色の羽を両手で胸に抱くようにしてうつむき、肩を震わせながらまた、泣きそうになっている。

「……っ」

泣いている少女の姿が、頭の中で何かと……。

いや、俺には関係ない。分かっている。このままこの子が希望を無くそうが勝手だし、最悪自殺したって俺には全く実害は無い。

むしろ、俺は感謝されるべきだ。それが分かっているながら、こんな所までわざわざ追いかけて来てまでこの子の命を救ったわけだし。貴重な情報まで与えた。

この現実主義者しか生き残れなくなった世界で、人より自分を優先するのが当然の世界で、此処までただけでも異例だ。このまま立ち去っても誰もとがめない。

それに俺は今依頼を受けている。そうだ、今すぐ此処を立ち去ってロザリアを追いかけよう。そうすれば……

少女の瞳から透明な光が落ち、また一つ、地面に小さな染みを造った。

「畜生め。」

十二話 涙が苦手な男（後書き）

はい、いかがでしたか？

というわけでリヨウは実は女性の涙が根本的に苦手です。

しかも、他の作品の格好いい主人公たちと違い、「女を泣かせるなんて！」みたいな理由ではなく、「この人いい人だけどなんか見た目が嫌だ。」みたいな感じの正義感より個人的感情から来る苦手意識です。

要はあくまで自分のためというわけで。まあそれでも、やることは変わりませんがね。

大体は相手の涙を止めるために行動してしまうと巻き込まれる。それがリヨウと言う奴なのです。

あ、そう言えばPVが10000を突破いたしました！ユニークも2000に到達。本当に、感謝感謝です！

これからもがんばっていきますので、何卒よろしくお願いいたします！

ご意見ご感想心よりお待ちしております。

では！

十三話 ピナ救出チーム（前書き）

はい、どうもです

今回から数話、結構一話一話が短くなります。
すみません。

では、ごんご。

十三話 ピナ救出チーム

立ち上がり、俺はメニューウィンドウを開く。立ち上げたのはトレードウィンドウ。名前の通り、他のプレイヤーと物や金を交換する時に開くウィンドウだ。トレード目標は目の前の少女に設定し、俺はそこに次々にモンスターからドロップした中で少女が装備出来そうなものを選択し、ウィンドウにぶち込んでいく。

「あの……？」

いきなりの事に戸惑っている少女に、俺は淡々と述べる。

「これ装備すりゃ6、7レベルは底上げできる。後は俺が付いて行ってやっから、それで何とかなるだろ。」

「えっ……」

言いながらもアイテムを選択する手は止めない。

目の前の少女がじっと俺の事を見て来て居るのも気が付かないふりをして、操作を続ける。

腕、足、胴の装備から、ダガーとアクセサリー、後は……。

「なんで……そこまでしてくれるんですか……？」

手が止まる。見ると、少女はこちらを真っ直ぐに見ていた。

その眼に有るのは疑問とそして怪しむ光。

まあ当然の反応だろう。この世界で生き残るのは現実主義者やあくまでも自分本位の人間。「うまい話には裏がある」は、この世界の常識だ

さて、返答だが、一番の理由は殆ど個人的な好き嫌いみたいなものであって、衝動的な物に近い。しかしそれでこの子が俺を信用するとは到底思えない。

しかし、流石に俺もそれだけで此処までしてやれるほど、親切心の爆発した人間ではないのできちんとした理由もある。

「一つ、その竜が死んだ責任の一端が俺に有るとも言えなくもないから。」

「一つ、俺もその竜に興味がある。」

「一つ、俺の個人的な感情だな。」

「一つ、これはあんまり言いたくないんだけど、その……知り合いに君が似てて、それで。」

「へ？」

最後のは聞こえないようにボソリと小さく言ったんだが、どうやら聞こえてしまったらしく、以外そうと言うか……何とも形容しがたい顔になる目の前の少女。

「知り合いの人に……ですか？」

「ん、いかにも」

「その方って……？」

「……従妹だ。」

俺は目をそらす。あんまり言いたくなかったんだよな……

「従妹？」

「ん、従兄妹の兄妹の、妹の方にな。」

「……ぷっ」

「おい！？笑うなよ！俺だって恥ずかしいんだから！」

「ご、ごめんなさ……くすくす……」

「な……はあ。」

少女は耐えきれなくなったのか遠慮気味とはいえ笑い出してしまった。

正直俺自身、理由としてベタ過ぎると言うか、俺だって真剣な顔して「貴方が従弟に似ているから助けます」なんて物語じみた事言われたら笑ってしまうだろうけど。

やっぱり事実とはいえない言うんじゃないよ、畜生め！

だが……やっぱ女つてのは笑つてた方がいい。
うん、良い顔だ。

「よろしくお願いします。助けてもらったのに、その上こんなことまで……」

笑いのツボから抜け出した彼女は、申し訳なさそうにしながら自分のトレードウィンドウに何かを入力し始める。

「あの……これだけじゃ全然足りないと思うんですけど。」
見ると、ウィンドウの少女の側のアイテム欄に、結構な額の金が入力されていた。

恐らく桁が半端な所を見ると、彼女の持つ全財産だと思いが確かにこれだけではこのアイテムの相場とは到底釣り合わない。が、

「金はいい、さっき言った通り、俺が勝手にやることだし、それに君にあげる物は全部余ってたものだし。」

「でも……」

「はいはい、年長者の意見には素直に従うもんだぞ？」

「う……、分かりました。」

「よろしい」

子供は素直が一番。……まあ俺も未成年だが。

「でも、ほんとに何からなにまで……。あの、あたし、シリカって言います。」

ああ、そう言えば名乗って無かったな。忘れてた。

？、残念そうにしてあわてて首を振って、何をしてるんだ？この子

は。

「俺はリヨウコウだ。リヨウって呼んでくれ。よろしく、シリカ。」
手を差し出すと、シリカも俺より一回り小さな手を重ね、しっかりと握手を交わした

「さて、んじゃ先ずはこのうつつうしい森から抜け出すとしますか。」

「あ、地図お持ちなんですね。」

「……むしろ、持たないでこんなところに入る方がどうかしてると思うがな？」

「う……。」

自身の失敗を指摘され言い返せないのか、言葉に詰まりうつむくシリカに俺はため息をつくと、

「ほれ行くぞ。過去から学び、未来を見つつ今を行け……だ。幸いお前には過去の失敗を取り戻せるだけの可能性も残ってるわけだし。」

「は、はいっ！」

「よろしい」

そうして俺とシリカは街へ向って歩き出す。

ちなみにさっきの言葉は何となくななので深い意味は無い。強いて言えば口癖か。

さてさて、ピナ救出チーム始動だ。

十三話 ピナ救出チーム（後書き）

はい、いかがでしたか？

こちら辺、二つつなげると長すぎ、一つ一つだと短いという何か微妙なことになってしまっています。

最後の理由については、あれ意外にシリカをあの場合下で笑わせる策が思いつかなかったという、作者の未熟さがもろに出た理由であります。

ご意見ご感想、心よりお待ちしております。
では！

十四話 主街区に行く（前書き）

はい、どうもです。

今回も少々短いです。

が、だんだんと原作に無かった台詞が増えて来ます。

できれば少しでも新鮮さを感じていただければ幸いです。

では、どうぞ

十四話 主街区に行く

シリカと行動し始めてから三十分ほどが経った頃

正直あれだけ走り回った（シリカはリアル迷子になった）森がたつた三十分で抜けられた事に複雑な気分になりつつ、地図の偉大さを再確認しつつ、俺達は第三十五層の主街区へ辿り着いた。

この街は白壁に赤い屋根と言う、どこかの牧場にもありそうなタイプの建築物が多く、牧歌的な雰囲気のものびりとした街だが、現在は中層プレイヤーたちの主戦場である迷いの森等が近いせいか人通りが多く、なかなかの賑わいっぷりだ。

さて、街に入った俺達は取りあえず今日の宿へと向かおうと歩き出す。

大通りを通り、転移門のある町の広場を抜けて……と、数名のプレイヤーが声をかけて来た。

俺には無い。その全員の視線はシリカに向いていた。話を聞く限り、どうやらシリカをパーティに誘っているようだ。にしても……

『ずいぶんと熱烈なこつたなあ。』

流星は中層プレイヤーのアイドルとでも言おうか。迷いの森に一人で入った時のセリフは、正直な所調子に乗り過ぎではないかとも思えたが……

成程、これでは確かに、この年の子では少々自惚れてしまうのも頷ける。

「あ、あの……お話ありがとうございますけど……」

シリカも断るのに必死だ。

「……しばらくこの人とパーティーを組むことになったので……」

あ、そこで俺に話が回って来る訳か。

まあ、そりゃそーか。原因は俺だし。

シリカの取り巻きと化していたプレイヤーたちは、ひとしきり愚痴を言った後、俺に視線を向ける。

その眼に有るのは嫉妬、疑問、興味も交じってんな。

いずれにせよ、好意的な感情は皆無。まあ慣れっこだしどうって事も無いが。

「おい、あんた。」

両手剣を背中に背負った青年が結構高圧的な態度で話しかけてくる。

「見ない顔だけど、抜け駆けはやめてもらいたいな。俺らはずっと前からこの子に声かけてるんだぜ。」

「あー……つっても流れだったから……俺にもどうにも。」

いかな、パーティー勧誘ってのは誘われた側に選ぶ権利が有るか俺に文句を言うのは道理が違ってもんなんだが、こいつの言いたい事も分からんでも無いと言うか……下手な事言いつらいぞ。

「あの、あたしから頼んだので、すみません！」

「お、おい……」

袖をつかんで足早にその場を立ち去ろうとするシリカに引つ張られる形で、俺はそこから離れた。

北の通りに入り、プレイヤーたちの姿が見えなくなった所でやっとシリカは息を付きこちらに向き直る。

「すみません、迷惑を……」

「ああ、気にすんな気にすんな。特に何とも思ってたねえし。むしろ

お前の人気っぷりに驚いてる所だよ。」

「そんな事……ただのマスコットみたいな扱いで誘われてるだけなんです。なのに、良い気になって、調子に乗って一人で森に入ってそれで……」

げ、また泣きそうになってるし、今のこいつにあの使い魔の事は禁句だなこりゃ。

まあ、落ち込まれ続けられても困るしなあ。

「んな顔するな。さっきも言っただろ？過去から学び」

「未来を見つつ今を、ですね。分かつては、居るんですけど……」

そう言っただけまたうつむく。今は見えないが、目を見なくても不安なのは様子で分かる。

……つたく、見くびられたもんだ。

「心配するなって。」

「あ……」

無意識に、シリカの頭に手を置いていた。

その手の動きが、現実にはいたところキリトとキリトの妹が一度大喧嘩した時に、妹の方を慰めるのにやった動作とそっくりだった事には、後で気が付いた。

「俺だって協力するんだ、必ず生き返らせられる。安心しとけ。」

「リヨウさん………はいっ！」

「よろしい。」

涙をぬぐって微笑むシリカに、俺もいつの間にか笑顔を向けていた

しばらく歩くと、右側に大きな宿が見えて来た。恐らくシリカの泊まる宿だろう。「風見鶏亭」か。

すると、シリカがふと気がついたように。

「そういえばリョウさん、今日はどちらに?」

「ん? ああ、家帰んの面倒だし、この階層に泊まるつもりでいるが?」

「そうですか!」

何故にこんなうれしそうなのかね? この子は。

まあ、笑ってるからいいけど。

「このチーズケーキが結構いけるんですよ」

……ほほう?

「言っとくが、俺は甘いものにはちょーっとうるさいぞ?」

「……へ? 甘いものがお好きなんですか?」

「うむ、……意外か?」

「い、いえ、そうじゃないですけど……」

「無理すんな、顔に出てるぞ。」

「……すみません、意外でした。」

「よく言われるから気にするな……」

実際、俺がスイーツ好きだと知られると殆ど毎回意外そうな顔されるんだよな。

良いじゃないか、好きな物は好きなんだよ。甘いものは男女平等に与えられるべきだと俺は思うのさ!

「でも、此処のは本当に美味しいんですよ?」

「自信满满だな。よし、もし俺の舌を満足させられるものが出てきたら、褒美にアインクラッドの旨い菓子屋を紹介してあげよう。ついでに奢ってやってもいい。」

「本当ですか!?」

「俺は必要ない嘘はつかないぞ? ま、あくまで満足させられたら、」

「だがな？」

「むむ……頑張ります!!」

ケーキは規定の物が出てくるはずだからお前が何かを頑張れるわけではないんだがな、まあいいか。

十四話 主街区に行く（後書き）

はい、いかがでしたか？

前半のなでるシーンは短い文で少しでもリヨウをカッコ良く見せたかったのですが……
いまいちうまくいったか自信がないです。

そしてリヨウのスキルその二「甘味好き」（笑）です
世間一般から見て、ケーキとか甘いものはどうも女子が好きってイメージが強いみたいですね。

以前部活の女子に、「洋菓子とか好きなの？」と聞かれて「当然」と答えたら大爆笑されました。
まったく、失礼な！

っと、余計でした。

とにかくリヨウは結構甘味好きです。
ので、これからもちよくちよくお菓子が登場するかもしれません。

ご意見ご感想を心よりお待ちしております。

では！

十五話 悪意あるもの（前書き）

はい、どうもです。

現時点で最も短い話です。

物足りないかと思いますが、次話から何とかしますので申し訳ありません。

では、ごきげん！

十五話 悪意あるもの

ケーキの話題で盛り上がりながらシリカが俺を引っ張る様な形で宿に近づくと、宿の隣にある道具屋から、五、六人の集団がぞろぞろと出て来た。今日、シリカと行動を共にしていたパーティーだ。

殆どのメンバーはこちらには気が付かなかったようで、何事も無く通り過ぎたが、唯一最後尾にいた槍使いの女。ロザリアがこちらをちらりと見、とたんにシリカが顔を伏せた。

が、気が付かれたようで目敏く寄って来た。

俺を引っ張り、無視してシリカは宿に入ろうとするが……

「あら、シリカじゃない」

声をかけられると、立ち止った。

何か言うべきか迷った。が、まだロザリアと俺には接点が無いし、此处で話に割り込むのは不自然だろうと思ひ、自重する。

「……どうも」

「へえーえ、森から脱出できたんだ。よかったわね。」

そう言つてロザリアは口の端を歪める様な、嫌な笑い方をする。

「でも今更帰ってきてても遅いわよ。ついさっきアイテムの分配は終わっちゃったわ。」

「要らないって言ったはずです！　急ぎますから。」

シリカは早くこの女から離れたいのだろう。俺の事を引っ張って宿に入ろうとするが……

「あら？あのトカゲ、どうしちゃったの？」

トカゲとはピナの事だろう。

使い魔はゲームの使用上、主人の傍から離れることは無いから、そ

の姿が見えない以上理由は一つしかない。
ロザリアの瞳に宿っているのは明らかな悪意。それにこいつ、楽しんでやがるな……

「あらら、もしかしてえ……?」

先ほどよりも更に嫌な笑いを口元に浮かべながらロザリアは畳みかけようとする。

しかし、何か言われる前に今度はシリカの方から口を開いた。

「死にました……。でも!」

シリカの目が鋭くなり、ロザリアを睨みつける。

「ピナは、絶対に生き返らせませす!」

断言したシリカにロザリアは少し驚いたように目を見開き、小さく口笛を吹く。そして俺は、小さく笑っていた。

正直、この子が精神的に大丈夫か不安だったが、これなら大丈夫だ。それに、本人が成功を疑っているようでは、上手く行くものも行かなくなるだろうからな。

「へえ、てことは《思い出の丘》に行く気なんだ。でも、あなたのレベルで攻略できるの?」

その質問で言葉に詰まるシリカ。

つと、俺の出番かな。

「まあ、一応此処に手伝い役がいるんで。」

頭を掻きつつ、シリカの前に出ながらそう言う。

「それに、あそこ大したダンジョンじゃないし。」

見ると、ロザリアは俺の事を値踏みするように見ている。そして結論を出したらしいロザリアは、鼻で笑った。

あー、こりゃ見くびられたな、俺。

「あんたもその子にたらしこまれた口？見たとこそそんなに強そうじゃないけど」

「俺の評価についてはご自由に。どれ、行こうか。」

またしても泣きそうになっているシリカを促し、俺は宿歩き出した。うつむいていてよく見えないが、今のシリカは屈辱で顔をゆがませているのだろう。

「ま、せいぜい頑張ってね」

馬鹿にしたように言うロザリアに、シリカは振り向きもしなかったが。

俺は最後の言葉を発する瞬間、ロザリアの瞳に少しの歓喜と、強い欲望が宿ったのを、見逃さなかった。

シリカには少しだけ怖い思いをさせるかもしれないが、これは思いの外一石二鳥になりうるかもな……

十五話 悪意あるもの（後書き）

はい、いかがでしたか？

っても短すぎで何言えっつんだ。って感じだと思えますがw

やっぱりここら辺は。つなげると長いくせに切ると短くて……
いっそのこと長くすべきだったでしょうか？
次話はなんとかなっている……はずです。

では！

十六話 少女と青年の食事時（前書き）

はい、どうもです。

今回は、シリカとの会話メイン、というか全面的にそれです。
またリヨウが少し語り（？）ます。

それと少し、原作のシリカの性格的にこういうことは言わないのでは？というセリフがあるかもしれませんが。

では、どうぞ！

十六話 少女と青年の食事時

《風見鶏亭》の一階部分はホテルのロビーに隣接してレストランが置かれている感じで、チエックインと料理の注文をする受付が一体になっている。

「とりあえず、チエックインと注文済ませてくるから、適当な席に座つといてくれ。」

そう言つてこちらを見るリヨウに頷いて返すと、リヨウは受付へと近づいて行く。

シリカはわざと奥の隅の方の席に座つてリヨウを待つ。

見ると、ちょうど注文を終えたらしいリヨウはこちらを見つけ、近づいて小さな丸テーブルをはさんだ向かいの席に座つた。

「あの……」

シリカは不快な思いをさせたであろうリヨウに謝ろうと口を開くが、リヨウに手で制された。

目の前のリヨウは神妙そうな　けれど何故か危機感の様な者は感じない　顔をしながら、

「まあ待て待て。先ずは飯だ飯、腹が減つちやあ話も出来ん。」
別に話は出来るのでは？

とシリカは思ったが、口には出さずにおとなしく口を閉じる。

とその時、ウェイターが湯気のものぼるマグカップを二つ持ってきた中を見ると、そこにはトロトロとした黒に近い茶色の液体が入っている。

立ち上る湯気からは甘い香りがし、その香りにシリカは覚えがあった。

「チョコレート？」

「お、正解」

リヨウ狙いどおりとばかりににやりと笑うと、カップを一口飲む。それに習いシリカもカップに口をつける。

ココアか何かかと思っていたが、いざ飲んでみるとココアよりも濃厚で深い甘みが口の中に広がった。しかも甘味だけで無く、時折顔を出す苦味がアクセントとなって、微妙に大人っぽい味を演出している。

「……おいしい……」

「だろ？」

そう言わせる自信が有ったのだろう。シリカの様子を見てリヨウは少し胸を張っていた。

「あの、これは……？」

しかし、自分はこの宿に既に二週間近く滞在していたにもかかわらず、この味におぼえがなかった。隠しメニューでもあったのだろうか？

「実はだな、NPCレストランってのはボトルとか、飲み物の持ち込みも出るんだよこれが。でこれは俺が持ってた《ブラック・ビター》ってアイテムだ。なんと、カップ一杯で筋力の最大値が1上がるという優れたもの」

「そ、そんな貴重な物……！」

驚いて声を上げたシリカだが、リヨウは大して気にする様子も無く。

「まあ、飲み物を何時までも持っていてしょうがないしな。それに、一人寂しく飲むよりは、こういう時に人と飲んだ方がよっぽど

「いい味すらあな。」

「あ、あとチーズケーキに対する基準提示って意味合いもあるな。」
と言って「ふっふっふっ」と怪しい笑い声を出すリヨウにシリカは
思わず笑ってしまう。

もう一度目の前のホットチョコレート（正確にはそれに似た何か）
を飲むとまた甘みが口の中に広がる。

その甘みは、色々な事（主に悲しい出来事）が有ったせいで、固く
なった心と疲れのたまった身体をゆっくりと溶かすように癒してく
れる気がした。

飲みながら、ふと思った事を口にする。

「でも、《ブラック・ビター》ってコーヒーみたいな名前ですね。」

「あー、駄目だ。コーヒーは駄目」

「え？コーヒー飲めないんですか？」

「うむ、無理だ。あの苦味の塊みたいな黒い液体を上手いと思える
奴の気がしれん」

至極真面目な顔をしてそう語るリヨウを見て、またしても笑いが
込み上げてくる。

此処まで、年上のお兄さんと言うイメージが強かった彼だが、コー
ヒーが飲めないという以外に子供っぽい発言で何故か一気に親近感
がわいた。

森で、自分を助ける理由を語った時に見せた恥ずかしそうな脱力し
た様な表情を見せた時にも思った事。

変わっているが面白い人だ。なにより。

『この人は、悪い人じゃない』

シリカは、今はこの人に助けられて良かったと思えていた。

だが、安心した矢先、シリカの中に先程のロザリアとの会話が思い出される。

『あら？あの‘トカゲ’、どうしちゃったの？』

『あらら、もしかしてえ……？』

『あんたのレベルで攻略できるの？』

『あんたもその子に‘たらしこまれた’口？』

全てのセリフが、まるで他人の不幸を喜んでいるとしか思えない。嫌な笑いと共に放たれていた。本当に、嫌な笑いと共に。

「……なんで……あんな意地悪言うのかな……」
気が付くと無意識にそう口に出していた。とたんにリヨウがどこか憐れむような表情になる。

「シリカって、此処に来る前にMMOやったことは？」

「いえ……」

シリカは首を横に振る。

「成程な　まあ、どんなゲームでもやり出すと人格変わる奴ってのはいるんだよ。善人になるか悪人になるかは人によるんだがな。まあ元々、ロールプレイってのは他人になりきって、その人物の人生なんかを体験するって意味だから、間違っちゃいないんだが、」
そこでリヨウは一度言葉を区切ると、真剣な表情になる。

「知ってのとうり、このゲームは全く勝手が違う。誰も顔を隠せないし、他人の目から隠れられない。自分自身の姿で生きるしかない。」

「

「それなのに、いくらなんでも他人の不幸を喜ぶだとか、強盗染みた事するとか、果ては殺しをする奴が多すぎるんだよな。」
そう言つて、シリカの事を真っ直ぐに見るリヨウの目は苦々しさと同時に、どこか悲しみをたたえているようにも見えた。

「でもな、そんな奴らでも、少なくとも現実ではまともな人間として生きていたはずなんだ。なら、いま殺人まで犯している奴らと、そいつらの現実の姿との境界線はどこだと思つ？」

突然問われ、シリカは戸惑いながらも考えたが、直ぐには答えが出なかった。

考え込んでいるシリカにリヨウは口を開く。

「俺は『法』だと思つてんだよな……」

「法……ですか？」

「ああ、考えてみりや当たり前なんだけどな。法つてのは抑止力だ。それを犯せば罰が与えられる。だから人間は、最後の一线を越える事を理性で抑える事が出来るんだ。自分に被害が及ぶから。」

「この世界で人を殺しても、本当に死ぬかなんてのは分からない。だから、この世界での殺人は罪にはならない。」

これは、この世界で殺人をするオレンジプレイヤー達が殺人の理由としてしょっちゅう上げる理由だと聞いたことが有る。それはつまり、この世界で殺人はしてはならない事だが、強制的に禁止する物は無いと言う事。

「けど、この世界に法は無い。じゃあ、ストッパーが無くなった瞬間にそれらを簡単に犯す奴らは何なんだろうな？」

二度目の問い。シリカにはリヨウの言いたい事が分かった気がした。

「多分、この世界でそういう事をする連中は現実でも自分に実害が

なければそう言う事をする、根の腐った奴なんだろうな………正に人間の本质が見えてるってわけだ。」

その吐き捨てる様な言葉と威圧感に気圧されたシリカにリヨウは、すまんすまん。と軽く笑って謝る。

しかし、

「まあ」

言葉を続けたリヨウの瞳をみたシリカは驚きを隠せなかった。その時のリヨウの瞳には先程とは比べ物にならない様な深い、何処までも深い哀しみの色のはつきりと見てとれたからだ。

「俺も、人の事言えた義理じゃねえんだよ。人助けなんて殆どしないし、何より」

次に続く言葉が、何故だかシリカにはは分かった気がした。

「俺もそのクチだしな。」

「リヨウ、さん……？」

シリカは少し驚いたが、何となくでも予想が出来ていたためだろう。そこまでではない。

シリカは、目の前の浴衣姿と言う奇妙な青年が持つ、その愉快的姿に似合わぬ深い苦悩を何となくだが感じ取っていた。

何か言わなければと思うのだが、恨めしきは語彙の少なさか、言いたい事を上手く形にする事が出来ない。

その代わりと言おうか、シリカはテーブルの上に拳となつて置いてあつた自分より一回り大きなリヨウの右手を、両手で無意識に包み込んでいた。

「リヨウさんは良い人です。あたしを、助けてくれたもん」

リヨウが驚いて一瞬硬直するが、直ぐに力が抜けるとどこか自嘲気味な笑みを浮かべる

「シリカって以外に度胸あるんだな？今のは結構嫌われる覚悟で言っただぞ？」

「度胸なんて必要ないです。私はリヨウさんを信じてますから。」
即答したシリカにリヨウは少し驚いた様な顔をしているが、シリカは自身は本気でリヨウを信用していた。

それがある意味危険な事なのは分かっている。

自分はこの青年について知らない事が多すぎるし、これまでのやり取りが全て演技だったという可能性も無い訳ではない。

何より、許されない様な事をしたとリヨウが言った以上、それなりに恐ろしい事を想像して警戒するべきだ。……最悪の事も含めて。

それでも、シリカはリヨウを信用したかったのだ。

さつき大通りで、不安に押しつぶされそうになっていた自分の頭をそつと撫でてくれた時、まるでリヨウの優しい心が直に伝わって来るような、そんな感覚がした。

あれが演技だと言うのなら、最早リヨウの演技は神の域だろう。
それに……

「それに、私がこんな事言っているのかは分かりませんが……自分のやった間違いを哀しめる人が、普通のオレンジの人たちと何もかも一緒だなんて、私は思いません。」

「……！」
リヨウは今度こそ驚愕したようで目を見開いたが、シリカの真っ直ぐな視線を見て、それは柔らかい微笑に変わった。

「はは、俺が慰められるとはなあ……うん、元気出た。ありがとよ、

シリカ。」

その時のリヨウの笑顔を見た瞬間、シリカは自分の顔が急激に熱くなるのを感じた。今更ながら、自分がしている事の大胆さに気が付いたのだ。わけも分からない内に心臓の鼓動が速くなる。胸が痛い。慌ててリヨウの手を離して両手で胸の中心を抑える。しかし、依然として胸の痛みは消えない。

「ん？……どした？」

「な、なんでも無いです！あたし、おなかすいちゃった！」

若干言い訳がましいと思いつつも、シリカは話をそらすためにそう言った。が、

「なんだなんだあゝ？ホレホレ」

「んむ、止めてくださいよお」

シリカの態度から何かを察したのか、頭をくしゃくしゃと楽しそうに撫でてくるリヨウにシリカは小さく抗議するが、それが何となく楽しくてしばらくそのままじゃれていた。

さて、そのまま突入した今日の夕食は、シチューと黒パン。そして件のチーズケーキであった。

シリカの今後のデザートが掛った選定の結果はと言うと……

「おっ、これは中々……」

「どうですか！？」

「うむむ……触感も8層のあの店に似て、いやいやしかし……」

リヨウは難しい顔をして、味を見定めているようだ。シリカは緊張しながらそれを見守る。

そして突如、リヨウがそれまで閉じていた目を大きく見開いた。妙な迫力に満ちたその表情に、シリカは一瞬たじろいだ。

「うん、よし。合格！」

「本当ですか!?!」

「おう、今度俺のお進めの店連れてってやるよ。おごりで。」

「わぁ!やたー!」

嬉しさのあまり、諸手を上げて喜ぶシリカにリョウはさらに嬉しい提案をして来た。

「その時にはピナも一緒だな。餌でも買ってやるか。」

「はい!ありがとうございます!」

「さて、そうと決まれば明日は張り切って行くでしょう。」

「はいっ!」

と言う訳で、この件が終わったらシリカはケーキを奢って貰える事となった。

何とも現金な事だが、この時からシリカのやる気は二倍増しとなった(もちろん再優先はピナだが)

十六話 少女と青年の食事時（後書き）

はい、いかがでしたか？

今回は、オレンジの方々の大前提をおさらいするようなことしか言えず、もっと言えることはないのかと思った挙句、結局なにも思いつきませんでした。

リヨウとシリカは、恋愛よりも、兄妹的な二人にしていることと想っています。

ちなみに、コーヒーは僕も苦手です。あの後味がキツイ……

ご意見ご感想心よりお待ちしております。

では！

十七話 風見鶏亭の夜（前書き）

はい、どうもです。

なんかタイトルが「銀河鉄道の夜」みたいになってますが、偶々です。

今回はまあ、そこまで重要ではない話です。あくまで過程です。はい。
の割にいつもより長めですがね。

では、どうぞ。

十七話 風見鶏亭の夜

「ふう……」

飯を食べた後俺達は、明日に備えあてがわれた部屋で早めに休むことにした。

しかし、シリカと別れてから約一時間ちょっと。

俺は、SAOに来てから毎日欠かさず行っている、とある日課をこなしていた。

俺の日課。

それはその日の活動を始める前、起床してからの二時間と、就寝前の二時間に一つのスキルを徹底して使いまくる。と言う物だ。

SAOのスキルシステムは、レベル制や、ポイント制ではなく、その系統のスキルを繰り返し使う事で凄まじくゆっくりした速度で溜まっていく。

しかし、たとえゆっくりと言っても、そのスキルだけを徹底的に連続で使っていけば、大体二時間で2か、多ければ3くらいはスキル値が上がるのだ。

スキルのマスター値は1000、一日に大体4程度上がるので、単純計算で250日で、一つのスキルをマスターできる事になる。そしてこのゲームが始まってから約一年半。

俺の完全習得しているスキルは、フィールドでも意味も無く歩きながら使えるスキルを使いまくっていたりする事もあり、メインに使っている武器と、武器防御、策敵、音楽の四つだ。もうすぐマスターできそうなスキルも後二つ三つある。

「ふっ！ふっ！」

ちなみに今鍛えているのは、《足技》と言う《体術》のスキルか

らの派生形スキルだ。

名の通り、蹴りを《体術》のスキルで徹底的に使用すると現れるスキルで、蹴りを初めとした足を使う技が集中している。

ちなみに、ただ蹴り続けると言う地味な作業を繰り返さなくてはならないため殆ど鍛えているプレイヤーは居ない。

ならなぜ俺がこのスキルを上げているのかと言うと……俺が体術における蹴り技の、ある特異性に気が付いたからだ。

まあ、それについては今はどうでもいい。

「ふっ！ふっ！」

只々、何度も何度もスキルを発動させては繰り返し出し、発動、繰り返し出しの繰り返し。

退屈だし、精神的に疲れるが、もう慣れた。

さて、それからさらに約二、三十分、時刻は午後九時台後半になつており、そろそろやめにしようと思つて足を止めた所へ、まるで狙つたように部屋に扉をノックする音が響いた。

「おう？はいはい？」

遅い時間の訪問者に疑問を抱きつつ、ドアを開けるとそこに居たのは、先程までと違い、可愛いチyunickを身にまとつたシリカだった。

「なんだ、どした？」

「あの」

「ごもるシリカに、俺は少しばかり悪戯心をくすぐられる。

「なんだあれか？もしかしてシリカって一人だと寝れない人なのか？しかし流石に此処に来るのは……」

「ち、違います！ええと、その……よ、四十七層のこと、聞いてお

きたいと思つて！」

「ほーう？……ま、良いけどな。」

「なんだか若干、「今思い付いた」感のある理由だったが、まあ何もわざわざ追求する事も無いだろう。」

「んじゃ下行くか？」

流石にこの歳の子と部屋で二人はまずいだろうと思ひ、そう提案した。のだが……

「いえ、あの よかつたら、お部屋で……あつ、あの、貴重な情報を誰かに聞かれたら大変ですし！」

「え……んー、俺は、構わんが……」

これは……どうなんだ？モラル的に。

本人の希望だから良いのか？

少々迷いつつも、俺は一步ドアから退きシリカを部屋の中に招き入れる。

と、シリカは「お邪魔します」と言いつつ恐縮した様子で部屋に入つて来た。

部屋にはティーテーブルと、ベッド、それに椅子が一脚あり、左の壁では備え付けのランタンが光を放っている。

俺はシリカを椅子に座らせ、アイテムウィンドウから幾つかのアイテムを取り出す。

ポット、金属のコップ二つ、小さな小箱。

それらを机の上に置き、ポットからコップにアイスティー（っぽい）を注ぐ。ちなみにこのポット、何時でもどこでもアイスティー、ホットティー、水を無限に出せるという優れものだ。（実際かなりレア）

「ほい。」

「あ、ありがとうございます。」

シリカがコップをもったのを確認しつつ、俺は机の上の小箱を開く。と、中には小さな水晶玉がランタンの光を反射してなかなか幻想的な光を放っていた。

「綺麗……。それは何ですか？」

「ん？《ミラージュスフィア》ってんだ。効果は……今見せてやるう。」

そう言いながら水晶玉を指でワンクリックすると、メニューウィンドウが出た。幾つかの操作をして、OKボタンを押すと水晶玉が青く発光し、大きな円形の立体ホログラムが現れる。

「うわあ……！」

シリカが歓声を上げ、身を乗り出すようにホログラムを覗き込む。この《ミラージュスフィア》は、このように所有者が一度でも行った事のある層の地図を立体ホログラムで表示するアイテムだ。

結構高価だが、プランなどが立てやすくなるし、何より面白いと言う事で前線プレイヤーの中でも所有している人は多い。

夢中になって地図を覗き込んでいるシリカに、層の説明を始める。

「この真ん中のが主街区な。で、俺達の目的地である思い出の丘は此処。道は一本道の此処を通る。ただし、この辺りにはたまに厄介なものが出っから注意だな。」

説明しつつ、無意識に策敵スキルで周囲を探る。あまり必要ないかとも思ったが、最早癖の様なものになっているので仕方がない。

結果だけ言うと、策敵をかけたのは正解だった。扉の前にプレイヤー反応が一つあったのだ。

これは……盗み聞きか。

「んで、此処をたどってつてまずはこの橋を目指す……」
説明しつつ俺はベットから立ち上がる。

怪訝そうな顔をするシリカに人差し指を口唇にあてて静かにするよ
うに伝えつつ、俺は足音を殺してドアへと近づく。気付かれないよ
う、徐々に声にトーンを落としながら。

「此処まで辿り着けば後はもう此処から丘が見えるから一直線、つ
てこゝんな夜更けになあんの御用ですかなお兄さん!？」

ドアを開けながらそう言い放つと、一瞬呆けたような顔を見せた
盗み聞き犯は慌てて逃げ出した。正直追いつくのは容易いが、此処
は泳がせるのが得策だろうと思いついて追いかけずにそのまま逃がす
慌てたようにシリカがドアから顔を出した時には、既に盗み聞き犯
は下へ続く階段を駆け降りる所だった。

「な、何……!？」

「……話を聞かれた。所謂盗み聞きだな。」

「え……でも、ドア越しじゃあ声は聞こえないんじゃない……」

「ところがどっこい、聞き耳スキルが高いとそうでもないんだなこ
れが。まあ、そんなスキル上げてる物好きはあんまないがな。」

かく言う俺もその物好きの一人なわけだが、まあそこはスルす
る方向で。

部屋の中に戻りドアを閉めると、俺は再びベットに座る。さてさて、
これからどうするか……

取りあえず、ロザリア達「タイタンズバンド」が俺達、（正確には
ブネウマの花）をターゲットにした事は確かなようだ。こちらとし
ては一網打尽が最も望ましいので、どちらかと言うと俺の都合の良
い方向に事態は転がっているとと言える。

と、隣に座るシリカに視線を向けると、彼女は不安げな表情で、自分の事を抱きしめるように両腕を自身の身体に回している。まあ無理も無い。夜中に自分達の会話盗聴されたなんて知ったら、特にこの歳の女子では誰だって不安だろう。

「……………大丈夫か？」

「あ、はい。……………でも、何で立ち聞きなんか……………」

「多分直ぐに分かるだろ。ちよいとメッセージを送るから待っててくれ。」

言いつつ俺は、机の上のスフィアを片づけつつ、ウィンドウからホロキーボードを開き、ロレントに現状報告のメッセージを送る。

ロレントからは、「よろしく頼む」とだけの答えが返って来た。

「さて、そろそろ遅いし、シリカも自分の部屋に、っておいおい……………」

メッセージを打ち終わり、そう言いながらベッドの方に振りかえると、シリカは俺のベッドの上で静かな寝息を立てていた。

「まったく……………ほらほら、さっさと自分の部屋に……………」

「すう……………すう……………」

「……………はあ、警戒心つてのはねえのかね、この子は。」

普通今日始めて出会った相手の部屋には寝ないだろ。それも異性だつてのに……………」

「……………しかしまあ、此処まで気持ちよさそうに寝てるとなあ……………」

正直、起こすのも悪い気がする。かといって、彼女の部屋に運ぼうにも、システム上、彼女以外が彼女の部屋の扉を開くことはできない。

「しかたない、か。」

俺は嘆きつつ、掛け布団をしっかり掛けてやり、座った体制のままベットの外に投げ出されていた足もベットの中に戻す。

そんな事をしてるうち、ふと、先程シリカに言われた事が頭の中に蘇った。

『それに、私がこんな事言っているのかは分かりませんが……自分のやった間違いを哀しめる人が、普通のオレンジの人たちと何もかも一緒だなんて、私は思いません。』

正直、言われた時は驚いた。

俺は、人とは少し違う所がある。

異常、特殊、変態。

幾らでも言い方はあるのが、取りあえず、俺には常人とは決定的に違う所があるのだ。

……それは多分、悪い意味で。

その違いのせいで俺は、自分の犯した罪に、自分が何を思い、感じているのか、未だに答えを見つけれられていない。

もしかしたら、答えなど自分には見つけれられないのかもしれないと、最近半ばあきらめていた。

だが、実際はどうだ？

俺はこんな初対面の少女でも見てとれるほど、あの時の事を分かりやすく哀しんでいたらしい。

その事に気がつかされた。

今まで、この子よりよっぽどながく共に居た連中にも気が付かされなかつた事を、だ。

ゆえに驚いたし、同時に思った。

俺は、哀しんでいたのか？

この問いは、俺自身への問いだ。

もしかしたらそれは、答えを見つけるための欠片の一つになるかもしれない。

それがシリカの勘違いであったり、俺の中の何処かに有る願望にすぎた逃げだったとしても、だ。

だから今は、側で眠るこの少女に感謝した。

自分の中の、答えの見えない問いに一つヒントをくれた、この少女に。

ちなみにその日は、寝袋で寝た。

十七話 風見鶏亭の夜（後書き）

はい、いかがでしたか？

というわけで今回はまあ、盗み聞きしてるやつが居たってことだけ分かっていただければ、それでOKです。

どうでもいいですけどほんと、初対面で男女が一緒の部屋に寝るってどうなんですかね？モラル的に。

僕ですか？そりゃまあ（ry

にしてもなぜこんなに長くなっただし……

でわ！

十八話 L e t ' s g o t o t h e 〈 f l o w e r g a r d e n 〉

はい、どうもです。

はい？何で今回タイトルが英語なのか？

いや、特に意味はないんですけどね。しいて言うなら高校生はカッコつけたがるもんなんですとだけ言っておきます。

まあ、全員じゃないですが。

では、どうぞ！

耳元で奏でられるチャイムの音で、シリカは目を覚ます。

この世界では朝、自分だけに聞こえる起床アラームで、強制的に起こしてくれるという非常に便利な機能が有る。

無論、起きてから二度寝するしないは自由だが、いつも朝が苦手なシリカはしかし、今日はスッキリと目が覚めた。

現在時刻は午前七時。

一度大きく伸びをしてから、ベットから降りようとしてシリカは普段部屋に無い物の存在に気が付いた。

部屋のティーテーブルの上の小さなポット。

それを見た途端に、シリカは昨日の出来事と、ついでに此処がどこなのかを思い出した。

134

『私、リヨウさんの部屋で、そのまま……』

そこまで理解したとたん、顔が火炎ブレスで炙られたかのように熱くなる。

SAOの世界は感情表現が過剰なので、もしかしたら頭か耳から湯気の一つでも出ているかもしれない。

地面に寝袋がほつたらかしになっっている所を見るに、どうやらリヨウは床で寝たらしい。

幸いと言うべきか、今は何故か本人は居ないがそれはどうでもいい。恥ずかしいやら申し訳ないやら、そんな感情がごちゃ混ぜのパニックになった結果、シリカは両手で掛け布団をひつつかみ、顔を覆って身悶える。

「……朝からベットの上で何をやってんの、お前は。」
「ぴゃあー……」

どれくらいそうしていたのかわからないが、突然苦笑した様なリヨウの声が掛けられ、驚いたシリカは変な声と共に顔を跳ね上げた。

と、いつの間にか部屋に戻って来ていたリヨウともろに目が有ってしまった。しかも早く目を離せばいい物を、何故か目が離せなくなり、リヨウと見つめ合う形になってしまう。

こうして見ると、やはり年上と言う印象の強い青年だ。だが、どこか幼さの残った顔をしている。

高校生、位だと思うのだが……どうなのだろう？

そんな事を考えていると突然リヨウが困ったような表情と共に頬を掻き、

「あのー、正面から見つめ合うのはさすがに恥ずかしいんで目、逸らしていいか？」

「ぴゃあ！？え、あ、は、はい！」

「……とりあえず落ち着けな。」
笑いながら言うリヨウに、シリカは言われた事とは逆にますます赤くなってしまうのだった。

それから五十分ちよつと。

準備や朝食などを済ませ、宿の隣の道具屋で回復ポーション等の補充を済ませた二人は、ゲート広場へと向かう。

シリカはリヨウに先行して転移門へと飛び込もうとしたが、そこではたと足を止める。

「あ……あたし、四十七層の街の名前、知らないや……」

マップを見て確認しようとする、横にきたリヨウが右手を差し出してきた。

「俺が指定した方が早いだろう？」

「あ、はい。」

有りがたく申し出を受けることにして、おずおずと差し出された手を握る。

「転移！フロリア！」

一瞬、軽い転移時特有の浮遊感がしたかと思うと、次の瞬間には無数の色彩の乱舞がシリカの目の中に飛び込んで来た。

「うわあ……！」

意識せずして、自然と歓声が口から洩れる。

第四十七層 主街区 《フロリア》

そのゲート広場は、無数の花々詰め尽くされていた。

円形の広場を細い通路が十字に貫き、それ以外の場所が煉瓦で出来た花壇となっていて、そこに、見た事の無い花々がまるで周りに埋もれないよう自分の存在を主張するかのように一輪一輪咲き誇っている。

「すごい……」

「この層の通称は《フラワーガーデン》って言ってな、街どころかこの階層事態の至る所が花だらけなんだぜ？時間が有りゃ北端の《巨大化の森》とかにも連れてってやるんだが……」

「それはまたのお楽しみにします。」

そう言つてリヨウに笑いかけてから、シリカは花壇を覗き込む。水色っぽい、矢車草にも似た花に顔を近づけ、香りを吸い込む。

花は、花卉からおしべ、葉や茎に至るまで、驚くほどリアルに作ら

れていた。

ただし、それはシリカが注目しているこの花だけで、視界の端に移る花は、グラフィックは少々雑だ。

これはSAOに採用されている、《ディティール・フォーカシング・システム》による物である。

これは簡単にいえば「プレイヤーの注目した物のみ、そのディティールがリアルになる。」と言う仕組みだ。

ナーヴギアに使われているCPUや、SAOのメインフレームは確かに優秀だが、流石にこの広大なインクラッド全域のグラフィックをリアルに出来るほどのキャパシティを備えてはいない。

しかし、このシステムを使えばシステムにかかる負荷は大幅に減り、なおかつ、プレイヤーには本物さながらの見事なグラフィックを体感してもらう事が出来る。

ちなみに、この仕組みを思いついたのも、ゲームデザイナーでもある茅場本人だとかそうでないと言われている。

閑話休題

存分に花の香りと色彩を楽しんだシリカが顔を上げると、リヨウは近くの屋台で何か買物をしていた。

振り向いたリヨウは、面白い物を見つけた子供のような表情でこちらに駆け寄ってきた。

「見るシリカ、こんなもんが有ったぞ。」

「何ですか……？壺？」

リヨウの小脇には、茶色い16、7?くらいの壺が抱えられていた。壺の中からは、5本の竹串が突きだしている。

「これはな、60本までならどれだけ食べても団子が次々に中から湧き出るように出て来ると言う団子好きにはたまらない魔法の壺なのだ。まあ、先ずは一本食ってみ？」

「は、はあ……いただきます。」

喜々とした表情で壺をこちらに差し出してくるリヨウに、完全に花より団子だなあ……とか思いつつ、シリカは壺の中から竹串を一本引っ張り出す。

中から出ていたのは、みたらしだれっぽい何かが付いた団子っぽいものだった。ちなみにリヨウは緑色の草餅っぽい色の団子に餡子っぽい物が掛ったタイプの物だ。

「（はぐっ）」

「（もぐっ）」

シリカが四つの内の先端の一個（リヨウは一気に二個）食べ、咀嚼する。

と、モチモチとした食感と共に口の中にみたらしの香ばしく、甘じよっぱい味が広がる。

「おっ、普通に団子だな！これ。」

「おいしいです！」

一個目を食べ終えた二人が同時に感想を述べる。
なるほど、これは中々当たりの様だ。

こんなのんびりとした調子で良いのだろうか？と思いつつも、シリカはこの状況が嫌ではなかった。

はい、いかがでしたか？

まあなんとというか、団子って美味しいですよね。

でも最近団子屋さんって見ませんよね。

うちの学校の近くには団子メインの店があるんですが、やっぱりス

ーパーのとは餅から違う感じですよ。

ちなみに作者は草餅に餡子が好きです。

皆さんはどうですか？

では！

十九話 花に囲まれた行軍（前書き）

はい、どうもです。

さて、それではいよいよ、フラワーガーデン攻略作戦の始まりです。そこまで難しいことはないはずですが、相変わらず短いので、少しずつ進みます。

もう少したくさん書きたいところですが、なかなか。

十九話 花に囲まれた行軍

さて、現在俺達二人は三十五層の主街区を歩き、南門へと進んでいる道中だ。

隣にはシリカが並ぶ形で一緒に歩いている。

ちなみに俺は、先程勝った屋台の魔法の壺から取り出した、胡麻のしつこさのあまり無い甘さと、香ばしさが特徴の団子の味を感じている所だ。(壺の中には、これと、草餅餡子とみたらしの団子が入っていた。)

途中、シリカから従弟妹についてなどを聞かれたりしてだべっていたのだが、ちょうど団子を食べ終えたころ、目の前に鉄で編まれたアーチにツタの植物がからみついたよう作りの南門が見えてくるとシリカはとたんに緊張した様な表情になる。

いや、実際に緊張はしているのだろう。

少なくとも、これから自分のレベルでは本来圧倒的に届かないフィールドへ出るのだ、誰でも緊張はする。特に、彼女にとっては大切なパートナーの命が掛っているのだから尚更だ。

門の目の前まで来た所で足を止めると、シリカは少し前に出て、俺と向き合う形で立つ。

「さて、いよいよ冒険開始なわけだが。」

「はい。」

表情の引き締まった状態のシリカに取りあえず一番重要な注意をする。

「お前のレベルと渡した装備なら、まあ此処のモンスターは別に倒

せない敵ってわけじゃない。だが……」

俺は左の袖に手を突っ込む。実はここ、左右共にポーチのように物を入れられる仕組みになっており、片方に付き二つくらいまでなら物を入れられる。

他にも俺は、服の裏だとか、腰の後ろの所だとか、色々な所に色々な物を仕込んでいるのだが……まあ、今はどうでもいい。

「フィールドじゃ何が起きてもおかしい事はねえからな。もしもなんかあつて俺が離脱しろつて言ったら、何処でもいいからその結晶で跳べ。その際、俺の事は一切考えるな。」

「で、でも……」

「いいな？必ずだぞ？」

□ごもるシリカの言葉をさえぎって俺は言葉を強調する。

その言葉に納得したのか、はたまた俺の迫力がすごかったのかは知らないが、シリカはたじろいだように頷く。

心配してくれる気持ちは勿論嬉しいのだが、無理をされてもしもの事が有ったのでは、話にならないのだ。

頷き、少し暗い表情をしているシリカに、俺は先程とニツと笑いながら出発を促す。

「さあ、んじゃパパア〜つと行くぞ！」

「あ……はい！」

少し驚いたように顔を上げたシリカだったが、直ぐに明るい笑顔を取りもどし、頷いた。

かくして、俺達ピナ救済チーム（2人だが）はフィールドへと繰り出した。

さて 行軍中、どうもシリカは足手まといになるまいとしているらしい。

気合十分に前を歩いている。

駄菓子菓子

「ぎゃ、ぎゃあああああ!? なにこれ !? き、気持ちワル

!?!」

歩き出して数分、最初のモンスターとエンカウトしたのだが、
どうやら戦闘以前の問題が有ったようだ。

「や、やあああ!! 来ないで

」

『いやいや、そんな事言ったってモンスターなんだから近付いて来るぞー』

とか胸中でツッコみつつ、俺はシリカの戦闘(?)を傍観している。

草むらから飛び出してきて、今シリカと相対しているのは、太い茎の先を枝分かれさせ、地面をしっかりと踏みしめることで、移動可能な、まさしく《歩く花》とも言べき奴である。

まあそれだけなら特に何も無かったのだろうが、問題なのはその茎の先だ。

そこにはヒマワリのような巨大花が乗っており、その中央にいかにも汚そうな不揃いな牙を生やした口がパツクリと開いて内部の毒々しい赤をさらしている。

また、茎と花の間からは肉質のツタが伸びており、どうやらその蔦と口に攻撃判定が有るらしい。

「やだつてば」

先程、この層に来た時の反応から察するに花は好きなのだろう。それもあってか、その醜悪な外見に相当な嫌悪感を催したらしいシリカは殆ど目をつぶって短剣をぶんぶん振り回すだけになっている。

「狙いもしないで剣振っても当らんぞー、花のすぐ下の白くなつてるとこ狙えば倒せるからやってみー？」

「だ、だって、気持ち悪いんですうっう」

まあ、直視するのも嫌なんだから相当なんだろうけども……。

「そいつで気持ち悪がってたらこの先大変だぞー。似た様な花がいくつもついた奴とか、食虫植物っぽいのも、粘液だらけの触手が山ほど生えたモルルみたいな奴まで……」

「キエー！！！」

その先を聞くのが嫌になったのか、シリカは奇声を上げながら殆ど狙いも付けずにソードスキルを繰り返すが、まあ見事に空振る空振る。

面白いな、もうちょっとからかってみようか……？

そんな少々黒い事を考えていると、スキルを使った事で出来た技後硬直の際を突いてするりと二本のツタがシリカの足元に滑り込み、足首を捉えて見た目に反した怪力でひょいと持ち上げた。

「わっ！？」

足から宙吊りにされたシリカは身体が上下逆さまになり、かなり不安定な体制になる。

しかしそれだけでは収まらない。

まあ当然と言えばそうなのだが、シリカが下半身に来ていたのは黒

いスカートだったわけだ……それが仮想の重力と物理法則に馬鹿正直に従いずりりつと下がる。

「わわわ!?!」

慌ててシリカは左手でその裾を抑え、右手を使って自分の足に巻きつくツタを切るうとしてしているが、いかんせん無理な体勢であるせいで上手くいつてない。

左手を使ってツタを掴めばいいのだが、それをするとスカートが完全にずり落ちるわけだ。

最早必死と言った様子のシリカは、顔を真っ赤にして助けを求めて来た。

「りっ、リヨウさん助けて!見ないで助けて!」

「無茶を言つな。罵切るぞ。」

淡々と言いつつ俺は袖の中から刃の部分だけが金属で、他は木で出来たブーメランを取り出す。

これは投擲スキル専用のアイテムで、鉄製のナイフやピックには威力で劣る代わり、耐久限界値までは自分から主人のもとに帰って来ると言つ便利な投擲武器だ。(通常は回収したければ自分で取りに行く)

「疾っ!?!」

鋭い呼吸と共に投げ出されたブーメランは水色のライトエフェクトを纏っている。

投剣、初級技「カッターシュート」

まあ、ただ普通に投げるよりも少し威力が高い位の技が出来る投擲技だ。

回転し、飛んで言ったブーメランはシリカを拘束していたツタを

切る。

戻って来るブーメランを取るまでの間にシリカは体制を立て直して空中でソードスキルを繰り出し、忠告通り花の首根っこを攻撃。すると巨大花は頭をころりと落とすと同時にがしゃーんと爆散し、ポリゴンの欠片を浴びながら着地したシリカは、振り向くと殆ど同時に俺に訪ねた。

「……見ました？」

ふむ、表情が真剣だな。

俺は肩をすくめながら答える。

「さあな。」

白か。

十九話 花に囲まれた行軍（後書き）

はい、いかがでしたか？

やっぱりシリカのぱんつ（ビュビュビュビュッ！！ 大量のダガー
ギャアアアアアアアア！！！！

な、なんでもありません。

こんな感じで、こまごまと進んでいきます。賊が出てくるのは、まあ近い内ということぞ。

まあ、黒の剣士が終わるまで十話もかかりませんから、ご安心を。

ちなみに「白か」はギリギリまで入れるかどうか悩みました。
入れたことに後悔はない！！

????「作者さくん？」

ん？なんか聞こえん 鳩麦をLostしました

「ご意見ご感想、心よりお待ちしております」

PVが25000、ユニークが4000を突破しました！

見てくださっている皆様に心からの感謝を！

ありがとうございます！！

二十話 第一目標達成（前書き）

はい、どうもです

記念すべき（プロローグ除いて）二十話です！

今回の次くらいから、花畑の冒険は後半に入っていきます。

徐々にこの章もラストスパート！？

では、どござー！

二十話 第一目標達成

初めの戦闘終了後、五回ほど戦闘をするとようやくモンスターの姿にも慣れ、二人は快調に行程を消化して行った。

一度イソギンチャクに似たモンスターの、粘液まみれの触手に全身をぐるぐる巻きにされた時は意識が飛びかけたが。

リヨウの方は基本的には後ろから傍観しているだけで、危なくなると、ブーメランを投げて援護するだけのサポート役に徹していた。この世界でのパーティプレイは、モンスターに与えたダメージの量によって経験値が分配されるため、高レベルのモンスターを次々に倒したシリカはたちまちレベルを一つ上げた。

赤レンガの街道を進んでいくと、小川にかかった小さな橋が有り、その向こうに一際小高い丘が見えて来た。

直線の街道は、その頂上までつながっている。

そこを指差して、俺は言った。

「ほーら、見えて来たぞお、あれが、《思い出の丘》だ」

「見た所、分かれ道は無いみたいですね？」

「ああ、だから基本的にはただ登って行くだけでいい。ただし、エンカウント率が異常なほど高いつて話だから、あと少しだからって油断すんなよ？ 帰りもあるしな。」

「はいっ！」

真剣な顔で答えるシリカの目には、大きな期待が宿っている。

そのせいか先程までより足が速くなり、リヨウもそれに続く。

噂通り、登り道に踏み込んだとたん、モンスターのエンカウント率が高くなった。

しかし、シリカに持たせた短剣は俺の持つ武器の中でも結構強い部位に入るので、大体のモンスターは、通常の連撃ワンセットで倒す事が出来る。

それもあつて、この丘に入ってから複数の敵が出て来た時は一体を残して俺が倒すことにしていた。

初めの内は、《足技》を鍛えるために蹴りでモンスターを倒し始めた俺に驚いていたシリカだったが、今は慣れたようだ。ただ、少し瞳に疑念が混じっている所を見るに、俺の強さに疑問は持っているようだが。

さて、激しいエンカウントの嵐を退けて、少し高い木立を抜けるとそこが頂上だった。

「うわあ……！」
シリカが歓声を上げる。

そこは木立に囲まれた中にぽっかりと空いた空間で、そこにこれまでた色とりどりの花が咲き誇っていた。

「やっと着いたなあ」

少し疲れた声を出しつつ、リヨウはシリカに歩み寄っていく。

ちなみに此処は、安地（モンスターの出ない、フィールド上の安全地帯の事。中立地帯とも言つ）に設定されているので、モンスターは心配しなくていい。

「ここに……その、花が……」
「ん、話じゃ真ん中あたり岩が有って、そのてっぺん……って聞いてねえか。」

言いきる前にシリカは花畑の中央の白く大きな岩へと駆け出すと、そこを覗き込む。

リヨウは後ろからのんびりと後ろから近づくが、岩の上が見えるか見えないかの所でシリカが血相を変えて振り返った。

「ない、ないよ、リヨウさん！」

「はあ？んなわけ……っておい！泣くな！っーかよく見る！」

「え？……あ……」

また泣きそうになっているシリカを促し、岩に視線を戻させると、そこではちょうど一本の草の芽が伸び始めている所だった。

双葉の芽はやがて白い蕾に姿を変え、それをだんだんと膨らませながら茎をのばしていく……

テレビなどで、植物が生長する早送りの映像等を見た事が有るだろうか？

それと同じ事が、今日の前で、リアルタイムで行われていた。

そして

リヨウとシリカが見守る中、その涙滴型の蕾は徐々にほころび、ついに、しゃらんと言つ鈴のような音と共に花開いた。

リヨウとシリカは暫くその神秘的な情景に見とれていたが、やがてシリカが確認するようにこちらを向く。その目に宿るのは希望と、少しの不安。

リヨウが腕を組んでしっかりと頷くと、シリカも頷きかえし意を決したのか右手をのばす。

そしてシリカの右手が細い茎に触れた瞬間、それは碎けるように中ほどから茎が切れ、シリカの手の中に中央に真珠色の滴を溜めた白い花だけを残した。

確認のためシリカが指先でクリックし、出現させたネームウィンドウには確かに、《プネウマの花》と表示されていた。

「これで……ピナを生き返らせられるんですね……」

「おう。その花の滴を《心アイテム》に振りかければ、一発OKだ。だがまあ、此処じゃ帰り道に強いモンスターが多すぎて少々不安だからな。やるのは帰ってからにするとしよう。ってわけで、帰りも急ぐぞ？」

「はい！」

頷き、アイテム欄に花をしまうシリカの目には、歓喜と希望のに染まっていた。これからまた怖い思いをさせると思うとリヨウは少々罪悪感が湧いたが、仕方ないと割り切る。自分が守り切れればいい話だし特に不安も無い。

幸いなことに、帰り道では殆どモンスターにエンカウントしなかった。駆け降りるように進み、麓に到達する。

後は街道を一時間歩くだけ。それでまたピナに会える。

弾む胸を抑えつつ、心なしか軽くなった身体で若干スキップしながら小川に掛かる橋を渡ろうとした時突然、後ろから肩にリヨウの手が掛けられた。

どきりとして振り返ると、リヨウは何と云うかめんどくさそうな顔をして、橋の向こう側の道の両脇にある木立の方を睨んでいる。やがて、首の後ろに手を回しながら呆れた様な声が吐き出された。

「おいそこの木の陰。バレバレだ、出てこい。」

「え……………？」

シリカは慌ててリヨウの見る方向に目を凝らすが、人影は見えない。

緊迫した数秒の後、不意に木の葉ががさりと動いた。

同時にプレイヤーを示すカーソルが表示されるが、色はグリーンなので少なくとも犯罪者では無い。

橋の向こうに姿を現したのは、シリカの知っている顔だった。

「ろ…………… ロザリアさん！？何でこんな所に……………！？」

そう、出て来たのはロザリアだった。赤い髪。エナメル上に輝く黒のレザーアーマーを装備し、片手には細身の十字槍を携えている。ロザリアは唇の片側を釣り上げた笑いを浮かべると、シリカを無視してリヨウの方を向く。

「アタシのハイディングを見破るなんて、なかなか高い策敵スキルね、あなどってたかしら？」

「さあな。お姉さんが高いと思ってるそのスキルが、実は結構低かっただけかもな。」

リヨウの皮肉を気にした様子も無く、ロザリアは今度はシリカに視線を移す。

「その様子だとし、首尾よく《 Pneumaの花 》をゲットできたみたいね。おめでと、シリカちゃん」

ロザリアは明らかに何かを企んでいる。直感でそれを感じたシリカは数歩後ずさる。

約一秒後、その予想を裏切らないロザリアの言葉が続けられた。

「じゃ、さっそくその花を渡してちょうだい。」

二十話 第一目標達成（後書き）

はい、いかがでしたか？

まあ、少々グダった感が否めませんが、平に、平にご容赦を。
これも必要な過程なのです。……多分。

そうそう、明日から五日間ほど、僕は部活の合宿に行ってきました。
なんか新潟に行くらしいのですが、山梨や神奈川でいいと思うんで
すけどねえ……

というわけで、次回は日曜日に予約で投稿になります。

あ、感想は頂ければ携帯で返しますので、相変わらず心よりお待ちしております
しております！

では！

二十一話 その男の異名（前書き）

はい、どうもです。

部活の長い合宿もようやく終了し、パソコンの有る環境に戻ってこられましたので、次話投稿です。

今回の内容はまあ……タイトルから想像いただきたく。

では、どごぞー！

二十一話 その男の異名

「……………！？な……………何を言ってるの！？」

シリカは言われた事の意味が分からず、混乱して声を上げたが、突然後ろにいたリヨウがシリカを護るように前に出て来た。

「いやいや、出て来ていきなりそれは無いでしょうよお姉さん……
いや」

そこでリヨウは一度言葉を切る。

続いた言葉は、シリカの想像の斜め上に行くものだった。

「犯罪者^{オレンジ}ギルド「タイタンズハンド」のリーダーさんよ」

その言葉を聞いた瞬間、ロザリアは眉をピクリと動かし、笑みが消えた。

オレンジギルド

SAO内において、システム上の犯罪を犯した者（主に、窃盗、傷害、そして殺人等）は通常緑色のカーソルの色がオレンジ色に変化する事から、犯罪者^{オレンジプレイヤー}と呼ばれる。そしてその集団の事を、通称としてオレンジギルドと呼ぶのだ。

この知識はシリカ自身も知っていたがしかし、実際に遭遇したのは初めてだった。

というか、眼前にいるロザリアのHPバーは間違いなく緑色だ。シリカはリヨウの事を見上げ、驚きでかすれた声で問う。

「え、でも……………だって……………ロザリアさんはグリーン……………」

「残念ながら、オレンジギルド＝全員がオレンジプレイヤー って方程式は今じゃ間違いなんだなこれが。グリーンの奴が街で獲物を

みつくるって、パーティに紛れ込んで待ち伏せポイントに誘導。なんて、今じゃこういう連中の常套手段だ。覚えとけ。」

「あ、はい」

戸惑った答えを返すシリカに、リヨウは「あ、そうだ」と更に続ける。

「昨日の立ち聞き野郎もあいつの仲間な。」

「そ、そんな……」

愕然としながらシリカは再びロザリアを見やる。

「じゃ……じゃあ、この二週間同じパーティに居たのも……」

恐怖を抱いたシリカの顔に満足気で、そして毒々しい笑みをロザリアは浮かべると、楽しむように語り始めた。

曰く、あのパーティに居たのは戦力を図ると同時に冒険で金品が溜まるのを待つため立った事。

本当ならば今日にもあのパーティを襲撃する予定だった事。

一番の狙い目である獲物だった自分が抜けて迷っていた事。

そして、自分がレアアイテムである《プネウマの花》を取りに行く事を知って目標を自分達に変更した事まで。

何と言う事だろうか。

自分はおかしかったら……今日の今頃にはフィールドで襲撃され、身ぐるみをはがされて、あまつさえ殺されていたかもしれないなかったのだ。

そう思い、シリカが背筋に冷たいものを感じていると……

「でも」

一度言葉を切ったロザリアは、これまでの何処か喜々とした様子では無く、何処かおかしな物を見る様な目でリヨウを見、肩をすく

めた。

「そこのお兄さん、そこまで分かってながらノコノコその子に付き合うとか、馬鹿？それとも本当に体でたらしこまれちゃったの？」

昨日も受けた侮辱に、シリカは視界が赤くなるほどの憤りを覚える。腰の短剣を抜こうと腕を動かした所でシリカの前にリヨウの右手が掲げられた。止める、と言うのだろう。

そしてまるで友人と話す様なあっけらかんとした声で、リヨウは口を開く。

「馬鹿とは失敬だな。それに、年下の子に手え出すほど餓えてねえわ」

何となく失礼な事を言われた様な気もしたのだが、気のせいだろうと直ぐに思い直した。

「実はな、俺もあんたらを探してたんだよ」

「　　　　　どういう事かしら？」

そこからは、リヨウに驚かされる番だった。

ロザリア達に襲われ、リーダー以外が皆殺しにされたギルドの話。

そのリーダーに依頼され、リヨウもロザリア達を探していた話。そして……

「リーダーだった奴はな、俺にあんたらを殺せとは言わなかった。

こくてつきゅう ジエイル 黒鉄宮の牢獄シエイルに送って欲しいと、そう言った。　　あいつの気持

ちが解るか？あんに

「解んないわよ」

面倒そうに、自分のした事を毛ほども後悔などしていないといった風に答えたロザリアにリヨウは「だろうな……」とため息をついた。

「何よ、馬鹿みたいね正義派ぶつて。ここで人を殺したってほんとにその人が死ぬ根拠無いし。そんなんで、現実に戻った時罪になるわけないわよ。だいたい戻れるかどうかも解んないのにさ、正義とか法律とか、笑っちゃうわよね。あたしそうゆう奴が一番嫌い。この世界に妙な理屈持ち込む連中がね」

この言い分を聞いていて、まさにリヨウの言ったとおりだとシリカには思えた。法が無く、罪にならないからと言ってこういう事をする。

罪になるならない以前の問題なのだと言理すら、彼らには通用しないのだ。

そんな事を感じていると、再びロザリアの眼が凶暴な光を帯び始める。

「で、あんたその死に損ないの言う事真に受けて、アタシらを探してたわけだ。ヒマな人だねー。ま、あんたのまいた餌にまんまと釣られちゃったのは認めるけど……でもさあ、たった二人でどうにかなるとも思ってたの……？」

言葉の意味をシリカが理解するよりも早く、ロザリアは唇に笑みを浮かべながら、右手を掲げて素早く二度宙を仰ぐ。

途端に向こう岸の両脇の木立が激しく揺れ、茂みの中から次々に人影が現れた。シリカの視界に連続して複数のカーソルが表示される、そのほとんどは紛れも無いオレンジ色だ。

その数は 十

リヨウが待ち伏せに気がつかねば確実に向こう岸で囲まれていただろう。

その十人のうち、ただ一人のグリーンの男は、昨晚シリカ達の部屋を盗み聞きしていた男の逃げ去る後ろ姿と同じ。針山の様などがっ

た髪形をしていた。

十人の盗賊は、皆派手な格好をした男性プレイヤーだった。

全身に銀のアクセサリやサブ装備をじゃらじゃらとぶら下げている。ニヤニヤとした笑いを浮かべる男たちは、シリカの体に粘つくような視線を投げかけて来た。

その視線に激しい嫌悪感を感じて、シリカはリヨウの浴衣の裏に姿を隠し、小声で囁きかける。

「り、リヨウさん……数が多すぎます、脱出しないと……！」
そう言つてリヨウの顔を見ると……

「ふあゝあ………ムニヤ」

リヨウは大きなあくびをしていた。そこには焦りも恐怖もなく、ただ純粹に、この二月とは思えないほど暖かい陽気のフィールドのおかげで眠気を感じているように見える。

シリカは危うい所で昔ながらのギャグ漫画よろしくズッコケそうになるのを堪えたが、戸惑いは隠せない。

それは目の前の盗賊団も同様だったらしく、何か変な物を見るような視線をリヨウに送っている。いや、というか既に変な奴だと思つているだろう。

「あ、あの……リヨウ、さん？」

「ん？ああ、すまんすまん……余りにも暖かいもんでつい、な。」

「いえ、あの、それは良いんですが……えつと？」

思わず後半は疑問形になってしまふ。あまりの緊張感の無さになんだかこれがドッキリなのでは無いかという気さえして来た。

「ああ、大丈夫大丈夫。俺が逃げろつて言わん限りは、結晶用意し

てそこで見てればいいから。」
のんびりとした声で答えつつ、リヨウはそのまますたと橋に向かって歩き出す。

シリカはしばし呆然とその後ろ姿を眺めていたが、慌てて我に帰り、再び大声で呼びかけた。

「り、リヨウさん……!」
その声がフィールドに響いた途端。

「リヨウ……?」
不意に一人の賊が眉をひそめ、何かを思い出すように視線をさまよわせ始めた。

「奇妙な浴衣……腰の偃月刀……じ……《ジン》……?」
急激に男の顔から血の気が失せ、数歩後ずさり始める。

「や、やばいよ、ロザリアさん。こいつ……《ジン》だ。こ、攻略組の……」

その言葉を聞いた瞬間ロザリアを含む周りの賊の顔が一斉に蒼白になる。驚愕したのはシリカも同じだ。あっけにとられたまま、目の前のリヨウの背中を見つめる。

確かに今までの戦いで相当な高レベルプレイヤーだとは予想していたが、まさか、最前線で未踏破の迷宮に挑み、ボスモンスターすらも次々になぎ倒し続ける《攻略組》、本物のトップ剣士の一人だとは思わなかった。

彼らの力はSAOの攻略の身に注がれ、そもそも中層フロアに降りて来る事すら滅多に無いと聞いていたのに。
そして何よりも《ジン》と言う名に驚いた。それは

「こ、攻略組がこんなところをうろつろしてるわけないじゃない！それに、噂じゃ《ジン》の装備はもっと柄の長い武器だって」
今まで周りと同じくぼかんと口を開けていたロザリアが急に甲高い声で喚いた。

確かに、噂などでよく聞く《ジン》と言う人物の得物は、柄が長く、先に付いた刀身は青龍刀のように通常の薙刀より大きく幅の広い刃に特徴的な黄金の龍の彫刻の様な物が成してあると言う武器。

俗に言う青龍偃月刀と呼ばれる物だと言う事は、シリカも知っていた。

「こんな所って……良いとこだと思うんだがなあ……。ああ、武器の事ならたぶんこれだと思う」

リヨウはいたって普通の態度を崩さず答えると、不意に腰に釣っていた曲刀を回転させるようにして振り回し始める。

やがて、曲刀の柄の部分がどんどんと長くなっていき……。最終的にはブンブンと風切音を立てながら柄の長い曲刀がリヨウの手の中で回っていた。

リヨウが回転を止め「ダン！」という音と共に地面に武器を叩きつけると、それだけで周囲がびくりと反応する。

そこに有ったのは、長い柄と、先に突いた青龍刀。そして何より、黄金の龍の彫刻が掘られた武器。

それはまさしく、古来、中国のとある英雄が好んで使用したと言われる大刀。

青龍偃月刀だった。

「正確にゃあ、青龍偃月刀じゃなくて冷裂れいれつって立派な固有名が有るんだがな……」

少し残念そうにリヨウは嘆き再びロザリアの方を見つめる。此処まで来ると相当に真実味が有るとシリカには思えた。ロザリアの部下もそう感じたらしく、一人の部下がロザリアに囁きかける。

「ろ、ロザリアさん……やっぱり、本物なんじゃ……」

「そ、そんな訳ないだろ！どうせ、名前を騙ってビビらせようってコスプレ野郎に決まってる。それに　もし本当に《ジン》だとしても、この人数でかかれれば一人くらい余裕だわよ！！」

ロザリアのその発言に勢いづいたように、オレンジプレイヤー達の戦闘に立つ大柄な斧使いも叫んだ。

「そ、そうだ！攻略組なら……まして此奴なら、すげえ金とかアイテムとか持ってたんだぜ！オイシイ獲物じゃねえかよ！！」

口々に同意の声が上がり賊たちは一斉に抜剣する。無数の金属がキラキラと凶悪な光を放っている。

「リヨウさん……無理だよ、逃げようよ！」

その姿に再び恐怖が湧きあがって来たシリカは、クリスタルを握りしめたまま必死に叫ぶ。

幾らリヨウが強いとはいえ、ロザリア達の言うようにあの人数相手には勝ち目はない。だがリヨウは動かないどころか、武器ももう一度くるくるとまわして引っ込めてしまった。

そのリヨウの様子を諦めとつたのか、ロザリアともう一人のグリンを除く九人の男たちは、狂ったような笑みを浮かべながら我先にと走り出し、短い橋をドカドカと駆け抜け

「オラアアア！」

「死ねやアアア！！」

「ヒヤッハーア！」

顔を護るようにうつむいて立ち尽くしているリヨウを半円形に取り

困むと、剣や槍の切っ先を次々にリヨウの体へと叩き込み始めた

二十一話 その男の異名（後書き）

はい、いかがでしたか？

というわけで今回は、リョウの個の世界での二つ名と武器についてです。

異名の知名度は、キリトよりも高い感じですよ。

まあ、それについては物語の中で追々……

武器の方は、

中国、三国時代の中でも特に有名な武将の一人、かの関羽雲長が愛用していたとされる（使って無かったって説もあるそうです）青龍偃月刀です。

色々なところで使われている個の武器ですが、僕も大好きなので起用させていただきました。

ちなみに伸び縮みについては、個の武器のオプションのようなものだと考えていただければ……

鳩麦のSAO世界では、これ以外に 金剛如意棒 という、両手棒に属する武器が、この力を持っているという設定です。

それ以外にも無いとはいえませんが、如意棒含めて出てくるかは不明です。

今回は、りょうVSタイタンズハンドです。まあ、勝負になるか微妙ですが。

では！

二十二話 差（前書き）

はい、どうもです。

今回はリョウの無双（？）シーンです。

とりあえず先に言っておきますが、リョウはSTR（筋力値）特化型なので、キリト達と比べると圧倒的に防御、体力の面で勝ります。

それを踏まえた上で、今回のお話をお読み下さると……

では、どうぞ！

二十二話 差

突き込まれた槍と、振るわれた斧や剣がリヨウの身体に届く瞬間、シリカは恐怖できつく目を閉じた。だが、聴こえたのはポリゴンが破損する時のガラスが砕けるような音ではなく、鉄の塊同士がぶつかった様な、鈍い金属音だった。

「え……?」

まさかと思い眼を開けると、そこにはリヨウ向かって武器を構えたまま驚愕の表情を浮かべている賊たちと、先程と変わらぬ後姿で立っているリヨウがいた。

ロザリアは、驚きのあまり眼を見開いている。

「な、なんだこいつ……」

「剣が弾かれて……」

賊たちがぶつぶつと何かを言っているが、よく聞き取れない。

だが、その内容はシリカにもおおよそ予想が付く。さっきの音から察するにそれは……

「こんの野郎オ！」

先程叫んだ斧使いが再びリヨウに切りかかるが、その刃がリヨウの纏う浴衣に触れた瞬間、ギーン!と言う先程聞いた金属音と共に斧が弾かれ、斧使いは反動で尻餅を突く。

再び起こった出来事に、賊たちが冷や汗を浮かべているとリヨウが挑発するように肩をすくめた。

「で?終了かい?」

「……っ!なめんなゴラァ!」

それに憤ったのか、今度は一人の髪を緑色に染めた片手剣使いがリヨウに切りかかる……頭めがけて。

今度こそポリゴンの破損する音が響き、シリカは悲鳴を上げそうになるが。それが声となって口から出る事は無かった。

リヨウが、頭のポリゴンが半分破損した状態で両手をぶらぶらと振ると言うなかなかにはスプラッターかつ余裕丸出しな行動をしたため、安心と呆れで声は軽いため息となったのだ。

しかしそれはシリカの話、まったく攻撃の通じていない賊たちは再び数歩後ずさる。

やがて、攻撃意思を無くしたと判断したのか、リヨウの方から口を開いた。

「と言う訳で、だ。俺の防具はあんたらの武器で傷が付く程やわな物じゃねえんだわ。フーか今の頭に喰らったダメージからしても、多分あんたらじゃ防具なしで百年攻撃しても俺は倒せねえよ。俺は戦闘回復で十秒に付き875程HPを回復する。対しあのペースじゃ、俺に与えられるダメージはせいぜい十秒で300〜400行けばいい方なんじゃね？」

最早賊たちは驚愕を通り越して愕然としている。その内、サブリーダーと思われる両手剣士が口を開いた

「そんなの……そんなのありかよ……。ムチャクチャじゃねえかよ……」

「？なにを今更。」

睨みつけるような眼差しと共に放たれた言葉によって賊たちはまた数歩後ずさる。

「たかだか数字が増えるだけの差で、此処まで差が付くのは理不尽か？甘いなあ、この世界がどこだか忘れてんのかい？レベル制MMOの中なんだがなあ？」

力の入っていない口調とは裏腹に、段々と何処か威圧感を増して行くリヨウの言葉に賊たちはついに橋の寸前まで後ずさる。徐々にその顔に浮かべられた表情が、恐怖のそれへと変わっていく……

「チッ」

と、不意にロザリアは舌打ちをすると同時に転移結晶を取り出し、空中へと掲げた。

「転」

が、ロザリアが言えたのはそこまでだった。突然轟音と共に地面が揺れ、バランスを崩したロザリアは転んで転移結晶を取り落としただのだ。他の賊たちも次々に転倒するが、何故かシリ力だけは揺れをそこまで感じなかった。せいぜい地鳴り程度だ。

そして揺れが収まった時、ロザリアの前には彼女が落とした転移結晶を持ったまま仁王立ちするリヨウの姿があった。

転移結晶を使おうとした女を視界の端に認めた次の瞬間、俺はスキル発動と共に思いっきり地面に足を叩きつけていた。

足技 範囲妨害スキル「大震脚」

ダメージは受けないが、一定範囲のモンスター及びパーティーメンバー以外で一定条件を満たしていないプレイヤーを転倒させ、動きを封じると言う便利スキルだ。

俺はスキルの効果により転倒したロザリアが取り落とした転移結

晶を拾い上げると、未だに地面に這いつくばってる女の服を掴んで持ちあげ、橋へと向かう。

「は……離せよ！どうする気だよ畜生！！」

「ターゲットを捕まえたのに離せと言われて離してやるほど俺はお人好しじゃねえ。つーか喚くな、うるさいから。」

言いつつ俺は未だに棒立ちしている男たちのど真ん中にロザリアを投げ出し、袖の中を探って濃紺の結晶体を取り出す。

「これは俺の依頼人が全財産使って買った回廊結晶だ。出口は牢獄ジェイル内。あんたらは全員これに飛び込め。後は知らん。」

牢獄の管理は「軍」と呼ばれる、アインクラッド最大のギルドが行っている。俺は個人的に高圧的な公務員みたいな態度をした軍の連中は好かんのだが……一応囚人の管理はちゃんとしているらしい。
(逃がすような事は無い的な意味で)

するとロザリアは、数秒唇をかんだ後に急に強気な笑みを浮かべた。

「もし、嫌だと言ったら？」

「なんだ、んなことか。別に、俺の懐の麻痺ナイフで麻痺ってもらって、俺が投げ入れるだけだ。そっちが良いつてんなら言え。優先的に投げ込んでやる。」

本当はもう少しきつい処理でも良いのだが……まあ依頼人からの命令だ。

「本当にそれでいいんだな？」

「ああ、他人に人殺しなんかさせたく無いし。ましてや知り合いならなおさらだよ。……それにあいつらを殺しても、結局皆は戻って

「こないんだ。」

「……わかった」

「はは……まいったな。よく本なんかで読む台詞だけど、その意味が今更ながらよくわかったよ……」

「そうだな……。行って来る」

「ああ。頼む」

ロレントとの会話を思い出しながら俺はロザリア達を見下ろす。その眼に宿るのは怯え、恐怖、憤怒、悔しさ、少しばかり嫉妬等、色々だがどれも今はどうでもいいのでクリスタルを発動することにする。

「コリドー・オープン、つと」

掲げられた濃紺の結晶が小さな音を立てて砕け散り、の前に青い光の渦の様な物が出現する。

「畜生……」

先程俺をオイシイ獲物呼ばわりした斧使いが、一番初めに肩を落としたながら渦の中へ飛び込む。他の連中もそれに続き、ある者は悪態を突きながら、ある者は無言で渦の中へと消えていく。最後に、盗聴役のツンツン頭のグリーンも渦に入り。残りはロザリアだけなのだが……この女、未だに地面に座り込んだまま、挑戦的な視線でこちらを見上げている。随分と強気な事だ。

「……やりたきゃ、やってみなよ。グリーンのアタシに傷をつけたら、今度はあんたがオレンジに……」

「んじゃ、遠慮なく」

自信満々なロザリアの台詞を最後まで聞かずに、俺は奴の襟首を掴んでつまみあげる。

「生憎と俺はソロなんだ。一日二日オレンジになるくらいどつと言
うことも無いんで」

そう言いつつつまみあげた女を持って俺は光の渦へと近づくが、
ロザリアは尚も手足を動かして抵抗する。

「ちょっと、やめて、やめてよ！許してよ！ねえ！……そ、そうだ、
あんた、アタシとk」だから、うるさいから喚くなつたろ」

途中で遮って、未だに何か喚いていた女を渦の中に放り込む。と
いつか、人殺しといて許してとかアホかあいつ。

そんな事を思いつつ、俺は後ろでへたり込むシリカに向き直り…
…頭を下げた。

「すまなかつた」

「え……？」

「どんな形であれ、お前を囷として俺はあいつらをおびき寄せた。
お前を危険な目に会わせた事や、怖がらせた事、本当に申し訳なく
思ってる。すまん！」

頭を下げ続ける俺に、シリカはぶんぶんと結構な速さで首を横に
振っている。

「お詫びって言ったらなんだが、街までの安全は俺が保証しよう。」
頭を上げてそう言い歩き出そうとするが、何時までたってもシリ
カが立ちあがる気配がないので心配になる。

「どした？歩けないか？」

「あ 足が動かないんです」

「ありやいや……」

ほんとに立てない様子だったので笑いながら右手を差し出す。
と、シリカも小さく笑いながら右手を掴んだ。

二十二話 差（後書き）

はい、いかがでしたか？

今回は、原作同様。主人公無双だったわけですが……流石にやりすぎたか……

もはやステータス以前に装備の耐久地で勝った感じですね……

もう少ししまともな対人戦を書けるといいんですが……なにぶん実力不足が否めない……

そう言えば、WEB版のSAOで夏休み企画やってますね。

<http://wordgear.xo.com/novel/>

今回は第一層の攻略みたいです。

明らかに僕の方と設定もボスも違いすぎる……

なかなかSAOは二次作殺しな面がありますね、何しろ次々設定が追加されていく……対応できるかな？

ご意見ご感想心よりお待ちしております！
では！

二十三話 居場所は違くとも（前書き）

はい、どうもです。

今回でいよいよ、原作で言う「黒の剣士」の範囲をぬけます。

さて、では一気に走りぬけますよ！
と、そのまえに、

P a c h e l b e l l ' s c a n n o n i n D M a j o r
R o m a n t i c M o d e r n i z e d V e r s i o n

こちらをヨウツベかグーグルビデオで検索してみて、一番上の奴を
選択ください。

聞くタイミングは皆さんにお任せしますが、できれば話の後半の有
る部分からお聞きいただくとお楽しみいただけるかと……

URL貼り付けたかったのですが、なんかうまくいなくて……不
便なまねをして申し訳ありません！

では、どうぞー！

二十三話 居場所は違くとも

三十八層の風見鶏亭に付くまで、細々とした会話はあった物の二人はほとんど無言と言っていていいほど会話をしなかった。

それと言つのも、言いたい事や言つべき事は沢山あるはずなのに、そのどれもがのどに小石が詰まったように言葉として出てこなかったのだ。

やがて、シリカとリヨウは二階へと上がってリヨウの部屋へと入る。

外はもう夕方。窓からはオレンジ色の光が差し込んでおり、その光の中でリヨウの着ている浴衣（鎧？）が光の角度ゆえか不思議な緑色に光っていた。

少しばかりその幻想的とも言つべき色彩に見とれたシリカは、ようやく震える声で言った。

「リヨウさん……行っちゃうんですか……？」

しばしの沈黙の後、逆光で殆ど表情の見えないシルエットとなったリヨウは頷く。

「そりゃ、な。前線離れてもう五日だし、いい加減戻んねえと……」

「……そう、ですよね……」

言いたかった。自分も一緒に連れて行ってほしいと。

この世界で、ピナがいなければ本当に一人ぼっちのこの世界で、久しく感じていなかった人間が居ると言うぬくもりを心から感じさせてくれたこの兄のような人と、本当はもっと一緒にいたいのだ。

しかし、言えない。

先程聞いた。リヨウはレベル83だと言う。対し自分のレベルは45。その差は38。まさしく冷酷なほどに明確な、シリカとリヨ

ウを隔てる距離だ。

仮にリヨウの戦う戦場に付いて行ったとしても、ろくな抵抗も出
来ずに一瞬で殺されるのがオチだろう。

同じゲームの中であるにもかかわらず現実以上に高く分厚い壁が二
人の間にはある。

「……………あ……………あたし……………」

その先を口にすることはできなかった。気持ちがあふれそうにな
るのを必死にこらえるが、抑えきれずに二つの滴へと姿を変えたそ
れは、零れて頬を伝う。

トン…………と

シリカの額にリヨウの人差し指の先があてられた。
見ると、リヨウの少し呆れたような顔が手の大きさを挟んだ少し向
こう。とても近い場所に有る。どうやら屈んでいるらしい。

「リヨウ……………さん？」

「まったくお前は……………毎回直ぐ泣くのはいい加減子供でも無いんだ
からどうにかしなきゃだと思っぞ？」

「う……………」

そんな事を言われても仕方がない、そう思っているシリカに、リ
ヨウの声が続く。ただし今度は先程よりも幾分か優しい声で。

「それにな、そんなに泣くような理由も無いだろ？」

「え……………だって……………」

「忘れてるようだから言わせていただきますがね、俺はお前にケ
キ奢る約束してるんだぜ？」

「あ……………」

すっかり忘れていた。色々な事が有りすぎたせいで完全に脳内から飛んでいたのだ。
リヨウの言葉は続く。

「それにその後だつて、機会があれば幾らでもケーキぐらい奢つてやるつての。俺の知り合いの自作ケーキ食わせてやったつていいし。あ、無論その都度上手い店が交換条件な？」

「そんな食いしん坊に見られてるんですか？私」

「そう言う事じゃなくてだな……要は別に住んでる所や戦う場所は違っても、俺とおまえの人間関係は変わらんつて事。」

「あ……………」

「レベルの差つてのは強さの差だ、決して人間関係の差じゃない。いつも顔を合わせてる訳じゃ無かるうが、俺とシリカが友達だつて事に違いなんかないんだから、泣く必要なんてないだろ？」

「はい……………はい……………！」

な？と言つて、指を離しニカツつと快活に笑うリヨウを見て、シリカもようやく笑顔を取り戻し、頷きながら返事をする。

その過程で涙がこぼれるが、それは先程までとは違う。喜びによって透明に澄んだ涙だった

「それじゃそろそろ、ピナも生き返らせてやるでしょうかね？」

「はい！」

シリカは頷くとメニューウィンドウを呼びだし、アイテム欄から《ピナの心》と《プネウマの花》を実体化させる。

高まっていた気持ちも落ち着き、ティーテーブルの上の水色の羽を見た後、リヨウの方を見る。

「花にたまつてた滴を、心アイテムに振りかける。それで蘇生が出来る」

「はい……」

色々な事が胸の中で回る中、シリカはゆっくりと花を傾け、花の上へと滴を垂らす。滴が羽に当たった瞬間、羽が光輝き、徐々にその姿を変え始める。光が収まった時、そこには会いたくてしかたの無かった水色のふわふわとした相棒の姿があった。

ピナとシリカが再会を喜び合っている間、リヨウは微笑みながらその姿を見ていたが、唐突にシリカが口を開いた。

「そう言えばリヨウさん、音楽スキル上げてるっておっしゃってましたよね？」

「ん？ああ。」

それは、昼間フロリアのメインストリートを歩いているときに聞いた話だ。リヨウは趣味で、音楽スキルを上げていると。(その時意外そうな顔をしたら一発チョップをもらったのだ。)

「一曲だけ、お願いできませんか？この子へのお祝いの意味含めて」それは、最後の少しだけの我が儘だ。この後分かれる事を思うとどうしてもそう言う事を言いたくなってしまう。

「ふむ……いいぞ。そこ座れ。」

「はい」

頷いたリヨウは、シリカがベットに座るのを見届けると、ウィンドウを操作し始める。

やがて、オルガンの様な音の伴奏が流れ始めた。

「これは独奏ソロでも迫力に欠けるからな。」

そう言うリヨウが取り出したのはヴァイオリン。やがて、リヨウがオルガンの音に乗るかのごとく旋律を奏で始める。音楽スキルを持つ物は、こうして自分の演奏を録音しておくことで自分が引いた旋律等を何時でも好きな時に流せる。しかもそれを一つの曲として保存しておき、自分がどれか一つのパートを演奏する事も出来るのだ。

今回演奏する曲。

その世間一般的に知られる呼称は、「カノン」

徐々に音が増えてゆく。それは通常アンサンブルでつかわれるチエロやコントラバスではなく、全てヴァイオリン。やがてオルガンの伴奏が用意した舞台の上では三つのヴァイオリンの音が踊っていた。

一つ一つのヴァイオリンが複雑に入れ替わり立ち替わり主役を交代するようにメロディーを奏でる。

絡まり、或いは離れ、重なり合った音が流れるような軌跡を描く。

それは段々とテンポを増していき、そして曲中に置いて最も盛り上がる部分。

この曲を、万民多くが知る理由となった部分が奏でられた瞬間、シリカ達は音の海の中にいた。

周りの空間全てをリヨウが生み出す音が支配し、時間と共に次々に色を変える。

まるで今日見た、花が支配する世界の様に。

そう思った時、シリカの頭の中に何故だろう、昨日と今日リヨウと

過ごした時間が次々に思い起こされる。

頭の中を駆け巡る思い出を見ながら、シリカは思う。

自分は、忘れないだろうと。

このたった一日を。

その間を共に過ごした、この少し不思議な兄のような人物を。

いつまでも続くかのような時間おんがくの芸術は、やがて最後の一音とともに、静寂と、思いを残して消えた。

Second story 《不思議な青年》 完

二十三話 居場所は違くとも（後書き）

はい、いかがでしたか？

これにて「黒の剣士」もとい、「不思議な青年」編は終了です。
シリカともしばらくはお別れですねー。ああ、書きやすいキャラだ
ったのに……

最後のですか？あはは……すみません半分は趣味に走ったことを認め
めます。

でも、いい曲だと思うんです「カノン」！
今回の舞台でもあるフローリアのイメージともぴったりですし！
どうかお許しを！

さて、お次の物語は、少々オリジナルなところの多い物語です。
とはいえ、時間軸は覆りません。

このお話の後の時間軸で起こるは間違いはありませんので。
というわけで次回からの物語もがんばっていきます！

（あ、物語に区切りがついたので少々次の更新まで時間が空くかも
しません。すみません。

ご意見ご感想、心よりお待ちしております！
では！

二十四話 ある日の決闘（前書き）

はい、どうもです。

明日は部活の大会。

それが終わればやっと夏休みなので、こっちにも少しは身が入るか
と……

と言うわけで、次の物語が始まります。

今回は……あの人がご登場です！

では……どうぞ！

二十四話 ある日の決闘

その日はとあるフロアのフィールド・ボス攻略会議の日だった。
……のだが。

「いかんいかんいかん!!!遅刻だー!!!」

その日、その会議の会場となった広場に向かって俺は全力疾走で走っていた。

まあ何故こんなことになったかと言うと、本日はとある層のとある店で、食材系アイテムがバーゲン並みの安売りだったのだ。

俺自身はその手のアイテムは使用用途が無いのだが、知り合いにお使いを頼まれ、色々と選んで買い、届けていると時計を見るのを忘れ、結果、今に至る。

まあ別に遅刻自体は実際の所大したことではないのだが……問題は。

「あの、騎士姫さんまたキレるぞこりゃあ……」

段々走りながらげんなりとしてくる。

そう、遅刻が嫌な理由と言うのは、現攻略組の指揮官的な女性がこういう事にやけに厳しい風紀委員の様な性格で、その説教がまたなかなか面倒なのだ。主に長くて論理的だと言う意味で。

なまじ顔はこの世界でもトップクラスによいため、ギャップのある性格がきつすぎる。

「見えたあ!……つて、ん?」

取りあえず全力で頭下げて間髪いれずに引つ込むかな。と思いつつ広場に到達、したのだが様子がおかしい。何やら人の視線がちょうどデュエル（プレイヤー同士のゲーム上の決闘）を観戦する時の

ように中心に向き、その中心では数人のプレイヤー達が言い争いの様な事をしているようだ。

双方の主張者達の先頭に立つのは、先程言った騎士姫さんと、我が義弟であるキリト。

……勇者だなあいつ。

とり合えず、俺は後ろの方に見えた見知った赤髪バンダナの野武士面に話しかける。

「よ、クライン」

「おっ、リヨウじゃねえか。随分と遅かったなあおめえ」

「ちよーつと色々あってな。で、なんだこれ？」

「ああ、実は」

クラインの話によると。攻略の戦闘方針について、騎士姫さん達攻略優先派ギルドと、キリト達ソロプレイヤー達の意見が対立しているらしい。

今回攻略するボスモンスターは、偵察の結果、攻撃力が平均的なボスと比べ高く、対し体力面では劣る、いわゆるパワー型ボスであることが判明。

それに対し対立するグループは、二つの全く真逆の案を提案した。

ギルド側

・一定のローテーションのもと一人一人が少しづつスイッチをこなして行き、一定のダメージを与えて。多少時間がかかっても堅実さを重視して最終的な撃破を目指してゆくべきである。

ソロ側

・ 幾人かの実力の高いプレイヤーが耐えたれるだけ耐え、短時間におけるダメージ効率を優先し、短期決戦的に撃破すべきである。

と、主張だけ見るとどちらも正しいように見え、そこまでいがみ合わずともどちらかが妥協すれないように見えるのだが、これには実はお互い譲りたく無い訳がある。

SAOと言うゲームは、戦闘終了後に割り振られる経験値に置いて、撃破対象に対しより多くダメージを与える程、取得経験値が多くなると言うシステムになっている。これを踏まえると、彼らの主張にこのような裏が見えて来る。

ギルド側

・ ギルドは複数のプレイヤーから成る組織であり、ある程度レベルを同一に維持しなければ、「同じ狩場に行けない」「一人だけ与えるダメージ量が大きく、取得経験値が高くなる」等のデメリットが発生。結果的に、ある程度のローテーションを組んで平等に攻撃しなければ、レベル的に引き離される者が出る可能性が有り不都合。

ソロ側

・ 通常時のボス戦だと、大人数であるギルド側のローテーション型に阻まれ優先的な経験値が得られない。今回は、敵も短期決戦型のためこちらの方がダメージ効率がいいと言う大義名分が発生。上記の自分達の主張であれば、圧倒的に強者が多いソロ側が優先的に経験値を得られる可能性が高く、都合がよい。

と、こんな感じだ。これが通常のモンスターなら此処まで言い争う事は無いだろうが、ボスモンスターと言う、大量の経験値とアイテムをもたらず相手となると話は別なのだ。

ちなみに、死亡確率におけるリスクは互いに同等である。

ギルド側の主張だと、攻撃にさらされた攻略組でもレベルの低いプレイヤーが死亡する確率はあるし、ソロ側にしても万が一にも長時間攻撃にさらされたプレイヤーが死亡する可能性はある。まあ、この人数ならどちらの確率もかなり低い。

そうこう分析している間にも言い合いは続くが、どうにも平行線の様だ。

と、ギルド側のリーダー格である騎士姫さんが大きく声を上げた。

「解りました、」

一際大きく、凜とした声上がり、全員の視線が声を上げた騎士姫さんに集中する。

「このまま言い争っても時間の無駄ですから。双方の代表者による決闘デュエルで決めるって事でどうですか？此方は私が出ます。そちら側はどうぞ。ご自由に」

突然の提案にソロ側もギルド側も少々驚いたようだったが、ギルド側は彼女なら負けないと踏んだのだらう。構わないと言うように一歩下がる。

対しソロ側は、彼女の強さを知っているが故か少々たじろいだように見えた。

が、先頭に居た黒衣の剣士。……まあ言うまでも無くキリトだが、彼奴だけは違った。

前に出て、騎士姫さんことアスナと真っ向から対峙する。

「いいぜ。こっちにとつちや思いがけず好条件だしな」

『言いやがった此奴。』

キリトの自信満々な言葉に俺は軽く呆れ気味になる。

アスナはこの浮遊城アインクラッドでも最強と言われるギルド「血

盟騎士団」(通称KOBと言い、おれは「コーブ」と呼んでる)に置いて、副団長に上り詰める程の実力者である。

戦闘タイプは細剣使い《フェンサー》で、その常軌を逸したスピードの細剣裁きレイピアから、ついた異名が「閃光」のアスナ。言う度簡単には行かないだろうし、それはキリトにも分かっているはずだ。

だがまあ、話し合いにも参加しない中立の俺達からすればそんなことは関係ない訳で、むしろ。

《閃光》VS《黒の剣士》

と言う滅多に見れないであろう好カードの試合が見れるのだ。正直、この場に居てちょっと時した気分である。

ちなみに、黒の剣士と言うのはキリトの異名で、何時も黒いロングコートと同じく黒い剣を使っていることから付いた名だ。前に恰好を変えたらどうかと聞いたことがあるが、何故か頑なに拒否された。

さて、ギャラリーが大きく広がり、中心に直径20メートル程の円形スペースを造る。中心にはアスナとキリトが5メートル程間を開けて立ち、ルールを設定した後互いに剣を抜き、構える。

キリトは、力を抜くように、腰を落として剣先を地面にギリギリ付かない程度の高さで低く。

アスナは地面と右手を身体側に引きつけ、細剣を胸レイピアの位置で地面と水平に。

後で聞いた話だが、ルールは《初撃決着モード》（強攻撃を一発でもヒットさせる。又は、相手のHPを半損させた方の勝利）だったらしい。
六十秒のカウントが始まる。

二人の眼を見ると、アスナの眼には決意と何故か期待が宿り、キリトは、期待と……何で歓喜してんだあいつ。
と、二人の口が動いている事に気が付く。
何か話しているようだが聴こえないので聞き耳のスキルを使ってみた。曰く

『最強ギルドの副団長さんの実力、期待してるよ』

『私の方はなんの期待もしてませんが』

『少しは「お互い健闘しよう」とか無いのかよ……』

『先に挑発したのはあなたじゃない』
等々。

何か何気に仲良くねえか？あいつ等

そしてカウントが終わり……

地を蹴る音と共に双方はほぼ同時に走りだす。互いに敏捷値を心に上げているタイプのプレイヤーなので、初めの隙間などもはや初めから無かったかのような速度で距離が詰められていく。

先制したのはアスナだ、全プレイヤー中最高レベルの敏捷値を誇る彼女の突きがその点では少々劣るキリトの斬撃よりも早く放たれる。

が、キリトもむざむざそれを喰らってやるほど馬鹿では無い、あいつの敏捷値も相当な物があり、一足遅く（とは言え十分速いが）繰り出された横一線の斬撃は容易に腕力値で劣るアスナの刺突を弾

く……かと思つたが単純な突きかと思われたアスナの攻撃はそうでは無く、手が急激に引き戻され、レイピアが振られたキリトの斬撃を回避した。

「……うお、」

思わすまぬけな声を出してしまった。

「はっ!!」

気合一線

間髪入れずに再び突き込まれたアスナの細剣は殆ど白に近い緑色のライトエフェクトを帯びる、ソードスキル……

「ふっ!」

が、それを殆ど反射で剣を切り返し、キリトは弾く。その剣には濃い水色のライトエフェクト

アスナの両肩と上下に十字を掻くような四連撃、《ラファル・クロワ》に対し、キリトは水平四連撃、《バーチカル・スクエア》

互いの連撃が甲高い音を響かせながらぶつかり合い、二人とも少しノックバックしたことにより生まれた隙間から表情が見える。

アスナは自分のフェイントに対応しきつたキリトに驚いているようだったが、キリトの方は案外と楽しそうだ。……まあアイツ意外とこう言うのでは楽しむタイプだからな。

そうして、決闘は十分間近く続く。互いに打ち合う内、徐々にキリトだけでなく、アスナの方にも少しずつ楽しそうな表情が見えてゆくのが印象的だった。

が、そんな決闘にも終わりは訪れる。結構、意外な形で。

俺がそれに気が付いたのは全くの偶然だ。ただ不意に、キリトのそれまで重心移動以外に使われていなかった左手が、ピクリ。と動いたのが、確かに見えた。

「あ、」

俺が短い声を上げた直後、攻撃動作に入ろうとしていたアスナにタイミングを合わせるがごとく、キリトの左手が稲妻の様な速度で跳ね上がった。

それはちょうど、左手にある剣でカウンターをするかのよう。

勿論、実際には左手に剣など握られてはいない。と言うか、両手で剣を使う《二刀流》の剣士など、この世界にはそもそも存在しないのだ。

しかし、アスナはそれに迎撃しようと動いてしまった。まあ仕方ないと思う。理性では分かっているけど、身体が反射的に対応してしまうほどに、キリトの動作は真に迫るものだったから。

結果的に、存在しない左手の刃を迎撃しようと剣を振ったアスナには決定的な隙が生まれてしまい、それを見逃すはずもなく繰り出したキリトの攻撃がクリーンヒット。決闘はキリトの勝利に終わった。

ちなみに、後日行われたボス討伐は案外と楽に終わった。戦闘終了後にキリトに、「兄貴一人で大立ち回り過ぎだ！」と怒られたが割合する。

そうそう。

決闘終了後のアスナがキリトを見る目に、何処か熱っぽい物を見た気がした。

その日の帰り道、俺はその顔の意味を考えて、一人微笑する。

「いやいや、もう三月だし、春はすぐそこだねえ」

そんな事を言いつつ、上機嫌で俺は家への道を歩く。

うん、暖かくなってきたな。

二十四話 ある日の決闘（後書き）

はい、いかがでしたか？

今回は、原作メインヒロイン。結城明日菜こと、アスナが登場です。

この先は少々オリジナルに入りますが、少しネタバレするとやっぱり、時間軸と、結果的な流れは本編から外れません。

たとえば誰がキリトに、リア充　しろ！と言ったところで、アスナの行き先は変わらないのです。

ご意見ご感想、心よりお待ちしております！
では！

二十五話 林での遭遇（前書き）

はい、どうもです。

此処から先数話のストーリーは、完全にオリジナルなので、僕の未熟さが丸見えです

もしかしたらありえないようなミスがあったりするかもしれませんが、どうかお許しを……

そしてできればご指摘も願います……自分一人ではどうも見つけきれなくて……

では、どうぞぞー！

二十五話 林での遭遇

「ん〜んんん〜ん〜ん」

鼻歌を歌いつつ、周囲警戒も忘れずに俺は進む。

三月の終わりに起こったあの決闘から、四週間近く。

本日、4月20日

午後9時34分

俺は、とある上層階層の「引き込み林」というダンジョンに居た。何故こんな時間に狩場に居るかと言われれば、単純に少々面倒クエストをこなしているからだ。

条件はこのエリアに出現する、《アサシン・アウル》と言うフクロウ型モンスターを討伐すること。

ただこの《アサシン・アウル》が少々厄介で、午後8時以降にしかフィールドに出現してくれないのである。

しかも当人（鳥？）たちは一メートル以上ある巨大鼻である癖に何気にすばしっこく、俺の敏捷度と鍛えているスキルを考えると滑空攻撃時にカウンターを喰らわせると言うこれまた面倒な闘いかたを中心にしなければならぬ訳で……結果、結構時間かかってしまったのだ。

まあそれも終わり、俺は意気揚々我が家へ……帰りたいところだがそうではなく、俺は今安地（フィールド上に置いて、モンスターが出現・侵入しない安全地帯の事。ただしプレイヤーからの攻撃は有効）へ向かっている。

実はこの引き込み……じゃなくて「引き込み林」、午後九時以降は翌日の午前六時まで林の外から入る事は出来ても、内側からの脱出は徒歩から転移結晶まで、何しても出来ないと言うスバラシイ仕

様のダンジョンなのだ。

ちなみに俺は今日、初めから野宿するつもりでこのダンジョンに
来ているので準備はばっちりである。

後は安地で夕飯を食べ、あすの朝を待つため寝るだけ。

のはずだったのだが

唐突に、前方から甲高い剣戟の音が聞こえて来た。

「ん？」

こんな時間に、自分以外にも此処に用がある奴が居るのだろうか？

さて……かなり可能性は低いが、もし狩りをしているのなら、近
づきすぎるとモンスターの注意が此方に向いてしまい、狩りをして
いるプレイヤーの邪魔になるので、ゆっくりと見付からないように
慎重に距離を詰めていく。

聴こえて来たのは、剣戟の音。そして獣の吠える声と息遣い。ギリ
ギリ見える距離まで近づき、策敵スキルを起動して相手方をズーム
する。

そこに居たのは一人の人間と二匹の黒い狼型モンスター。

モンスターの方は《ハイド・ウルフ》、ハイディング昼間でもこのステージで姿
をよく見かけるモンスターで、自身を隠蔽する能力が高く、当然の
ようにその皮からも隠蔽能力の高い装備アイテムが作れる。

また、一体一体を倒していただけの経験値が高く、最近LV上げプ
レイヤー達のまよになっているモンスターでもある。

が、正直そっちはどうでもいい。問題は人間の方。

装備は、純白の美しい細剣。レイピア

身にまとうは白をメインに赤のラインが入った騎士風の戦闘服
そして何より驚いたのは、戦闘を行っていたのが俺とそう変わらな
い少女であったと言う事。

そう、言うまでも無く、ギルド「血盟騎士団」の副団長。騎士姫
さんことアスナである。

「あいつ、こんな時間に狩りやってんのか？」

そんな事を思いつつ観察を続ける。

《閃光》の名を持つアスナだが、俺は彼女がソロで対モンスターの
狩りをしている所を見た事は無かった。つまり初見だったのだが……
まあ 流石と言うべきか、アスナの立ち周りには正直見事な物だっ
たと言えるよ。

二体のウルフの噛み付きや爪の一撃。突進を、バックステップや
サイドステップでひらりひらりと回避。直後、異常とも言うべき敏
捷度から繰り出される神速の突き技や切り払いが、的確に相手の身
体を捉えていく。正に一方向的。

しかも怖い事に、それをするアスナはこの上なく冷静沈着で、技
も最早機械的とも言える程正確な物なのだ。

あんな冷徹な攻撃を繰り返されようものなら、相手が並みのプレイ
ヤーであればとつくに恐慌をきたし、無茶苦茶に剣を振り回すかな
んかして訳も解らずやられるだろう。
そして何より……

「閃光……か」

その戦いには美しさがあった。

圧倒的な速さから描き出される白の軌跡と、アスナの舞う動きに合

わけて踊る戦闘服^{ドレス}。

それらが、元々きれいな顔立ちをしたアスナをより映えさせて見せ、実に美しい。

正に今、あの戦場は彼女の領域^{ステージ}なのだと、誰も言わずとも分かる。そんな闘いだっただ。

まあなんにせよ、このままいけばあっという間にアスナの勝利だ。その後のんびりと安地へ行けばいい。

面白いものが見れた事に俺は得をした気分になった。

が、……その時、これまで端役に過ぎない存在だった黒い獣が、思わぬ反撃を見せた。

突然それまで仲間の後ろにいたウルフが入れ替わるように前へと出て、バックステップで下がったもう片方のウルフが、天高くへと吠え声を上げたのだ。

「遠吠えか？……つておいおい！」

驚いた声を上げた俺だが、仕方ないと思う。

なぜなら、突然アスナの後ろの茂みから、新たな《ハイド・ウルフ》が三匹出現したからだ。

何度か奴等とは戦闘をした事があるが、あんな技は初めて見た。夜専用の特殊技か？

いずれにせよ、それまでテンポ良く立ち回っていたアスナのステップが突然の事態に大きく乱れる。

五対一という、圧倒的不利な状況に突然追い込まれてしまったのだから当然だろう。

彼女の眼に、明らかな戸惑いと焦りの光が浮かぶ。

一応なりとも此処は上層階なのだ。あいつ等の体力もあれだけ数が居れば馬鹿には出来ない。俺から見ても、あれはまずい。

「つーかまたこんなのか！」

何か、俺がフィールド上で人を偶然見かけると、こう言う事になる確率高い気がする。偶然のはずなのに、なんか悪意を感じるんだよこれ！

そんな事を思いつつ、一気に駆け出した俺は、すぐにアスナの居る広場へと到達する。

変わる代わる仕掛けて来る五匹に囲まれ、木を背にして身動きがうまく取れないでいるアスナの正面に位置するウルフに狙いを定めて跳躍。

またしても現れた乱入者に驚いた顔を見せるアスナの事はほおつておいて、空中で得物である、冷裂を一回転させ、その切っ先を未だこちらに気が付いていないウルフの頭に向けながら重力に従って俺の身体は落ち、ついでに振り下ろす。

「覇ア！！！」

轟音、と共に土煙が上がり、周囲のウルフがたじろいだように飛び退く。

クリティカルポイント
急所部位である頭を貫かれたウルフは、そのままポリゴンとなって四散。

地面から冷裂を引き抜いた俺は構えながらアスナの斜め前に立って話しかける。

「助太刀する。かまいませんな？」

少し戸惑ってその後迷ったような表情を見せつつもアスナが頷くのを確認した俺は、「左をやる」とだけ告げて、こちらを未だに睨む左側のウルフ二体へと突っ込んだ。

二十五話 林での遭遇（後書き）

はい、いかがでしたか？

そんなこんなでアスナも今までの二人と同じような出会いになってしまいました……ワンパターンだな僕……

でもまあ、こうするのが一番つとりばやくてですね……すみませ
ん！石をぶつけないで！！

ご意見ご感想、お待ちしております。
では！

お気に入り件数が100を超えました！日頃からこの作品を見て
くださっている方々に心からの感謝を！
ありがとうございます！

二十六話 疑問と忠告（前書き）

はい、どうもです。

それでは今回は、全話の続き、森の中の話となります。

取りあえず、現時点での、これがリヨウとアスナの距離感ですかね W

では、ごうござ

二十六話 疑問と忠告

ぺこり。と、目の前の少女は頭を下げ、俺も同じく頭を下げる。これが助け、助けられた時の上層部での基本的な礼儀だ。いちいちありがとうだの何だのと言う挨拶は無い。

ただ頭を下げるだけ。

助けた側は、いちいち例など求めないし、助けられた方も、大概は短く礼を言うか、無言化のどちらかだ。

最前線と言う常に死が付きまとう状況下では、フィールド上の助力などお互いさま。という暗黙の了解があるからだ。終了後は無言で戦闘処理を終えて次へ。

それが自身を護り、強さを維持していくために、効率的で合理的な事にのみ目線に向けた攻略組と言う人種なのだ。

俺はそのまま安地に向かおうとする。こんな時間だ。当然、アスナも同じだと思ったのだが……あろうことがまた森の奥に行こうとしやがった此奴！

「おい、ちょい待ち閃光の騎士姫さん？」

「なんですか？」

威圧するような目線で此方を見て、否、睨んでくる。

軽く呆れが入っているのは多分呼び方のせいだ。

仮にも助けた相手に向ける視線かそれが。俺が遅刻魔だからか？風紀委員みたいなやつだし根に持つタイプなのか？……嫌、そうではなく。

「あんたまだ狩りを続けるつもりか？」

「そうですけど何なんですか？」

「止めとけ。今の戦闘で解ったはずだ。あんたの力で此処の一人はきつい。つーかさっきの顔から察するに、夜ここに来るのは始めてだろ？騎士姫さん？」

実際、あいつ等の経験値が高いのは最近分かった事だ。知らなくともおかしくない。

「……前から言おうと思ってたんですけど、その呼び方止めて下さい。」

「何で？」

「……止めて」

「……はいはい、で？」

「……確かに危なかったのは確かですから、今夜はあきらめましょう。」

「さいで」

そうして、彼女は森の別方向へと行くこうとする。ありゃ？

「何してる？安地はこつちだぞ？」

「？何で安地まで行く必要があるんですか？」

攻略ギルドには情報が集まるはずだよな？何で知らんのだこいつ

……

それから俺は、この林の夜における特性などについて、懇切丁寧にアスナに説明した。

全てを聞き終わったアスナは、まさしく「苦虫をかみつぶした顔」と言つに相応しい顔をしていた。

「……つまり、今日はもう、」

「まあ、此処の安地で野宿するしかねえわな」

「……………」

「なんだその眼は。」

「別に何も思ってます、ただ、何かしようとすれば即座にハラスメントの通報をするって事だけ言っておきます」

「そりゃ自意識過剰ってもんだよ、お嬢さん？」

「なっ……………！」

軽い皮肉で返してやると、アスナは顔を真っ赤にしている、眼に宿るは憤怒と羞恥。ふむ、少し刺激が強かったか？

『まあ……………どうにかなるか？』

そう思いつつ、俺は歩き出した。

「さて……………取りあえず飯にするか。」

安地に入つての俺の第一声はそれである。まあ先ずは何をおいても飯。腹が減っては戦は出来ぬは、生き物の鉄則だ。

「……………」

「なにしてる？器は貸すからお前も自分の分の食材とか出したらどうだ？」

フライパンや無限ポットを出しつつ、安地の入り口で突っ立ったまま口を開かないアスナのほうを向いてそう話しかける。

「……………んです」

「……………はい？」

「持ってきてないんです。食べるもの……………」
成程ね。

恐らく帰れるつもりでここに来たからだろうが、案外とっつきかりしてるんだな。

「はあ……………分けてやるから座れ」

呆れて言うと、アスナは少しむっとしたように強気な声で返してきた。

「憐れまれるほどじゃありません。ご心配無く」

「あのなあ、腹へって無いのか？」

「……別に大したことありません。」

「そう言う割には此方から……と言つか食材から目をそむけてぐぐうううう」

「もう一度聞く。腹へって無いのか？」

「……減ってます。」

顔を赤くして眼には羞恥を宿し、同時に少々悔しそうにしながらも、アスナは己の空腹を認めた。

「分けてやるからこっちに来て座りなさい。」

「はい……」

「よろしい。」

全く……なんだってこう、変な所で意地っ張りなのかね？この娘。

「……」

「……」

飯を食いつつ思う。

会話がないなあ、此奴とだと……

というわけで仕方ないし、こっちからアプロチだ。

「所で、」

「……なんですか？」

「そう睨みなさんな、恐ろしいから。」

いやほんと、眼力で人が殺せそうだぞおまえ。

「何でこんな時間にダンジョンに居た？危険度が高いのは分かってるだろ？」

「それはそちらにも言えると思いますけど」

「俺はクエストの条件上仕方なくだ。対象モンスターが夜行性でなで？」

「……………」

だんまりか。此処でこっちも黙るのもいいが……コープのサブリーダーと個人的に話せる機会なんざそうそうねえだろうし、何とか話を繋げて行きたいのが本音だな。

……と言つか此奴に関して個人的に気になってる事があるしな。(変な意味では無い)

「別に深く言うつもりは無いが……こんなやり方でレベル上げしたら、いつか死ぬぞお前」

「……………解ってるなら聞かないでください」

拗ねたように言うアスナに、俺は自分の行っている事が正しいと知る。

つまり、こいつは自分のレベルを上げるため、わざわざ真夜中にフィールドに出て来たということだ。

そもそも前々から疑問ではあった。

原則、ギルドと言うのはメンバー全員がおなじ狩場でレベル上げをする。結果、メンバー全員が一定のレベルで頭を並べて戦う事になり易い。

しかし、此奴のギルドであるコープには二人ほど頭一つ抜けた実力の人間が居る。一人はまあ……仕方ない。あいつはこの世界じゃ最強だからな。

そしてもう一人が、今日の前に居る此奴だ。だが……此奴はギルドの中で（もしかすると攻略組のギルド全体の中で）攻略に関する全権限を任される立場にいる。つまり、毎日のように最新の情報が入って来る上、それを頭の中でまとめ、ギルドメンバーに指示を出さねばならない。忙しいのだ。

それだけならともかく、ギルメン（ギルドメンバーの略）のレベル上げを兼ねた全体の育成の管理、纏めもしなければならぬ。要は、昼間自分のレベル上げをしている暇など無いのだ。

にもかかわらず、アスナはコーブに置いて 否、SAO全体に置いても突出しすぎた実力を持ち、それを維持している。

正直、昼間にちまちまギルメンとレベル上げをしているだけと言われても、計算が合わない。

コーブに居る友人に聞いた話でも、アスナは殆ど一日中攻略作業と仕事に明け暮れているとのことだった。ギルメンにも厳しく、正直何かに取りつかれているようにすら見えるそうだ。

「じゃあ正しいと言う前提で話すがな、こんな時間にソロでレベル上げなんて、やめといた方がいいぞ」

「貴方に関係ないと思いますけど」

心から不快そうなおスナだが、そう言われてもなあ……

「残念ながらお前さんに死なれると困るんだよ」

「はい？」

「曲がりなりにもあんたは攻略組の前線を纏めてる存在だ。そのあなたに、ある日突然死なれたら、前線が混乱して面倒事が増える。」

たとえばコーブが戦線に参加できなくなるとか、ギルド間の連携が上手く取れてないと言う事になったりとか。

「つまり自分にデメリットがあるから死ぬな……と？」

「まあ平たく言えばそう言うことだ。なんだ？心配してほしかったか」

「別に、初めから期待してませんし。と言うか」

「余計なお世話……か？」

「……理解していただけで何よりです。あと、自分の都合で人の行動を制限しようとしなくて下さい」

眼に宿るは怒り、怖いね。

「ふむ……すまんかったな」

「……………」

「おやおや、謝ったのに胡散臭そうな目を向けられてしまったか。感情込めずに言ったからなあ……」

「まあ確かに自分勝手な物言いだと反省はするが、後悔はしとらんので。」

「そいじゃ、そろそろ寝るかね。見張りをお願いしたいんだが……」
「解りました。引き受けますのでお先にどうぞ」

基本的に、街の中でだろうと安地だろうと、寝るときは策敵スキルの接近警報アラームを付けるか、誰か一人が起きていて交代で見張りをするのが基本だ。

特に、安地でのフィールド夜明かしの時は仲間がいれば見張りを付けるのが一般的だ。そうしないとプレイヤーの攻撃が有効な安地では危険だからである。

まあ目の前のこいつは、険悪なムードで有れど、殺人と言う愚行を犯すような奴ではない事を俺は知っているので、安心して今日は寝る事が出来る。

「すまんね、んじゃおやすみ」

「……………」

未だに俺の事を疑うような眼で見ているアスナを一瞥しつつ、俺は自らの寝袋に入った。

二十六話 疑問と忠告（後書き）

はい、いかがでしたか？

なんか、距離感も何もそもそも他人ですわこれw

一応キリトの従兄弟ですし、そもそもここからアスナは劇的に変わる時期ですから、まあこのままでないのは確かですが、さてさて……

えーここで、突然ながら皆さんにアンケート（？）がしたいのです。

実はここから先、とある時期に、ラフィンコフィン（原作のSAO最大最悪の殺人ギルドの事）討伐作戦を描くかどうか、只今迷っています。

できれば、書くか否か、読者の方々の意見も参考にしたいので、余裕があればメッセージか感想で意見願えないでしょうか？

ちなみに、あくまでも参考ですので、どちらかが多いからと言って、そちらに決まるとは限りません事をご理解いただきたく……

ちなみに、やるとメリットは……

デメリット

初めての大規模対人戦闘（下手かも）

メインヒロイン登場がまた先延ばしに

SAO編が終わらない

メリット

リヨウの過去の一部が明らかになる！？（かも

です

ご意見ご感想、心よりお待ちしております！

では！

8月15日 一部改稿しました

二十七話 騎士姫が見る夢は？（前書き）

はい、どうもです。

今回、もしかすると原作のアスナとキャラ違くな？

と言う部分が出るかもしれません。

いちおう原作とは時間軸が違うので、そこら辺から、勘弁していた
できれば嬉しいく存じます。はい。

ヒントは 騎士姫 + 睡眠 ？ です

では、どうぞ！

二十七話 騎士姫が見る夢は？

あの後、十時半から一時半頃まで三時間程寝て再び起きた俺は、アスナと見張りを交代。

何故かアスナは渋ったのだが、さつさと寝るように言ってよつやく寝てから二時間程。現在午前4時23分。

まだ冬が過ぎきっていないのか、この季節は日が昇るのが遅い、当然この浮遊城にも光は差し込まないため辺りは薄暗く、肌寒い空気が満ちている。

「さつさと六時になってくれねえかなあ……」

もうすっかり眼が覚めてしまった身体を揺らし、ホットティーを飲みつつ嘆く。

暇潰しだった朝の運動も終えてしまった俺は、そろそろ第二回に入ろうかとすら考え始めていた。

事が起こったのはその時だ。

「お……………ん……………」

「ん？起きたのか？」

随分早い朝だなあとはいつつも、話しかけてみたが返事は無く、ただ呻くような声が聞こえて来るばかりだ。

顔色が青くなつてり、綺麗な卵型をした顔には苦しそうな表情と脂汗が浮かんでいた。

「ちよっ……………と待てよ？おい。」

「……や……………て……………いで……………けて」

とぎれとぎれに何かを言うその表情は必死の形相で、恐怖と苦し

みに埋め尽くされており、俺にただ事ではない事を知らせる。その様子はまるで悪夢を見ているかのよう……いや、恐らく見ているのだらう。この状況ではそれしか考えられない。

暫く呻く内、段々とその声は音量を上げていく。

俺が戸惑っている、ついにアスナは両手で空中にある何かを掴もうとするかのように虚空を掻きむしり、絶叫を上げ始めた。

尋常ではないその様子に、俺は思わず彼女の前に駆け寄って肩を揺さぶり起こそうとする。

「あああ、あああああああ、あああああああああああああああああああ
ああ!!」

「ちよっ!……おい!こら!起きろ!おい!」

「あああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああ!!……!」

「起きろ!!おい!起きろってんだ!アスナ!!」

「あああああああああああつっ!……!」

「ちよっ!うおっ!」

「あああああああああああああああつあああああ……あ
そしてようやく悲鳴が止んだ。だが……」

夢を見た。

いつもの夢。

……ではない。

いつもとは違う。

普段のアスナの夢は何処とも分からない病院のベッドの上で、両親や、同級生親戚の姿を見続けて終わる。

だが今日の夢は、健康体の自分の身体が、自分の部屋で目覚めることから始まった

自分は始め、現実の家族の中に居る。SAOの記憶もちゃんとあって、昨日までの事は夢だったのだと、本気でそう思う。

その内、自分の家に親戚の人々がやって来る。

味気なく、規則正しい日常。

少しだけ、自分の生き方に疑問は持つけど、そんなものは悩むほど重大じゃなくて、もっと大きくて素晴らしい目標のために日々邁進し歩いて行く。そういう日常。

私はそれに満足しているつもりだし、そもそも他の世界なんて考えた事も無ければ夢見た事も無いはずだ。

母は、貴女は普通の人間より特別なんだと何時も行っていた。

才能もあるし、この道を歩んでいけば必ず正しく幸せな人生になると。

そう言った母や、既に成功を手にした父や兄達。

周りの期待にこたえるために生きて行く。

これまでもそうだったし、これからもそれは変わらないと、そう思っていた。なのに、

気が付くと自分は、檻に閉じ込められていた。

それは天空の、何処までも遠い空の中にある鋼鉄の檻。

SAOと言う名の、電子で出来た、絶対の檻。
外に手を伸ばそうとしても、それは決して届く事は無く、誰も助け
てはくれない。

檻の外では、両親や家族や親類やクラスメイト達が、自分の事を
憐れむような目で見つめている。

助けを求めても外からは何も手を出す事が出来ず、その内にかつて
の競争相手だったクラスメイトや同年代の人間、従兄妹達は自分の
事を憐れみつつも何処か嘲笑うような視線を向けて立ち去って行く。
その後に親類の叔父や叔母たちも続き、最後には兄や父、母も自分
のもとから離れていく。

私の築いてきた日常が、世界が、私が生きるべき道が、コワレテシ
マウ……………

『待つて！お父さん！お母さん！』

見捨てられる事を恐れ、必死にそう叫ぼうとしても声は出ず、ど
んどん皆の背中は遠いものになって行く

『待つて！置いて行かないで！！助けて！！』

叫ぼうと母たちが振り向く事は無い。

それどころかどんどん離れていき、私の周りにあつた青空も自分の
後ろから迫って来た暗闇にのまれ始め、母達の居る場所はどんどん
と遠く、小さな光の点となって行く……………

何故？

普段の自分の夢は、こんな、全てが自分から離れていくような夢で
はないはずだ。

少なくとも両親は、自分をベットの傍で表情が見えないながらも見

下ろしている。

その表情が心配である事がアスナの持つ一つの希望の光でもあった。
……なのに、何故今日はこんな夢を見る？

まさか、両親は自分の事をもう……

そしてついに、自分の周囲が暗闇にのまれた。

私の……結城明日奈と言う人間の世界が完全に消えてしまったと。
アスナにはそう感じられた。

後に残ったのは孤独、孤立、恐怖、空虚……絶望
ある意味では、当然だ。

これまで生きて来た道以外に生きる道を知らないアスナにとって、
その道が消える事は、死ぬことほぼ同義と言っても過言では無いの
だから。

『……や……い……ああ……』

気が付くと、自分の意思とは関係なく声が漏れていた。

それは、絶望と恐怖に押しつぶされそうな一人ぼっちの少女の叫び。

『いやああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああああ』

止めようも無く上がる叫び声に身体が呼応するように、なにも無い
虚空にアスナは手を伸ばし、ありもしないのにそこにある希望を
掻き集めようとするかのように暗闇を掻きむしる。

『ああああああああああああああああああああ……い！』あああ
ああああああ……い……い……ら！』あああっあああああっ！……きる
！……アスナ……』

唐突に、何かが聞こえた。

誰かの声だろうか？

何でもいい、この叫びを止めてくれるなら、今は誰でもいい何でもいい！

アスナは必死に音のする方に向かって手を伸ばす。
そして何かを掴んだ、と思った瞬間、視界に光がはじけた。

「はっ、はっ、はぁ……」

視界の中に映る物がなんなのか、アスナはおぼろげな意識のせいかよく理解できなかった。

息は途切れ途切れで、汗のべたべたとした不快感が全身の表面に張り付いている。

またこれか、と思いつつ、徐々に頭が五感の感覚から得た情報を整理していく。

視界に映る緑色は森の木々の色、そうだ。

自分は今日、狩場の安地で寝ることになって……それで……

「おーい、落ち着いたか？」

「はぁ……は？」

急に耳元で春せられた声に、妙な声を上げてしまう。

それに伴い自分の今の状態への理解が進む。

そう言えば、視界がいつも起きた時より少し高い様な……それにこの身体を包んでいる温もりは何だろう？

「落ち着いたらでいいから離してくれんか？ 圧迫されてる。」

完全に理解した時、恐らくアスナの顔は真っ赤になっていただろう。

今、アスナは、フィールドで出会い、同じ安地で寝る事となったり

ヨウと言つ青年の身体に抱きつく形になっていたのである。

「き……」

「き？」。

尋ねる様に首を傾げるリョウ。

関係無く、先程の夢の中と同じように意識と関係なくアスナは声を上げていた。ただし先程とはだいぶ、違う意味で。

「きゃあああああ！……！！」

まだ暗い森に、少女の悲鳴が木霊した

二十七話 騎士姫が見る夢は？（後書き）

はい、いかがでしたか？

まあそんなこんなで、原作（WEB）版とは違う、少々刺激の強い夢をアスナには見ていただきました。

あまり夢程度では折れなさそうな、芯の強い女の子であるアスナですが、案外一巻の最後ではキリトが決闘に行く際悲鳴じみた声を上げるなど、どうしようもないことに対しては弱い一面も持つ娘だと、僕は解釈しております。

そんな感じで、出来た話でした。

ご意見ご感想、お待ちしております。
では！

二十八話 何時もとは違う朝（前書き）

はい、どうもです。

現在僕は家族旅行中です。

なので、予約での投稿となります。

今回はまあ……雑談ですね。

え？必要なのか？

過程です！

では、どうぞ！

二十八話 何時もとは違う朝

「で？理解したか？」

「すみませんでした。」

事情の説明を終え、腕を組んで首を傾げるリヨウに、アスナはそう謝罪した。

と言うのも、自分から抱きついた（らしい）リヨウから意識を取り戻して離れる時、ハラスメント通報をするのも忘れて飛び退き、レイピアを引き抜いてリヨウの説得も聴かずに武器を振り回して（全部回避された）リヨウの震脚で転ばされ、武器を取り落としてそれをリヨウに弾かれ、レイピアが遠くに転がった所ようやくリヨウの主張を聞いたのだ。

ただし、自分の側に全面的な責任があると頭で理解はしていても、羞恥や怒りが邪魔をして納得は出来ていない。

顔を赤くしてぶつぶつと何事かをぼやいているアスナに、突然リヨウがそれまで面倒くさげだった顔を引き締めて訪ねてくる。

「で？何だあの悲鳴？正直、常軌を逸してたぞあれは」

一瞬、驚いた。

自分が夢の中で上げている悲鳴を現実にも上げているとは思わなかったからだ。

意外にもこの世界に置いても夢の中の出来事は現実の身体にも影響するらしい。しかも、目の前のリヨウの口調を見るに相当。

本当に、何で今日に限って……そんな考えが頭によぎったが、表面上は出来る限り冷静に答える。

「……別に、悪い夢を見ただけです」

「ふーん？……さよか。」

さらりとした物言いに、もう少し追求されるかと覚悟していたアスナは内心安堵した。

その感情を見透かされた訳ではないだろうが、話題をずらしてリヨウは続ける。

「まあ、取りあえず水を飲め。あんだけ叫んだんだ。喉、渴いてるだろう？」

「あ……いただきます」

今更ながら、自分の喉にガラガラとした違和感を覚えたアスナは、先程とは違い今度は素直に応じる。

よし、と言う声と共に、リヨウはレアアイテムだと言う無限液体ポットからアイステイーを銀色のコップに注ぎ始めた。

少々リヨウに自分勝手な印象のあったアスナだったが、気遣いを受けたせいも、幾らかこの青年に対して印象を回復させる。

思えば、夢の中で聞いた声はきつとリヨウの物だったのだろう。悲鳴を上げていた自分を、心配してくれたのだろうか……？

聞くのもなんとなく恥ずかしいので、黙ったままアスナはそんな事を考える。

『嫌なだけの人じゃないかな、無愛想だけど』

差し出されたカップを受け取りつつ、アスナはそう、リヨウに対する結論を付けたのだった

暫く黙ってカップを傾けていた二人だったが、不意に、リヨウがのんびりとした調子で口を開く。

「そついやさあ……副団長さんって、攻略休みのとき何してんの？」
「……特に何も」
痛い所を突かれたと言つか、答えずらい質問だ。

アスナは基本的に、攻略を休んだりそれと関係無い事をする。と言つ事が少ない。

と言つか、殆ど無い。

その旨をリヨウに伝えると……

「んじゃ、フレンドもいねえのか？それ悲しくね？」

「いや、そう言う事じゃ……」

一応フレンドは居る。

だがその殆どは、他ギルドの連絡担当者や軍関係者、情報屋等、攻略やギルドの仕事に関係する人物たちであり、連絡用に登録しているだけだ。大して親交がある訳ではない。

無論親交のある友人もいる（男は居ないが）特に、自らの大事な装備を全て任せるために、信頼のおける人物を探しまわった結果知り合った鍛冶屋の少女とは仲が良く、偶に買い物に行ったりもするほどの仲だ。

だがやはり、それほどの友人が多く居る訳ではないし、休日が少ない事が変わるわけでもない。

そもそもこの休日の少なさは自ら望んだものなのだ。

一刻も早くこの世界から出なければならぬ自分にとって、休みなど邪魔な物。そう思うがゆえに、休めと言われてもアスナは休む事を拒んできたのである。

そしてそれはこれからも変わらない　この狂った世界を脱出するまでは。

「ふーん……まあそれがお前さんの考えか」
「ええ」

即答する。

それ以外の選択肢などありえ無いし、迷うつもりも無い。

「ま、それもまた一つ……か。でもなあ」

「？」

言葉を続けたリヨウの顔は至極真剣な物で、さっきまでののんびりとした青年とは別人のようだ。

何処となく、自分の知っている誰かに似ている様な気がしたが、それが誰だかは分からなかった。

「やっぱ、たまには休めよ？」

「……………」

「迷惑かも知れんがな、勝率100%じゃ無い勝負を無限に繰り返し続ければ、いつかは負ける時が来るんだ。だからまあ、たまには休息も必要だつて納得しろ」

「……考えておきます」

少々そっけなく返事をして、少しだけうつむく。

冷静になればリヨウの言っている事が正しいのは理解できるが、自分がそれを実践できるかは、現段階では分からない。

「さて、んじやもう一つ聞きたい事がある。いいか？」
「ある程度なら」

流石にギルド内部の情報等は答えられないため、そう答えつつアスナはもう一口カップのアイスティーに口を付ける。

「お前さん、好きな人とかいねエの？」

「~~~~!!?」

いきなりの質問に、アスナは口の中に含んでいたアイステイーを嘔き出す。

リヨウとアスナはランタンを挟んで向かい合って話していたため、当然嘔出されたアイステイーは……

「うわ冷たっ！汚なっ！おまつ、バカっ！」

「ケホッ！ゲホッ！変な事、言うからです！いきなりなんなんですか!?!」

まじめな顔して突然恋愛の方面に話が飛べば、いくらなんでも誰だってこんな反応をするはずだ。

ましてや男女間である。

これで非難されるのは理不尽と言う物だ、そう思いつつ、アスナはいきなりのリヨウの質問にその意図を問い返す。

「何でそんな驚く？別に深い意図は無いんだが……女子ってそういうの好きだろう?」

「だからって、いきなりその質問ってどうなんです?ナンパか何かだと思われまますよ?」

恐らく自分の今の眼は世に言うジト目になっている事だろう。

「あー、確かにそうか……気をつけよう、すまん。」

「そう言う所も無頓着なんですね……まあ良いですけど……」

実際、そう言う質問が飛んできた事が過去に無かった訳ではない。と言うか、結構ある。ので、答えも考える前も無く用意済みだ。

「答えはNOです。好きな人なんていませんし、作る気も無いんです。私。」

「そりゃやっぱ、邪魔だからか?」

「はい」

そもそも休み事態が要らない物だと考えているのに、恋愛などしている暇があるはずも無い。
その程度の事はこの男なら予想しているかと思ったのだが、帰ってきた答えは意外な物だった。

「うーん、勘違いだったか？」

「？」

首を傾げるアスナに、リョウ心底意外そうな顔で続ける。

「いや、てつきり好きな人でも居るかと思ってたんでな？」

「はい？何でそんな事を？」

「んー、まあ判断材料ちよっとした事なんだが……。まあいいや。気にするな」

「はあ……？」

少々疑問が残ったが、これ以上追及してもこの男は喋ってくれない気がするので、引き下がる事にする。

いつもと違う朝は徐々に過ぎて行き、段々と森の東側からは光が差し込み始めていた。

現在時刻は午前六時

森が脱出可能な時間となった。

アスナの眼が覚めてしまってから、俺達二人は色々と雑談を重ね、今は結晶アイテムを取り出し脱出を行おうとしている。

だが……アスナが転移結晶を掲げる寸前、ちよっとした事を思いついた。

こんな珍しい状況等、滅多にある物でも無いだろう。思いきって普通ならこいつにはしない提案を試してみる。

「なあ、フレンド登録しないか？」

「え？」

「いや、無理にとは言わんが……そちらにもある程度メリットがあるように協力できることはするぞ？」

例えば、ソロ側との仲介とかな。

ちよっとした情報源になれる程度には色々知識あるし。武力の面ではある程度の物だと自負もしている。

「どうだ？」

「そう……ですね。分かりました。かの《ジン》との連絡手段ですし、持っていて損はなさそうです。お願いします」

「こちらこそ。コーブの副団長さんとの連絡手段なんざ、俺みたいなソロプレイヤーじゃ願っても得られるもんじゃないからな。頼んでみるもんだ」

そう言っつて、俺とアスナを対象にフレンド申請の操作を行う。

キリトなんかは積極的にボス攻略の会議なんかにも出ているため、アスナやコーブの団長の連絡先なんかも持っているのだが、俺は基本その手の事には強制や、呼ばれない限りあまり出る事が無い。(この間はキリトと目の前のアスナに呼び出された)

どうにもああいう議論っぽい場合は苦手だし……他の個人的理由絡んでの事だ。

「よし、完了。じゃ、またいずれ会おう」

「ええ、次のボス攻略でもよろしくお願いします」

そう言っつて、アスナは転移結晶を掲げ、青い光と共に消えた。俺も同じように結晶を掲げて叫ぶ。

「転移！コラル！」

いったん自宅に戻るため、自宅のある階層の主街区の名前を指定して、青い光と共に俺は空間を移動する。

正直、コープの副団長の連絡先が入ったのは運が良かった。情報があらゆる事を左右するこの世界で、最強ギルドの重要位置に居る彼女と協力関係になれたのは、大きな収穫だっただろう。

そう思っていたのだが……以外にも、俺とアスナの連絡は、協力者と言うより友人としての連絡が多くなるとは、この時の俺は知りもしなかった。

その要因となった事件が起こったのはこの数日後の事だ。

二十八話 何時もとは違う朝（後書き）

はい、いかがでしたか？

まあこれで、ひとまずリヨウとアスナは協力関係と言つ事になりました。

しかし、実はこれだけでは終わりません。

僕の記憶が合っていて、皆さんがSAOをしっかりと読みこんでいれば、おそらく分かるはず……

ご意見ご感想お待ちしております！では！

二十九話 あれは所謂 (前書き)

はい、どうもです。

さて、今回はちょっと色々あります。
てか、久々に原作とかぶります。

まあ、詳しくは読んでいただけると分かるかと。

では、どうぞ！

二十九話 あれは所謂

さて、騎士姫ことアスナとの奇妙な夜が明けてから次の日の事、その日俺は、今日一日を休暇の日と定めることにした。

SAOに置いての気象と言うのは、あらゆる気象パラメータの調子が、ランダムに設定される事で決定される。

それはとりあえず季節に始まり、大体の温度湿度等の決定は此処だ。ちなみにこの季節設定、冬はすげえ寒いし夏はマジで暑い。

ここからさらに、季節の範囲内の気温、湿度、風速、雨や雪、ほこりっぽさ、小虫の群れまで、細かい項目の全てがランダムで設定され、まあ大体はそのすべてが好条件と言うのは無い。

のだが、一年三百六十五日、その内のたった数日だけ、その殆どが好条件と言う日があるのだ。

しかもそれが過ぎやすい春や秋だと言う事など、最早これは神様の贈り物と言う他あるまい。

「断言しよう！良い天気つてのはまさに今日この日のためにある言葉だ！」

と言う訳で、急は休暇だ。少々テンションも高い。

取りあえず、俺は普段からポーシオン及び毒消しの安売りを行っている店に買い物でも行くためのんびりと、屋台で買ったクリームサンドウィッチ（っばい）を食みながら賑やかなとある階層の主街区を進んでいたのだが……

「おや？ありゃあ……」

広場の斜面になっっている芝生の上に、寝転がった状態の見覚えある黒い影ひとつ。

近づいてみると予想どおり。我が義弟こと、キリトである。
近くへ行き、気持ちよさそうに寝転がっている義弟に声をかける。

「ご気分はいかがですか？坊っちゃん」

「最高ですね、兄貴殿」

「はは、そーりゃよかった。隣いいか？」

「勿論」

にやりと笑ってキリトが了承の意を返したのと同時に、俺はキリトの横の芝生にごろりと寝転がり、ちよっとしたセキュリティ操作をしてから目を閉じる。

うむ、実に昼寝日和

「いやあ……良い天気だねえ……」

「まったく」

俺のつぶやきにキリトも短く同意を返す。

そのまま暫く、二人でのんびりと寝転がっていたのだがふとキリトが口を開いた。

「最近、どうだ？アイツとか」

「んー？問題なく、のんびり暮らしてるよ。偶に俺が買い物頼まれるくらいだな。元気だぜ？」

「そっか」

ボソツと、そう返すキリトに何を言うべきか迷ったが結局は世間話になった。

あまりまじめな話は俺には向かないと自負している。

「お前もたまには買い物とかしたらどうだ？」

「それを言うなら兄貴の情報くれよ、買い物系の情報兄貴の得意分野だろ？」

確かに、俺は買い物が得意である。

あらゆる階層のあらゆる店の情報を稀に情報屋を使ってまで集めているおかげで、良い物を安く買おうと言う、正に買い物の基本を完璧に実践した様な事が出来ているのだ。

「ふむ……十三、東、最南、大通見、N武器、裏道、三軒、結・《マイナス》45パー（%の意）」

「……マジで教えてくれると思わなかったよ」
確かに、本来なら貴重な情報をただで教えるなど、たとえ義弟でも絶対にしないのだが……

「そうか？……まあ今日は機嫌いいからな」

「こりゃマジで天気に感謝すべきだな」

「いや、俺に感謝しろよ」

「おっと、失敬」

「おいおい……」

苦笑いしつつそんなのんびりとした何気ない会話の応酬を繰り返す。

いや、ほんとに良い天気だ。

そうして、会話が途切れ、暖かな陽気に段々と二人共うとうとし始める。と、

「ん？」

キリトの頭のすぐ横の芝生を、ブーツか何かが踏んだ音がした。と思った刹那、聞き覚えのあるキツイ声が頭上から降ってくる。言うまでも無くアスナである。

「攻略組の皆が必死に迷宮区を進んでいる時に何のんびり昼寝なんかしてるんですか！こんな所で時間を無駄にする暇があったら少しでも迷宮を攻略してください」

昨日も聞いた声が再び俺の上で響くのに対し、こりゃなんかいい訳すべきかと俺が口を開きかけた時、隣に居たキリトが一瞬早く切り返した。

「今日はアインクラッドで最高の季節で最高の気象設定なんだ。こんな日に迷宮にもぐつちや勿体ないだろ。」

冷静な、のんびりとした調子の声。

対し、アスナの声は少しむっとした様なものだった。

「天気なんて毎日おんなじです」

いや、断言したとこ悪いけど全然違うんだよこれが。

そう突っ込みたかったが、此処はキリトに任せることにする。結果からいえば、キリトは期待を裏切らない提案で返した。

「じゃあお前も此処に寝て行けよ。そうすりゃ分かるさ」

この提案、始めはアスナの事だがら即答で断るだろう、と思っていたのだが……

少し目を開けてアスナの顔を見ると、どうするか迷っている様な表情を見せていた。

これは、面白い。

即座に俺はキリトの後押しをする。

「良いじゃん。昨日言っただろ？たまには休め。俺はまた買い物行かなきゃならんなのでな。失礼。」

此処は二人だけにした方が面白いだろう。なるべく自然な流れを装って、俺は此処から立ち去る事にする。

後ろから、「情報サンキューな」と言う声が聞こえたのに後ろ手を振って返し、俺はその場を離れた。

少し離れてから振り向くと、アスナが取り巻きのギルメンを先に

行かせて、キリトの横に寝転がる姿が見えた。
さてさて？こりゃ本当に面白くなってきたな。

さて、あれから俺は、普段はあまりのんびりと出来ない買い物や旨い物（正確には甘い物）探しをたっぷりと楽しみ、ホクホク顔で家へと戻る事とした。

「いやあ、実に良い休日だった。」

心からそう呟き、俺は朝も来た主街区の中をとことこと歩く。何故と言われればこの階層、北にも中央通りではないが大通りがあり、その食材屋、実は夕方の4時ごろからタイムセールと言うべきが安売りになる。その食材を買い求めに行っていた訳だ。

歩きつつ、俺は午前のことを思い出し一人微笑む。

あのアスナの反応は、それはそれは面白かった。まさか寝ると言われて本当に寝ると思っていなかった分、それはひとしおだ。

あの後、どうなったのか俺としても非常に興味のある所であり、そのせいか俺の脚は転移広場に行くにはいささか遠回りとなるあの芝生の広場へと向いていた。

まあ、あれから七時間近くも経っているし、もう居やしないだろうが。

「おいおい……マジか」

そこには、あいも変わらず朝と同じ状況だった。

緑の芝生の上に並んでいるのは二つの影、一つは黒、もう一つは白だ。

シルエットからでも、それがキリトとアスナであることは明白だ。

変わっているのは、キリトが上体を起こしている事とギャラリイが遠目にクスクス笑ったり、記録結晶のフラッシュをたいたりしているぐらいか。

まあ、気持ちは分かる。

それほど、この二人の組み合わせは珍しいのだ。

詳細は省くが、この二人と一緒に昼寝をすると言うのは、学校一の秀才で生徒会長の女子生徒と、頭は良いがはみ出し者の不良男子生徒と一緒に昼寝してるのと同じくらい奇妙なただけ言っておこう。

と、キリトと俺の視線が遠目ながら合った。

キリトの助けを求める様な視線に対し、俺はゆっくりと振り向いて我が家へ……

突如、新着のメッセージが届いた事を知らせる電子音が俺の耳に響く。

「うん？つと……」

From: KIRITO

Main: 逃げんなああああ!!!

はいはい分かったよ……

「で？まだ寝てるん？」

「そう言う事」

俺は今、キリトの隣に座っている。

ほんとはあのまま逃げても良かったのだが

まあ、寝ると言った

一人は俺であって、その代償としてキリトに付き合つと、そう言う事だ。

「お前も律儀だねえ」

「ほつとけ、これでなんありゃ後味悪すぎる」

言った俺にふてくされたようにキリトは答える。

この世界、ソードアートオンラインの舞台アインクラッドでは、街中は、「アンチクリミナルコード有効圏内」（通称「圏内」）に設定されている。

簡単に言えば、この圏内では幾ら剣を振るうが当てよう絶対に他のプレイヤーを傷付けることはできない。毒やその他の犯罪行為も一切無理だ。

これはシステム上の設定なので、本来絶対に崩す事は出来ない……はずなのだが。

実はこの設定、相手が熟睡しているか気を失っていれば、案外簡単に相手を殺す裏技がある。

その詳細についてはやっぱり省く。

今は取りあえず、誰かが付いていないとこの眠り姫が死ぬかもしれない。と言う時可能性だけあれば十分だ。

「ま、確かにな。なんか買つてこようか？」

「ものすごくお願いします」

本気で懇願する眼でキリトは俺を見つめる。恐らく朝から付きつきりだった所を見るに、昼飯も食べていないのだろう。

そんな事なら呼び出してくれても良かったのだが、何とも遠慮深い事だ。

苦笑しながら俺は屋台からホットドック（っぱい）を三本（俺1義弟2）を買って義弟の元に戻った。

ホットドックを食べ終わり、アスナの顔を見ながらぼーっと座っている和不意に、キリトが小さな声で何事かを嘆いた。

「ん？なんだつて？」

「あ、いや……何でも無い」

「そか？」

何も隠す事も無いと思うが……「疲れてるんだろっな」か。

まあ、この義弟も数カ月前まではアスナと同じような状態だったのだ。

恐らく、今この娘がどういう状態なのか、身をもって分かっているのだろう。

キリトは事情を知らないだろうが実際、最近……いや、或いはこのデスゲームが始まってから今日までの間に。この少女がこれだけしっかりとした睡眠をとった事があつたのだろうか？

あの夜、アスナが寝たのはたった三時間少しだけだ。

もしも、これまでもアスナが毎日その程度しか寝てないのだとしたら、恐らく本人が思っている以上に疲労は蓄積しているだろう。肉体的にも精神的にも。

それこそアイツの「くしゅんっ」

物思いにふけていた俺達の横で、小さなくしゃみの音が響いた。どうやら、騎士姫様がお眼覚めになつたらしい。

「……………うにゅ……………」

言語では無い言語を放ちつつ、眼をうつすらと開けるアスナ。

横に居たキリトは、顔を覗き込むように胡坐をかいて座っている。取りあえず眼を開けたアスナはまばたきしながらキリトの事を見止めると、眉をひそめ、次に右手で上体を起こし、周囲を髪を揺らしつつ見回す。右、左、右。

最後にもう一度キリトの顔と、ついでにその後ろで笑っている（多分心底面白がっている顔で）俺を見ると……

透明感のある白い肌を、瞬時に赤く染め（完全に羞恥）、やや青ざめさせ（動揺＋苦慮）、最後にもう一度赤くした（更なる羞恥＋激怒）。

眼を見て分かるが、まあ、一つ一つの感情の大きい事大きい事。

「な……アン……どう……」

また言語では無い言語になっているが、まああえて無理矢理訳すなら、

「なんで、アンタ、どうして」と言った所ではなかるうか？

「おはよう。よく眠れた？」

とびっきりの笑顔でそうのたまったキリトの後ろで、俺は笑いをこらえるのが物すごく大変だった事を、此処に追記しておくとしよう。

いや本当に

さて、それから後、俺達三人は色々あって、面倒な事件に巻き込まれたり、その過程でおれの古い友人に出会ったりと色々あった訳だが、まあそれらは割合しよう。

とにかく、それらが終わり、俺が自宅のベッドの上でそろそろ就寝するかと思つた時だ。

新着のメッセージを知らせる電子音が、またもおれの耳の中で鳴り響いた。

「おう?.....これはこれは」

何と言うか、意外と言うか.....いや、予想通りか?

後々、俺はこの出来事を語る時、ある意味で重大な場面だったあの日の芝生と上での事をこう言っ。

『あれは所謂、あの二人にとっての、《人生の転機》って日だったんだろっな』

From:ASUNA

Main:キリトくんのこと分かりますか?

少々日本語のおかしなこのメッセ。

さてさて、この情報、何と引き換えに渡そっかな?

Third story 《騎士姫と眠りと》 完

二十九話 あれは所謂 (後書き)

はい、いかがでしたか？

と言うわけで今回は、圈内事件の冒頭とかぶせることで、三つめの物語の終焉とさせて頂いたいただきました。

どうでもいいですけど、この前とある日に夜九時ごろ寝たら(体感的に)次の瞬間朝の九時だったという出来事が……

いやいや、熟睡しているとほんと時が経つの早いですよね。多分皆さん一度は経験しているのでは無いかと思いますがいかがですか？

そうそう、ラフコフ編は、書くと言う事で方針が決定いたしました！アンケート等に答えてくださった皆様！本当にありがとうございます！
した！

次の物語へは、また少し間があくかもしれませんが。

ご意見感想心よりお待ちしております！
では！

三十話 武器の手入れは重要事項（前書き）

はい、どうもです。

今回から新しい物語が始まります。

また原作キャラが登場しますが……だれかは、おわかりですね？

そうそう、初めに、これをお勧めします！

<http://www.youtube.com/watch?v=Yxx2JpWqPHw>

では、ごきげん！

三十話 武器の手入れは重要事項

緩やかなトランペットの音が、金色の朝日に包まれた世界に響いている。

それは朝のひんやりとした空気の中を流れるように飛び、森の中を満たす。

少し賑やかで、それでいて爽やかな朝の始まり。

誰に聞かせるためで無く、自分自身の身体を起こすための朝のひと時。

とある階層のとある森の中。

リヨウは、銀色の楽器を手に、姿勢をぴんと伸ばした直立の状態で見えを閉じながら音を奏でながら思う。

気が向いたときにしかない事だが、やはりいい物だ。

やがて、長く涼やかな最後の音と共に演奏が止む。

リヨウはパチリ眼を閉じると、自身の手の中の銀をアイテムの中へと仕舞い、大きく体を伸ばして大声で言った。

「さて、今日も一日がんばりますか！」

この世界でも朝の始まりは、人それぞれである。

俺はあの日、メッセージの返信としてキリトの連絡先（と言うかホームタウンと行きつけの店）等を教える事を受理したが（本人の許可も経て、だ）、その交換として、二つほどの条件を出した。

1 これからも毎日しっかり休息は取る事

2 一つ腕の良い武具屋を紹介する事

その1は言うまでも無く、攻略組全体の利益及び俺のこれからの娯楽の一つを確保するためである。(そんな事本人には言いやしないが)

そのために、アスナには死なれては困る。故に、この条件を出した。そしてその2。

実は最近、俺の行きつけだった武具屋が色々あって無くなってしまい、武器の手入れで非常に困っていたのだ。

問題解決のためには当然、新しい武具屋を見つけなければいいのだが…
…常に最前線で戦う以上、半端な腕の鍛冶師スミスに自らの半身たる武器を預ける気には到底ならない。

腕は確かで、出来るなら人柄に置いても信用できる人物が良い。だがそんなのがそうそう都合よく見つかる訳でも無く、そろそろ一人では探すのも限界になっていた所だった。

そこでアスナだ。
最強ギルドの副官たる彼女なら、プレイヤーの武具店についてもどこかいい所を知っているだろう。

俺は結構必死な思いでアスナに紹介を頼んだ。
そしてその結果……

「ここか……？」

目の前には脇に巨大な水車のついた綺麗な職人用プレイヤーホームが立っている。

第48階層主街区、《リンドース》

その通りの一角に、この店はあった。

《リズベット武具店》

アスナに紹介してもらった武具屋であり、店主は「あの」アスナの友人の少女にしてマスターミスだと言う。
名目上は一級の武具屋だ。

「さてさて……？どんなもんかなあ？」

アスナに限ってそれは無いと思うが、一応友人鼻肩でこの店を紹介しただけでも限らないので、警戒……とは言わずとも疑いの心を持って、OPENと書かれた木札の掛った扉を開ける。

「いらつしゃいませ」

恐らく店番用の少女型NPCが無機質な挨拶をカウンターから返してくる。

俺は取りあえず周りを見渡しながらカウンターに近寄っていく。
壁には剣やら槍やらの武具達が所狭しと並んでおり、中にはそれなりの技物もあるようだ。

これは……期待できるか？

「武器の手入れを頼みたい。店主を呼べるか？」

「かしこまりました」

応じ、NPCは店の奥へと入っていく。恐らくあの奥が公房なのだろう。

金属を叩く高い音が断続的に響いており、NPCは入って行くと、すぐに戻って来た。

「マスターはただいま作業中です。少々お待ちいただけますか？」

「ああ、構わん。」

そう言うと、NPCはまた奥へと入って行き、待つ事一分半程度。もう一人の人影と共に奥から出て来た。恐らくあれが店主だろう。

出て来たのはアスナから紹介されていた通り少女だった。

恰好は鍛冶屋と言うよりも、どちらかと言うとウェイトレスに近い。檜皮色のパフスリーブの上着と、同色のスカートにその上の純白のエプロン。胸元には赤いリボンを付けている。

髪型の方は、ベビーピンクのふわふわとしたショートヘアと言う常人がやっていたら少々派手な髪型だが、快活な雰囲気を持つ彼女だからだろうか？存外似合っている。

「いらつしやいませ。武器の手入れと言う事ですが？」

「どうやら、少女とは言え客に失礼な態度を取る様な娘ではないらしい。口調も丁寧だ。」

この娘の素が、アスナの言うような物だとすればそれはそれで面白いが、まあそれは今度で良い。

「ああ、ちょっと特殊な物だから、腕の良い鍛冶師を探していたんだが、友人に此処を紹介されてね。」

「それは有難う御座います。ご友人にもよろしくお伝えください」「ああ」

さて、この子を見てどんな感想を示すかな？

少々期待しつつ、俺はアイテムボックスの中の得物を取りだした。

武器の手入れをして欲しいと言ってやって来た男性客の取りだした得物は、リズベットの予想だにしていなかった。

取り出された武器の柄は長く、所々に金の装飾が成されている。刃の部分も幅広な上に長大でそして特徴的な黄金の籠の装飾が掘られていた。

何かの本で読んだ事がある。これは……

「青龍偃月刀……」
「そうとも言っな。俺の一番大事な武器であり、自慢の相棒だ。これを頼みたい」

青年がカウンターの上に偃月刀を置く、しかしあまりに大きいため、先の方がカウンターの外に飛び出している。
その偃月刀を、リズベットは先から先まで眺めた後、ごく小さな力で指先によるクリックをする。すると即座に情報が表示された。

カテゴリ《薙刀/ダブルハンド》

固有名 《冷裂》

製作者銘《無し》

製作者銘が無いと言う事はモンスタードロップの品と言う事だ。通常、プレイヤーメイドの武器とモンスタードロップではメイド品の方が勝る。だが稀に、異常なほどの性能を持つ「魔剣」と呼ばれる種類の武器がドロップすることがあるらしい。代表的な物に、この世界で最悪の殺人者が待っているダガー等がある。これもそう言う類の内的一本だろう。

「すごい……」

思わずリズベットは呟いていた。

システム上、所有者以外が武器の詳細な性能を調べることは出来ないがしかし、見ただけでもこれの持つ圧倒的な存在感がこの武器の強さを教えてくれる。

この武器はこれまで、リズベットが見て来た全ての武器を上回っていた。

「気に行ってくれたようで何よりだが、流石に譲る訳にはいかない

ぞ？」

青年がからかうように笑って言う。対し、リズベットは勘違いさせたかと思いい、大いに慌てた。

「い、いえ！そう言うつもりじゃ！」

「ははは、分かってるよ。で、引き受けてもらえるか？」

「あ、はい。お代は作業が終わってからになりますよ、」

「どれくらいかかる？」

「今すぐ取りかかれればすぐですね」

工房には回転式の自動砥石があるため、砥ぎ程度なら実際に終わるだろう。

駄菓子菓子

「あー……本当にすぐに終わるか？」

「？どういう事です？」

リズベットが首を傾げると、青年は言いにくそうに言った。

「店主さん、そいつ持てるか？」

「え……？」

言われた意味が分からず、首を傾げると青年は「その武器を持ちあげてみる」と目の前の武器を指差して行った。

言われた通りに両手で持ちがえようとするが……

「な、なにこれ！？重っ！」

両手を使ってどんなに力を入れても、偃月刀はピクリとも動かなかった。

重量を確認しようと、再び冷裂をダブルクリックするとそこには……

重量 《1t》

「はあ!？」

「どうだ？砥石にかけられそうか？」

「冗談じゃない、持ち上げられもしないのにどうやって回転砥石にかけろつての……よ。……あ。」

しまった、と思った。興奮したとはいえ客に対して素の言葉を使つてしまうとは!

謝ろうと思い、気を重くしながら顔を上げると、青年は口を押さえて必死に笑いをこらえているようだった。

「ぷッ……くくく」

「あの……お客さん？」

訝しんで話しかけると青年は「すまんすまん」と言いながら顔を上げた。

「いやあ、友人に聞いたのと君の性格が余りにも同じもんでな。敬語とのギャップもあって噴いちゃった。すまん」

「あ、いやいいけど……あの、ご友人つて……」

「ああ、コーブ、じゃなくてKOBの副団長さんだ」

「アスナですかあ!？」

親友とも言つべき友人の名が出た事に、眼を見開いてリズベツトは驚いた。

その反応も青年にとっては笑いの要素だったらしく、再び吹き出す。

「ククク……やばい……止まらねえ。おもしろ……」

『おのれアスナ……次きたらからかい倒して、ああしてこうして……』

そんな黒い事を思いつつも何とか話をそらそうと本来の話題を青年に振る。が、

「と、とにかく!この武器を研磨に欠けるのは結構手間がいりそう

です！」

「ああちなみに、やりにくいなら無理に敬語使わなくてもいいぞ。どうせその内アスナ繋がりで友人的なコネも出来ただろうしな」

未だに笑いながらそんな事を言ってきた青年に更にリズベットは戸惑う羽目になってしまった。

面倒な敬語から解放されるのはありがたいが、しかし客相手にどうすべきか……

「……ええい！分かりました！此処からはタメで話させてもらおうわ」

「そうこなくちゃ。こっちもその方がやり易いしな」

「へー？敬語苦手なの？なんで？」

「恐らくお前と同じ。同じ歳くらいの奴にに使われると固苦しくてなあ……」

「あー同感。なんかやり辛くなるのよねー」

とか何とか敬語談義をしている内に、再び青年の顔が笑い顔から普通の顔に戻る。切り替えが早い。

「さて、まあ友人と言っても、まだ客と店主な訳だが……やっぱりお前も無理か。仕方ない。他を……」

「ちよつとまつたあ！」

「へ？」

偃月刀をしまおうと手を伸ばしたりヨウの手を、自身の手を伸ばしてリズベットは制止する。

呆けた顔をする青年に向かってリズベットは自信満々の笑みで言い放った。

「誰も回転砥石が使えないからって手入れできないなんて言っただいよ。一応これでもマスターミスなんですからね」

「とうとう？」

「さっきはあんな事言っただけだね。回転砥石無しでも、普通の砥石

で自己研磨するだけでも十分手入れくらい出来るってのよ」

「おお、なるほどなあ。今までの鍛冶屋は回転砥石が使えないと見るや仕事を投げたが……はは、中々根性あるみてえだな」

ニヤリと、青年も面白がるような笑みを浮かべてリズベットを見る。

どうやら乗り気の様だ。此処まで来れば後は最終確認だけである。

「で？どうする？あんたの大切な武器の手入れ。私にまかせてくれるの？」

「持てずとも砥石で出来ると来るとは思わなかったしな、上等だ。

任せたぜ、リズベットさん」

そう言っただけで青年は右手を差し出して来る。一瞬意味が分からなかったがすぐに察して同じく右手で握り返す。

初対面の異性の手を握るとは前代未聞だが、気は良い人物の様だし、何より、何となく気が合いそうだ。

「リズでいいわ。こちらこそよろしく。えっと……」

そう言えばまだ名前も知らなかったのだ、その状況で手を握るとは、やはり少し不信心だっただろうか？

「リョウコウだ、リョウで良い。さてと、んじゃまた明日来るから取りあえずフレ録（フレンド登録）して明日出来たら連絡くれるか？」

そう言ったリョウに、リズは少し申し訳なさそうに告げた。

「あ、その前に悪いんだけどアスナのメッセージ見せてくれない？

一応用心のためにね」

「ああ、そりゃそうか。……てか遅くね？」

「忘れてたの！」

そんなこんなで、リズベットはリョウの得物である冷裂を預かる事

となった。

手入れの方は無事に終わり、それからリヨウとリズは友人関係を築いたのだが、それからしばらくして、この二人と、アスナとキリトの中で、とある出来事が起こる。

それはリヨウにとって意外な出来事であり、リズにとってはとても大きな出来事となるのだった。

三十話 武器の手入れは重要事項（後書き）

はい、いかがでしたか？

と言うわけで、SAOのツンデレAこと、リズベットの……え、ちよ、アーッ！

しばらくお待ちください……

……すみません訂正します。みんなの鍛冶屋こと、リズベットさんの登場です。

彼女はとりわけ、SAOの中でも人気の高いキャラクターだと聞きました。が、実際のところどうなんでしょうね？

僕はそこらへん良く知らないので……

まあしかし、今回の物語は、そこまで長くないと思います。ええ。

理由は今は言いませんがねw

最初の曲は何か？

「ハトと少年」というトランペットソロの曲です。

おそらく、知っている方もいたのでは？

じぶんは、結構好きな曲です。朝と言う環境なら、間違い無く合うかと思わせてw

ちなみに朝のシーンを出したのは、原作リズ登場話の「心の温度」が、リズの朝の風景から始まるのとかぶせてみたからですw

ご意見ご感想心よりお待ちしております！
では！

三十一話 鍛冶屋失踪！？（前書き）

はい、どうもです。

まあ今回は正直、あんまりどうでもいい話かもしれませんが。

え？ならなんでって……過程です！

では、ごんごん

三十一話 鍛冶屋失踪！？

突然だが、俺は武器の手入れは結構まめにする方だ。

自分で出来るメンテナンスはほとんど毎日やってるし、鍛冶屋に行つてメンテナンスも月一くらいでやってる。

武器は自分の半身、大事にしなきゃ罰が当たるってもんだ。

で、そのポリシーにのっとり、俺は約一ヶ月ぶりに《リンダース》へと向かった訳だが……

「ん〜んんん〜んん〜、ってありゃ？」

なんだか分からんが、《リズベット武具店》の扉の前に誰かが突っ立っているようだ。

時間的には今は攻略組の連中も今日の冒険を終えて続々と帰ってくるころだし、もしかして混んでるのだろうか？

だとすると待ち時間がだるいんだが……

そんな事を思つ内にも店は近付き、徐々に店の前の人物の輪郭が見えて来る。

白を基調とし、赤いラインの入った騎士風の服に、白いレイピアと栗色の長い髪……って

「あれ？アスナじゃん」

そう。店の前に居たのは、この店の常連にして俺に此処を紹介した張本人でもある、アスナだった。

「あ、リヨウコウさん」

「だからリヨウでいいってのに……それとさん付けやめい」

どうにも此奴、この間とある事件で俺の事をこう呼ぶようになった

てから友人として交流し始めてからもこの呼び方だ。そのたびに訂正するのだが、いい加減覚えてくれ。

「あははは……ゴメン、一回呼ぶと慣れちゃって」

「はあ……まあいいが、で？扉の前で立ち往生って事は副団長さんも待たされ客か？」

「あー、そうじゃないんだけど……これ」

はて？どうやら人気が出過ぎて店に入りきらなくなったとかじゃないらしい。

いや、まあ日によってはホントに行列もできるらしいが。

アスナに促された俺は、アスナの後ろにある店の扉を見る。

扉には、「CLOSED」と書かれた木札が架かっている。

「閉まつてるのか……っーかやけに早いな？」

「そうなんだよね……だから今からメッセージ送ろうと思って」

「マップ追跡は？」

「駄目、反応なし。リョウより前に居た常連さんにも聞いたんだけど……」

無言で首を振るアスナに、俺は腕を組む

「成程な……んじゃついでに休日返上で俺の武器見るように言ってくれ」

「えー、流石に相手がリスじゃ受けないんじゃないかなー……え」

「意地でも受けてもらうって……どした？」

みるとアスナは青ざめた表情で自身のメニューウィンドウが表示されているであろう場所を凝視している。
なんだなんだ。

「リス……？」

「おい？」

少々心配になってアスナの顔を覗き込むと震える声で、アスナは発言した

「リストに、連絡不能って……」
「なっ!？」

連絡不能

SAOにおけるフレンドリストの中で、何らかの理由によりメッセージが届かない状況にある相手は、リスト上の文字が灰色^{グレー}で表示される。

この状態にある相手には此方からメッセージを送ろうとしても届く事は無い上、相手方から此方にメッセージを送ることも出来ない。

理由に関しては数個あるが、最もスタンダードなのはこの世界にそもそもその人物が現在居ない。

つまり、通常のオンラインゲームにおけるいわゆるログアウト状態であり、このゲームでいえば既に死亡している事である。

当然、この状況を見たプレイヤーは相手の身を非常に案じる訳だが……

しかしだからと言って、すぐに死んでいると決めつけられる訳ではない。

特に、相手が攻略組だったりすると……

「いや、ダンジョンに居るとか、色々可能性はまだあるな。そこまです心配する必要はねえんじゃないか？」

そう、フィールド上に大小点在する、ダンジョン内に置いててもメッセージは使用不能になる。

どちらかと言うと、現在ではこの可能性の方が高いし、当然リズムもこの状況である可能性はある訳で、推測できる可能瀬としては十分な訳だが……

「リズが一人で……？」

「ぬ……」

こう言われるとキツイ。

リズは鍛冶屋だ。あまりダンジョンまで出かけることは少ない。

飯にしかけていたとしても、正直、徐々に夜も近付いて来るこの時間までダンジョンから出てこないと言うのはどう考えても不自然だ。

「リズ……」

「ぬう……ええい面倒だ！黒鉄宮行くぞ！」

「へ？」

「いちいち此処で止まってんのは性にあわん。ほら行くぞ、さっさと無事だって確認しねえとまた寝れなくなりそうだしなお前」

「う……はい」

ほんと、そう言う顔してるからな。さっさと行って戻ってこよう。

親友の安否を心配し始めると、ともに居たりヨウにより、殆ど強引に黒鉄宮に行くになってしまった。

黒鉄宮

第一階層《始まりの街》に存在する巨大な鋼鉄製の建造物であり、正式サービス以前には、HPをゼロにした者のリスタート地点となる《蘇生者の間》という場所であった。

が、現在は役目変わり、巨大な金属製の碑が設置されている。

この碑、表面にゲーム参加者全員の名前が書かれており、死亡した者の名前の上には横線と、横に死亡日時と原因が刻まれると言うシステムだ。

まあ心配なのは事実だし、どちらにせよ一人でも行く羽目になっていただろうから構わないのだが……

ただ、稀にあの場所へ行く時は毎回毎回どうしようもなく胸中が不安で満たされる。もしも確認した友人や仲間の名前の上に横線が刻まれていたら……そう考えるだけで背筋に冷たい物が走る。特に今回はこの世界でも無二の親友である人物なのだ。正直、確認しに行きたくない様な気持もある。

そんな事を考えていると、前を歩いていたリョウが不意に横に並んで此方を向いた此方を向いた。

「そっいや、昨日キリトとデートだったって？」

「……!!!??？」

驚いたアスナは出店で買った飲み物（アイスティーっぽい何か）を噴き出しそうになる。

「というか、以前にもこんなことがあった様な気がするのだが。」

「な、またいきなりそう言う事聞く!？」

「質問なんて何時もいきなりだろ。内容は場合によるがな。で?どうだった？」

「ど、どうって……なによ？」

明らかに楽しそうな顔で聞いて来るリョウに、なんだか昨日のリーズを相手にしているような気分になって来た。

「なんだ?何処まで進展したか聞いたんだが？」

「進展って……」

「そう言う言い方は無いんじゃないだろうか?と少々文句を言いたくなっただが、言うより先にリョウが口を開いた。」

「個人的にも、義弟絡みのこういう話題には興味があるからな。おっと、今は一方通行か？」

「むう……!」

「はっはっは！すまん、今は失礼だった」
リヨウには始めから知られているので最早隠す事も無い。

と言うか、こういう話題にはあまり興味の薄い人間だと、フレ登録する前は思っていたのだが、意外にもアスナの恋路に多大な興味を示すとともに……偶にサポートしてくれたりもする。

正直、協力の代償にからかわれている感じた。

気を取り直して。

「まあ、普通に買い物に付き合ってもらったり、お茶飲みながら攻略の相談して、それくらい」

「ほお、ほんと普通だな」

「なにをきたいしてるのかしらないけど、変な噂立てないでよ？」

「まさか、自分の楽しみを他人にばらすような勿体ない事は……」
「ちよっと！」おっと失礼

まったく、偶に何を考えているのか読めないこの男である。

正直、面白がられて良い気分とは言い難いのだが。特に何をするでもなく、傍観しながら偶に協力をしてくれる程度なので、さして目くじらを立てる様な必要も無いのが実状だ。

「そういう言ってる間に、転移門か」

「え？あ……」

いつの間にか目の前には、淡い光を放つ転移門があった。

複数のプレイヤーが、出たり入ったりを繰り返し、今日も通常運転中の様だ。

中に入り、それぞれ目的地の名を言い放つ。

「「転移！始まりの街！」」

青い光と共に、二人は一気に第一層へと移動した

三十一話 鍛冶屋失踪！？（後書き）

はい、いかがでしたか？

まあ、こんな感じで、この話に関してはどちらかと言うと、舞台裏な感じの話です。

ちなみに、リョウとアスナの仲が何気によくになっているのは、まあ、あのメールの後色々あったかもです。

もしかしたら、いつか小話みたいな感じで語るかもw

ご意見ご感想、心よりお待ちしております！では！
では！

三十二話 その日の終わり（前書き）

はい、どうもです。

今回は、まあ、また過程と言っか……ちょっとした小話的な感じですよ。

正直なところ、一日しか猶予が無いのでこの話は短いです。

では、ごんぞー！

三十二話 その日の終わり

第一層《始まりの街》

リョウとアスナはその後、一言も話す事無く黒鉄宮に到着した。上層まではある程度雑談も交えながら歩く余裕はあったが、流石にすぐ近くに多くの戦死者達の名が刻まれる場所があり、しかもこれからそこへ行く目的を考えれば、此処からは話をする気にはならなかった。

黒鉄宮の下部

旧《蘇生者の間》

今、二人の目の前には巨大な鋼鉄製の碑が存在している。その表面にはABC順に無数の名前が刻まれており、その中には所々名前に横線が刻まれているものもある。

それが意味するのは、その名前の主の存在の否定。即ち……死

胸中にどうしようもない不安と恐怖を抱えながら、ゆっくりと二人はRの名前が表示される部分へと向かう。

足が重く、歩みも遅くなるが、それでも此処まで来て確認しない訳にはいかない。

ゆっくりと、碑に近付き、上から名前を一つ一つ確認してゆき……
そして、一つの名前の上でその視線が制止する。

プレイヤー名は 「R i z b e t t」

名前の上に横線は無く、それは、この二人の友人が未だその命を保ち続けている事を示していた。

「よかった……！」

「ああ、流石に心臓に悪いな、これは」

本当に、心臓に悪かったとアスナは思う。此処でリズベットの名前の上に横線が刻まれていれば、自分はどうなっていたか分かった者ではない。

そんな事を思いつつ、糸が切れたようにアスナはその場でへたり込んでしまった。

隣に居たリヨウが心配したように声をかける。

「おいおい、大丈夫か？」

「うん、大丈夫……ごめん、安心したら気が抜けちゃって」

「さよか……」

アスナの返答に対し、そう言って少し微笑んだリヨウはふと、思いついたようにアスナの後ろで頭の後ろに両手を組みながらこんな事を言った。

「そついや何て言うかお前、柔らかくなつたな」

「？、何突然？」

「いやまあ、リズは友達だから当然かもだけど、全体的に雰囲気つていうか、纏う空気が変わったっつーか」

リヨウが「確信は無いけど」と言っアスナの顔を見ていると、その顔は渋いお茶飲んだようになってる。

「……それ、リズにも言われた」

「おっと、マジか？」

「うん。昨日の朝店に行った時、春先から妙に明るくなって来たっ

て……」

「はっはっはっ！さすがリズだな、年頃の女子の眼つてのはやっぱ侮れんか！」

「んむー。私ってそんなに分かりやすいのかな？」

「恥ずかしいのか少々頬を赤らめながら言うアスナにリヨウは破顔しながら言葉を続ける。

「まあ何もお前に限った事じゃあるまい。聞いた限りじゃ、恋をしてる乙女の顔つてのはすぐ分かる物らしいぞ？」

ちなみにこれは、リヨウのかつてのクラスメイトが殆どノリで言った言葉であるからして、あまり信憑性は高くは無い。

「もう！からかわないで！！」

「まあまあ、そう怒るな」

言いつつ未だに笑っているリヨウを相手に、アスナはますます顔を赤くして喰って掛かるのだった。

「ああ、そうだ。ちつと墓参りしていいか？」

「お墓参り？」

「ああ。まだ現実に戻れないしな、たまには墓参りだ。」

「あ、うん」

一瞬、意味が分からなかったのだが、すぐに察して了承する。

リヨウはこの碑を墓石と見立てているのだろう。故に、墓参りなのだ。

「で？誰のお墓参りなの？」

「ん？俺の大切な友達二人だ」

「そう……なんだ……」

聴いてからではもう遅いと知りつつも、少々聴かなければよかつ

たと言う思いが湧いてきた。
軽々しく相手についての質問などをした、自分が恨めしい。が、

「んな暗い顔すんなよ。別に気にもしてねえからさ」

「え、あ、あの、その」

「アスナさん？ 貴女日本人ですよねー？」

「なっ！ だからからかわないでっばー！！」

一瞬でもったアスナの様子を見逃さずに遊びにかかって来るリョウにまた噛みつく。

そんな風にしてるうち、リョウはSの欄の前で立ち止まり、直立して眼を閉じ、手を合わせる。

「……………」

どうやら、リョウの友人と言うのはSから始まる名前らしい。

名前が気になったが、横線が刻まれている名は沢山あり、どれがその人物の名なのかは分からなかった。

が、リョウに習い、アスナも手を合わせて眼を閉じる。

彼女にとっては、友人の友人。もしかしたら、自分の友人にもなっていたかもしれない人だったのだ。

出来れば一度、会ってみたかった。そんな思いも含めて、今はもうこの世界から消えてしまった、もしもの友人達の安らかな眠りを祈った。

「やっとついたかぁ……………」

それから一時間少し、リョウは既に暗くなっている世界を背に自身の自宅の敷居をまたいだ。

あれから、もう日も暮れるのでリズの行方探しは明日と言う事にして、二人とも帰路へと付いたのである。

玄関からすぐのリビングに入ると、台所で一人の女性プレイヤーが立っているのが眼に入った。

「あ、お帰り」

「おうただいま。わりいな、遅くなった」

「良いよ別に。でも珍しいね、リヨウが素直に遅くなった事謝るの」

「いやいや、お前が頭に角を生やして玄関に仁王立ちしてやしないかとヒヤヒヤしながら帰って来たもんで」

「なによ、人を鬼みたいに言っつて」

「前にメッセ（メッセージの略）無しで遅くなったらお前本気で怒鳴ったじゃん」

「あれは！余りにもリヨウが遅すぎるから心配になっただけ！あんまりそう言う事言っつとご飯抜きだよ！？」

「すいませんでしたもう言いませんから飯抜きは勘弁して下さい」

まるで夫婦の様な会話をしているがこの二人、決して（システム上でも）結婚はしていない。単なる同居人である。

「お風呂はー？ご飯出来るまで後五分くらいあるよ？」

「あー、んじゃシャワーだけ浴びて来るわ」

「いつてらっしやーい」

「……………重ねて言うが、決して夫婦ではない。

あくまでも“ただの同居人”である。

その後、取りあえずリヨウは夕食を済ませて普通に就寝した。

リズの事は気がかりではあったが、それで寝れなくなって体調に異常をきたしたりしたらお話にならない。

そして翌日、アスナからメッセージで、リズが戻ってきた事を知らされたリヨウはリンドースへと向かう。

途中ゲート前でアスナと合流し、鍛冶屋自体には二人で行く事とな

ったのだが、その後、リヨウは自らも知らなかった意外な事実を知る事となるのである。

三十二話 その日の終わり（後書き）

はい、いかがでしたか？

本当はもう一話くらい増やして、軍をネタにしようかとも思ったんですが、そうすると、後々、アスナやキリトに対して、軍の体制について新鮮味のあるコメントをもらう事が難しいかと思い、使いませんでした。

リヨウの、軍の方々フルボッコタイムを期待していた方々、（居るのか？）申し訳ありません。

最後の人？

.....

ご意見ご感想心よりお待ちしております！
では！

三十三話 音ならざる言葉（前書き）

はい、どうもです。

むう、なかなか難産でした。

色々理由はあるんですが、まあまずは本編です本編。

ではでは、ごうござい！

三十三話 音ならざる言葉

カランカランと、涼しげな音がドアに掛けられたチャイムから鳴り響く……より先に、《OPEN》木札を見た瞬間にアスナが力いっぱいドアを開けたバーン！と言う音が響くのを聴きながら、俺とアスナは店の中に入り、工房に（またしてもバーン！と言う音と共に）入って即座にこの店の店主であるリズの姿を見止める……より前に、やっぱりアスナがリズに向かって駆け出していた。

「リズ！！心配したよー！！」

そう言いつつ、最早ハグと言うより体当たりじゃないのか？と言うような勢いでリズに抱きつくアスナを苦笑しながら見ながら、俺も入店してドアを閉める。

「あ、アスナ……リョウモ……」

驚いたようにこちらを見ているリズに、片手を振って相手をしてやれ、の意を示す

と、アスナの背中斜め後ろに所在なさそうに突っ立っている黒衣の片手剣士を見つけた。ありゃ？

「あ、兄貴」

よっ、と片手を上げて挨拶してくるキリトに、俺は何やらリズに向かってワーワー喚いているアスナを無視して同じ動作で返す。

「なんだ、キリト。お前リズと一緒にだったのか？」

「ああ、ちよつと武器作るのに金属取りメタルにさ、色々あって足止め食ったんだ」

「成程、それだ、き、キリト君！？」はあ………」

どうも今日は、騎士姫さんが賑やかな日らしい。

まあ、いきなり片思いの相手が居たんだから普通ビビる……のか？
どうやらリスもまた、キリトとアスナが知り合いである事に驚いているようだ。アスナと並んで完全に棒立ちになっている。
まあ、俺の方は後で適当に説明するとしてよう。

さて、呼ばれたキリトはしばしやりずらそうにしたが、軽く咳払い後右手を少し上げて言う。

「や、アスナ、久しぶり……でもないか、二日ぶり」
「う、うん。……びっくりした。そっか、早速来たんだ。言ってくれば私も一緒したのに」

言いつつアスナは頬をわずかに桜色に染め、はにかむように笑いつつ腕を後ろに組んだ姿勢を取って、ブーツの踵で床をトントンと叩く。

おーおー、乙女だねえ……

少々オヤジ臭いがそんな事を思いつつアスナとキリトの事を微笑ましく見ていると、ふと、視線の端にリスの姿を捉える。

どうやってアスナをからかうかリスとこっそり相談でもしようか、と俺が黒い事を考えたその時、二人の姿を見つめるリスの瞳の中に、俺は奇妙な光が宿っているのが見えた。

それは驚きと、そして……パニック困惑

それを見た瞬間、それまで楽しんで暖かくなっていた俺の脳が一気に冷える。

おいおい……？

飯に、もし今俺の立っている予想が的を得た物ならば、よく分からないがこの状況は不味いんじゃないのか？
落ち着きつつも少々焦り始めた俺の耳に、リズに向き直ったアスナの屈託のない声が響く。

「この人、リズに失礼な事言わなかったー？どうせあれこれ無茶な注文したんでしょ」

それは紛れも無く、気兼ねなく話せる友人へと向ける普通の話し方だ。

だが話しかけられながら、段々とリズの持つ眼の光の中のパニックの部分が強くなって行くのを見て俺の嫌な予感革新へと変わっていく……

不味い。

今のリズにその態度は多分だが不味い！

「あれ……でも、ってことは、昨夜はキリト君と一緒にだったの？」

『しまった、そういうことか！』

それで大体の事は察した。つーかそもそも

「あ……あのね……」

そこまで俺が考えた所で、突然リズはアスナの右手を掴み、工房のドアを押しあけてわずかにキリトの方を向き、
「意図的に」キリトの顔は見ないようにして早口で

「少し待ってて下さいね。すぐ帰ってきますから……」

「おい待っ」

と言つと、足早に店内から出て行ってしまった。止める暇も無かった……

「はあ……」

「リズの奴……てか兄貴どうしたんだ？」

「……なんでもない」

全くこの義弟は……まさかこんな才能があったとはうかつだった。この数カ月二人に惚れられるとは！

この間のシリカの時も俺が依頼受けなかったらシリカにもフラグが立っていたかもしれん……

「さて……そういやっば二本目作ったんだな？」

「え？あ、ああ。良い剣作って貰えたよ……」

「ほお……」

実はこの義弟。とある事情により、通常一本だけの片手剣を二本作らなければならぬ理由があったのだ。

まあそれは後々語るとして……

「リズには見せたのか？」

「なんで、そう思う？」

「勘だ！」

「もうそれ超能力でいいです……まあ、見せたけどさ」

作って貰った本人だしな。と言いながら苦笑して頬を掻く義弟を見ながら、俺は驚いて言う。

「ほお……んじゃほんとに二人だけで行ったのか？」

「ああ……って、嘘だと思ってたのかよ？」

「だってなあ……どういう風の吹きまわした？」

「う……」

「別に一人って選択肢が無かった訳じゃあるまい？」

此奴は……キリトは、ある時からパーティを組む所か、自分から他人に近づく事が極端に少なくなった。

俺と組むこともたまにはあるが、それも本当に稀の稀だ。

そのキリトが初対面でいきなりパーティを組んでダンジョンに赴く

など……殆ど、いや、まったく言っていないほどこれまでは無かった。

故に、これは俺の心からの疑問だ。

何故キリトの堅いガードの一つが、リズには解けたのか。
だが……

「……分からないんだ……自分でも、何でいきなりリズとパーティーが組めたのか」

「……そうか」

聴きたかった答えとは違ったが、案外とそう言う物なのかもと思い、此処は納得しておこうと思う。
だが、

「でも、リズと組んで一つ、分かった気がする」

「ほお、それは何ぞや？」

その答えを聞いた時、俺は自分自身の口角が上がるのを抑えられなかった。

やはり、俺の知りたかった答えとは違ったが、その言葉は俺を歓喜させるには十分な物だったのだ。

「なあ、剣見せてくれよ」

「え？……ああ」

突然話題が変わったことに驚いたような表情を浮かべたキリトだったが、すぐにメニュー画面からオブジェクト化した純白の片手直剣を、俺の方に差し出す。

予想道理というか、程良く重い。

キリト好みだろうと分かる。良い剣だ。

本当に、この剣をリズはキリトの事を思いながら打ったのだろう。自慢の勘だけでは無い。それは、剣の固有名を見ても十二分に分か

る事だった。

「《ダークリパルサー》、《暗闇を払うもの》か。いい名だ」
ほんとうに、最高の名だろう。
此奴キリトに持たせるにはピッタリだ。

「なあ、お礼。ちゃんと言ったのか？」

「え？」

「だからお礼だよ。お、れ、い」

普通に聞いたなら、これは制作に対する礼だ。だが……

「……まだ、だな。」

「そうか、なら」

俺は純白の片手剣を持ち主に再び差し出しながら言う

「ちゃんと言ってこなきゃな？」

コクリ、と頷きながら剣を受け取ったキリトに、俺は微笑んで「よし！」と告げた。

途端、キリトが弾かれたように店の外へと走り出す。後ろ姿に、「ありがとう」の言葉を残して。

俺は今、リンダースの最も高い建造物　ゲート広場に面した教会の尖塔の上　に居る。

策敵スキルを起動させズームした視線の向こうでは、リズとキリトがなにごとかを話しているが、此処からでは声は聞こえない。

まあ、かといって、わざわざ接近して話を聞きに行くほど俺は野暮じゃないが。

「まったく、何時の間に女を惚れさせる才能なんか身に付けたんだか……」

だがまあこれから少しずつ、アスナやリズの手によってキリトが少しずつ明るくなってくれれば、俺自身非常にそれは嬉しい。

これからの事を想像し、軽くに微笑みながら俺は美しい街の情景と共に、キリト達二人を見つめる。

「こりゃ、今日は帰りますかね？」

どうやら、冷裂のメンテナンスはまた明日になってしまったようだ。残念。

そう思いつつ、俺は尖塔の上から教会の二階へと飛び降りたのだ。た。

F o r t h s t o r y 《裏側であった話》完

三十三話 音ならざる言葉（後書き）

はい、いかがでしたか？

いやあ……この修羅場にリヨウを飛びこませていかにキリトを導くように喋らせるか、が今回の焦点だったんですが、どうだったでしょう？

もうちょっと深みがある心理描写が書きたかったなあ……後セリフ回しにも改善点がありそうな感じが。
ってこと自体は薄々感じるんですけど、僕の眼だとこれが限界ですかね。

うーん、もっとたくさんいろいろ読まないといけませんねやっぱり。そうそう、昨日久々にアクセス解析を見て見たんですよ！するとですね。

P V 116075件

ユニーク 14392件

鳩麦「!？」 図書委員

友人C「oh……」 図書委員

てな感じで、図書委員兼此処の書き手C君と一緒にビビっております。

十万とは、身が奮い立ちます。

読者の皆様にますますの感謝を！

報いるには文しかありませんからして！一掃励みます！

あ、でも学校始まっちゃった……

ご意見ご感想お待ちしております！

あ、ちなみに物語一つ終わりましたので、また間（ry

さてさて、次の物語は……！

では！

三十四話 騎士姫と黒衣からの頼み（前書き）

はい、どうもです。

と言うわけで、今回の物語はタイトルのとおり、キリトとアスナから頼まれるところから始まります。

内容は、まあ本編でと言う事でww

では、ごっげー！

三十四話 騎士姫と黒衣からの頼み

その日、攻略を終えて、フィールドからその層の主街区に来た時、突然こんなメッセージが届いた

From ASUNA

Mein 話があるからエギルさんの店まで来てくれない？

はて、突然何だ？

よく分からないがわざわざ場所を指定して来ると言う事はよほど大事な事か人に聞かれたくない事なのだろうが、エギルの店と言う事は少なくとも恋愛関係の話ではない。

第50階層主街区 《アルゲード》

一言、「猥雑」という言葉が似合うこの街には、始まりの街等のように巨大な施設等は無く、広大な面積一杯に無数の小店舗や宿舎等が立ち並び、それが細かい路地を無数に作って何処が何だとも知れぬような何とも怪しい雰囲気を漂わせている。

路地に一歩足を踏み入れたら出てこられなくなるのではないかと言うような空気に違わず、

その雰囲気は何処となく、現実世界で義弟を引きつれてちよくちよく出かけていたどこその電気街にも似ていて、あまりうるさい場所は得意ではない俺も、この街は嫌いでは無い。

そのせい、と言う訳でもないだろうが、実を言うと我が義弟、キリトは此処に自身のねぐらを構えている。あいつの部屋には何度か行った事もあるが……ま、散らかっているとだけ言っておこう。

さて、転移門から西に延びた目抜き通りを、数分進むと、目的の店が見えて来た。

ここは俺やキリトの友人であり、攻略組の仲間でもある商人兼斧使いのプレイヤー、エギルの経営する、まあ所謂よろず屋である。俺もちよくちよく、アイテムの売却で此処の店主には何時もお世話になっており、まあ長い付き合いの友人だと言えよう。

店のドアを開けると、いかにもプレイヤーの経営するショップです！といった感じで統一感の無い混沌とした陳列棚が並び、奥には3人ほど人影がある。

カウンターの奥に立っているのは店主であるエギルだ。肌は褐色で、純粹な日本人では無いと言う事が分かる。

180近いと思われる体躯は筋肉と脂肪にがつちりと包まれ、顔は岩から削り出した様なごつごつとした感じの造作だ。その上髪型はスキンヘッドなもんだから、正直普通に現実の街に居たら結構怖いタイプの人間だと思う。

しかしこれが何故か、笑うと結構愛嬌がある、味な顔をしている。と言うのがキリトと俺の共通認識だ。まったく、現実では何をしていたんだか……

その脇に居るのは、白いコープの制服に身を包んだアスナと、何故かいつも通り真っ黒な格好をしたキリトまでいた。

「よお、エギル、儲かってるか？」

「ここんとはまあまああってとこだな。お客さんがお待ちかねだぞ」
「？」

「の、ようだな」

そう言いつつキリトとアスナに向かって右手を上げる。

「うつすお二人さん。なんだ？話つてのは3人ですんのか？」
言つとキリトはまあ、そうだなと言つて肩をすくめる。隣に居る
アスナは何故か少し緊張しているようだ……

「で？アスナよ、それは此処でもいい話なのかな？」

「え、あ、いえ、そうね……」

「答えがおぼついて無いぞー？どうした一体」

「いや、あの……なんでもないの、ほんと。」

「あー、エギル、2階借りるぞ？」

「おう、かまわん」

「……………」

少々疑問はあるが、俺はキリトとアスナに続いて店の2階へと上
がった。

「オレンジ討伐の協力要請だあ？」

「ええ。それをお願いしたくて。」

目の前の椅子に座り、何時もの状態に戻ったアスナの出して来た
依頼は、少々驚くべき内容だった。

とある犯罪者ギルドオレンジの討伐依頼。

近々、攻略組のメンバーから大掛かりな討伐部隊を組んでとある大
型オレンジギルドの討伐作戦が行われるので、それに参加してほし
いと言つのだ。

……つて

「一応聞くがな、討伐対象のギルド名を言ってもらおうか？」

つつてもゲーム内最高ランクを誇る攻略組が部隊を組んでまで手を出さなきゃいけないギルドなんざ一つしかないのだが。

この質問に答えたのはアスナの隣で揺り椅子に座るキリトだった。

「ラフィン・コフィン笑う棺桶」

「やっぱりか」

俺は息を吐きながら座っていたソファに深く腰掛ける。

「オレヅ犯罪者……否

「レツト殺人者ギルド ラフィン・コフィン笑う棺桶」

通称 《ラフコフ》とも呼ばれるこのギルドは、今年の初めから活動が始まり、今なおSAO中にその名を轟かせる、プレイヤー達の恐怖の対象とも言うべきギルドだ。

その主な活動内容は、プレイヤーキルPK即ち、「殺人」である。

非常に冷酷かつ頭の良い頭首リーダーに率いられ、次々と新手的殺人手段を考えだして既に三桁に上る犠牲者を出している、正に、最凶にして最悪のギルド。

流石の状況に、ついに攻略組も本気で動かざるを得なくなったと言う事か……そう思い少々ほぞを噛んでいると、目の前のアスナが真剣な面持ちで再び口を開いた。

「リョウリョウ……危険を承知で言うわ。これはこのSAO内で、攻略の全権を任される立場である人間としての私からのお願いです。どうか、この攻略作戦に参加してほしいの、ラフコフは、もう無視できるように存在じゃない。だから……」

「ふむ……話は分かった。」

「じゃあ！」

アスナの顔が一気に明るくなる。

恐らく俺の性格から受けてくれると思っただろう。

確かに、いつもなら友人からの必死の頼みだ。面倒くさがりつつも結局協力するだろう。

しかし返事をするより前に、俺はアスナの眼前に右手を祇出して言葉さえささる。

「だがなアスナ 俺はおかしな態度した人間を簡単に信用するほど、お人好しじゃねえぞ？」

「……………っ！」

その言葉に、アスナの瞳が明らかに動揺した光を見せる。

「気が付かないと思ったのかどうか知らんが。俺にその手の隠し事は無駄だと以前言っただけだ。特に動揺や恐怖はな」

以前言っただ事、俺は人の顔を見、その人の眼を見ると、その人間が今どういう感情を持って居るのが、大体は分かる。

これが俺の異常に鋭い勘の延長なのか、それともまた違った特技なのかは考えた事も無いが、なんだかんだいって便利な物だ。喜びから、怒りも哀しみも相手が考えているある程度の事はすぐに分かるのだから。

そしてアスナは先程俺の顔を見たとき、瞳に動揺と、そして明らかな恐怖の光を浮かべたのだ。幾らなんでも、出会いがしらに自分に対して心からビビるような人間をそうそう信用する気にはならない。

まあ、理由については今の話から大方予想が付くんだが……………

「で？何で俺を怖がる？……………俺の異名の由来でも聞いたか？」

「……………！！！」

はい、ビンゴ。

まったく、隠し事のできん奴だ。

三十四話 騎士姫と黒衣からの頼み（後書き）

はい、いかがでしたか？

と言うわけで今回の物語は皆様にアンケートでも意見を求めました。

殺人ギルド 笑う棺桶 《ラフィン・コフィン》 討伐編です。

今回はちょっとこれまでの日常パートとは毛色の違う感じになるかなー？と思っておりますので、ご了承ください。

アルゲートの説明はあれ以上変える方法を思いつきませんでした。すみません……

ご意見ご感想心よりお待ちしております！
では！

三十五話 二人の見る戦場（前書き）

はい、どうもです。

今回は珍しく、リョウが登場しませんですはい。

まあそのかわり……（？）

では、ごんごー！

三十五話 二人の見る戦場

「ヒヤッハアアアアアア」

「ソオラ、死ねやあ！！！」

「どうしたよ！攻略組さんよオオオ！！」

「くそっ！下がれ！後退しろ！」

「HP回復してくれ！注意域に割り込んじまってる！」

「我慢しろ！結晶だつて限りがあるんだ！」

『くそっ……！！』

状況は、最悪だった。

とある攻略済み低層フロアのフィールドの端の洞窟の中。

キリトは、その中で多数の怒号と剣戟の音を聞きながら唇を噛む。

次層へと続く階段では無く、ゲームデザイナーが配地しただけで取り残した様な小さな洞窟ダンジョンの安全地帯。

そこに、殺人ギルド、《ラフィン・コフィン》の本拠地があった。

この場所を、以前ラフコフへと交渉のために送ったメッセンジャーが殺されてから実に数カ月の時間がかかりながらもようやく見つけ出せたのは相手方、ラフコフの中から 恐らく殺人の罪悪感に耐えかねて 攻略組への密告者が出たからだ。

偵察の後、その洞窟が本拠地であると確信を得た攻略組はすぐさま行動を開始。

攻略組最大規模ギルド。《聖竜連合》の幹部プレイヤーや《血盟騎士団》他にも名だたるギルドから実力者たちが参加し、ソロからも、

依頼や志願によって次々にメンバーを集めた結果、恐らくはこの世界で最強であろう大規模討伐部隊が編成された。

そして本日 八月某日 午前三時

大規模殺人ギルド 笑う棺桶 《ラフィン・コフィン》 討伐作戦が、始まった。

のだが、皮肉にも言うべきか、それとも必然的と言うべきか。此方に密告者が居たのと同じように、攻略組からも相手方へと密告が発生していたらしく、極秘として進められてきたこの作戦は敵方へ完全に漏れていたのである。

当然、突入は事前に対策されており、ラフコフメンバーは一人として本拠地である洞窟内の大広間には居なかった。

しかし、別に逃亡した訳ではない。敵方は、突入時に攻略組が通り抜けたダンジョン内の枝道に身をひそめ、討伐部隊を背後から逆奇襲して来たのだ。

畏から、毒、目眩ましまで、ありとあらゆる準備を整えた上での不意打ちである。幾らレベル的に敵を大幅に上回っているとはいえ、部隊は始め、大きな混乱に陥ってしまった。

当然、奇襲が強襲どころか反撃を許す状態となったこの時点で、レベル差を利用して安全地帯の出口、入口を封鎖し、敵に無血投降させると言う当初の策は不可能となり、戦闘はやむなしとなる。

一度は危機に陥ったものの、突発的事態の対応能力は、討伐組にとっては最も求められる能力の一つだ。

状況を理解した討伐部隊の面々は、敵に対し猛然と反撃を開始した。圧倒的なレベル差である。正面からの戦闘で有れば、状況を覆し、此方が勝利することは難しくない。俺も、初めはそう思っていた。

だが、ラフコフと討伐隊の間には、ある、決定的な差が存在した。殺人への、忌避感の有無である。

現在目の前に居る、狂騒状態となったラフコフのメンバー。その全員が、誰一人として、HPバーをギリギリまで減らされても降参しない事が分かった時、討伐隊の全員が大きく動揺した。

当然ながら、そういう状況が有りうる事を事前に話し合っていた。

その場合、HPを削りきることもやむなしと、初めに結論を出してもいたはずだ。

しかし、HPバーを真っ赤にした者に、とどめの一撃を刺すとなると……そんな覚悟を、話し合いの一つで決める事が出来るはずも無かったのだ。

そして現在、討伐隊はとどめをさせないまま混戦を続けており、徐々に防戦一方となりつつある。

このままではまずい。

喧噪の中そう思うが、かといって打開策も見つからない。

切り札を使うべきかもしれないが、こんな人の多い名所で使う事は出来ないし、何よりまだ使いこなしていない。

焦りと苛立ちばかりが募り、背筋を嫌な汗が流れる。

そんな中、その声はやけに俺の耳によく届いた。

「あつ………！」

周りの男たちの怒号よりも、ワントーン高い声。

聞き覚えのあるその声に、右へと首を回した俺の視線の先に居たのは、純白の騎士装の少女。

ギルド《KOB》の副リーダーであり、俺の友人、アスナだった。

その彼女は今、視線の先三メートルの位置で愛用の純白のレイピアを跳ね上げられた状態で、身体を硬直させている。

そして恐らくそれをしたであろうプレイヤー、金色の趣味の悪いツンツン頭に褐色の肌をした両手剣使いのプレイヤーが、奇声を上げながら手に持った巨剣を紫色のライトエフェクトと共に振り下ろそうとする。

やめろ

策敵スキルで、アスナのHPは分かる。

長時間の戦闘でかなり削られたそれは、既に黄色の注意域まで割り込んでいた。

あの体勢でクリティカルを受ければ、HPバーは削りきられて……

やめろ

アスナの顔が恐怖に染まる。

その姿が何かとデジャヴする。

周りを埋め尽くすほどの敵。

アスナの髪が黒く染まり、その顔が……

やめろ やめろ やめろ！ やめろ！

「おおおおおおお！！！」

気が付くと俺は叫びながらアスナと敵の間に走り、割り込んでいた。

振り下ろされた巨剣を弾き飛ばし、伸びきった腕を無理矢理引き戻して漆黒の愛剣を右から左へと思い切り振り抜く。相手の首へと吸い込まれるように半円の軌道を描いた俺の剣は、目の前に居るそいつの首と胴体を容易に分離させ、HPバーを完全に消滅させた。

アスナは、焦っていた。

人を殺すと言う事がどうしても出来ない周りのプレイヤーたちは、皆HPバーを赤く染めたオレンジプレイヤーたちにとどめをさす事が出来ず、防戦一方となり始めている。

このままの状況が続けば恐らくは……

だが、アスナが焦っているのはそれだけではない。

アスナはリヨウとある約束をしているのだ。

それはある意味自身の意地を、そしてリヨウとの友人関係も欠けた絶対に破る事の出来ない絶対の約束。

キリトと二人で、約束し、必ず果たすと誓った。

それを破らないためには、なんとしても、この状況を打開しなければならぬ。

故に、アスナは焦っていた。

『……俺の異名の由来でも聞いたか？』

『……………！！』

その言葉を言われた時、アスナは完全に動揺にのまれてしまった。リヨウにごまかしや嘘が通じないのは分かっていたが、此処までと

は！

『なるほど……つまりお前は俺を掃討役になつて欲しい訳だ』

『え……？』

納得したように言うリヨウに、アスナは再び動揺する。一体何を？

『そんな大規模な対人戦に俺を誘つてことはそう言う事だろ？要は俺にもしものときは殺人マシンになれと』

『なっ……！何を言い出すの！？』

『だってそうだろ？俺にビビリながらも頑張つて俺に依頼にするのは、それが一番合理的だぜ？』

『違う！私は別にリヨウに人殺しになれなんて！』

『ほお？それなら俺は行かなくてもいいんだな？』

『っ！そ、それは……』

正直、リヨウの異名はあの手のオレンジプレイヤーに対して特効薬にもなりうるものなのだ。

《ジン》のその名を聞けば、大抵のオレンジプレイヤーは恐怖する。

だが、この様子だとその理由をどうやらリヨウは嫌っているらしい。まして、「戦力的にも期待できる」等と言う本音を言えば、間違いなくリヨウは嫌悪感を抱くだろう。

それはアスナにとつても嫌だし、なおかつ友人だと思っている人物に、自分を殺人マシンとして使った奴だなどと思われるのは耐えられない。

そして、アスナはある提案をリヨウにした。

『分かったわ。じゃありヨウは、顔を出すだけでいい。もしも作戦が崩れて戦闘になったら、後ろに下がって傍観していて構わない』

『ほお？』

『お、おいアスナそれは……』

『いいの、キリト君は黙ってて』

『は、はい……』

後ろで何か言おうとしたキリトを黙らせ、アスナはリヨウを真っ向から睨む。

リヨウは面白そうにからかうような笑みを浮かべてソファーに座り込んでいた。

『わかった。その条件なら依頼を受けよう』

『ありがとう』

『ただし、俺が大丈夫だと思っている間だけだ。本当に危なくなったら、俺も参加する。見殺しは寝覚めが悪いしな』

『わかったわ、絶対にそんな事にはしない。』

『さて、どうかな？……ま、お前らの力次第だな……』

やはりからかうような笑みを崩さないまま、リヨウはそう言っ
て部屋から出て行った。

今ならよく分かる。

あの時リヨウが言っていた「力」が、いわゆる精神的な強さだったのだと言う事が。

あの時それが分からず、当たり前のように単純なレベル差で作戦は成功、リヨウとの約束も簡単に果たせると思っていた自分を殴り飛ばしてやりたい。

そんな事を考えていたのがいけなかったのだろうか、アスナは目の前の金髪の巨剣使いに少々大きく踏み込まれてしまう。

あわてて、向かってきた突きを弾き、即座に反撃の突きを放つ。

だが、反射で動いたその攻撃は、相手がほとんどHPバーを散らし

た瀕死の状態であることを全く考慮していなかった。
慌てて細剣^{レイピア}を相手当らぬように引き戻す。

そして、隙が生まれてしまった。
モンスター相手なら。絶対に生まれなかったであろう絶対的な、隙が。

「あっ……！！

思わず漏れた短く細い悲鳴と共に細剣が跳ねあげられる。

かろうじて武器を弾き飛ばされるのには耐えたが、片腕を上げた無防備な状態で、身体が硬直してしまった。

顔に明らかな歓喜の色を浮かべたオレンジプレイヤーが、紫色のライトエフェクトと共に、巨剣を振り下ろしてくる。
避けられない。

あたる。

「あ、私、此処で……」

死ぬんだと、そう思ったとたん、何となく、自分のこれまでの人生が頭の中でリピートされる。

自分が、十七年生きて来た記憶。しかし、何故だかSAOに来る前の十五年間は、まるでただ過ぎただけの日常だったかのように、何処か色がくすんだように印象が薄い。

それから一年半。

ひたすらに元の世界へと戻ろうと努力し続けて来た時間。苦しい物や辛い思い出がほとんどで、何時も悪夢を恐れながら生きて来た記憶。

そんな記憶の中で、つい最近。ここ数カ月の記憶だけが、とても

輝いてアスナには見えた。

リヨウと出会い、そして何よりキリトと出会い。

何時しか、自分は今までの人生で一番「生きている」と感じられるようになっていた。

これからも、もしかしたら続いたかも知れない日常。

それが今眼前にある死によって失われると思うと、無性に悔しくて悲しい。

今更ながらに後悔した。そして……

「おおおおおおおおお!!!!!!!!!」

黒い風が、アスナと敵の間に割り込んだ。

発動し、アスナの身体を切り裂く寸前だった凶刃を、その風は軽々と受け止め、はじき返し、そして……

金髪のアレンジプレイヤーの首と胴体を分離させて、この浮遊城から……否、この世から、消滅させた

三十五話 二人の見る戦場（後書き）

はい、いかがでしたか？

まあなんだかんだで、今回はキリトがブチギレる会でありました。

原作ではたしか、この時ピンチになったのは「仲間」としか言われてなかった気がしましたが、あえてアスナになっていただきました。だってその方が盛り上がるじゃん！（爆）

まあ、そんなこんなで、次回はまた亮が登場する会です。あんまり出番は無いですがw w

ご意見ご感想、心よりお待ちしております！
では！

三十六話 故に彼は「ご」呼ばれる(前書き)

はい、どうもです。

珍しく早くかけまして、なんと二日連続で投稿です！

では、ごうげー！

三十六話 故に彼はこう呼ばれる

バシャアアアン！という、プレイヤーが死亡した時特有の、神経を逆なでするような大音響のポリゴン破砕音が辺りに響いた瞬間、付近に居た敵味方両方のプレイヤーの眼が、一斉にキリト達の方へと向けられる。

驚き、憐れみ、様々な感情を周囲が浮かべる中、一瞬、呆けたように口を開けた一人の両手槍使いのオレンジプレイヤーが、犬歯をむき出しにして一気にキリトとの間合いを詰めていく。

恐らくは、先程倒されたオレンジプレイヤーが彼の知り合いだったか何かしたのだろう。

だが、今のキリトにそれは自殺行為であった。

「死ねえ！！」

怒りの形相のまま、槍使いは突進しながら赤いライトエフェクトを纏った両手槍をキリトの胸へと突き出す。

「……っ！」

気が付くとほぼ同時にキリトは左足を軸にして身体を90度回転。これを回避。

当然、回避されたオレンジの方はソードスキルを虚空に打ち込むことになり、スキル硬直を科せられる。

対しキリトは、右半身を引いた事で、右腕が後ろに下がり、左腕を前方に突き出すような形にして、肩に担ぐように右手で持った直剣の切っ先を相手へとちょうど弓矢を引き絞るのに近い姿勢で向けている。

その構えの中で、握られる直剣が紅蓮のライトエフェクト帯び……

「ラアアアア!!!!!!」

ジェットエンジンめいた轟音と共に、オレンジの心臓の位置めがけて片手直剣 単発重攻撃 《ヴォ パル・ストライク》が打ち出された。

これは、この討伐作戦より、一年半位前の話だ。

そのころ、徐々に攻略が進み始め安定して来たSAO世界には既にオレンジプレイヤーが存在しており、当然、その集合体であるオレンジギルドの存在もあった。

当時は、軍の治安維持活動も本格化しておらず、オレンジプレイヤーたちは原則として中堅及び始まりの街に居るレベルの低いプレイヤーを狙うものが主であったのだが、その中で、特筆して特殊なやり方を持つオレンジギルドの存在がその年の二月中盤頃から目立ち始めた。

ギルド名 「義鉄」

主な活動内容は、本人達が基本的に頑なに隠しているベータテスト参加者（以下ベータ）情報を掴んでは、HPを戦闘直後で減らしたその参加者を十人程度で囲み、武器をちらつかせ、戦闘によってHPをギリギリまで減らしてから相手の持つ情報及びアイテムの“回収”

そう。回収である。

強奪や奪取ではなく、回収と言う言葉を使っているあたり、彼らが

自らのしている事に疑問を持っていなかった事が分かるだろう。彼らは自分達のしていることが「正しい」と信じていたのである。

自身が、ゲーム開始直後から持っていた情報を他のプレイヤーに分け与えずに独占し、その結果レアアイテムや更なる情報を得た《ビーター》と呼ばれる者たちを「悪」と定め。自らを「正義」と信じて、武力的な力を持って「悪」が奪った物を「取り返そう」としたのだ。

当然、そのためにオレンジ行為に及ぶなど本来ならば許されることではない。

だが同時に、彼らの言い分はゲーム開始直後に始まりの街に取り残されかけた中堅プレイヤーや、その段階で仲間や友人を失った者達の、ある意味では共感を得ていた。

多くの人間が表立って肯定はしないものの、心のどこかでは否定もしていない。そんな組織だったので、彼らは調子に乗ったとも言うべき勢いで襲撃を繰り返し、情報を掴まれたベータ参加者。特に攻略組に属するソロプレイヤーは自らの力で己の身を守るしかなかった

だが、幾ら高いレベルとレアな装備を持ったベータとて、HPを減らしている時にレベル差が8〜5程度しか無い連中（実はこのギルドの面々結構な高レベルとなっており、ベータにも肉薄するほどのレベルとなっていたのである）に十人で囲まれば何時までも逃げおおせる訳は無いし、身を護りきる事も難しくなってくる。

ついに、一人が身ぐるみをはがされると言う被害が起きた時は、ベータ全員が恐怖と一種の恐れを抱いただろう。

しかし、そんな彼らの活動は、その年の3月の終わりに突然終了する。

原因はベータでは無い攻略組ソロプレイヤーへの勘違いによる襲撃。

といっても、別にそれをしたことで彼らへの非難が殺到したとか、そう言う政治家の様な理由ではない。

単純に、そのプレイヤーとの戦闘で、メンバーがほぼ全滅したのである。

十人のメンバーは一人残して黒鉄宮の碑に有る名前に横線を刻まれ、ポリゴンの破片となってこの浮遊城及びこの世から消滅したのだ。

ちなみにこれがSAOこの史上で初めての「殺人」となっている

その戦闘から、幸運にも一人だけ脱出できた戦槌使いのオレンジプレイヤーは、せめてもの仕返しなのか流した噂の発端としてこう言っている。

「あの男のは、人を殺す事に一片の躊躇も迷いも無かった。」

そしてこうも言った。

まるで、ただ相手に向かって振るわれて何の感情も無く人を殺す刃物のような人間であったと。

あまり知られていないが、後々この噂の対象である「あの男」はその後自分に襲撃をかけて来た少数のオレンジプレイヤーをまるで当たり前と言わんばかりに殆ど殺害している。(オレンジにそれだけ襲われるあたり、その男は相当狙われやすいらしい)

それが唯の自己防衛なのか、それとも自身がオレンジにならないよう技と調節している計算高い殺人鬼なのか真実を知る物はさらに少ないが……

噂自体は、オレンジ本人の口から語られたと言う事もあつた事に加え、あまりに怪しい物だったので余り広まらず。現在、かなりのプレイヤーはその異名を彼の凄まじい実力から間違つた意味で解釈している。

即ち

《神聖剣》と並ぶ男として

しかし一部の……一部の真実を知る者達やオレンジプレイヤーからは、その“事実”故に彼はこう呼ばれる。

重々しい金属音と共に、打ち出された《ヴォ　　パル・ストライク》の切っ先が横から飛び出した刃の刀身に打ち止められる。

俺は、自分でも筋力値パラメータはレベルの高さもあってかなりの物であると自負している。。

だが、打ちつけられた切っ先は、まるで鋼鉄の壁に打ち込んだかのようにいとも簡単に打ち止められ、衝撃によって弾き返された。

「がっ！」

ノックバックにより大きくのけ反つた俺は、体制を立て直す事も出来ずにそのまま地面に背中を叩きつけられる。

恐らく今のでHPバーが少し削れただろう。

自身の身が守られた事を悟った槍使いは、安堵したような表情をした後、小馬鹿にするような嘲笑を浮かべて俺を見下ろす。
そして次の瞬間

そいつの嘲笑った顔は上段蹴りによって粉々に吹き飛んだ。

「あーあ、結局一人殺らしちまったよ……兄貴失格だなこりゃ」
聴きなれた響き、聴きなれた声。

何時も俺を何処か落ち着かせ、安心させてくれる声が、喧噪の中やけにはつきりと、何時も通りに響く。

そう。「何時も通り」なのだ。

目の前で、頭を吹き飛ばされたオレンジプレイヤーが、激しいポリゴンの爆碎音と共に消えて行っているのに……自身の起こした「死」の音と現象が、目の前で起きているのに、その声はあまりにも「何時も通り」だった。

「兄……貴」

「リョウ……」

俺とアスナの声がほぼ同時に響く。

不思議な色をした浴衣姿。手に持つ得物は青龍偃月刀。

“真実”を知る一部のオレンジにとって恐怖の象徴であり、レッドプレイヤーを除いて唯一、「殺し」をためらわない、刃と言われたプレイヤー

《刃^{ジン}》

と呼ばれるプレイヤーの姿が、そこにはあった。

三十六話 故に彼はこう呼ばれる(後書き)

はい、いかがでしたか？

今回の話については、あまり多くは語れません。
まあ色々とありまして、基本的にこの話に関しては……

ご意見ご感想お待ちしております！

では！

三十七話 説得（前書き）

はい、どうもです。

今回はぱっぱと書いたので、短いです。

どうにもシリアスなシーンが苦手らしいという事に気がつき始めた
今日この頃

では、じゃーん！

三十七話 説得

目の前に居るのは、絶対に出て来ては欲しく無かった仲間の姿であり、でも恐らく、自分がこの状況を打開するために心の何処かで出て来ることを期待していた人物の姿。

自分の中の「期待」と言う感情にアスナが気付いたのは、キリトの横から登場したその男……リヨウの姿が、どうしてもこの上なく心強く見えてしまったからであり、同時にそこまで考えてしまった所でアスナは慌てて首を横に振った。

違う。今回は、今回だけはこの人物を自分の前に立たせる訳にはいかないのだ。

既に、自分せいで絶対に人を殺してほしく無かったキリトにすら殺人の業を背負わせてしまった。

「約束」した、だから、リヨウをこれ以上の殺人者にするわけにはいかない。

そこまで考え、アスナは意を決してリヨウに向かって口を開いた。

「な、何で出て来たの！？後ろに下がってって」

「誰がどこからどう見ても、んなこと言ってられる状況じゃねえだろコレ」

「う……」

出鼻を挫かれた上に言い返せない。

リヨウの言う事はまったくもって正論であり、この状況を生み出したのは自分達なのだから、彼が出て来るのは当然かもしれない。

だが此処でリヨウの言う通りにして彼を戦場へと送り出せば、噂の通り何のためらいも無くリヨウは人を殺す。

それは、今のほんの一瞬で十二分に分からされた。

だから駄目だ。ここで引いてはいけない。

「でもまだ、約束が……！」

「ああ、あれなら、気にしなくていいぞ？」

「え……」

再び言いきる前に、リヨウはあっけらかんとした様子で再び口を開く。

「別にお前らが役立たずとかじゃなく、俺が勝手にやるだけだ、お前らとの約束は関係無いしな」

「な……いいえ、それでも駄目！下がって！」

「ったく、今日はずいぶんと食い下がるな。どした？」

まるで普通の雑談をする様なリヨウの態度に段々と苛立ちが募って来る。

今している会話の内容を、本当分かっているのだろうか？

ちなみにこの間、リヨウは一度も此方を向いていない。ずっとオレンジ側を睨んだまま、それだけで、気性が荒いはずのオレンジプレイヤー達をその場に釘付けにしている。

やはり、リヨウが居ると言うだけでその威力は絶大なようだ。

だが今はそんなことはどうでもいい。

「どした？じゃないわ！本当に分かっているの！？この世界で人を殺すってことがどういう事なのか！」

大体、義弟であるはずのキリトはどうして何も言わないのだろうか。

そこまで思った時、アスナの耳に別の声が割り込んだ。

「その辺にしてやってくれ。アスナ」

「き、キリト君！？」

アスナのリヨウへの反感を止めたのはそのキリトだった。

そしてその発言に、アスナは大いにうるたえる。唯でさえ過去に前歴のある人間を前に、一体何を言い出すのだろう。

近い関係であるならば、むしろこんな事をしようとする彼を止めるべきではないのか？

アスナの中の“常識”と言う判断材料はそう答えを出しており、それを止めようとするキリトの態度は、混乱以外の物をアスナにもたらさなかった。

「で、でも！このままにしたらリヨウはまた」

「良いんだ」

「え……………」

「兄貴が今しようとしてる事は、俺達にとってどうしようもなく有りがたい事だし、その事に兄貴も納得してる。だから……………良いんだ」キリトの言っている事の意味がアスナはすぐに分からなかった。

恐らく、よく考えれば分かったのだろうけど、反射的に分からなかったことから、アスナは咄嗟にキリトに聞き返す。

「ど、どう言う……………意味？」

「そのままの意味だ。ここは兄貴に任せる。その方が良い」

「何を……………！」

良いわけがない。そう言おうとしてようやく、アスナの頭は答えを導き出した。

違う、キリトの言っている事は確かに正しいのだ。

恐らく、自分やキリトが殺人を犯せば、その事実は一生涯負うべき罪として、自分を苦しめ続けるだろう。

だがリヨウは、話の通りならば人を殺しても精神的ダメージが他人に比べ圧倒的に少ない。

つまりは……………

「まったく、その言い方じゃまるでお前悪い奴みたいだぞ？」

「別にいいさ、兄貴に肩代わりさせてる時点で」

「だから、俺が勝手にやってんだからいちいちそう言う事考えなくていいっつもの」

うつむいたまま動かないキリトに、アスナは何も言う事が出来なかった。

彼も、悔しいのだろう。リヨウに任せなければならない事が。

だが、たとえ既に一人を殺していても、それをさらに重ね、更に一生背負い続ける様な覚悟はまだアスナにもキリトにも無かった。

「ほれ、下がってる。さつさと片付けてくつから」

「でも、でもそれじゃありヨウは……！！」

自分の事を殺人鬼だと思いながら生きて行かねばならない。

それに恐らく、これだけのプレイヤーの前でそれを行えばせつかくデマだと思われるている噂も証明が成され、周りからのリヨウを見る眼すらも悪い方向へと変化してしまう可能性は、決して小さくないだろう。

自分達のせいで、そんな事にはしたくない……

「かまわねえさ」

「え………」

リヨウの口から紡ぎだされた言葉は、とてもやさしく、同時に何処か納得して居る様な……諦めているような雰囲気孕んだものだった。

「よく言うだろ？人殺しは殺した分だけその罪を背負わなきゃいけないとか何とか。俺、効率悪いのあんま好きじゃねえしな、より良い方法があるならそっちを選びたいわけさ。で、どうせ何も感じない奴が背負った方が、他の奴が背負うよりこっちの負うリスクは小さいと。俺自身も、それが友人や親類のためなら大歓迎だし。な？効率いいだろ？」

「……………」
「まただ。また、リヨウと自分達の間で明らかで根本的な溝を感じる。元々、この青年は、偶にどこか常人離れた所を見せる事がある。人の心を読んだかのように話し始めたり、異常な中率の勘が働いたり。」

だが、今回は最早曖昧な物ではなく、明らかな形有る物としてアスナにははつきり感じ取れた。

それはそうだ。実際ついさつきリヨウは平然と人を殺したし、たった今もリヨウは遠回しに、「他人のために殺人をする事になっても構わない。」と言ったのだから。

この世界に、自分以外の者のために殺人を犯せと言われて平然と了承出来る物がいたい何人居るのだろうか？

少なくともアスナやキリトが知る限りでは、目の前に居る青年一人しか心当たりが無かった。

「な？そう言う訳だから。もう、いいよな？」

「う、ん」

頷くしかなかった。どんなに反論しても、此処ではリヨウの言う事が最も上策である事は疑いようも無い。

正直、悔しい。

自分にもっと精神的な強さがあれば……本来人としてそんな強さを持つべきではないと知りつつも、どうしてもそう思わずには居られなかった。

「さーて、んじゃまあ、パパア〜つと行くか！」

リヨウが得物を構えたまま一気に走りだす。その後ろ姿を見ながら、キリトは拳を強く握りしめ、アスナは小さく「ごめんなさい…

…と眩いた。

三十七話 説得（後書き）

はい、いかがでしたか？

原作SAOのような複雑な心理状態を上手く文章にするという芸当が、どうしてもできない今日この頃……畜生めー！

次回からはいよいよ戦闘スタートです。

さて……殺りますか。

ご意見ご感想心よりお待ちしております！

では！

三十八話 それでも（前書き）

はい、どうもです。

では今回から、いよいよバトルパートに入ります。

戦闘を描くの事態が初めての経験なので、至らぬ点がある……と言
うか至らぬ点ばかりかもしかかもしれませんが、申し訳ありません。

では、どうぞ！

三十八話 それでも

走り出す時、後ろでアスナが言った言葉はしっかりと俺の耳に届いていた。

「ごめんなさい」

まあ何と言うか、どちらかと言えば申し訳ないのは俺の方だと思う。

殺人の重みを彼らに背負わせたく無いのが根本に有るはずなのに、結局の所彼女たちにも精神的負担をかけているのだから、とんだ詐欺師だろう。

だがそれでも、彼らには殺人だけはして欲しく無い。

まだ俺が人間らしい事を自分自身に証明できるその思いを果たすために、俺は姿勢を低くしてオレンジの群れへと突っ込んだ。

先ずは第一関門、噂もあるため俺を警戒したのか、三人の両手槍使いが俺の前に立ちふさがっている。

俺は原則的に、筋力値を中心に上げている、と言うか殆どそれしか上げていないため、敏捷値はレベルアップ時の自動上昇分だけ。つまり足も腕の振りもレベルの割に相当遅い。

リーチの長い武器を複数使って囲めば、何とか抑えられると思ったのだろうか……

「慣れてんだよ。その対応」

言うと同時に俺は地面を踏みきって、一瞬でその距離を詰める。

勿論走りきった訳ではない。空中に向かって、斜めに低く、低空を「跳んだ」のだ。

通常この世界での「走る速さ」や「腕を振る速さ」等の現象のスピ

ードは確かに敏捷値によって決定されるが、跳躍なら話は別だ。地面を蹴り、その際身体が飛ぶ「距離」「移動速度」「高さ」は全て、筋力値によって決定づけられる。

まあ、地を走れないなら空を跳べばいいと。そう言う訳である。

「は？」

「打あ！」

中央に居た青髪ピアスの奴が声を上げるが、既に遅い。

とうに俺の身体は槍の穂先など抜けており、赤いライトエフェクトを纏った俺の右脚が、身体の後ろから追いついて来るように腰を軸にして思い切り振り切られ

ポリゴン破砕音と共に首から上の無い一人のプレイヤーが、消滅した。

足技 単発技 飛脚鎌断

ひきやく かたち

「先ずは一人。つてね」

猫のように姿勢を低くして着地した俺に対し、一瞬既にも後ろに居る槍使い二人と、目の前に居る多数のオレンジプレイヤーは一瞬呆けた顔をしたが、すぐに戦闘態勢を取ろうとする。

だがやはり遅い。

俺は既に《足技》のスキルを使った硬直から復活している。

この《足技》のスキル。幾つかの特異性があり、その内一つに、「硬直時間が異常に短い」と言う物があるのだ。

足技の硬直時間は長い物でも2秒。短い物だと、0.3秒も無い。

俺は相手方の対応と心の準備が追いつくより速く、次の行動へと移る。

「覇アアアアア!!!」

右足を軸に、左足を少々前に出し、右手の冷裂を長く掲げて大き

く回転する。

その一撃に巻き込まれ、近くに居た三人のプレイヤーが一瞬で消滅する。これで四人。

勿論だが、一回転で終わりではない。既に刃の部分に緑のライトエフェクトを纏った冷裂を持った俺の身体は、そのまま足を代わる代わる入れ替えながら回転を維持して常人の身体ではあり得ない早さで前方へと進む。

二回転目で追加で二人。

三回転目でもう一人。

四回転目で更に二人。

圧倒的な筋力値から生み出される剣技ソートスキルの威力は、オレンジ達のHPを危険域のレッド、注意域のイエローはおろか、まだグリーンの状態の物でさえ、一撃でアバターごとポリゴンの欠片として砕け散らせて行く。

爆散により起こったポリゴン片と回転によってクルクルと尾を引く緑色のエフェクトとが、さながら光の嵐のごとく輝き続ける。これで、9人。

「ま、初手としちゃ十分か。」

そう言いながら回転を止める。合計四回転。

薙刀 上級連撃技 「乱嵐流らんらんりゅう」

正直、始めてこの名前を見た時は某ハンバーガーチェーンを思い出したのだが、名前とは裏腹に威力、範囲は共に文句のつけようのない非常に優秀なスキルである。

が、しかし、そうそう全て上手く行くかと言うとそうでも無い。

原則的に、薙刀のソードスキルと言うのはどれも他の武器のスキル

よりも硬直時間が長い。無論、優秀な技である以上それはこの《乱嵐流》も例外ではない。

で、当然集団に囲まれていれば皆その硬直を狙ってくる訳で……

「いけえ！」

「おらあああー！」

「死ねやああ！」

ほら来たよ……

目の前や左右には槌やら斧やら剣やらを構える野郎共の姿。当然、このまま硬直してたらまあもろに当たってHPがごっそり持って行かれるのだろう。

駄菓子菓子

「そんなつもりは毛頭ねえんだよ！」

そう言いながら、硬直しているはずの足を振り上げ、土色のライトエフェクトと共に地面に叩き付ける。

足技 範囲妨害技 大震脚

ズン、と言う重々しい音と共に地面が大きく揺れ、周囲に居たプレイヤーたちは昔懐かしいギヤグの様にこける。

まあ彼らにとってはギヤグでは無く真剣に命の危機なわけだが。

「なっ！？」

「馬鹿な！？」

おーおー、驚いてる驚いてる。

まあそれはそうだろう。この世界での絶対の隙であるはずの硬直時間を、無視してスキルを使用したのだから。

これが、足技のスキルのもう一つの特異性《硬直割り込み》である。

本来ソードスキルは使用すると硬直時間が科せられ、その間はいかなるスキルも使用できない。

それどころか動く事も出来ないのだが……《足技》のスキルは唯一例外として、ソードスキルからの場合のみ（同じ足技スキルは不可）硬直時間に割り込んでスキルを発動させる事が出来る。

しかも驚くべき事に、その後科せられる硬直時間は発動した足技スキル分だけなのだ。

つまり、非常に短い。

まあ今回も、接近して来たオレンジ達が立ち上がりきるよりも俺の方が硬直から回復する方が早かった訳で……

「はい、残念」

スキルを使うまでも無く、少ししゃがんで冷裂を振り、周りに居た四人を切り裂く。

これで十三人。

冷裂を振り終わってから、俺は構えを崩さずに周りを見る。と、いつの間にかオレンジが押している混戦だった状況は逆転し、徐々に討伐組が押し始めているようだ。

あれだけの状態を見ても、俺に刃を向けたままの勇氣あるオレンジプレイヤーもまだ数人いるが、彼らの顔は一樣に恐怖に彩られていた。

そんな彼らに向かって、俺はなるべく「何時も通り」のニヤリとした笑みを浮かべて、言う。

「さあ諸君、旅立つ準備は出来たかね？」

ちよつと格好付け過ぎの様な気もするが、まあこの歳だし、まだ許されるだろ。

それに、今の言葉で間違いなく目の前の連中ビビってるし。

恰好を付けると言えば、ジン、と言う異名は誰が呼び始めたのか知らんが結構その方面のもんだと思う。

まあ、実際の所何も感じず人を殺すと言うのは言いえて妙だと思うが、少々それには語弊があるとも思える。

……否、或いは俺がそう思いたいだけなのかもしれない。

俺は、人を殺しても、何か感情を抱いた事が無い。

罪悪感はあるが、殺した事に対しては大して何も感じてないし、精神的な重圧なんて皆無だ。

友人や親類が死ぬ事がどれだけ悲しいか俺は知っているし、今までに殺した連中にとつてのそういう人々は今頃死ぬほど哀しんでいる人もいるんだろうって事も分かってる。

だけど、何も感じない。

自分の知り合いや友人が死んだら、俺自身は死ぬほど悲しいし悔しいのに、自分が殺した事に関しては何も感じない。感じられない。

殺した後には、ただ、殺した事が分かるだけ。

それが生み出す哀しみを、俺は知っているはずなのに、その全てを俺は、極論、たった一言で片づけられる。

どうでもいいや

……正直言えば、これだけ殺してそれでこんなにも自然で居られる自分の人間性を疑った事は今までに一度や二度じゃない。

何故何も感じないのか？何故何も考える事が出来ないのか？それがどういふ事か分かっているのに、何故？なぜ？ナゼ？

考え続けて、頭がおかしくなりそうになった事も無い訳じゃない。

「だけでももう諦めた。」

人殺しと言っなら、言えば良い。

殺人鬼と呼ぶなら、読んでもらって結構。

たとえ、人として大切な物が何か欠けていると言われようと、

責任や重圧を全て俺が受けるだけで済むのなら、それでも俺は刃を振るおう。

三十八話 それでも（後書き）

はい、いかがでしたか？

と言うわけで、戦闘スタートとともに少しばかりリョウの暗い部分を見せる形にしてみました。

これに関してはまあ……人を殺すって重みがどこまで僕に表現できるかからなので何とも言えんですが……頑張ります。

つか、戦闘描写ってやっぱりムズイ……

ご意見ご感想、心よりお待ちしております。
では！

三十九話 紙袋頭とエストック（前書き）

はい、どうもです

まだまだ戦闘は続きますが、今回はまたしても原作キャラが登場です。

まあ、タイトルから予想できると思いますがw

では、どろぞー！

三十九話 紙袋頭とエストック

結局あの後、俺は更に三人のプレイヤーを殺る事となった。

そこまでいった時点でやっと、オレンジ側の戦線に崩壊の兆しが見えたのだが、同時に、とある三人のプレイヤーをあぶり出すことにもなってしまった訳で……

「で、お前らが出て来た訳か？」

「だいぶ、暴れて、くれたな」

「つか余裕ブチかましてんじゃねえぞコラア！」

「はあ、相変わらず個性全開なこと……」

今俺の目の前には、二人の黒尽くめオレンジプレイヤーが立っている。

一人は、黒革ブーツに黒い細身の革パンツとやっぱり黒のレザースーツ（身体に密着するピチピチタイプ）に武器は小型のダガー（毒付き）言う、何処ぞの潜入工作員のような格好に、何故かよく分からん袋を頭にかぶり（俺には外国とかで買物に使う茶色くて長方形の紙袋を子供が面白がって被ってるように見える。）、眼の部分だけ丸くくり抜いて前を見れるようにしてあるという、窒息するんじゃないかと心配になるような恰好の男。

もう一人はやや小柄な男。運動してんのか此奴、と言いたくなるような細い体に、身体と同じく、非常に細く長い針剣エストックと呼ばれる武器を持っている。恰好は灰色のぼろきれの様なフード付きマントを纏っていて、それには深紅の逆十字があしらってある。

顔にはどくろを模した様な仮面をかぶっており、暗い眼窩からは、赤く小さな光が漏れていた。口の部分は隠れていないのに、素の呼吸でしゅうしゅうと細い呼吸音を響かせているあたり、やっぱり不

健康な奴だ。

こいつ等はそれぞれラフコフの三人の幹部プレイヤーの内の二人だ。

袋をかぶった奴が、《ジョニー・ブラック》

赤い瞳の奴が、通称で《赤眼のザザ》

格好こそふざけているが、こいつらも俺と同じく、今までに両手両足の指では足りないほどのプレイヤーを殺してきた殺人鬼である。

「つーか、お前らはつきり言って俺としてはどうでもいいから。どけ」

「悪いが、それは、できない」

「そもそも言われてどくとも思ってたのか？なめてんのかテメエ！？」

「お前は少し落ち着きを持って声のポリウムおとせジョニー。いちいち声でけえんだよ小学生かお前は」

「んだとゴラア！！？」

「……人の話聞いてたか？」

ザザは寡黙で途切れ途切れに話すから、正直聴き取りづらいがまだ良い。

だが、逆にジョニーは興奮しやすく、すぐ声が大きくなるので、はつきり言えばうるさい。

まったく……まともにしゃべれる奴は居ないのかね？

「ま、いいや。んじゃ殺るか……ねー」

最後の声と共に思いつきり地面を蹴って低空で一気に距離を詰める。

これできるまでにどれだけ練習した事か……

「っー」

「うおお!?」

「覇っ!」

冷裂の切っ先を向けたまま突っ込み一気に突きこんだ一撃を左右に避けた二人を無視して通過し、それぞれ左右後ろに付かせる。当然ながら、二人は素晴らしい反応速度で俺の後ろから接近。ザザは鋭い突きを放ち、ジョニーは接近戦用の小型ダガー（勿論毒付き）で切りかかって来ようとするが、

「打ラア!」

俺は右後方に居るジョニーへと、左足と両足で身体を支えた状態から黄色いライトエフェクトを纏った右足をサッカー漫画のシュートシーンのごとく後ろへ跳ね上げ、蹴り上げを放つ。

足技 単発技 逆月さかづき

凄まじい筋力値と共に跳ね上げられた右足は、俺へ届く寸前だったジョニーの右手へと当たり、持っていたダガーを弾き飛ばす。

「なんだと!?!」

「!?!」

後方への攻撃手段があると思っていなかったのだろうか?（まあ予想はしてただろうが）驚いた声を上げて後ずさるジョニーの右手は粉々に吹き飛んでいるが、ザザは俺の攻撃の初動を見て咄嗟に小さくバックステップして距離を取っていたらしく、被害を受けては居ない事が逆さまに後ろを見て確認出来た。だが、

「そこは射程内だ……ぞ!」

即座に逆月の硬直から立ち直ると今度は足を素早く下ろし、その勢いのまま、少々右足を前に出して体を捻って、冷裂を左から横一線に振り抜く!

「……!」

「甘えよ！」

振るわれた冷裂は、縦に構えたザザのエストックにブチ当たり、ザザを吹き飛ばす。が、そこはそれなりに対人戦闘の経験のあるうざげである。後ろへと飛んで、少しでも衝撃を逃がしたようだ。

ちなみに、SAOの物理エンジンは中々どうしてこういう所では優秀で、戦闘に置いてはこのような細かいテクニクも十分に通用する。

ザザの対応は見事だが、それだけでは終わらない。

なんとジョニーに至っては足を曲げることで姿勢を低くして薙ぎ払いを避け、此方に向かって左手で投擲用ダガーを投げつけて来たではないか！

「うおっとー！」

冷裂の後ろ側を持っていた左手を下に向かって押し出し、指先を使って冷裂を回転。身体の左側に回っていた右手を戻すようにして移動させ、跳んできたダガーを弾き飛ばす。

……まあ何と云うか、曲がりなりにもシステム上の重さは1tあるはずの物体を、指先で振り回せるあたり、俺の筋力値も化け物じみて来たもんだと思う。

そして今度は此方の番とばかりに足技を起動。冷裂の回転を地面と水平の状態で止めると、右足を大きく曲げて姿勢を低くし、冷裂を持ったまま右手で身体を支えつつ、不安定な下半身に身体の右前に突き出した左足を再び右から左へ振るようにして足払いの下段蹴りを一発。

「そら、よつとぉー！」

足技 単発技 地月（後）

ギリギリでジヨニーはそれをバックステップで避けるが、無理な体勢で避けたため大きく体制を崩す。

「クソがつ！」

「割れる、紙袋野郎！！」

地月の勢いから一気に冷裂を振り上げつつ立ち上がり、そのまま振り下ろしてジヨニーを真っ二つにしようとする。が、

「……………！」

「あぶつ！」

横から突き出されたザザのエストックが俺の顔面を貫こうと迫ったため、俺は攻撃中断を余儀なくされた。顔を咄嗟に首を後ろに反らして避けたは良いが、ちらりと見えたエストックにはピンクっぽいライトエフェクトが纏われていた。と言う事は……………追撃が来る！

「死ね」

「断る！」

死ねと言われたからと言っておとなしく喰らうほど阿呆では無い。突き出された二撃目を、自慢の筋力で後ろへと飛んで距離を取ることとで回避。何とか事なきを得た。

取りあえずは一区切り。さてさて？

「で、抵抗しない気になったか？お兄さん方」

「なめた、事を、言うな」

「ふざけんなテメエ！つか不意打ちとか卑怯な真似しやがって！」

「スキルコンボ複合技使ってまで不意打ちしたお前が言うな」

「ん？」

「あ？」

「？」

最後の声は俺では無い。

目の前の二人のうちどちらでも……

「ぬおあー!!」

直後、俺達の立っている位置から右側。ちょうど、全員の死角と
なっている位置から長大なランスが飛び出し、ジョニーに向かって
空気を押しつける様な低い音と共に突き出された。

ジョニーは危うい所でそれに気付き、ギリギリで身を引いたが、余
波により少々HPバーが減る。

同時に俺の目の前に一人の男が現れる。

青に銀の装飾が入った高級そうなフルプレートアーマーに身を包
み、両手で二メートルはあるうかと言う先程のランスを持つその男
は、以前、とある事件で俺達と変な縁を持った男だった。

「これはこれは……DDAのトップ壁戦士タンクに護って貰えるたあ光栄
だね」

「ボス戦の時のアンタほどじゃ無いさ、リョウさん」

「謙遜しなさんなよ、シュミットさん？」

「ははは」

突然の乱入者たるこの男、名はシュミット。

攻略組最大の規模を誇るギルドDDAデヴィアイン・ドラゴンズ・アライアンスこと聖竜連合の幹部で、攻略
組有数の壁戦士タンクとしてボス戦でも活躍する男だ。

特に最近はやけに腕を上げて来た。

「おい、オイオイオイ！いきなり出てきやがって何だテメエ！」

「外野は、引っ込んで、もらおう」

なんか目の前のオレンジ二人がギャーギャー言ってるが、シュミ
ットは毅然とした態度で答える。

「残念ながらそうもいかない。お前らにはこつちとしても借りがあ
る」

それに、あいつらとの約束も有るんだ。

そう、小さく嘆くとともに、シュミットは再びランスを持ち直し此
方を見ずに言う。

「ここはオレが抑える、アンタはあいつを頼む」

「おいおい、幾らタンクつつたつてこいつ等二人を一人は
一人じゃないぞ」んあ？」

再び突然。今度は後ろからした声に俺が軽く振りかえると、後ろ
から見慣れた黒衣の剣士が跳び込んで来た。
それを見たザザが、不快そうに目を細める。

「また、お前か、《黒の剣士》」

どうやら俺と戦闘する以前に何かがあったようだ。

しかし今はそれを聞いている時でも無いので、ザザは無視しておれ
はキリトと話し始める。

「おやまあ……お前まで来たのかキリト」

「ああ。此処は俺ら二人で抑える」

「……いいのかよ？」

「まあ、上手く殺さずにしとめるくらいはやって見せるさ」

「ほっほお？さっきのネガティブキリト君は何処いったんだ？」

余裕しゃくしゃくな様子で言うキリトに俺はからかうようにそん
な事を言うと、案の定キリトは言葉をつまらせた。

「う……色々ふっ切ったんだよ！良いから！兄貴はあいつの相手行
つてくれ」

「っは、んじゃまあ任せますかね？」

そう言って身をひるがえし、件の「アイツ」の所に行こうとする
と再びイラついた声が背中に投げつけられる

「あ、待てコラ！」

「逃がすと、思っな」

「残念ながら、待てと言われて待つほど素直じゃねえし、それに」

「お前らの相手は俺だ！」

そう言っつてシュミットはジョニーに突きを、キリトはザザに切り
かかる。

二人が避け、或いは受ける事に集中したため、俺はその隙を逃さず
一気にオレンジの集まる部分の後方を目指して跳ぶ。

さて、行こうか。

三十九話 紙袋頭とエストック（後書き）

はい、いかがでしたか？

まあ、ジョニーとザザはいいとして……何故出たシュミットさんw w

まあ彼とて攻略組の、それもボスの攻撃を押さえつける役目たる壁戦士ですから。

恐らく原作時のような不意打ちで無い限り、準備さえしていればそうそう負けやしないだろうと思ったんで登場させましたw

それにしてもって感じは有りますがw w

ご意見ご感想お待ちしておりますw
では！

四十話 It's show time (前書き)

はい、どうもです。

今回は……まあまた原作キャラですが、誰かは……言つまでもありますまい。

原作未読の方はその目で確かめていただきたい。

もしかしたらその方が純粹に楽しめるかもしれませんし。

では、どうぞ！

四十話 It's show time

「死にやがれえ！」

「この野郎があ！」

後ろから俺の頭を真つ二つにしようとする赤紙で平べったい髪型の男の曲剣が振り下ろされ、正面からは胴体をぶった切りたらしい鉄鎧の男が振る戦斧が横薙ぎに迫る。が、

「ふっ！」

俺は身体の横で冷裂を手首を使って一回転させる。

これが俺の基本的な防御法だ。

原則的に、敏捷値の低い俺は咄嗟に武器を動かし、敵の攻撃線上に武器を置いて武器防御。と言う事が非常に苦手である。

ならばどうするか、俺の武器である冷裂は薙刀、即ち長物だ。

それが何を意味するかと言うと、まあ攻撃等の範囲が広い。同様に回転させたりすれば、それによって広範囲の防御をカバーする事も出来る。

で、言ってしまうえば回転させるだけならば殆ど、手首の動きや指先だけでも可能なわけで、しかも俺はこの動作が何故かやたら得意で、振り回しても殆ど冷裂を落とさない。

自分でも不思議に思っていたのだが、以前キリトに聞いたら、『小さいころからモップとか振り回すの大好きだったる兄貴』とか言われた。

恐るべし、子供時代の俺。

そんなこんなで、俺は殆ど不便なく冷裂を振り回す事が出来る。

しかも冷裂の重さは1t。それがすさまじい速さで回ると言う事は

……

「うおっ！」

「のああ！」

当然、元々の回転の力+冷裂自体の重さによって増大した回転速度から来る遠心力その他による威力の上昇により、大体は打ちこんで来た敵の武器が軽々と弾き返される。

今回も然り。甲高い金属音と共にオレンジ二人の武器は軽々と弾かれた。

で、当然ながらその隙を逃しはしない。

「疾イ!!!」

無理矢理回転を止めた冷裂をオレンジのライトエフェクトと一緒にノックバックで動けない正面の斧戦士の胸の中心に向かって突き出し……

「勢やあ！」

突き出した右手の勢いを利用して身体を捻り、後ろの曲刀使いを顔面を濃い赤色のライトエフェクトを纏った左足の踵で蹴り飛ばす。

雑刀 単発技 空突くうつ

足技 初級単発技 逆鎌さかがま

少し危なかったので小さく息を吐く。と、冷裂が突き刺さったままの斧使いが何か口をパクパク動かしているのに気が付いた。どうやらタンクらしく、HPは削りきったがまだ減り終わっていないらしい。

「い、いやだ……死にたく……」

「今更遅いわ」

そう言っただけ冷裂を引き抜くのと同時に、男はポリゴンとなって碎

け散った。ちなみにうろに居た男は頭吹っ飛ばされてとつくに居ない。

これで……

「十八人……か」

まったく、殺人鬼もいい所である。どっちがレッドプレイヤーなんだか分からない。

まあ、性質が悪いのがどっちかは分かりきっているが。

「w o w……随分と派手にやってるなおい」

ある意味では待ち望んだ……英語交じりのラッパーじみた台詞が聴こえたのは、そんな事を考えていた時だ。

「お前に言われても皮肉に聞こえるなあ……喋り方からしてお前の方が目立つたる」

ちよつとした皮肉に同じく皮肉で返すと、目の前の艶消しの黒ポロンチヨを被ったそいつはかろうじて見える口元に薄ら笑みを浮かべてこつ返して来た

「H a……人の主義にはあんま口出さないもんだぜ b o y?」

「いや、この歳の間人をボーイと呼ぶかお前は」

「俺から見りやまだガキつてな」

「うわ、ちつと傷ついたわ……まあ良いや。また会えて嬉しいよ。

P o H (プ) 「

「オレもだ。M y b r o t h e r 「

それが俺、リヨウでは無く、刃としての俺と、レッドギルド「笑う棺桶 《ラフィン・コフィン》「リーダー《P o H (プ) 《との、久々の再会だった。

これも、過去の話だ。

と言つても、これはSAO自体がまだ発売していなかった頃。大體、その三年くらい前の話だ。丁度、リヨウの母親が死んだ。その年の、年明けから春休みにかけての話である。

巨大なネット上の一部。

某巨大掲示板の一角等で、その年の昨年末にとあるMMOのアクションゲームが話題にのぼった。

タイトルは英語だが意味は明快

「The killer（殺人者）」

その頃普及し始め、ナーヴギアが発売しなければ恐らく今もハードの中心としてゲーム業界を引っ張っていたであろう。HMDヘッド・マウント・ディスプレイを使用する、MMOサバイバルゲームであった。

「The killer」は、とにかくリアリティのあるグラフィックを主眼に置いて開発されたゲームだった。

ソフト開発の大元はアメリカのとあるゲームソフトではマイナーな会社だったが、配信前に公開された情報の中にちらちらとみられたゲームの映像は、ユーザーの興味を引き付けるには十分であったためユーザーの期待値は、それなりに高かったと言つて良い。

そして年明け、「The killer」はネットから日本各地

でプレイされ始めた。

……結果から言おう。

「The killer」は三か月で配信停止せざるを得なくなつた。

原因は、ゲーム自体の不具合では無い。
バグは殆どと言っていいほどなかったし、未帰還者がでた訳でもない。

原因となつたのは、プレイしたユーザーの精神及び健康上の被害。

そもそも、「The killer」のゲーム上での基本ルールはこうだ。

「一定の大きさのフィールドに、プレイヤー十数名空く数十名を押しこめ、フィールド上に存在する武器を使って争い、最後に生き残つたプレイヤーを勝者とする」

要は、電子の世界での疑似的な「殺し合い」である。
素手でも、フィールド上の武器を使つてもよし。ルールは唯、生き残る事のみと言う、とても単純な物だ。

しかし、それが失敗だつた。
リアルすぎたのである。

あまりにリアルで、なおかつプレイヤーの眼にダイレクトに視覚的情報が飛び込むHMDを使用していた。と言う事もあり、プレイヤーには殺人が本^{それ}当に眼前で行われているように見えてしまった。

勿論、ゲームだと割り切り、プレイする事の出来るプレイヤーは沢山いたが、「The killer」に関してはそれをプレイした者達に明らかに健康上の問題を抱え始める者が、一部とはいえ多すぎ、問題へと発展してしまう。

その結果、国は民間に調査を委託。検証の結果、最終的には配信中止の処置を取らざるを得なかった。

だが……そんなゲームにも他のゲームと同じく、トッププレイヤーと呼ばれる者は存在したのだ。
ちなみに、一人では無く二人。

殺つていても全く体調を崩すことなく戦闘を続け、他のプレイヤーたちからはその二人が参加すれば先ず、その試合は負けるとさえ言われた二人の猛者。

何時も大体二人で行動し、そのコンビネーションと息の合いようは、まさしく兄弟のようにぴったりだった、二人。

片方の名は「POH」

もう片方の名は「Rin」

それが、「The killer」という一つの世界に置いてのみ、最凶の殺人鬼コンビだった人物達の名である。

「しっかしホント、お前があ頃と同じHN使ってなきゃ絶対気が付かなかったもんなあ……変な因果もあったもんだ」

正直、これまでも他のゲームで知り合いだった奴に会ったことが無い訳じゃない。

しかし、よりも寄ってこいつに遭うとは、予想していなかった。

「こつちとしても、出来ればあんたにや会いたく無かったな。Rin」

「おいおい、最強のレッドことPOHさんが何をおっしゃる？」

「killerじゃアンタの一つ勝ち越しだったはずだぜ？」

「あれ、そうだったっけ？」

一応言っておくと、たがいに会った時から武器を構えたまま下ろしていない。と言うか、今からする事を考えれば下ろす訳がないのだが。

彼ら二人は、「The killer」内に置いて、最凶のコンビであると同時に、最強のライバルでもあった。

それはそうだ。元来あのゲームは一戦闘に付き勝者は一人だけ。

そしてコンビネーションにより、他の全員を殺し尽くしたこの二人が毎回の戦闘で最終的にどの様な行動を取ったのかは、想像するまでも無いだろう。

「って事は今日のはお前のリベンジマッチか？最凶のレッドからリベンジマッチ受けるとは、なんか優越感だな」

「まあ今回俺が勝つてもそれ以上の勝負は無えからな。今日は一回でtwo pointsって事だ」

「あれ、お前ってそんな負けず嫌いなキャラだったっけ？」

「そもそもアンタと組んでた頃に他の奴に負けた記憶がねえが……」

「そうだったっけ？ま、いいや。んじゃまあ……」

リヨウののひざが曲がる、自身の身体を弾丸とし、打ち出すためにだ。

POHの方も、腕がほんの少し曲がり、受け返すため力をこめているのが見てとれる。

一瞬、この世界で存在しないはずの物。彼ら二人の「殺気」と言
う名の力が時を止める。
………声が、重なる

「It's show time」

四十話 It's show time (後書き)

はい、いかがでしたか？

そんなこんなで、ラフコフBOSSこと、みんな大好きPOHさんの登場です。

彼の口調は非常に特徴的で、所々英語を混ぜてくるんですよ……うまくかけていたでしょうか？

ちなみに最後の台詞。これは原作だと、全てカタカナなのですが、今回はPOHも本気の本気と言う事で、英語にしてみました。

ご意見ご感想、心よりお待ちしております。
では！

四十一話 刃と殺人鬼（前書き）

はい、どうもです。

や、やっとかけた……戦闘むずいっす。

まあ、どうなるかは……読んでいただきたく。

では、ごっごー！

四十一話 刃と殺人鬼

先制攻撃は俺だ。

セオリー通りに、低空跳躍を利用して突撃、冷裂の切っ先をPOHの着ている黒ポンチョのフードの部分めがけて……突き出す！

「是エイ!!」

「ツハ！」

その一撃を……まあ避けるわな。同時に、冷裂と上下で平行に並ぶように奴の大型ダガーが振られる。

POH自身も身体を前に出して、俺の突進の勢いも利用するつもりらしい。

POHの愛剣、「メイト・チョッパー友斬包丁」はインクラッド内でも特に名のあ
る魔剣だ。

その切れ味は、現時点でプレイヤーメイドによって作れる最高の剣を凌駕していると言われており、かなりの高級防具でも防ぎきる事は不可能らしい。

駄菓子菓子

俺の持つ冷裂とて、決して負けては居ないのだ。

「ムン！」

冷裂の下部を持っていた左腕を思い切り下へと突き出し、冷裂を半回転させる。ダガーの軌道に入った冷裂は当たり前のように友斬包丁を受け止め、突進によって付いていた勢いもあってPOHを跳ね飛ばす。

「ハッ！」

小さく笑いながら土煙を上げて着地するPOHに、俺はさらに追撃を加えるために踏み込んで右手だけで柄の端を持ち、遠心力に任せて左から右へと振う。

黒い刀身の描く軌跡に、掘り込まれた金の龍が設定された光の角度によって光り具合を変え輝く事でキラキラとした装飾が成され、弧を描く。

が、POHは今度は頭を下げてこれを回避。姿勢を低くし、再び一気に間合いを詰めて来る。

下から腕が跳ね上がり、振り下ろされるように振われた刃を避けることは無理と判断した俺は、重さによって遠心力が増大し伸びきった腕の中の冷裂を無理矢理に手首の力だけで引き戻す事で、手の中を滑らせるように移動。

左手で石突近くを持つと、顔面を狙って来ていたPOHの一撃をギリギリの所で受け止める。

水平にした冷裂に、自らの一撃が伏せれたとみるや否やPOHは今度は自らバックステップし、距離を取りながら牽制とばかりに二本のピックを放って来る。

冷裂を自身の正面で盾のように回転させて防いだ俺は、再び距離を詰めようと正面に冷裂を構え……ようとして、現前の黒。ポンチヨに驚愕せざるを得なかった。

俺がピックを弾いている隙に再び地面を蹴ったPOHは、またしても俺との距離を猛然と詰め、既に俺の懐に入っていたのである。しかも、俺へと腕を伸ばし、遠心力に任せて振われる右手のダガーにはうつすらと血色の光……

「やべっ！」

言った直後に（俺から見て）左から振われてきたメイト・チョッパ―が縦に構えた冷裂に直撃、強烈な衝撃が走るが、この程度では俺も動かない。

が、無論これで終わりでは無い。

「y a - h a - ! !」

「く……！」

興奮しているのか、珍しくそんな声を上げながら更に切り返して右から一撃、そのままP O Hの円を描くような軌道で刃が動き、切り上げ一発。再び切り返して切り下ろし。

不意を打たれた+その四連撃に、ついに俺のガードが少し崩れた

『いかん!!』

駄目押しとばかりに突きこまれた正面突き三連発。

一撃目が命中すると俺自身が認識するよりも早く二撃目、続けて三撃目が命中する。

そんなスピードで放たれたP O Hの三連突きは、俺の両肩と胸の上部に命中し、ポリゴン光を散らす。

俺が命中した事によるノックバックから立ち直るよりも早く、再びP O Hは再びバックステップで距離を取っている。

俺は、今度こそ自分から距離を詰めようと足に力を込めるが、跳ぶよりも早く再び投げられるピック。

舌打ちしながら叩き落と……そうとした直前で、俺は慌てて冷裂を引っ込めようとする。ピックの後ろの部分に、何か小さな玉がくくりつけられていたからだ

「しまっ……!?!」

しかし時すでに遅し。冷裂に激突したピックは、俺の眼前で強烈

な光を発生させる。

咄嗟に腕を掲げ、顔を下にそむける事で眼をつぶされるのは避けたものの、完全にP O Hから眼を離す形になってしまった。

『くそっ……！目晦ましの使い方見事すぎんだろ、この無駄技術が！』

内心悪態をつきつつ、慌てて再び正面を向くが既にP O Hの姿は無い。

次の瞬間、左から何かが来る事を殆ど気配だけで察した俺は必死に右に跳ぶ。が、無理な体勢で跳んだため体制を崩し、その上飛距離も全く伸びず、まだP O Hの射程範囲内だ。

「ンなんじゃ逃げれてねエぜ！」

そう言つて、再びステップで大きく踏み込んだ奴は、メイト・チヨッパーの鋭さを倍増させて見せる様なシルバーのエフェクトを纏ったダガーを身体を捻り一回転させながら振って追撃してくる。

「こなくそ！！」

対し、俺は何とか足を開いて体制を立て直すと、冷裂を持った両腕を思い切り伸ばし、手首や指の動きを最大限に使ってパリィに徹する。

しかし、ダガーの間合いである超近距離ではどう頑張ってもパリィしきるのは無理と言つ物であり、八発中四発の斬撃が俺の身体を捉える。

最後の一発は最早命中する事も構わずにP O Hの側に突っ込み無理矢理に柄の部分をぶち当てる事でP O Hをふっ飛ばし、何とかダガーだとすぐには詰められない間合いを作る。すでにHPバーは一割近くが削られていた。

「Hey?」

「……………」

リヨウが、急にその口を閉じ急に無口になった事にPOHは疑問を覚える。

此方から話しかけても何も反応がない。正直な所、今のリヨウは彼から見て、まるで何も考えていない人形のように見えた。

実際、その認識はおおむね正しい。

今のリヨウは殆ど何も考えて居ない。正しい意味で、頭が空っぽの状態だ。

しかしながら、そんな状態でも幾つかの事はリヨウの頭の中に残っているのだが。

と、そんな事をPOHが考えている内、ようやくリヨウの口が開いた。

「行くぞ……………」

突然層言った直後、トン。と言う音と共に、リヨウの身体が跳ね上がる。

低空跳躍では無い。文字どおり、斜め上へとリヨウの身体が大きく跳ね上がり、上昇して行く。

冷裂の様な重たい物を持ってそもそも跳躍できること自体異常なのだが、その事は今は重要ではない。

POHは突然のリヨウの行動に少々驚くが、動揺は無い。

此処は洞窟。その場所で高く跳びあがり、攻撃としてする事と言え
ば……………」

低い破裂音と共にリヨウが洞窟の天井を蹴る。彼にとっては予想通りであり、不意をつかれた事は何もない。

……その異常なスピードを除けば。

「ッ!？」

上から冷裂の切っ先を此方に向けたまま、振って来るリヨウの速度は、まるで「閃光」と呼ばれるS A O最強ギルドの副団長の様であった。

すんでの所でバックステップを行ったP O Hの目の前で、冷裂が地面に突き刺さり地面がキラキラとポリゴン光を散らす。

避けられた事にひとまず内心でP O Hは安堵するがしかし、そんな暇は与えぬとばかりにリヨウはP O Hに猛然と打ちかかった。

人体の部位の中でも素早く動く手首や、指先の動きを最大限に使って偃月刀を振り回し、P O Hに反撃のすきを与えようとしない。

上下左右

攻撃は正面からのみであると言う事を理解しているにもかかわらず、全方位から打ちかかられているかのよう錯覚させられるほどの斬撃の乱舞はP O Hにとって、まるで巨大な死神の手に包まれるような印象すら与えたが、P O Hはそれを全て回避し続ける。

ちなみにパライはあまり出来ない。

唯でさえその重量によって圧倒的な攻撃力を生み出している相手の偃月刀が、今はさらに全プレイヤーの中でもトップの筋力値を持つリヨウによって振り回されているのである。

下手にパライしようとして、武器を当てる角度を間違えれば、此方の武器である友斬包丁が手の中から吹っ飛ばされる事だろう。

それがわかっているからこそ、避けて避けて避けて避けて避けまく

る。

P O Hは間合いの差により反撃出来ていないがしかし、さりとしてやられるだけで居るわけでは無い。

常にリヨウの動きを見続け、いずれ来るであろう隙を徹底的に探す。これまでのP Kの中で鍛えて来た、「人を殺すための」洞察力が、フルに使われていた。

そして、その時が来た。

左手に持った偃月刀を大きく振り抜いたリヨウは、そのままちょうど伸脚をする時のように体制が低くなり、左手は伸びきる。

即ち、胴体はガラ空きだ。

そこに、何のためらいも無くにP O Hは跳び込む。

狙うは首、自分のペースに持ち込み、再びヒット& amp ;アウエイ戦法へと移行すれば、間合いの差を覆して十分に勝算はある。

それは事実だし、これまでの戦闘もそれを証明して来たのだから、P O Hがそう考える事はごく自然であり、正しい。

此処で一気に流れを引き戻そうと、P O Hは友斬包丁を振り下ろす。

瞬間、鈍い金属音が、辺りに鳴り響いた。

「N o w a y……」

ありえない。

そういったP O Hの目線の先に有ったのは、リヨウが左の掌で友

斬包丁を受け止めている、光景であった。

否

掌では無い。

よく見ると、リヨウの手には何か握られており、それが、この世界で最強の切れ味を持つはずの友斬包丁の刃を見事に受け止めていた。

その手の中に有ったのは、十センチ四方程度の小さな小箱。

「永久保存トリンケット……だと……」

POHが呟く。

永久保存トリンケット

マスタースミスのみが作ることのできる十センチ四方程度の大きさの保存箱。

これ自体が小さいため大きな物を入れる事は出来ないが、その名の通り、この箱の中に入れた物は、本来この世界に置いて食べ物から武具まで全ての物に起こるはずの「耐久値自動減少」が発生しなくなり、永久にその形を保って保存しておくことが出来る。そしてこの小箱にはもう一つ特徴がある。

即ち「耐久値無限」

この小箱は、たとえ屋根の上から落とそうが大型モンスターに踏まれようが友斬包丁で切られようが、決して壊れないのだ。

「……名答。その通りだよPOH、さすがだな。それと……」

先程までとは違う。何時もの様子で、リヨウは言葉を続ける。

「ようこそ、絶対不可避の間合いへ」

ゾツとする悪寒が、一瞬でPOHの全身をつつみこむ。

と言うのもPOHには見えてしまっていたからだ。腕を伸ばし切り、リヨウの左斜め後ろに携えられた青龍偃月刀が、深く、濃厚な深緑色のライトエフェクトを纏うのを。

そしてようやく気が付いた。

この隙はわざと作りだされたものであり、自分が、彼の間合いにまんまと誘い込まれた、獲物なのだと言う事に。

「Shit!」

狩る側から、珍しく狩られる側に回された事で、屈辱にPOHは小さく悪態をついた。

左から右上に向かって立ち上がりつつ冷裂を振り上げる。

POHは本来片手持ちの友切包丁の刀身に左手を添える事でギリギリのパリィによって何とか軌道を少し反らす、当然これでは終わらない。

次は振り上げる過程で冷裂の柄の下部を握った右腕と、左腕を上手く交差させ、先程と合わせて、のを描くように再び右下から左上への振り上げ。

これは何とか体制を立て直し、少々後ろに下がったPOHに回避されるが、更に前に出ながらスキルは続く。

振り上げた冷裂を今度は大上段に構え思いつき正面に振り下ろす。

武器を使った全ての攻撃に置いて、武器の重量と振り下ろす腕力を最大限に使えるため、最も強力と言われる振り下ろし。喰らえば恐らく一撃であろうそれを、P o Hは大きく後ろに下がって避けるが、予想道理の動きだ。

お次は自身の身体をさらに前に出す。

冷裂の横に付き、前に出した右足と、冷裂の刃が平行に並ぶように位置取り、冷裂と地面の間の角度が大体7〜80度くらいになった所で、一気に冷裂を振り上げる。

地面により、抑えつけられていた力が一気に解放されると同時に、少々握りを緩めて置いた事で両手の中を冷裂が滑るように移動し、一気に間合いを広げる。

恐らく、予想外の動きだったのだろう。P o Hはパライする事も出来ず、その一撃はP o Hの右側の身体の表面を切り裂く……が、浅い。

それでも、圧倒的な威力を孕んだそれは掠っただけにもかかわらずP o HのHPの四割を喰らう。

しかも、まだ終わりでは無い。

三度跳ね上がった冷裂を再び振り下ろす。が、今度は地面まででは無く、胸のあたりでそれが止まる。そして右手が柄の下部を持っていた事を利用して、間髪いれずに突き出す。

再びリーチの差による攻撃を受けたP o Hは何とかそれを左に回避ししながら、俺の身体はそれを確認するよりも早く次の行動に移る。

突き出し、右腕が伸びきったままの姿勢で俺の身体が回転する。

丁度先程使った乱嵐流のように、一転、二転、三転……そして五回転目。それまで石突きを持っていた右手の冷裂を、右足で急制動を掛け、回転を止める事で手の中を滑らせて右半身を大きく引きP o

Hを睨みつける。

さながら、弓を構え狙いを定めるかのように。

それを……突き出す!!

「破ア……羅アッ!!」

ド、ン!!

空気が爆発するような音と共に跳び出した深緑の光を纏った一撃は、既に回転を受パリイもギリギリだったPOHの友斬包丁メイト・チョッパーにブチ当たり、それを、真つ二つに折り砕いた。

薙刀 最上位重連撃技

いくさがみ
戦神

唯でさえ威力の高い薙刀の攻撃を、十二連撃で繰り出すと言う、まさしく必殺技とも言つべき薙刀最強のスキルの一つ。

初動時のその独特な構えゆえに、察知されやすく、決まりにくい大技なのだが……博打の成功した例と言えよう。

折られた友斬包丁が、ポリゴンの欠片となってキラキラとした光と共に四散するのを見ながら、俺は思う。

勝ったと

恐らく、それは確信に近かっただろう。

POHの持っていた魔剣たる友斬包丁は碎け散り、既にHPを四割削っている上に、今発生している硬直時間も、足技のスキルでどう

とでもなる。

これで、俺の勝ちだと、そう思った。

POHが、青く輝く結晶アイテムを取り出す

「……は？」

POHは今、吹っ飛ばされた勢いで空中に居る。

つまり、震脚も通じない訳で……

「Good-bye My brother」

そう言っつて、何事かを呟いたPOHは、それがさも当然であるかのように転移結晶の効果により、逃走した。

「マジかよ」

俺が口に出れた言葉は、それだけだった。

四十一話 刃と殺人鬼（後書き）

はい、いかがでしたか？

な、長い……

戦闘の時ってホントに一つ一つの描写が長くなるからすごく疲れました。

とりあえず、これでPOHさん撃破ということで。友斬包丁も折っちゃったし。

えー、戦闘描写に関する意見等。何かあればガンガンお願いします。

次回は……どうなるだろう？

ご意見ご感想、心よりお待ちしております！
では！

四十二話 罪は誰に？（前書き）

はい、どうもです。

だあ……疲れた。

今回また、アスナのキャラが崩れかけるかもですが……申し訳ありません。

では、どうぞ！

四十二話 罪は誰に？

殺人ギルドラフィン・コフィン笑う棺桶との戦闘は、かなりの作戦変更及び混乱はあったものの、最終的に我が討伐部隊の勝利により終結。それぞれの被害は以下の通りである。

討伐隊

死者 三名（DDA二名）（ソロー一名）

精神的負担により今後暫く戦闘続行不可となった者 二名

ラフィン・コフィン
笑う棺桶

捕縛者 十三名

死者 二十名

逃走者 一名

尚、逃走者は「笑う棺桶」リーダーであるPOHであり、引き続き対象者の捜索、及び警戒に全力を尽くす物とする。

追記

この戦闘に置いてオレンジ殺しの《ジン》と目されるプレイヤーが発見されており、本戦闘に置いては彼一人で十八名の敵オレンジプレイヤーを殺害している。

本戦闘報告は対象への警戒が必要であると判断するが、当人は現時点でオレンジ以外のプレイヤーへの攻撃を行っていないことから、極端な行動の制限は不必要と判断するとともに、今後の攻略作戦に関して、対象の戦闘能力の有効利用を検討する事を同時に提案する。

ギルド 血盟騎士団 《Knights of the Blood》

殺人ギルド ラフィン・コフィン 笑う棺桶討伐作戦戦闘報告書より抜粋

第五十五層 主街区 グランザム

鍛冶や彫金の盛んな街でもあり、その街の殆どの建造物が鈍く光る黒鉄によって作られているがために、別名《鉄の街》とも呼ばれるその街の一角。

街で最も高い鋼鉄の塔に、白地に赤の十字をあしらった旗をはためかせた建物の下。

攻略組最強と言われる、ギルド血盟騎士団の本部はそこにあつた。

「君にしては珍しく、個人を保護する内容の報告書だね。アスナくん」

「……《ジン》が人格破綻者で無いことは事実です。個人的感情に關してはあまり含まないよう考慮したつもりではあります」

「そこに、君とジンが交わしたと言う「契約」を果たせなかった事に関する関係性はないと？」

「ッ……断言は、出来ません」

ギルド内の一部屋。

今、アスナの目の前には一人の人物が鎮座している。

細い長身に纏うローブは、全体的に血盟騎士団の通常ユニフォームとは逆。

赤を中心に所々白い装飾が成された物を着ており、シャープな輪郭をした顔立ちは、大学の専門家だと言われてもあまり違和感の無い

顔をしていると思う。

その表情は穏やかだが、しかしながらその瞳は全てを見通すような光を纏っているためか、見つめられるとどうにも落ち着かない。

聖騎士 ヒースクリフ

KOB団長にして、アインクラッド最強のプレイヤーの一人とされる男。

副団長と言う立場上、彼と相對するのに本来ならば精神的重圧は無い。

しかしながら、今日に限っては別だった。

友人たる青年の、その処遇が自分の双肩にかかっていると云っても良い状況である以上、それは仕方がない事なのだけでも、やはり背中を流れる汗が不快である事に変わり無いように、裁判の結果を待つようなこの緊張もまた、心地よい物とは到底言えない。

「良いだろう。この報告書については私の方で今後の方針として幹部陣にも推奨しよう。私は彼と言う人物を知らないが、君の必死さを見る限り信用に足る人物の様だからね。退出してもらって構わない」

「!.....有難うございます!」

十二分に良い判断を告げられ、アスナは満面の笑みを浮かべて自身の上司に深い礼をする。

そのまま身体を百八十度回転させ、部屋の扉に手をかけようとした所で、再び背中から声が投げかけられた。

「ちなみに、参考までにだが.....何が君をそこまで必死にさせたのかな?」

純粹な興味として投げかけられたその問いに、アスナは緊張しながらも振り向かず答えた。

「一度約束を破った以上、二度目は無いと思ったからです」

「……そうか。引き止めてすまなかったね。」

「いえ。……失礼します」

扉を開き、外へ出る。

ゆつくりと扉を閉め、階段を下り、自身の個室に入ってから、アスナは扉に背中を預けてズルズルと床に座り込む。

「よかつ……たあ……」

《ジン》……リヨウへの対応が厳しい物とならなかった事に心の底から安堵する。

一度目の約束は、結果的に自分達の力不足で破る事になってしまった。二度目の約束は……これで、何とかひと山越えた事になるだろう。

それでもまだまだ先は長いが……

そんな事を思いつつ、アスナは小さくこぶしを握ってガッツポーズをし、ふと、約束したその時の事を思い出す……

その時も、アスナは座り込んでいた。

戦闘が終結し、その後の被害状況の確認等が各ギルド、ソロプレイヤー間で終了。

現地解散により戦闘に参加した各プレイヤーたちが己々自身の本拠地へと散っていく中、疲れ果て、座り込んでいたアスナだったが……ふと、洞窟の入口へと歩いてゆく人影の中に、何人かの哀しみをあらわにした者達が目に留まる。

報告では、此方にも死者が三名出た。

彼らはきつと、その内の誰かの友人達なのだろう。

しかし、本来あの状況では、この程度の犠牲で済まずともおかし
くは無かった。

もしあの状況で、リヨウが前へ出、敵の戦線を崩してくれていなか
ったら。そう考えるだけで、背筋に冷たい物が走る。

しかし、本当ならばあの状況にだけはしてはいけなかったのだ。
まして、自分はキリトにまで……少しだけ、泣きだしそうになりな
がら俯いていると、不意に背中から声がした。

「よお、一応戦勝したつてのに浮かねえ顔してんな。騎士姫さんよ」
「……アスナ……」

両方とも、聞き覚えのある声。

出来れば聞きたく無かった声。

だけど心のどこかで求めてしまっていた声。

二つの声の主は、互いに自分の左右に座り込み、アスナの顔を覗
き込む。

まだ涙を流してはいないが、それでも地面を見つめたままの自分の
顔は恐らく泣きそうなものになっていた事だろう。

途端、キリトは困ったな表情をし、リヨウにいたっては慌てて跳び
退く。

「う……き、キリト、何とかしろ！お前にまかす！」

「はあ！？ちよ、兄貴おい待っ……！！」

止める間もなくリヨウはアスナ達から少し離れた場所へと移動し、
無限ポットから直接何かを飲み始める。

「まったく……アスナ、大丈夫か？」

「う、ん。大丈夫だよ。ごめんね、何か……心配かけちゃって」

「ん、いや、まあ……」
そこで会話が止まる。

無言 互いの間の静寂によって出来上がる空気が刺すように痛い。

その内に、キリトは居心地悪そうに頬を掻き始めた時、不意に、アスナの口が本人の意思とは無関係に言葉を紡いだ。

「ごめんね……」

再び先程と同じ言葉を繰り返したアスナに、キリトは焦った様に言葉を返す。

「い、いや、ほんと勝手に心配しただけだし、アスナがそこまで気に病む必要は……」

「違うの」

「へ？」

「違う。私、結局駄目だった。リヨウとの約束は守れないし、私のせいでキリト君には人殺しをさせちゃうし、本当に駄目。どうしようもない位……どっちとも、絶対、絶対嫌だったのに……」

「アスナ……」

徐々に語気が強まっていくアスナの言葉を、キリトは沈痛な表情を浮かべながら黙って聞いている。

「奴らが反撃してくるかもしれない事は予想出来たし、もしかしたら迎撃の態勢を整えられてる事だって可能性として充分に考えておくべきだった……そうすれば……そうすればリヨウとの約束も破らずに済んだ……彼に自分の事を更に殺人鬼だと思わせずに済んだ。私があの時迷わず剣を突けていれば、君に殺人の罪悪感を背負わせる事も無かった！私が……私が……が……！」

その先は掠れて声にならなかった。

自分がもつと強ければ、迷いがなければ、しっかりしていれば、責任を自分に求めれば、それはキリが無いほど沢山出て来た。

後悔ばかりが募り、段々と前が見えなくなつてゆく。

しかし

「おい、何でもかんでも勝手に自分のせいですモードにしてんじやねえよ。」

イラついたような、そんな声が洞窟に響く。

隣に居るキリトからではなく、正面から響いたその声に顔を上げると、そこには見慣れた浴衣姿の男がいた。

「自分の責任を反省して次に生かすのは悪い事だとは思わん。だがな、勝手に全部自分のせいにしてネガティブモードに入られてもこっちは対応に困るんだよ。キリトだって困つてんだろうが」

「ちょ、俺に振るのか!？」

「例えだよ。取りあえず、任せるつて言った後すぐで悪いが……お前少し向こう行つてくれ」

「え、あ、ああ……」

言われたキリトはアスナ達から離れてまだ残っていた友人らしき赤髪の男たちの方へと歩いて行く。

「さてと……あのなあ、そもそも俺もキリトも勝手に選択して、勝手に人殺したんだ。キリトに関しては仲間守るためだから仕方ねえとしても、俺に至っては下がつてろつて言われて、それでも勝手に前に出たんだからな。これに関してお前がそこまで責任感じるのか？」

「そんな「はい、人の発表中に喋らないでください」はい……」
声を出そうとしたアスナの台詞をさえぎつて、リヨウは学校の先生の様な口調で注意したため、アスナはつい現実に居たころの癖で

それに従ってしまう。

リヨウがニヤリと笑ったのが見えたが、まさか分かっているやつのだろうか？

「別にお前に全く責任が無いと言ってる訳じゃねえぞ？確かに向この反撃を予想しきって無かったのはお前のミスだし、あの時焦って隙を作ったのもお前だ。だがな、お前とオレンジの間に割って入る事を選択したのはキリトだし、ラフコフの連中とバトる事を選択したのも俺だ。まして周りの連中の殺人への忌避感なんてお前個人の力でどうにかできる事なんざ始めから期待して無い」

確かにその通りではある。

キリトやリヨウの選択する事柄をアスナが決める事は出来ないし、その選択をしたのが彼らである以上、アスナに責任は無い。

無いが……しかし

「だけど……そうせざるを得なくなるような状況を作ったのは私でしょ！？確かにそうしない選択肢も貴方達にはあったかもしれないけどあなた達が目の前で死にそうになってる人を見捨てられるような人じゃない事くらいちゃんと知ってる！」

あの状況をそもそも作らなければ、こうなる事も無かったはずだ。それがそもそも根本である以上、責任は全て自分に有る。そう感じているアスナは、強くなった怒気を緩めることなくリヨウにまくしたてる。いつの間にか岩から立ち上がっていたが、それはさほど問題では無い。

「お前からそう言う評価をされていた事は素直に喜んでくとして……先ず一つ。キリトについては、あれは彼奴の選択ミスだ。熱くなくて周りが見えなくなる。そう言う性質が、もろに出ちまったからああいう結果になっただけだ。まあそれでも、理由が理由だからキリトの事もあまり攻める必要は無いからな。どっちも悪くない。は

い、終了」

感情的には納得できないが、言っている事はある意味で道理だ。終わらない口論を続けるよりは、収まりの付く意見だろう。

しかしそれでも、もう一つの議題にアスナは自身を納得させる解
決策が見つからなかった。

「じゃあ、リヨウは？」

「俺は……別にいいさ。言っただろ？ 気にすんなよ俺も気にしてねえ
し」

「そんな事……出来る訳ないでしょう！？」

そうだ、出来るわけが無い。

約束したのだ。この青年にこれ以上の人殺しはさせないと。それ
なのに……それなのに……プレイヤーで構成されたギルドの大規模
部隊による討伐と言う事例の少ない作戦だったとはいえ、自身の認
識や読みの甘さがこの結果を生んだ以上、アスナは生半可な事で引
くつもりは無かった。

「私が……！ 待て待て待て！！ 分かった！ 分かったからそれ以上
怒鳴るな！」う……………」

絶妙なタイミングで言葉を刺しこまれ、再び黙らざるを得なくな
る。

実を言うとこの時、リヨウは半泣きの顔で怒鳴ろうとするアスナ
の尻尻からついに涙が零れそうになるのを見て、慌てて止めたのだ
が……そんなことはアスナは知る由も無い。

言ってからリヨウはどうするべきかを考えだしたらしく、うーむ
と唸る。アスナはそれを真剣な表情で見つめる……

「なら、こつしよつ」

ようやく考えるのをやめたりヨウが、アスナの眼を正面から見据えながら提案する。

「俺、今回の戦闘で噂の正体ばれちゃったし、もしかしたら、大規模なギルド辺りから警戒されて身動き取れなくなったりとかしそужゃん？ソロの連中からどう思われるか分かったもんじゃないし……だからよ、難しいかもしれんけど、それを全部どうにかすんの手伝ってくれ。それ二つ目の約束にして、守ったらちゃらって事でどうだ？」

提案して来たその内容は、確かに難しい事だった。しかし同時に、それはアスナには適任でもある。

最強ギルドたるKOBのサブリーダーであるアスナなら、確かに各ギルドとのコミュニケーションも取り易いし、攻略組の実質の攻略戦責任者でもあるため、ソロプレイヤーとリヨウとの間の折り合いをつけることも、ある程度は可能かもしれない。

「……わかった、今度こそ必ず果たすわ。約束する」

「いやあ、いやそんなに気張り過ぎなくても……（ギロツ）おう！すっかり頼むぜ！約束だ！」

睨まれ、焦った様な顔をするリヨウを見るうち、次にすべき事を見つけたからだろうか？

何となく先程まで重かった身体が軽くなって気がして、アスナはふっと顔を綻ばせる。

「？何だよ急に笑ったりして」

「ううん、リヨウもそんな顔するんだなーって」

「お忘れの様ですが俺だって一応人間ですよ」

「うん。知ってる」

そう言っつて、何となくとことこと数歩歩く。夜が明けようとしているのが此処からでも分かる。

「人間か……」

「え？」

後ろで何事かを呟いたリヨウの言葉が上手く聞き取れなかったアスナは、聞き返したが、リヨウは即座に首を横に振ると、再び口を開く。

「何でもねえ……そういや、あの時キリトを援護に回したのってアスナだったって？」

いきなり話題が激変した事にアスナは少々戸惑ったが、すぐに気を取り直し、リヨウがオレンジの群れに跳び込んだ後の説明を始める。

「え？あ、うん。何か……とにかく何かしなくちゃと思って、キリト君には前に出てもらって、私は部隊の立て直しする事にして動いたの」

「そうか……キリト言ってたぜ？『あの時アスナに激励されなきゃ俺はあの場に座り込んだままになってたかもしれない』ってな。ありがとよ」

「あ、うん」

「で、結婚は何時頃になりそうですかな？」

「ッ！？」

またしてもいきなりの質問にアスナはつんのめり、転びそうになった所を根性で耐えてリヨウと向かい合う
ただし先程までとはだいぶ違う意味で顔が真っ赤だ。

「何でいきなりそうなるのよ!？」

「あれ？最終目標そこじゃねエの？」

「それは……そうだけど此処で話す話題じゃないでしょ!？」

「おやおや、急に元気が爆発したようすな、騎士姫さん？」

「その呼び方やめろー!」

差し込み始めた朝日が洞窟内を照らし、地獄のごとき夜の終わりを告げていた……………

F i f t h s t o r y 《ある一夜の殺刃劇》 完

四十二話 罪は誰に？（後書き）

はい、いかがでしたか？

というわけで、今回でラフコフ編は終わりです。

いやあ……通常以上に疲れました。

戦闘きつつ。

って言ってもこれからも戦闘は有るんですがねッ

（泣）

さて、これで取りあえずは一区切りです。

それでは、次回からの物語は……いよいよ原作第一巻の範囲へと入って行きます。

SAO編も徐々にですが終わりが見えるところまで来ましたね……

あ、ちなみに何時ものように少々間が空き（ry

ご意見感想心よりお待ちしております！
では！

四十三話 始まりは雑貨屋にて（前書き）

はい、どうもです。

今回から、原作第一巻の範囲へと入って行きます。

台詞は原作のを残しつつ二なると思いますが、解釈や視点はオリ、
と言う感じで進めてきます。

では、どうぞ！

四十三話 始まりは雑貨屋にて

「はあ……お茶が上手いな」

「爺臭」その突っ込みはいらん。分かってるから」

エギルの言葉を無理矢理遮って、俺はもう一杯、先程家に買い置きするために買った緑茶っばいを飲む。

正直言つて、これがこの世界に有った事は非常に喜ばしい。

俺は紅茶も好きだが、実際の所緑茶の方が好きなのである。

「にしても、今日早ええじゃねえか、どうした一体？」

「んー？いや、ついさつきレベルが101に到達してな、ワンオーワンできりが良いし、めでたいから、今日は早めに戻って来たつてわけ……」

「お前……なんつーとこまで行つてんだよ……三桁到達者なんておめえが初じゃねエのか？」

「あー、かもな……いや、聖騎士のオツサンなら行つてるかもよ？」

「ヒースクリフか。確かに有りそうだが……それにしたって行き過ぎだと思つがな」

「あ、人には言つなよ？知られて面倒な事なんざ無い方がいいからな」

「勿論。分かってますよ……と客だ」

そう言つて、エギルは店の扉をくぐつた槍使いの青年の相手をはじめ。

少しだけ槍使いを観察するが、弱気な感じだし、目に少々の怯えが見える。これは駄目だろう。

エギルは付き合つてみると良い奴だし、価格もまじめに交渉すればまともだったり時々（本当に時々だが）おまけしてくれたりなんかするが、それを知らないエギル初心者（？）だと、なまじ本人の

顔が怖いため萎縮してしまい、金銭交渉のプロたるエギルにあれよあれよと話を進められて、どう考えても理不尽な値段で買い取られたりする。

まあそれ以前にそもそも、SAOに置いてプレイヤーショップで売買したいのなら遠慮や萎縮自体NOなのだが。

案の定、今回のお客はエギルを恐れたまま交渉を進めてしまったため簡単に押し切られてしまい、質の良い防具の素材となってくれる「ダスクリザードの皮」二十枚を、500コルと言う良心もクソもあつたもんじやない値段で買い取られてしまった。

『ご愁傷さん。学べよ、青年』

そんな事を思いつつお茶をもう一杯啜る夕暮れ時。

ラフィン・コフィン
笑う棺桶討伐作戦から約二カ月半。

浮遊城アインクラッドにおけるデスクゲームSAOは始まって、もうすぐ二年が経とうとしている。

残る階層は26

生存者の数は約6000人

「おーっす、相変わらず阿漕な商売してるな」

そう言っつて槍使いの後ろから続いてきたのは見慣れた黒衣の片手剣使い。キリトだ。

「おう、元気か少年」

死角になっていたので見えなかったのだろう。まだこちらに気付

いていない様子のキリトに話しかけると、驚いたように此方を向いた。

「おお！？兄貴居たのか。珍しいな兄貴が俺より早いなんて」

「何だ、どいつもこいつも人を帰りの遅い子供みたいに言いおつて……まあ事情は後で話すさ。それよか何持って来たんだよ？なんか面白いもんか？」

「ああ。面白いつてゆーか、なんてゆーか……エギル、たのむ」
「おうよ」

そう言つて、エギルと向き合つてトレードウィンドウを開くキリト。同じく向き合つたエギルはウィンドウを出し……目を見開いた。驚愕しているようだ。

「おいおい……こりゃS級のレア食材アイテムじゃねえか……《ラグー・ラビットの肉》、俺も始めてお目にかかるな」

それを聞いた俺は思わず高い口笛を吹く。

S級のレア食材アイテムと言つたら、売れば7万、いや10万コルは堅いだろう。

何しろSAO内で最高級とも言える食材アイテムである。

原則、SAO内での娯楽と言つたら先ず間違いなく「食つ」ことが上がる。NPCのレストランでも旨い所は旨いが、料理スキルの高い職人プレイヤーが、高級な食材を用いて作る料理の旨さは、その比では無い。
それだけの食材を持っていて、食わずに金にすると言つのは正直、自身でもよく食つと自負している俺ならまずあり得ない事だ。

「何だキリト、お前自分じゃ食わねえのか？相当旨いと思つぞその肉なら」

「そりゃ分つてるけどさ……このレベルのアイテムとなつたら扱え

る奴も限られてくるしなあ……」

それは確かにそうだ。

鍛冶スキル等と同じで、アイテムのレベルが高いほど、その手の物を扱う時スキルの熟練度が高く無いと失敗率は高くなる。

ましてこのランクの食材となれば、最低でも熟練度900異常の料理スキルの持ち主が欲しい所だが、そんなスキルの持ち主がそこらへんにごろごろしている訳は無い。

だが……

『お前によばれりや喜んで飛んでくるだろう女を、俺は知ってるがな……』

鈍感な義弟を正面に見ながらそんな事を思う。と……

「キリト君」

突然、聞き覚えのある声と共に、陳列棚の裏から手が飛び出し、キリトの左肩に触れる。

前言撤回。真後ろに居たようだ。

キリトは一瞬驚いたような顔をしたが即再起動。肩に付いていた手を掴んで、振り返るざまに言う。

「シエフ捕獲」

「いやキリト、その言い方はどうかと思うぞ？」

「何……ってあれ？リヨウ居たんだ？珍しいね、こんな早く帰って来るの」

「なあ、エギル、俺ってそんなにいつも戻って来るの遅いつけ？」

「まあ……なあ。用事がなきゃ大体早くて日が暮れる直前位だろ。

キリト達も帰った後とか多いしなあ。おめえの自業自得だな」

「はあ……」

少し立ち上がって全員が見える位置に移動する。

現れたシェフ……もといアスナの後ろには、二人のコーブメンバーが立っている。

その内、左に居た赤いバンダナの男は知り合いだ。少し手を上げて挨拶すると、彼も同じ動作で返して来た。

もう一人の男は見覚えが無い。油っぽい長髪を後ろで束ねた、色白で細身な三白眼の男。

キリトがアスナの手を掴んでいる事がお気に召さなかったらしく、さっきの籠った目でキリトを睨んでいる。

ま、気持ちは分かるよ。

そんな風に観察している内に、キリトとアスナの会話は進む。どうやら、キリトがアスナに肉を調理してくれたら一口食わしてやると、提案しているらしい。っておい

「いやいやキリト、それ報酬として少なすぎ。ってというか、どんだけ食う気だお前は」

「「(リヨウ)兄貴が言う(か)?」」

「Hey……」

ハモったよこいつ等。

俺が好きなのは甘味だ、別に何でもかんでもやたら食う訳じゃない……はずだ。

「コホン……とにかく、一口つてのは少な過ぎだ。せめて半分くらいくれてやれ」

「そうよ。ってというか、私だってS級なんて殆ど食べた事無いんだからね?」

「ぬ……分かったよ。んじゃ半分こだ」

「聴き分けが良くてよろしい」

俺がそう言っていると、キリトはエギルに向き直って話し始める。

曰く、取引中止

了承した巨漢曰く、俺にも少し味見を……

意地の悪い黒衣曰く、四百文字詰め作文用紙二枚分の感想文をくれ
てやる

再び巨漢曰く、Oh NO!

といった感じだ。

そうして、キリトは店の出口に向かって歩き出そうとする。それを

……

「ちよい待てい」

「グエツ！」

襟首を掴んで引き戻す。

当たり前だが、キリトは首を押さえて抗議するように此方を向く

「何すんだ!？」

「『何すんだ』、じゃない。お前アスナに何処で料理させる気なんだ?ゴチャゴチャしたお前の家か?まとも道具も無しで?ゴキブリ湧くのに?」

「前半二つはともかくゴキブリは出ねえよシステムの!」

「おお、失礼。で?」

「う……」

以前にも行ったが、キリトの家は此処、第五十層アルゲードにある。

確かに近いが、あまり女性を招くのには感心しない程度に散らかっているはずだ。

「と、言う訳だアスナ。頼めるか?」

「え?あ、うん……それなら仕方ないわね。食材に免じて私の部屋

を提供してあげるわ」

そう言ったアスナは、態度こそ仕方なさそうにしているものの、目には明らかに歓喜の色が浮かんでおり、心なしか頬も血色良く染まっている。

……計画通り

「……へ？……え？」

「え？、じゃ無くてちゃんとお礼言え少年」

「あ、はい。ありがとうございます……」

『何故敬語……？』

そんなこんなで、キリトはアスナの家にお邪魔することが決定した。

少々油髪のおっさ……お兄さんが、キリトの事を雑魚だとか、ビーター（ベータテスターと、改造等によってズルをする事でゲーム内で強くなる“チーター”と言う言葉をかけ合わせた、テスター参加者と一般プレイヤーとの間に大きな溝があるSAO特有の蔑称）だと言ったりとか色々五月蠅かったが、最終的にはアスナが押しきってキリト達は転移門へと向かって言った。

その姿を見る、クラデイルと言う名らしい油髪の男の憎悪の宿った眼が妙に気になったが、今は気にしない事にしよう。

その夜、こんなメッセがアスナとキリトからそれぞれ送られてきた。

From Kirito

Main 何か成り行きでアスナと明日PT組むことになってしま
ったんだが……兄貴どう思う？

From ASUNA

Main 勢いでキリト君と明日PT組んで迷宮区に行く約束しま
した！どうしよう！？

おーやおや、こりゃ明日は何か起きそうな予感……

四十三話 始まりは雑貨屋にて（後書き）

はい、いかがでしたか？

まあまずはここからです。

相変わらず、キリトとアスナの間に入ってござかしいことやってる
リヨウを書いて見ました。

所で…… S A OとA Wがアニメ化及びゲーム化するらしいですね。
いや、と言う夢を見たとかじゃなく。

フフフ……ついに、ついに来たあ！って感じですよ！

これでまた僕の楽しみが増えた！！

さあ、執筆意欲が跳ねあがってきたぜえ！！！！

では！

今更ですが

ユニークが25000を突破！

総合評価800

お気に入りが300を超えました！

これを糧にもっともっと頑張って行きます！

感謝を皆さんに！

四十四話 仕事に真面目になり過ぎて犯罪を起こす人だっている(前書き)

はい、どうもです。

え？タイトルが長い？

いやあ、なんだかんだでピッタリなサブタイトルがあんまり思いつ
かなかったもんで、こんなのにw

では、どしどし。

四十四話 仕事に真面目になり過ぎて犯罪を起こす人だっている

次の日、俺は九時頃に何時ものように現在の最前線。

第七十四層の転移門広場へと降り立った。のだが、そこに珍しく一人でただ突っ立っている黒衣が一名。

「ふああああああ……」

「……ねむそうだな、キリト」

「おお兄貴か、おはよう」

「おはよ。ってアスナ待ちか？お前は」

恐らく、昨日のメッセの通り、二人で迷宮区へと出かけるのだろう。

聞いてみると、案の定キリトは首を縦に振り、眠たそうな目の上で眉をひそめながら事情を話します。

曰く、呼び出された時間に来たは良いものの、提案した本人がまだ来ておらずしかも何故か昨日の夜は寝無かったため、寝不足で眠い。段々待つのもつらくなってきた。つつか帰っていいか。

「いや、最後のは駄目だろ一応確認取らなきゃ」

「だってなあ……メッセ送っても返事来ないんだぜ？」

「それこそおかしいだろ？あの委員長タイプが連絡無しで約束の時間に遅刻なんて」

「はあ、それもそうなんだよなあ……」

以前なら彼女は会議等に少々遅刻しただけでも散々怒っていたのだ。

あの性格は恐らく根本から来るものであり、今は丸くなって俺の遅刻にもそこまで厳しくは無くなったが、それでも自分が何かしらの定刻に遅れることなど、少なくとも俺やキリトは見た事が無い。

俺の後ろからその声が聞こえたのは、その時だ。

「きゃああああああ！？よ、避けて！？」

「んお？おっと」

「な、うわああああ！？」

簡単に説明しよう。

後ろから何だか必死な声が聞こえたので、反射的にその場を右に退いた所、その場所を突如跳んできた白い何か……もとい誰かが通過。俺が避けた結果その進路上に断つ事となったキリトに激突。白い誰かがキリトに覆いかぶさるようにして二人とも転倒。

まあこれは俺の推測だが、俺の後ろに有るのは転移門で、この白い誰か……て言うかアスナはいきなり後ろから吹っ飛んできたから……様は転移門に跳び込みながら転移したのだろう。

中々アクティブな女だ。

さて、そんなこんなしてるうちにいきなり押し倒されて目を回したキリトに意識が戻ったらしく、自身の上に居るアスナを（キリトは誰だか分かって無いだろうが）どかそと腕を伸ばす……ってその位置を押すのはちよつと不味いんじや……

「おいキリト待っ「や、や　　っ！」「ありやりや……」

一歩遅かったようだ。

確認なしにキリトが腕を伸ばした先に有ったのは、アスナの胸であった。

当然、状況が状況でも女性なら誰だっけいきなり胸を触られたら反射的に自己防衛に走る。

アスナもその例に漏れず、キリトの身体を地面に叩きつけて（と言うかむしろ頭も叩きつけてたが）その反動を利用して起き上がりつつ座り込む。

続き、覚醒したらしいキリトも上半身を起こし……アスナと目が

あつた。

「や、やあ……おはようアスナ」

『その前に言うべき事があるだろ阿呆……』

呆れながらひきつった笑いを浮かべたキリトを一瞥した後アスナに視線を向けると、目に憤怒及び羞恥と……ちよつと殺意も交じっている。

ちなみに、ちょうど二人の中間に居る俺にキリトが助けを求める視線を向けているのは無視だ。

アスナが軽く武器すら抜きそうだったのでそうなら止めるかな。とか思っていると、再びアスナの後ろの転移門が青く光り始めた。

途端に、アスナはキリトの後ろへと身を隠す。なんだなんだ？

「なん……？」

「ああ？」

「……………」

俺達三人が見つめる中、転移門の中から姿を現したのは赤と白のユニフォームに身を包んだ見覚えのある油髪の男。

昨日アスナの護衛をしていた。クラディールと言う男だった。

クラディールさんは出て来て早々、キリトとその後ろに隠れるアスナの姿を見止め、目の中に憤怒と憎悪を一斉に宿らせる。

まあ、美人だからなこいつは。

そして……

「ア……アスナ様、勝手なことをされては困ります……！」

成人男性にしては、おおよそ高いと言えるだろう声でそんな事を言い始めた。

聞きようによつては、興奮してヒステリックになっているように聞こえなくも無い。

「さあ、アスナ様、ギルド本部まで戻りましょう」

昨日も感じたんだが、何も上官だからって「様」付けせんでも…結構熱狂的なファンなのだろうか？

「嫌よ、今日は活動日じゃないでしょ？……そもそもアンタ、なんで朝から家の前に張り込んでるのよ！？」

どうやら怒っているのはクラディールさんだけでは無くアスナもらしい。キリトの後ろから結構な剣幕でクラディールさんにまくしたてている。

……ていうかお前らキリトを挟んで口げんかしてやるな。本人が精神的にきつそうだ。

「ふふ、どうせこんなこともあるうと思ひまして、私一ヶ月前からずっとセムルブルグで早朝より監視の任務についておりました」

って、それ護衛つーか……いや、もしかしてそうしなきゃいけない理由があつたのか？

それでクラディールさんはわざわざそんなアレ紛いの事を？

「それ、団長の指示じゃないわよね……？」

アスナが固くなつた意識を無理矢理弛緩させようとするかのよう
に声を絞り出すが、クラディールさんは得意げにこう答える。

「私の任務はアスナ様の護衛です！それには当然ご自宅の監視も…

…」

「ふ、含まれる訳ないでしょバカ！」

アスナが台詞をさえぎってそう言った瞬間、クラディールさんはより一層目の中の墳怒を濃くしたが、正直な所それは流石に逆ギレ

と言っやつだろつ。

話を聞くに、ようはクラディールさん……もとい、この油髪のおっさんは必要も無いのに護衛の任務を口実にして本人の許可も得ず勝手にアスナの家の前に張り込み、アスナのことを監視していたわけだ。

前言撤回。このおっさん、どうやら唯のストーカーらしい。

そんな事を思っている内に、アスナはクラディールによって無理矢理連れて行かれそうになる。

が、今回に関しては俺はのんびりと傍観していられる。
なぜなら……

「悪いな、お前さんトコの副団長は、今日は俺の貸切りなんだ」
今の騎士姫さんには、俺の知る限りでもトップレベルの剣士君が
付いているからだ。

言いつつ、キリトはアスナを掴んでいるクラディールの右手首を
自身の右手で掴む。

これまで眼中にも入れずに無視していた相手に邪魔されたのが気に入
くわなかったのだろう。

クラディールは掴まれた腕を無理矢理に振りほどくと、より一層の
憎悪と憤怒を宿した眼でキリトを睨みつける。

それをさらりと受け流し、キリトは更に言葉を続けていく。

「別に今日はボスやろうてわけじゃないんだ。アスナの安全は俺が
責任もって保証するさ。本部戻るならおひとりで行ってくれおっさ

……クラディールさん」

『おい、今俺の台詞っばいのが聴こえたんだが……』

どうも我が義弟は最近俺の言葉を真似するようになったらしい。
後で注意しておこう。

「ふ、ふざけるな！貴様の様な“雑魚”プレイヤーにアスナ様の護衛が務まるかあ！わ……私は栄光ある血盟騎士団の……」

“雑魚”の部分を妙に協調して行ったクラディールだったが、相手の実力をよく知りもせずになんか言う事はあまり言うべきでは無いと思うぞ。

それに……

「あんたよりはマトモに務まるよ（だろ）」

思わず本音がボソリと漏れてしまったが、聴こえなかったようだ。しかしながらキリトは真正面から言ったため、クラディールはついにキレて、キリトに決闘デュエルを申しこんでしまった。

結果は、言うまでも無くキリトの勝利だ。

しかも、武器をぶつけ合うと稀に発生する武器破壊を狙ってやると言う、中々に派手な勝利である。

ちなみに言うておくと、実はこれ、キリトの得意技だったりする。

『んじゃ、邪魔者は消えるとしますかね……？』

無事に二人で攻略に出る事となったキリトとアスナがか会話を変えず姿を見つつ、俺はその場から立ち去り迷宮区へ向けて歩き始める。

これでまたあの二人の距離も縮まり、俺により一層の楽しみを与えてくれるだろう。

しかし……そんな楽しみな事を思いつつも、俺の中では何故か妙な不安が靄となって渦を巻き続けていた。

『貴様……殺す……絶対に殺すぞ……』

デュエル終了直後、クラディールがその言葉と共にキリトに向かって放った殺意に満ちた眼光。

それが、まるで網膜に焼き付いたように、迷宮区に行くまでの間の俺の脳からはなれなかったのだ

四十四話 仕事に真面目になり過ぎて犯罪を起こす人だっている(後書き)

はい、いかがでしたか？

クラデイル君が、かませ犬と言われるゆえんともなった出来事でした。

所で、最近寒くなってきましたね。

学生である僕には、コンビニのホットスナックが恋しくなってくる

この頃。

この間も、奮発して餡饅を二個買うと言う暴挙に出てしまいましたw

計画性の無い金銭の使い方は身を滅ぼしますねホント。おかげで金

欠ですw

では！

四十五話 食事は三食(前書き)

はい、どうもです。

まあ、今回はそこまで重要な話ではないです。
なら何故書くか？

過程で(r y

では、どござー！

四十五話 食事は三食

七十四層 迷宮区

「グルルル……」

リヨウは今、背中の毛並みをオレンジ色の炎によってと燃え上がらせた、赤い毛並みでサーベルタイガーの様な獣。

固有名 《インフェルン・ファング》 と向き合っている。

防御に置いてはこの階層ではさほどの物ではないが、獣型特有の素早さに加え、高い攻撃力を持った、集まると少々厄介な相手である。実際、数日前に五体で取り囲まれた時は流石に肝を冷やしたものだ。

しかしながら、現在俺の前に居るのは此奴一体。

初めは三体居たのだが、既に内二体は冷裂の凶刃の前に沈んだからだ。

そして先程言ったように、確かにこのモンスターは複数集まれば厄介だが、逆にいえば複数集まらなければ極端に注意すべき相手でも無い。

「ガルアア!!」

「ふっ!」

得意の俊敏さを活かしてリヨウの懐に飛び込もうと跳びかかって来た猫（虎？）に対し、リヨウは迎撃のため冷裂を突きだす。

が、何の捻りも無く馬鹿正直に放った突きなど、そうそう当るものでも無い。当然のようにそれは空を突き、突きを右に避けたファングはその勢いのまま一気にリヨウの右肩に喰らい付こうとする。

……が、

「慣れたんだよ、その動きは」

そう言いながら、接近してくるファングに二段目の迎撃として用意しておいた右足の下段蹴りを一発。

足技 初級単発技 下蹴かけ

「ギャフツ!？」

武器攻撃より攻撃力の低い体術系のスキルとは言え、異常な筋力値にから放たれたそれは、ファングの赤い体を易々と蹴り飛ばす。足技の、それも基本技と言う非常に技後硬直の短いスキルを使ったリヨウの身体は即座に硬直から回復。

蹴られ、冷裂の射程距離内ギリギリの位置に身体を叩き付けたファングに向かつて狙いを定め、蹴りを放った時振り上げて置いた冷裂に力を込める。

赤黒いライトエフェクト

「割れる、猫科動物」

本日八回目の戦闘が、終わりを告げた。

「ふう、付いたー付いたー」

いったん迷宮区の上層の方へと登ってから、休憩のため再び中間層あたりに位置するこの迷宮区の安全エリアへと戻ってきたリヨウは、昼食が少々遅くなった事も含めて、小さくため息をつく。

それと言うのも、何故か上層からの帰り道に限ってモンスターとのエンカウント率が高く、この安地に戻って来るだけでなんと四回もモンスターと遭遇してしまったのだ。

『そろそろ、この迷宮のボスも他の連中に見つかっておかしくない時期か……』

そんな事を思いつつ、休憩のため座るスペースを確保しようと、安全エリアこと殺風景な広間の左端の壁へと近寄っていく。と、

「うわあああああああ!!」

「きゃああああああ!!」

「何ぞ!?!」

ものすごい悲鳴を上げて、一組の男女が安地へと飛び込んできた。片方は白、もう片方は黒。誰だかは、確認するまでも無い。

「おいおい……なんだ幽霊でも見たのか?お前ら」

「リヨ、リヨウ……」

「近い、かもな……」

「はあ?」

疲弊した様子で苦笑を浮かべる二人に、リヨウは眉をひそめて事情を尋ねた。

………

「はあ、悪魔型ボス、ねえ」

「ああ。基本的には二足歩行の人型っぽかったけど……頭の部分が山羊だった」

「神妙な顔で言うキリト。」

「ふむ、そーいやどつか聞いたこと有るな。悪魔は山羊の姿だとか何とか……なんだっけ?あれ」

「あー、どこかで聞いたこと有るけど……ごめん。思い出せないわ」
アスナに問うが、彼女も思い出せなかったようだ。

再びキリトの方に向き直りリヨウは少しでもボスの情報を得るため疑問を投げかける。

「で？武装とかは？見たんだろ？」

「ああ、見た限りはでっかい両手剣が一本だったけど……たぶんそれだけじゃないだろうな」

「特殊攻撃有りってわけか。何して来るんだらうな……？一撃必殺で魂とられるとか？」

「冗談じゃないわよそんなの……」

ため息を突きながらアスナが咳く。まあもしそんなだったらゲームバランスが根底からひっくり返りかねないので、たぶんあり得ないのだが。

そんな神妙な話の雰囲気をブチ壊そうとするかのように、リヨウが口角をにやりと釣り上げる

「っにしても……さっきのお前らの必死さは面白かったぜえ？」

「うぐっ」

「う……」

勿論、目の前の二人をからかうために、ただし……

「そ、それより！もう三時だし、お昼にしましょう！」

「えー！そうだな！そうしよう！腹ぺこだ！！」……っち

アスナの咄嗟の提案により、阻止されてしまった。

小さく舌打ちをesisしたものの、食事はリヨウとしても望むところだったので、特に文句を言わず従い、床に座り込む。

「そっついやお前らの飯なんなの？」

「なんなのって？」

「いや、だつてせっかく料理スキル上げてる奴と一緒に居るのに、いつもの黒パンで済ます気かと思つてな？」

言つてみた途端、キリトがはつとしたようにアスナの方を向く。

そこには、得意げな様子で胸を張りながら笑う職人の姿

「ま、まさか手作り……?」

「と、言ってる腹ペコ剣士がいるが、どうなんだ?」

「……(ポチツ)」

尚も無言を貫きつつ、アスナはメニューウィンドウを操作して手に付けていた白い手袋をはずすと、代わりとばかりに手の中に小さなバスケツトを取り出した

リヨウがちらりとキリトの方を窺うと、その眼には大きく歓喜の色と、ついでに少々打算っぽい光が宿っていた。

『何考えてんだか……』

「……なんか考えてるでしょ」

考えたのとほぼ同時にアスナがそう発したためリヨウは心を読まれたのかと相当に驚いたのだが、それがキリトに向けられた言葉なのだど理解し少々安堵する。

「い、いや、そんなことは……」「嘘つけ」兄貴!

否定の言葉をさえぎると、結構な目で睨まれた。

もはや眼を読まずとも、キリトが何を言いたいかは分かる。「余計な事を言つな」と。

それよりも早く食おう早く食おうと、キリトが急かすのを見てかアスナは苦笑しながらバスケツトを開く。

「へえ……」

「おおお……」

リヨウとキリト(特にキリト)は感嘆の声を漏らす。

中に入っていたのは、丸いパンに焼いた肉やレタス(っぽい)等の野菜を挟んだサンドウィッチだった。

胡椒に近い感じのスパイスの香りが鼻腔を擦り食欲を増進させる。

見ていると、いきなりキリトがそれを手に取り喰らい付いた。

「いただきます”くらい言わんか阿呆」

「(ばくっ)腹 (もぐもぐ)減ったから(ばくっ)」

「あー分かった分かった、呑み込んでから話せ。……それよか四つあるんだな。一個くれよ」

「図々しいって言うか……そこで“一口”って言わないのがリョウだよね……いいわ、私一個で良いから。何時でも作れるし」

「サンキュー。んじゃ、いただきます」

自身で言った通りにしつかり挨拶してから、一口大きくかぶりつく。

咀嚼……嚥下……

「う……うまい……」

「こりゃ、うまいな」

サンドウィッチからは、明らかに現実世界の某ハンバーガーチェーンの物とほぼ同じ味がした。

これは、流石に驚かざるを得ない……

そんな事を思って思わず口から言葉が出るのを自覚しつつアスナの方を見てみると、キリトの方を見つめるその顔には歓喜と少々のお安堵が浮かんでいる。おーおー可愛らしい事で。

その後も、アスナが醤油やマヨネーズなんかを開発していた事に驚いたり、俺が同居人の特製ガトーショコラを振るまい、今度製作者に会わせてほしいとアスナが真剣な顔で言ったりするのをききながら、少し遅めのランチタイムは過ぎて行くのだった……

四十五話 食事は三食（後書き）

はい、いかがでしたか？

ステーキサンドって結構おいしいですよ。

僕は以前にどこかのレストランで食べたことがあるんですが、亮の割にボリュームがあつて、結構腹もちが良かったことを覚えていません。

お手軽に手に入る所だとカツサンドも大好きですね。
たまに見かける「さぼてん」ってお店の奴が好きです。

ご意見ご感想心よりお待ちしております！
では！

四十六話 仕事に誇りを持ちすぎて横柄になる人間だって居る(前書き)

はい、どうもです。

またしてもタイトルの長い話。
さて、誰でしょうか？

では、ごんごー！

四十六話 仕事に誇りを持ちすぎて横柄になる人間だって居る

アスナとキリトの会話を聞きつつ、これまたアスナの調合だと言
う冷たいお茶を飲んでいると、ガチャガチャと鎧が動く時特有のや
かましい金属音を響かせながらプレイヤーの一団が安地に入っ
た。

反射的に顔を確認して、それが顔見知りである事に気が付く。

「おーっすクライン、元気かー？」

入ってきたのは、俺＋キリトの親友兼、攻略組小規模ギルド「風
林火山」リーダー。カタナ使いのクラインだった。

「おお、リヨウ、キリト！暫くだな」

「まだ生きてたか、クライン」

ニヤリとしながらそう言ったキリトに、クラインは苦笑で返す。
なんだかんだいって、此奴とも長い付き合いだ。

俺達二人はソロとして、此奴はギルドリーダーとして、今も立派に
日々攻略に励んでいる。

「あいつ変わらず愛層の無え野郎だな、今日は珍しく二人か？」

「よく見る。三人だ。正確には二人と一人」

俺がそう言うと、クラインはちょうど俺の影となって顔が見え辛
くなっていたアスナの方へと目を凝らす。

「ほお、そりゃほんとに珍しい……な……？」

瞬間、クラインのデータが……もとい思考が完全にフリーズした。
ちなみに言っておくが、このフリーズに関してナーヴギアやその他
のデジタル的なことは一切関係ない。

そんなことを思っている内、キリトが仲介となってクラインとア

スナの紹介を始めた。

それに対し、アスナはちこりと頭を下げたが、未だにフリーズしたままであるクラインは全く反応なし。

キリトがイラついたように肘で脇腹をつつく。

「おい、何とか言え、ラグってんのか？」

この「ラグってんのか？」と言うのは、此処がオンラインゲームであると言う特徴から来る皮肉である。

ナーヴギア以前のネット回線を使用するオンラインゲームには、一つのエリアに対しプレイヤーが集中する等の事態により、サーバー側の処理速度が追いつかず他のプレイヤーに比べて入力したコマンドが発動するのが遅くなったり、チャットが表示が遅くなる「ラグ」。またはサーバーから強制的に落ちてしまう「サーバ落ち」等の不具合が発生する事があった。

しかしながら、ナーヴギアや高性能エラーチェック&ゲームバランス調整システムである「カーディナルシステム」を使用したSAOにはこの手のトラブルは殆ど無い。即ち、「起こらないはずのラグを起こしているのか？」と聞くのがこの皮肉なのである。

閑話休題

聞かれたクラインはと言うと、突然頭地面に打ち付ける気なのかと思われるような勢いでお辞儀をする。

「こ、コンニチハ！クライントイウモノデス！二十四歳独s「余計な事言わんでよろしい」」

訳のわからん事を口走ろうとした阿呆の台詞を途中で遮る、途端に風林火山メンバ―も我先にと自己紹介を始めた。

えーい、むさ苦しい……

そう思い、苦笑しながらふとキリトの方を見ると、少々瞳に暗いものが見えたので声をかける。

「おい、キリト」

「あ、ああ……まあ、リーダーの顔は別として、悪い連中じゃない事は保証　痛って!？」

そこまで行った所でクラインに足を踏みつけられキリトは右足を跳ね上げた。

アスナは面白そうにクスクス笑い始め、俺はため息を突きながらまた苦笑する。

その内、クラインが「どう言う事だ!？」といった様子で此方を睨んだので、面倒事が嫌な俺はキリトを指差して、

「あ、事情ならキリトに聞いてくれ。俺は知らん」

「ちよと、兄貴!？」

「キリト!どおう言う事だあ!？」

「おいクラインちよとと待て!兄貴!」

「自分で処理したまえ〜少年〜」

「ハツハツハツ」と笑う俺にキリトは裏切り者お!とか叫んでいたが、知らん。

そこにアスナが助け船を出す気なのか、進み出る。

「こんにちは。しばらくこの人とパーティ組むので、よろしく」

前言撤回

火に油注ぎやがったよこの娘。……というか。

「結局今後も組むのか?」

「……そう進めたのはリョウウでしょ」

彼らに聞こえないようにボソリと聞いた俺に、同じく小声で答えたアスナ。

そう、実を言うと、今の提案を進めたのは俺である。……というか、昨日来たメッセージに、俺はそれぞれこう返したのだ。

To Kirito

Main いいじゃん。一人より二人だ。たまには組んでみるよ、騎士姫さんなら心配無いだろ。

To ASUNA

Main どうせならそのままの勢いで今後の攻略パートナーにでもなってみれば？

まあ、つまりは今の状況にもろに関係有るわけだが……どうなるかなぞ知った事ではない。

そうこうしている間にも、キリトはクライン及び風林火山メンバーに詰め寄られ、たじたじになる……が、そんな和やかな時間は、新たなプレイヤーの一団の訪れによって終わりを迎えた。

『んっ』

遠くから、やけにそろった足音が聞こえて来た近付いて来ているが……周り連中はまだ気が付いていない。

ちなみにこれは、《聞き耳》の熟練度が高い事によるスキル効果だ。聴力が上がり、隙理を使用しなくても有る程度通常よりも遠くの音を聞き取ることができる。

策敵を発動させてマップサーチをすると、十二個の光点が綺麗な二列縦隊を組んで此方に接近してきている。

これは………

「軍、か？」

そう思った所で、アスナも気が付いたらしく、キリトに注意を飛ばす。

軍の連中は、ちょうど入口から入って来る所だ。

入ってきた軍の面々は相当に疲弊しているようだった。

身に纏った黒鉄色の鎧が重いと主張するように肩を落としている上に、足取りも重いし、剣士らしき六人のうちの五人は、腕に付けた城の紋章が描かれた盾を持つのが辛そうだ。

俺達とは反対側の壁に停止した軍の連中は、他の十一人とは明らかにレベルの違う装備を付けた指揮官らしき男に、「休め」と言われると崩れ落ちるようにその場にへたり込んだ。

男は部下達の状態を情けなく思ったのか、睨みつける様な視線を送った後此方に向かって歩いて来て、俺達の前でヘルメットを外した。

長身の身体の上に乗っていた顔は、短髪に、少々型物っぽい感じの厳しい表情をしていた。

歳は……二十代後半といった所ではなかるうか？いや、もしかしたら三十路に入っているかもしれない。

此方をじろりと一通り見まわした後、男は口を開いた

「私は、アインクラッド解放軍所属、コ バッツ中佐だ」

……「軍」というのは通称だと思っていたのだが、どうやら正式名称になっていたらしい。

しかも中佐とは、佐官と言う事は軍の中でもそれなりの実力の持ち主なのだろう。という事も考えないではないのだが、それ以前に階級付けまでしているとは、意外と凝っているのだろうか？

キリトも、礼儀程度に自身の名前と身分を明かす。

軽く頷くと、コ バッツ中佐殿は突然こんな事を聞いてきた。

「君らはもうこの先も攻略しているのか？」

「……ああ、ボス部屋の手前まではマップピングしてある」

言い方が横柄な時点で既にこの人物にあまりいい印象を抱けなくなった俺だったが、この後続いた言葉は、俺にさらに悪い印象を与えた。

「うむ。ではそのマップデータを提供してもらいたい」

「……………」

何と言うか、流石に横柄過ぎやしないかと思う。

S A Oの世界に置いて、情報は最大の武器だ。

まして未踏破層のマップデータともなれば、売る所に売ればかなりの金にすらなるものである。

それをさも当然だと言うがごとく「譲れ」とは……当然、納得のいかな言い草にクラインが反応し怒鳴る。が、

突然コ バツ中佐は顎を継いだしたかと思うと、演説の様な大声でしゃべりだした。

「我々は、君ら一般プレイヤーのために戦っている！」

「ために」とか言われても頼んだ覚えは無いし、倒したボスの数もマップピングしたマップの距離も俺達の方がずっと多いし長い。

そもそも軍が未踏破層に出て来たこと自体一年ぶりくらいなのだが……しかもまだ続けるらしい。

っつて言うか……

「諸君らが協力するのは当然の「うるさい。耳に響く。黙れ」な……」

……

ギャーギャーとうるさいコ バツ中佐の言葉をさえぎって、俺は思わず声を上げてしまっていた。

言われたコ バツ中佐は一瞬呆けた様な顔をしたが直ぐに気分を害したように俺の事を睨みつける。だが、俺はそれをさらりと受け流してコ バツ中佐が何か言うより先に喋り出す。

「中佐殿が何を言いたいかはよく分かった。マップデータはくれてやるからさつさとどっか行ってくれ。声が五月蠅くてかなわん。」

実を言うと俺は昨日ボス部屋の前まではたどり着いており、そこまでのマップデータはちゃんと持っている。部屋を覗くと言う暴挙は犯していないが。

「貴様……ほら、送ったぞ。早く受け取ったらどうだ」ぐ……」
有無も言わずに俺はマップデータをコ バツ中佐に送信し、その後は片手をひらひらと振る。

それでもまだ何か言おうとするコ バツに、俺は駄目押しの一言葉を放った。

「それと中佐殿。勘違いしないでほしいんだが、此処は何時もあんたらがご立派な精神で他のプレイヤーを護って下さってる中間層じゃねえ。此処にいる一人一人が、この最上層で自分の身を守る程度には強いつて事だけは分かっててくれよ」

「く……失礼する！」

コ バツ中佐は不快そうな表情を隠そうともせず乱暴に体をひるがえし、ボスはやめておけと言うキリトの忠告にもろくに耳を貸そうとしないで、乱暴な足取りで部下を引き連れ上層へと向かって行った。

「つたく……なんにもあんな挑発じみた事言わなくても良いだろ？ 兄貴らしくも無い」

「そうか？……気付かない内に俺も最近ストレス溜まってんのかもな」

「社員みたいね……」

「うるさいぞ、その白服」

そんな事を、足音が聞こえなくなってから話し始めると、クライ
ンが少々心配そうな声で、一言。

「……っーか、大丈夫なのかよあの連中……」

すると、皆一様に真剣な表情をして黙ってしまふ。

これは噂だが、どうやら軍の連中が上層階の攻略を再開するらしい、
という話が、ここ最近広まり始めている。

先程のキリトとの話の態度から察するにも、どうやら彼らはそのた
めにわざわざこの上層階へやって来たのだろう。

「ふむ……しゃあねえ、いっちょ様子でも見に行くか」

「……良いのか？ 兄貴」

「これで死なれてもなあ……あ、お前らは先帰っても「そんなわけ
ないでしょ」「さいで……」

アスナに言葉をさえぎられてしまった。

後ろに居るクラインや風林火山のメンバー達も首肯する。キリトの
方を向くと……

「まあ、これで帰って後でなんかあってもな」

と俺と同じような事を言っただけで肩をすくめた。

途中、出発前に、クラインがアスナにキリトのことをよろしくと
言ったり、キリトがそれにギャーギャー言ったりなどの、面白い事
もありつつ、俺達は第七十四層のボス部屋を目指し走り出した。

四十六話 仕事に誇りを持ちすぎて横柄になる人間だって居る（後書き）

はい、いかがでしたか？

と言うわけでどこの話でも嫌われ者になりがちなコバツツさん。彼はおそらく、今まで中間層あたりで他のプレイヤーの面倒を見て生きていたのではないかと僕は見えています。

そつでなきゃ、あの横柄な態度が地つてことですからね……流石にそれは……無い……たぶん。

ま、まあそんなこんなで珍しくリョウコウがイラつきを見せたりしたお話でした。

ご意見ご感想お待ちしております！
では！

四十七話 輝眼の悪魔（前書き）

はい、お久しぶりです。

テストがようやく終了したため投稿を再開できます！

では、今回はいよいよSAO作者のみなさん大好きあの人が登場です！

では、どうぞ！

四十七話 輝眼の悪魔

「ぬう……………」

リヨウは唸った。

久々に、こういう時の自分の不便さに気が付いてしまったのである。

「敏捷値低いつて不便だな……………」

今更なのだが、リヨウは極端に敏捷値が低い。

当然、どう頑張ってもスピード型の剣士であるアスナはおろか、それなりにしっかりと敏捷値を上げているキリト、同じくクライン及び、その限りでは無いはずの「風林火山」のメンバー達にまで、足の速さでは圧倒的に劣る。

というのは、リヨウの（というかSAOの）戦闘領域はあくまでも近・中距離に限られるのであり、本来ならば長距離のダッシュというのは最悪の場合、すなわち逃走する場合のみしか使用しないからだ。

プレイヤーが元々として敏捷値に求めるのはあくまでも攻撃や、咄嗟の反応の速さ、間合いを詰めるスピードで有り、疾走。即ち継続的な速さというのをリヨウは余りにも軽んじていた。その結果が……………これである。

「くっそ、やっぱ早すぎるぞあいつ等……………」

現在、一人。

様子を見に行く提案をした本人にもかかわらず、一人。足の速さにより、他のメンバーに追いつけず、自分から言い出しておいて置いて行かれて、一人。

「えっほ、えっほ」

キリト達と別れて、既に十分。此処に来るまで、キリト達も軍の連中に追いついていないのか誰にも追いついていないが……しかしこの状況では、今この時だけ、筋力値を全て敏捷値に変えられやしないかなあ？なんて、ありもしない事を思ってしまうも仕方ないというものだろう。

「はあ………」

この先の道のりもあり、タメ息をついてしまった。と。メッセージの新着音が耳のなかで涼しげな音を立ててに鳴り響く。

「ん？……っ!？」

From Clain

Main 急げ

読んだ瞬間、リヨウは跳躍した。

跳躍移動で長距離を移動するのは結構な集中力が必要であり、精神的にも疲れるのだが、そんな事を言ってももらえないらしい。本当なら「奥の手」を使いたいのだが、今は待機期間だ。と言っか……

『これはいざって時のための最終手段なんだから!？』

義弟に言われたあの言葉の意味を、体感しないと覚えなとか自分分は馬鹿かと、リヨウは自身を叱責するしかない。とにかく、今は急ぐ。

『くそっ……!』

有り得ない。

軍の攻略部隊隊長だった男。

コ バッツの最後の言葉は、無言のそれだった。

言葉の通り、彼は最後の最後まで、自分の身に起こった事や事態を受け入れられていなかったのだろう。

そう言った次の瞬間、彼は一瞬で自身の身体をポリゴンの欠片として四散させた。

あまりのあつけなさに、隣に居たアスナが小さく悲鳴を上げる。

余りに無謀。

そしてボスへの対処の仕方を知らない無知。

この二つが重なり、既に敗北寸前だった軍の部隊にとって、曲りなにも指揮官たるコ バッツの死亡は見事に最後のとどめとなった。

戦線は瓦解し、軍の人間達は逃げ惑う。

この時点で、既にこの部隊は撤退すべきなのだが、走って逃げようとすれば間違いなく中央に居るボスモンスター《The Gleameyes》の餌食だし、性質の悪い事にこの部屋はボス部屋には珍しい《結晶無効化空間》（回復、解毒、転移等の、全ての結晶アイテムを無効化するプレイヤーにとって最も注意すべき空間トラップ）であったため、それすらもままならない。

既に軍の全員がHPバーを半分を切っている中、キリトは必死に事態を収拾する方法を脳内で模索する。が、

「だめ……だめよ……もう……」

喉の奥から思わず出て来た様と言った風なアスナの言葉に、キリ

トは意識を現実引き戻され、咄嗟に彼女の腕を掴もうとした……しかし、一步遅かった。

「だめ　　ッ!!」

手が届くギリギリの所で、アスナは一気にグリーンアイズに向かって駆け出す。

「アスナッ!!」

「ええい……どうとでもなりやがれ!!」

こうなってしまうては最早仕方が無い。

キリトも抜剣しながらアスナの後を追いつ、続いてクライン達も「オオoooooooooooo!!」と言つときの声と共に部屋の中へと突っ込む。

キリト達の戦闘開始の初撃。

アスナの捨て身とも言える突進攻撃は、此方とは逆方向を見ていたグリーンアイズの背を捉えたが、体長三メートルを超えるであろう巨大な蒼い悪魔に対し、一撃の攻撃力を特化させたタイプでは無いアスナの攻撃は蚊が刺した程度なのだろう。

るくにHPバーは減らず、むしろ悪魔の注意をこちらに引き付けただけの一撃になってしまう。

自身を傷つけんとする愚かな乱入者に対し、部屋の主たる巨体の悪魔は怒りの声と共に向き直り、凄まじいスピードで斬馬刀の様な巨剣を振り下ろす。

それを何とかステップで横に回避したアスナはしかし、避けきる事は出来ずに余波によって地面に倒れ込む。

彼女の目の前にいる悪魔がその隙を逃そうはずも無い。

グリーンアイズはもう一度振り上げた斬馬刀を情けも容赦も無く振り下し

「アスナ　　ッ！！」

そこにギリギリのタイミングでキリトが飛び込み、手に持った愛エリュ剣シテータによって何とか攻撃軌道を逸らした。

「下がれ！！」

後ろのアスナ達に向かって怒鳴りつつ、キリトは追撃に備えて剣を構え直す。

振われる悪魔の剣はその一撃一撃全てが圧倒的な威力を孕んでおり、反撃どころか距離を取る事すら難しい。

人型でなおかつ武器を持つモンスターは原則として、プレイヤーと同じく剣技ソードスキルを使う事が出来る。

グリームアイズもその例に漏れず、両手大剣技を打ち出してくる。それ自体は良い。

しかし、プレイヤーの物とは微妙に違いがシステムによって付け加えられており、先読みする事も難しい。

武器防御バライ、ステップ、自身の知る限りのあらゆる手段持ってキリトは防御に徹するが、その凄まじい威力を持った斬撃の嵐は、キリトの身体を掠める度、確実に彼のHPを削って行く。

「くうっ！？」

捌ききる事が出来なかった一撃が、ついにキリトの身体を捉え、そのHPバーを大きく減少させる。

アスナが悲鳴じみた声でキリトの名を呼ぶが、それすらもキリトの耳には届いていない。

今、此処には囷となってボスの攻撃に耐える役である壁戦士タンクが一人も居ない。

現時点で状況を打開するには、最早キリトには攻撃特化仕様たる彼の切り札を使う以外に方法が無かった。

それには本来、色々と不都合が伴うのだが……今はそんな事を言っている場合では無い。

ただ、それには少々メニューウィンドウを操作する時間がある。

その時間稼ぎを、同じくタンクでは無いアスナとクラインに任せるのは非常に不安が残るが、今最も此処に居てほしかった人物は此処には居ないため仕方ない。

キリトは後ろの二人に向かって叫ぶ。

「アスナ！クライン！十秒もちこたえて「十秒で良いのか！？少年！……ふう」

その声を聞いた瞬間、まだ何も解決していないにもかかわらず安堵の息を漏らしている自分がある事に、キリトは内心苦笑した。

「遅いんだよ！クソ兄貴！」

「十秒で良いのか？少年！」

そう叫びながら、俺はキリトに向かって斬馬刀っぽい巨大剣をふるっていた頭が羊の巨体の顔面に白いライトエフェクトを纏った跳び蹴りをブチ込む。

足技 重単発技 流星脚（まほろしほしゅうきゃく）

「グオオオオ！？」

顔面に蹴りを喰らった悪魔は大きくのけ反る。

着地点はキリトと悪魔の丁度間、地面に足を突いた瞬間に後ろから義弟の怒鳴り声を喰らった。

「遅いんだよ！クソ兄貴！」

「なっ！？しょうがねえだろ！！お前等じゃねえんだから！
で
！？十秒つてのは？」

「ああ、「あれ」使う！もうちょい延長で時間稼ぎ頼む！」

「脱出は！？」

一応跳んだ時、上から見て状況は察した。この状況では脱出して時間を稼ぐのが最も好ましいはずだが……

「結晶が使えない！時間がかかり過ぎる！」

「っ！心得た！」

まさかボス部屋が《結晶無効化空間》になっているとは誤算だった。

そうなると、此奴を倒しにかかったほうが良い。素早い転移での脱出が不可能な以上、最後に残る殿の脱出が危険すぎるし、徒歩で脱出するにしても、中央で大戦闘をしてはそれも難しいからだ。

そこまで話した所で、悪魔が再び立ち直り、咆哮した。

「グオオオオオオオ！！」

「っち、なるべく早くな」

「分かってる、頼んだ！」

「任せろ！」

その会話を最後に、キリトは後ろへと下がった。

俺の眼前には三メートルを超す巨躯を持った蒼い悪魔が眼をららんと輝かせ、此方に向かってくる。

正直凄まじい威圧感だが……まあ何とかなるだろ。

「オオオオオオオ！！」

「むん！」

床を削るがごとく、下からすくい上げるように振われた大剣を、

冷裂を横にして防ぎ、ついでにバックステップで威力も逃がす。慣れている事をしたが、何度か見た技術ゆえか何とかうまくいった。これを見せてくれた連中には感謝だ。

しかしこのくらいの威力なら……

「ガアアアアアアアアアア！！」

「おっ………羅ア！！」

大上段から振り下ろされた斬馬刀を、今度は振り上げるように振った冷裂によって真正面から受け止める。

金属同士がぶつかり合う凄まじい音と共に、俺とグリーンムアイズ双方の武器が止まり、鏝迫り合いの様になる。

「グルルルルル……」

「うおおおおお……」

たがいに唸り合い、相手の武器を押しこもつと武器に力を掛け続ける。

本来ならば、上から切り下ろす力であるはずのグリーンムアイズの方が勝るはずなのだがしかし、冷裂は、徐々に悪魔の持つ斬馬刀を押し返し始めた。

ダッシュで遅れた分、無駄に筋力値を上げていた訳ではないと言
う事を………教えてやる！！

「うっ………オオオオオオオオ！！」

「ガア！？」

瞬間、筋力値を最大にして冷裂を押しこんだ俺は、悪魔の持つ斬馬刀を大きくはじいた。

グリーンムアイズは剣を持ったま万歳するような体制を余儀なくされ、大きな隙となる。

「割れる、山羊頭ア！」

振り上げた勢いのまま、俺が先程の此奴のように大上段で構えた冷裂の刃が、赤黒い光を帯びる。

「破アアアアア！！」

薙刀 重単発技 剛断こうたん

振り下ろされた一撃は、グリーンアイズの左肩に命中し……その腕と胴体を、分離させた。

四十七話 輝眼の悪魔（後書き）

はい、いかがでしたか？

グリームアイズはSAOの中でも一番最初に出てきたボスとして、読者の印象に強く残ったボスの代表格ですよ。

キリト君の無双っぷりが証明された場面でもありました。

なので今回は少々リョウも無双っぽくしようと思っ……こんな事にW

いや、部位欠損がプレイヤーにありで、植物系モンスターのツタが切れるのなら、もしかしたらボスの部位欠損も可能なのではないかな？と思っただんですが……いかがでしょう？

ご意見ご感想心よりお待ちしております！
では！

四十八話 双刀の黒衣（前書き）

はい、どうもです。

取りあえず前回に続き、グリーンムアイズ戦です。

では、どうぞ！

た右腕で斬馬刀を持ち、抵抗する様にそれを振るうが、片腕を俺が切り飛ばしたため奴のメインスキルである両手大剣技を発動させる事が出来ず、脅威が半減している。状況だけを見れば、攻撃するという点でキリトにとってはこれ以上ないチャンスと言えよう。

だが、だからと言ってグリームアイズの筋力値が消えてなくなつた訳ではない。

悪魔は片手でも軽々と斬馬刀を振り回し、その度にキリトのHPは確実に削られていく。

しかしアドレナリンが過剰分泌されているのか、それすらもキリトは意に介することなく二刀流のソードスキルを繰り出し続けて行く。ある意味で、狂気すら感じさせる姿だ。

「キリト君……」

「キリトお……」

アスナとクラインが、不安げな声を出す。

その横で俺は何をしていたかと言うと……凄まじい速さで動くキリトの剣を眼で追っていた。

『1 1、1 2……1 3、1 4、1 5……』

繰り返され続ける連撃。

みるみるうちに、悪魔とキリトのHPが減って行く。そして……

「……………ああああああ！！」

『1 6！』

キリトが喉よ裂けよとばかりに咆哮しながら放った十六発目の突きが、悪魔の胸に吸い込まれるように直撃した瞬間。

まるでその存在がまるで幻だったかのように、蒼い悪魔は断末魔の叫びを残して四散した。

と同時に、キリトは糸が切れた操り人形のように床にうつ伏せで倒れこむ。

『《スターバースト・ストリーム》……』
キリトから聞いていた特徴から、あいつの使った技を推測する。

『一発じゃ慣れねえとはな……』
あのスピードは異常だった。

いや、スピードに関してのみ言うならば、アスナの方がキリトよりも勝っているだろう。

しかし、それをおいてもなお、あのスピードである連撃を繰り出し続ける姿には、正に別次元とも言うべき強さが垣間見えた。

俺の物とはまた違う、圧倒的な攻撃力。

『こーりゃあいつにも届くんじゃねえのか……？』

アスナ達が名を呼びながらキリトに駆け寄る姿を見ながら、俺はそんな事を考えていた。

気絶したキリトが目を覚まし、アスナに叱責されたり、クラインから被害の報告を受けたりしている。

結果として、第七十四階層フロアボス。輝く目こと、《The Gleameyes》討伐戦は、軍の無謀な突撃に救援を行った少数の攻略組プレイヤーによるギリギリの勝利と言う、少々奇妙な形で終わりを告げた。

被害としては、軍の精鋭部隊から、コバツ中佐を含む三名が

死亡。

幸いなことに、俺達攻略組の人間に死者は出なかったが、《一人の死者も出さない》と言う事を目標に攻略を進めているSAOの攻略としては辛勝と言えるだろう。

そんな事を思っている内、どうやら話は進んでいたらしい。

クラインが、キリトに切り札について興奮気味に詰め寄っている。

エクストラスキル 《二刀流》

本来、SAO世界には存在しないとされてきた二つの剣を同時に扱う技術。

二刀流の能力をスキル化したものらしい。

専用に、異常な攻撃回数を持つソードスキルが設定されており、俺の知る限り最も攻撃能力に特化した武器スキルと言えるだろう。

ちなみに、《エクストラスキル》と言うのは、そのスキルの出現する条件が、まだはつきりとは確定されていない武器スキルの事だ。身近な物としては、クラインの使う《カタナ》のスキルや、もつと分かりやすい所では俺の《薙刀》もそれに含まれる。

まあ、《カタナ》については曲刀の武器スキルを使いまくっていれば出る場合が多いし、俺の《薙刀》に至って言えば、「両手槍系ソードスキルの中で、槍その物を薙いだり、はらう等するスキルを多様すれば出る」と言うのが、最早定説となっている。

ちなみに、どちらのスキルも持つてる奴は少なくとも十人以上居るはずだ。

が、キリトの二刀流及びゴープの団長の持つとあるスキルに関しては、まったく別。

この二つのスキルは、どちらのスキルも習得者が一人しかいない、言うなれば《ユニークスキル》

超が付くほどの、レアスキルなのである。

そんな訳なので、キリトは今日まで、自身の中のこのスキルの存在を、ひた隠しに隠して来た。(俺に関しては、キリトのスキル及びステータスを見る事が出来たため、隠しようが無かったのだが) 何しろ、ゲームマニアの集まるSAOである。

もともとMMORPGに有る、「リソースの奪い合い」という特徴もあって、原則的にネットゲームをプレイする者たちは他人の利益及び優位性等に、とても敏感に反応する。様は、妬み嫉みが多い。

《二刀流》なんて言う一人しか持っていないなんてスキルも持っていれば、周囲の反応はさぞかし大仰な物になるだろう。

目立つ事があまり好きではないキリトは、それを恐れた訳である。

ちなみに、本人も気づいているだろうが今のキリトにはもう一つ、妬み嫉みを受ける理由がある。

今も胸に泣き付かれてるし………どういふ事は言うまでも無い。

その後、クラインは軍の連中に今回の報告をするよう指示し、7層の転移門を開放する^{アクセシベント}といつて、上層へと続く階段を上って行った。

『キリトよ、おめえがよ、軍の連中を助けに飛び込んで行った時な………おれあ………なんつうか、嬉しかったよ。そんだけだ、』

最後に、友人思いのあいづらしい言葉を残して。

「ふう………んじゃまあ、俺も帰るわ。流石にいきなりボス戦とか、きつつ」

「ああ……兄貴もありがとな。腕無くなって無かったら、正直危なかった」

背中に、キリトの声が投げかけられる。

幾分か真剣味を帯びたその声に対し、おれは何時ものように笑って、転移結晶を取り出しながら首だけ振り向いてキリトに言った。

「まあ、遅刻した料金みたいなもんだあれは。……それよか、早くそれを何とかしてやんな」

う……と言って黙ったキリトに、俺は再びニヤリと笑って……

「転移！コラル！」

その後は何も言わずに、二人の前から姿を消した。

その晩。

もう何度目かも分からないが、再び、俺の寝室にて新着のメッセージが届いた事を知らせるチャイムが鳴る。

「ん、」

メッセージには、字には感情は表れない。

しかし、その文字の羅列から、俺は容易にキリトの迷いやある意味での苦悩を感じ取ることが出来た。

From Kirito

Main 俺は、また求めてもいいのかな？

「……………」

T o K i r i t o

M a i n 今のお前なら、自分の答えが分かるはずだ。

四十八話 双刀の黒衣（後書き）

はい、いかがでしたか？

SAOキリトの代名詞ともいえるユニークスキル《二刀流》
彼が主人公足る象徴ともいえるものだと思います。

そう言えば某有名オンラインゲームで戦う系RPGの主人公も双剣
士ですよな。

やっぱりみばえてきなもんだいだろうか？

ご意見ご感想お待ちしております！
では！

四十九話 短気は損気（前書き）

はい、どうもです。

一巻の範囲もだんだんと中盤に差し掛かって行きます。
今回は、ちょっとした回想的なものです。

では、ごうござい

四十九話 短気は損気

第七十五層 主街区 コリニア

その都市は、今、稀に見る活気に包まれていた。

ガヤガヤと、人混みが出す特有の喧噪の中から、食べ物や飲み物を売り込む景気のいい声がリヨウの耳にも飛び込んでくる。

リヨウは、先程その店で買った焼き栗……っばい味のする緑色の木の実が大量に詰まった袋を片腕に抱えて、パクパクと食いつつ人の波の中をのんびりと歩いていった。

目的地は此処、コリニアにある、観光名所となる事間違いないであろう中世のコロセウムを思わせる巨大な建造物である。

この喧噪は、今日がこの街の転移門が開放アクティベート。通称、《街開き》が成されてからまだ二日目である事に起因するものだ。

剣士は勿論の事、商人、職人プレイヤー、また、攻略に参加する訳で無いにしろ上層の街は見てみたいと言う観光客等が詰め掛け、この活気なわけである。

特に、観光客の数は多い。

例えば、《はじまりの街》にゲーム開始直後から籠っている人々にとっては、新しい街を見る事が出来ると言うのはこの上ない娯楽だ。

人間にとって、最も脳を刺激してくれる物と言うのは、良くも悪くも「新しい物」だと言われている。

今まで見たことも無い様な事、感じた事の無い感覚。

それこそが、人と言う種族の脳にとってはこの上ないごちそうなのだ。

でなければ、日々新しい商品を開発する企業の皆さんは、躍起になつて「新感覚」だの「新開発」だのと言う謳い文句を広告に掲載したりはしないだろう。

まあ、それは同時に「経験が無い」と言う事でもあるので、その刺激が悪い事であった場合、パニックやネガティブを起こす原因にもなってしまうのだが。

閑話休題

さて、前述したように、今日この日、このコリニアが此処まで賑わっているのは、《街開き》が最も大きな要因だと言って良い。しかしながら、それと同時にもう一つ、今日に限ってのみ大きな要因となっている出来事が有る。

黒の剣士VS聖騎士ヒースクリフ……いや、もとい。

二刀流VS神聖剣

現在リヨウが向かっているコロセウムの中で、こんな大イベントが行われるのである。

それが決まったのは、つい昨日の事だ。

「はあ？んで易々と挑戦受けたのかお前は」

「そうなの、私が説得するために頑張ろうとしてるのに、いきなり

「デュエルで決着付けましょう」だよ！？信じられないよ、もう！

「うぐ……申し訳ありませんでした……」

前日に、いきなりのボス攻略と言うバカをやらかしたため、リヨウはその日休暇を取る事にして、珍しく遅めに家を出てエギルの店

へと行ってみた。と、店主に「二階で面白い物が見られる」と言われ、上がる。

二階には、揺り椅子に座ったキリトが肘かけに座ったアスナにポカポカと殴られていると言う記録結晶にでも収めたくなる光景が存在しており、なんだか居てはならない様な気がして部屋を出ようとした所で、キリトからリヨウにヘルプコールがかかった。

で、何とかアスナを止め、事情を聞いて、この状況である。

どうやら、アスナが暫くギルドを休んでキリトと攻略パートナーを組もうとギルドに休暇申請をした所、団長殿に面倒な条件を提示されたらしい。

キリトとの立ち合いがしたい、と。

ギルド「KOB」リーダー 《聖騎士》 ヒースクリフ

キリトと同じく、ゲーム上に習得者が一人しかいないユニークスキル、《神聖剣》有し、SAOの中でも最強の男として名高い剣士である。

同時に、攻略組最強のギルドのトップでもあるため、なし崩し的に攻略組全体のトップと言う事になるが……彼自身が攻略に口を出して来ることは少なく、どちらかと言うとボス戦闘の時等に無言で前線を支える様な、攻略組の連中にとっての「心の支え」的な人物だ。

そんなかの剣士が、一剣士にデュエルを挑むと言うのは非常に珍しい。

と言うか、初めてじゃないか？とリヨウは思う

何でいきなり？とか、色々と疑問はあるがとにかく、アスナがギル

ドを抜ける条件として、彼はキリトとの立ち合い。即ち決闘^{デュエル}を提示して来たのである。

しかしながら、キリトを面倒事に巻き込みたくないアスナはこれを拒否。

ヒースクリフが譲らないため、一度キリトの所へと戻り、相談の結果、キリト自身が直談判する事となったらしいのだが……

「断りに行って自分でデュエル受けて来るとか、阿呆かお前は」

「……もう、勘弁してください」

易々とヒースクリフの誘いに乗り売り言葉に買い言葉と言った形で、試合の約束を自分からしてしまった訳である。

アスナが怒るのも無理は無い。

「けどさ、一撃終了のルールなんだし、そこまで心配しなくても大丈夫だって」

「まあ、決めたのならとやかくは言わねえが……そう言う事じゃないんだよなあ」

「う~~~~~」

その通りだと言いたげに、アスナがキリトを睨みながら唸っているのを見て、慌ててキリトは慰め始める。

「ま、俺にはどうとも出来んしな、頑張れ。あのおっさ……団長さんは言うまでも無く強敵だが……やるからには勝つ気で行け」

そう言いつつ、リヨウは立ち上がる。

何時までも居ても仕方ないし。色々したい買い物も今日は考えていたからだ。

「ん、おう」

「でも負けたら、私が休むどころか逆にキリト君がKOB入りなん

だよね……リヨウはそれでもいいの？」

そう聞いてきたアスナに、リヨウは首だけで振り向くと、何時ものようにニヤリと笑って言った。

「俺は別にそいつの進む道に関してとやかく言いつもりはねえよ。それにな、キリトにとっちゃあながち悪い条件でも無いかもしれないぞ？」

「ええ？何それどういう事」

問いかけに、肩をすくめることで答えて、リヨウは扉を開いて外に出た。

スキル《聞き耳》起動

『……どういう事？』

『ああ……いやその何と云うか』

一度会話が止まる、さて、キリトが何と云うか、リヨウとしては義兄という立場からも非常に注目度が高い所である。

『俺はその、アスナと一緒にいられれば別にどんな形でも良いんだ』

『……うん』

しばらく沈黙。

トン、と言う音につづいてトコトコトコ……という窓側へと歩く音。振られただろうか？

少々リヨウは心配になったが……
続いてもう一つ、コツコツという靴音が同じ方向へと響き……最後に、ポストと言う柔らかい布同士が当たるような音が聞こえた。

策敵スキルを使うと、二人が窓際で並んで立っているのが確認で

きる。

「……………」

リヨウは笑う。

しかしそれは何時もの企んだようなニヤリとした笑顔ではなく、優しく、暖かい目をした、頬笑みであった。

「…………… 転移、リンダース」

転移結晶を持ち、小さく呟くと、淡い青色の光が誰にも気づかれずにリヨウを包み…………… 次の瞬間には、そこには誰もいなかった。

四十九話 短気は損気（後書き）

はい、いかがでしたか？

コロセウムに向かう途中のリョウが、何だかんだで前日の事を思い出すだけのシーンでしたが……

まあ、何時もの過程です。

今回は多分ヒースさん対キリトになると思います。

では！

五十話 二刀流VS神聖剣(前書き)

はい、どうもです。

と言っわけで今回はヒース対キリトです。

では、どうぞー！

五十話 二刀流VS神聖剣

前日の事を思い出しながら歩いていると、ようやくコロセウムの入口へと辿り着いた。

近くで見ると一段とでかい。

その上、コロセウムの前は最早出店だらけとなっており、完全にお祭り騒ぎである。

『キリトの奴ぼやいてんだろうな』

苦笑しながらそんな事を思いつつ、コロセウムの中へと入る。

既にクラインとエギルが、席を確保してくれていた。

「おう、リヨウ。遅かったじゃねえか」

「ギリギリだな？」

「ああ、ま、あんまり待つのは性にあわねえんだよな」

クラインとエギルがそれぞれ言って来るのに、そう答えつつ、席に座る。

丁度、キリトとヒースクリフの二人が入場してくる所だった。どうやら本当にギリギリだったらしい。

「なあリヨウよう」

「ん？」

クラインの問うような声に、一文字で答える。

互いに、視線はコロセウムの中心に向いたままだ。

「キリトとヒースクリフと、どっちが勝つと思うよ？」

「おっさん」

「即答かよ！？ちったあ義弟おとこ信じてやんねえのか？」

やたらと熱くなってまくしたてて来る所を見るに、クラインはど

うやらキリトを応援する気らしい。
まあ、此奴なら当然とも思えるが。

「つてもなあ……やっぱおっさんが勝つと思っぜ？これ」

「ああ？何でだよ？」

「……カンだ！」

「またかよ！？」

「っ！かおっさんって……怖いもの知らずだなリョウ」

いつの間にか漫才の様な会話になっているが……さいこのエギルの台詞は聴こえなかった事にする。

「それより、ほれ、始まるぞ」

「ああ。すまんクライン、終わるまで話しかけないでくれ？」

「お、おう。わかった」

俺はコロセウムの中心に立つ二人を注視する。

キリトは《エリユシデータ》と《ダークリパルサー》正面中段に
ヒースクリフは十字盾を壁のごとく正面に構え、その後ろで細身の
長剣の切っ先をキリトの方へとぴたりと向けて。
既に此方の歓声は彼らには聴こえていないだろう。集中しているの
が此方からでも分かる。

それを見ながら俺自身も段々と自分の集中力が上がってきている
のを自覚する。

視界の中心の二人が大きくなって行き、周りの音が遠ざかる。

「……………」

俺の視界の二人が極限まで大きくなったところ、突然キリトが動い
た。

試合開始である。

『 1、 2』

突進した所から見るに、あの技は突撃技の《ダブルサーキュラー》だろう。

一応二刀流の剣技だが、あんなものは挨拶程度の物だ。反動によって距離を取ったキリトは再びヒースクリフと対峙する。

これに対し、ヒースクリフは盾を前に掲げて突進していく。盾の後ろに長剣を構えている所を見るに、キリトに手の内を読ませないつもりだろう。

それにしても、あれだけ重そうな鎧を着ていながらよくまああれだけのスピードで動ける物だ。

流石は……と言ったところか。

これをキリトは走って回避しようと、盾を持っている。即ち剣を振るう事が出来ないヒースクリフの左手に回り込もうとする。が、あるうことかヒースクリフは盾その物を水平に構え、白銀のライトエフェクトと共に打ち出したではないか！
成程、どうやら《神聖剣》死角は無いらしい。

不意を打たれたキリトは、それをギリギリのところまで剣を×の形に構えて受け止めるが、勢いを殺す事が出来ずに後ろへ吹っ飛ぶ。空中で回転すると言う超人的な身体の使い方によって体制を崩す事は避けたキリトだが、その隙を逃さんとばかりに、ヒースクリフは追撃をかけに行く。

『 1 …… 2、 3、 4 …… 5、 6 …… 7、 8』

かなりの速さの八連撃だ。アスナより少しばかり遅い程度、と言ったところだろうか？敏捷値も大したものである。

しかし、まだ勝負は終わらない。

それを全て二本の剣でさばききつたキリトは、最後の一撃をふさいだ時の勢いを利用して構えを取り、単発重攻撃《ヴォ パル・スト ライク》を放つ。

その一撃は十字盾の中心へと突き刺さりヒースクリフをふっ飛ばしたが、彼は大した衝撃を受けた様子も無く、軽いステップで体制を立て直す。

「
「!
」

間合いが離れた所で、二人は何か言葉を交わしたようだったが、すぐに互いに接近し、剣劇の応酬を始める。

『1 …… 2、3、4 …… 5』

『7、8、9 …… 10、11』

『3、4、5 …… 6、7、8』

『2、3、4、5 …… 6、7、8』

繰り返される連撃技の、その全てを眼に収めて行く。

すさまじい速さで振られる二人の剣に、段々と俺の眼が慣れて行く
……

中学一年生くらいの時だっただろうか？

進路指導か何かの一環で渡された紙の、自分の長所を書きなさいと書かれた欄に、俺は迷わずこう書いた事が有る。

・ 勘。

・ 集中力。

・ 何にでもすぐ慣れる事が出来る事。

周りの友人には苦笑されたが、これは事実だ。

スポーツだろうが数学の公式だろうが英語だろうが、あらゆるもの

に関して俺は集中的に考え、見て、聞いて、実際に行動する事で直ぐに慣れる事が出来る。

慣れるだけ、と言う事を軽んじる人間と言うのは多いが、実際の所、人間と言うのは慣れれば大抵の事は出来るようになるのだ。

その優位性が、この世界に来てから此処まで役に立つとは思っていなかったのだが……

とにかく。俺はあらゆる人物の動きやそのスピードに対して、殆どの物は集中すれば初見で慣れ、二度目からは対処が効くようになる。まあ無論、身体が動かなければどうしようもないが……

そして俺は今回の試合で、ヒースクリフの《神聖剣》とキリトの《二刀流》この両方のユニークスキルの動きと速さに、完全に慣れるつもりでいた。

『5、6……7、8、9、10』

『1、2、3……4、5、6……7、8』

『9、10……11、12』

最早俺の眼は完全にキリトとヒースクリフの動きを捉えきつていた。

今なら、彼らの次の動きを見てからでも何とか対処が出来るかもしれない等と思い始めた時、一気にキリトが攻勢に出た。

「らあああああー！」

『1、2、3、4、5……6、7、8、9、10……』

此処からでも聴こえるほどの咆哮と共に、二本の剣尖が次々にヒースクリフに叩き込まれていく。

その凄まじい連撃に、段々とヒースクリフの対処が遅れてゆくのが見える。

これは……行けるか!?

「11、12、……13、14、15、1……なっ!？」

最後の一撃が十字盾のガードを抜け、ヒースクリフへと命中しようとしたその瞬間、ヒースクリフの盾が有り得ない動きを見せた。人間の、否、ポリゴンがぶれる、即ち“システム”の限界すら超えたと思わせるスピードで盾が左へと動いたのだ。

それにより、キリトの最後の一撃は見事にガードされ、発生した硬直時間により動けないキリトへと見事にヒースクリフの一撃がヒット。

デュエルは決着となった。

「かーっ!おしかったぜキリトの奴!最後のは行けると思ったんだがよう!」

試合終了後、リヨウ達はキリトに祝敗会、もとい残念会言う妙な物を開いてやろうと、アルゲードの中を歩いていた。

「まあ、ヒースクリフ相手にあそこまで互角にやり合ったんだからな、流石はウチの常連だ」

「……………」
「いやそりゃ関係ねえだろ。それなら俺だつてなあ?リヨウ」

「……………」
「おい、リヨウ?」
「……………」
「ん?ああ、わりい。聞いて無かった」

反応の無いリヨウの顔を、クラインが怪訝そうな表情で覗き込み話しかけるとやっと反応が有った。

「なんだ?キリトが負けた事にでも納得行かないのか?」
訪ねたエギルに、リヨウは肩をすくめながら返す。

「いやいや、相手はあの神聖剣だしな、負けたっておかしかねえさ」「んじゃどうした？」

今度はクラインだ。

それに対して、リヨウは今度は首を横に振った。

「なんでもねえ。ちいとボーツとただけさ。」

「ならいいけどよお……………」

「まあ、追及しても仕方ない。そう言う事にしとけクライン」

「お、おう……………」

上手く胡麻化してくれたエギルに感謝しつつ、リヨウ達はエギルの店へと向かう。

『……………』

色々な事を、考えながら

S i x t h s t o r y 《終わりが始まる時》完

五十話 二刀流VS神聖剣（後書き）

はい、いかがでしたか？

と言うわけで、戦闘の中でリヨウのスーパー性能の秘密三つを明かしてみました。

ぶっちゃけると、筋力値に極振りレベルの事をする、戦闘についていくためにチート気味なプレイヤースキルを使う以外方法が思いつかなかったのです……すみません。

此処からまた、少し話が空きます。

ご意見ご感想、心よりお待ちしております！
では！

五十一話 疑問と回想（前書き）

はい、どうもです！

少々時間をあけまして、復活いたしました！

ただ、ここから一週間ほど部活の演奏会等で忙しくなりそうなのですが……

では、ごんごぞー！

五十一話 疑問と回想

「キリト君にさ……聞きたい事が有るんだよ……ね」

「え？」

アスナからその問いがキリトに飛んだのは、ヒースクリフとの勝負が終わった二日後の事だった。

「どうして……どうしてギルドや人を避けるの……？」

「……っ」

「……………」

「っはっはっはっは！！似合わねー！！」

「兄貴イ！！」

爆笑しながらそう言った俺に対し、キリトが怒鳴る。その横ではアスナがクスクスと笑っている。

今日の朝、攻略に出ようかと転移門をくぐろうとした俺に、まるで狙ったかのようにアスナから、エギルの店に来るように言われた。何事かと思いついてみると……何時もの安楽椅子に座ったキリトと、その肘掛けに座ったアスナが居て、キリトが白服に赤十字と言う何時もとは正反対のおめでたい恰好をしていた訳である。

いやいや、あえて言おう。凄まじい違和感である。

何しろ普段から真っ黒だったこいつがいきなり真っ白だ。ホワイトハウスが真っ黒になったとしても、此処まで違和感はあるまい。

「だから地味な奴っていたんだあ！」

「うーん、これでも十分地味な方だよ？大丈夫！似合ってるよキリト君！」

「今似合わないって言った奴が目の前にいるって！」
天井を仰いで叫ぶキリトにアスナが慰めるように声をかけるが、逆効果だったようだ。

キリトの纏う空気がズーンと重いものになっている。

「ゲホツゲホツ……ふう……それよか、お前がギルドになあ……」
小さくつぶやいた声は、盛り上がっていた二人に届いたらしく、四つの眼が此方を向く。

「俺もまさかこんな事になるとは思ってたな」

「だよなあ……」

俺とキリトが二人でしみじみとした空気を醸し出していると、突然アスナが申し訳なさそうな顔をした。

「同じギルドのメンバーになれたのは嬉しいけど……なんかすっかりキリト君の事巻き込んだね……」

その言葉に、俺は笑って返す。

「良いって良いって、此奴にもいい機会さな」

「何で兄貴が答えんだよ？」

横でキリトがぶうたれたが、「嫌なのか？」と聞くとすぐに「そうじゃないけどさ」と返って来た。素直な奴だ。

と言うか、そう言えば俺はこのために呼ばれたのだろうか？
そんな事を思った時だった。

「そう言ってくれると私も助かるけど……ねえ、キリト君」
その質問が、アスナの口から放たれたのは。

「……………」

「……兄貴」

「お前が決める」

答えは此奴の決める事であり、俺が口を出すべき所では無い。

確かにキリトが人との繋がりを極端に避け始めたあの出来事に俺は少なからずかかわっているが、それをアスナに話す話さないはあくまでもキリトが決めるべき事だ。

「あ、あの、答えたくないなら……………」

「いいよ、話せる。アスナになら……………」

「……………」

気を使ったのか、話さない道も提示しようとしたアスナだが、それをさえぎってキリトは口を開く。

キリトのアスナに対する信頼の証とも言えるだろう。

気持ちを落ち着かせるように一度深呼吸をし、再びキリトは口を開く。

それは、此奴自身の変えられない過去であり、消えない罪。

「……………もうずいぶん昔……………一年以上前かな。一度だけ、ギルドに入っていた事がある……………」

その話を聞きつつ、俺もあの時の事を思い出す。

キリトとあいつ等が始めて出会った、その日の帰り道だったと言う、あの日。

「迷宮で偶然助太刀した縁で誘われたんだ……………。俺を入れても六人しかない小さい小さなギルドで、名前が傑作だったな……………」
確かに。

初めに聞いた時は、俺も「何時の時代の盗賊団だよ」とか思ったり

した物だ。

《月夜の黒猫団》

今はもう存在しないそのギルドは、
そういう名だった。

五十一話 疑問と回想（後書き）

はい、いかがでしたか？

えー、と言うわけで、次回からは過去編《月夜の黒猫団》のお話へ
とはいつて行きます。

少々リョウも絡みますが、基本的には、今を逃すと後で消化する機
会がなさそうだ。と言う作者の都合によって出来た物語です。

ご意見ご感想、心よりお待ちしております！
では！

五十二話 狭き世の中（前書き）

はい、どうもです。

と言うわけでここから過去編です。
つても短いですがねw

では、さようぞー！

五十二話 狭き世の中

三月も終わりに迫ったその日、俺は、最前線から十二層程下の階層の、とあるアイテム屋に、そこでしか売っていない性能の良い携帯用のランプアイテムを買いに来ていた。

「ん〜んんん〜んん〜ん〜」

鼻歌を歌いながら帰り道を歩く。この頃はまだプレイヤーホームなんて持つてはいなかったから、前線の方の宿賃の安い宿へ向かうために、転移門に向かっていった時だ。

前方、迷宮区へと続く大通りの方から、六人程度のパーティがワイワイと歩いてきた。

よい事でもあったのだろうか？全員が明るい顔をしており、殺伐とした雰囲気多いの前線ギルドとは違い、純粋にこのゲームを楽しんでいると言った空気が彼らにはあった。

少々得をした気分になりながら、彼らとの距離が縮まって行く。そしてすれ違おうとした時、その一団から、意外な声が投げかけられた。

「あれ、兄貴？」

「おあ？」

聞いた事のある声で有り、何時も呼ばれているがゆえに思わず反応してしまう。

すれ違う寸前だったその一団の方を向くと、俺の義弟ことキリトがいた。

「あぁ？キリト？お前何で此処に？」

「いや、俺が聞きたいんだけど……」

「キリト、知り合い？」

状況の変化に少々戸惑いながら、キリトと会話をしていると、キリト後ろにいた俺と同じくらいの背丈の青年が、キリトに問いかけた。

慌てた風にキリトが受け答える。

「ああ、俺のこの世界での義兄なんです」

「ええ！？キリト……義兄弟がいるんですか！？」

青年は眼を見開く。

S A Oに置いて、義兄弟設定の関係を結ぶ人間というのは珍しい。それは、そのリスクが余りにも大きい事に起因するものだ。

義兄弟となった場合、その相手のプレイヤーのステータスを、何時でも好きな時に確認する事が出来る上に、策敵スキル等無しでも相手の場所を確認する事が出来る。

また、任意で共通のアイテムレステレージを持つ事が出来たり、専用アイテムが手に入ったりと、結婚とはまた違った関係性を持つ事が出来るのだ。

しかし後者一つはともかく、他三つは殺人や窃盗等に利用する事が出来る上に、この設定、実は片方から一方的に破棄が効く。

事実上の危険性は、《結婚》とほぼ同程度にまで登るため、どんなに親しくても、義兄弟と言う関係まで発展するプレイヤーと言うのはそうはいない訳である。

まあ、俺達の場合はそもその理由が少し特殊だが。

驚いた青年に、キリトは苦笑いしながら答える。

「ああいや、リアルでも従兄弟同士で。ホントはそれだけじゃ……
って感覚も有るんだけど、まあ色々と信頼できる人なんです。この人は」

「えーつと、キリト？その人達誰？」

今度は俺が尋ねる番だ。

正直、相手の素性が知れなくては自己紹介もしょうが無い。

「ああ。えーつと」

「あ、俺が説明します？」

キリトが悩んだように唸るのを見て、話していた青年が助け船を出す。

少し茶色がかった短髪に、黒い胸当てと型当てをした、人の良さそうな青年だ。

「あー……すみません、お願いします」

「オツケー。えーと、僕はケイタと言います。後ろにいるのはうちのギルドの団員で、名前は《月夜の黒猫団》。キリトとは、先程ダンジョンで助太刀してもらって。それで知り合いました」

成程。と俺は思う。この階層のダンジョンならキリトには余裕だろう。

しかしよく此奴がそんな事をできた物だ。下手をすれば非難を喰らう可能性だってあるのに。

そう思い、ふとキリトの方を見ると、何故少々苦しげな光が眼に宿っていた。ふむ？

「これはご丁寧に。俺はリヨウコウって言います、皆にはリヨウって呼ばれてますけど……どうもウチの義弟がお世話になっているよ。うで、ありがとうございます」

「いやいや、お世話になったのは僕らですよ。彼の助けがなきゃジリ貧だったんですから、お礼を言うのも僕らの方です」

お互い初対面なので、敬語で挨拶を交わし合う。

話し方もフレンドリーだし、中々に社交的な人物だ。こういう人間には結構好感が持てる。人柄も良い様だし、成程確かにリーダーの

器としては申し分ないだろう。

この時俺は、目の前の子の青年と、義弟に気を取られていたため後ろにいた他のメンバー達にそこまで気を配っていなかった。

そのため、その声が聞こえた時も、初めは何処から聴こえたのさえ分からなかった。

「……………りょう？」

「……………ふぬ？」

男性の物ではない、明らかな女性の物と分かる小さな声を俺が聞き逃さなかったのは、恐らく殆ど偶然だっただろう。

しかし前述の通り何処からその声が聞こえたのか分からなかったため、俺は声の主を探して回りをキョロキョロと見回す。

それでも声の主を発見できず、首を傾げ……………

「こつちこつち」

「……………はい？」

再び同じ声、今度ははつきり、聴こえたのはケイタの方向だった。しかしだからと言ってそれはケイタの声と言う訳では無く、その後ろ、ケイタの背の高さによって俺の死角となる位置にいる黒髪を肩まで垂らした少女が、ケイタの横から顔を出していた。

その顔を見た瞬間、俺は思わず声を発する。

「……………み、みゆk「待って」あ……………えつと？」

「サチ……………って名前が今の私だけ……………えつと、本当にりょう？」

「あ、ああ……………多分お前の知ってるりょう」

そこまで言った所で、思考がたがいにフリーズしてしまう。いきなりの事に頭が付いて来ない。

「…………………………」

「……………」

「吸う、吐あ」

突然深呼吸をした俺に、周囲が驚いたように目をむく。ただし、キリトとサチは除いてだが。

「久しぶりだな。元気……してたか？」

「う、うん……」

問いかけに対して緊張した面持ちサチはチコリと頷く。まだ混乱は抜けていないようだ。

「えつと……？」

「おい兄貴、説明しろ」

「あ……いや、だからその」

「……………幼馴染い！？」「……………」

「ああ、一緒にいたのは小学生までだけだな」

キリトと黒猫団の面々が素っ頓狂な声を上げる中、俺は冷静に答える。

此処は同じ階層の酒場、俺はいま、黒猫団の宴会でキリト達にサチとの繋がりを説明していた。

俺とみゆ……では無くサチは、小学校を卒業するまでは同じ学校に通う同級生で、家が近かったこともあってとても親しい間柄だった。

と言うか親しくならない方がおかしい。何しろ俺もサチも親が片方しかおらず、毎日家の近くの人の良い老人夫婦の家に親が迎えに来るまで預けられていたのだから。毎日会ってりゃそりゃあ親しくもなる。

そんな事を話していると、横にいたサチが俺のほうを見てこんな事を尋ねて来た。

「そう言えばしーちゃん元気かなあ？」

「しーちゃんってお前……あいつもいい加減その呼び名は嫌だと思っぞ？けど……そっぴや俺も連絡とってねえな」

しーちゃんと言うのはばーちゃん達……もとい老人夫婦の家のお孫さんで、この子も父親不在の子だった。本好きで、誕生日に本を送ってやると結構嬉しそうにしていた事を覚えている。ちなみに、うちの母親とサチ達の母親は境遇が近いせいか仲が良かった。

しかし、俺は中二の時に、サチは小学校の卒業と同時に引越してから、たがいに殆ど連絡をとる機会も無かったため、今彼女がどうしているのかは不明だ。

「しかしこんな所でお前に会うなんてなあ……変な縁っつーか、世間なんて狭いもんだな」

「うん……そう、だね」

何となくサチに覇気が無い様な気がするが、気のせいだろうか？此奴は昔から、何故か眼の読みにくい奴だった事を今更思い出した。

「あー、皆、ちょっと二人と話したいんだけど、いいかな？」

「え？あ、うん。じゃあ私皆というね」

ケイタがそう言うと、サチは一緒にいた仲間たちと共に近くのテーブルへと近づいて行った。

それを確認してから、ケイタはとても聞きづらそうに俺達のレベルを聞いた。と言うかどちらかと言うと、キリトのレベルを知りたいようだ。

先行して、俺は自分のレベルを答える。その数値を聞いてケイタは一瞬目を見開いたが、それ以上は何も聞かなかった。

続いてはキリトなのだが……一瞬キリトは迷ったような光を見せ、やがてこんどは決心したように口を開く。

「だよ」

「はあ!？」

俺は内心でかなり驚く。何しろキリトの口にした数字は、本来の此奴のレベルと比べ20も下の数字だったからだ。

だが、一瞬訂正しようと思っただけで開きかけた口はしかし、言葉を発する前に俺の意思で閉じられた。

キリトが案外と他人の眼を気にする正確なのは、この世界に来てからより顕著に表れている事の一つだった。と言うより、キリト自身はかなり人の眼を避ける様な行動を取っている事が多かったのだ。俺にはその気持ち自体は分からなかったが、キリトが他人にビーターや、はぐれ者と嘲られる事を恐れているのは、何となく察していた。

恐らく、今回もそうした危機回避の一つとしてこういう言動を取っているのだろう。

反射的にそう考えた事が、俺の口を閉じさせたのだった。

暫く驚いていたが、その間にキリトとケイタの会話は進んでいく。

曰く、そのレベルで、あそこでソロ狩りが出来るのか？

曰く、敬語はやめよう

「あ、それ俺も頼む。やっぱやりずらいわ。」

「あ、ああ。分かったよ……で、その……急に何なんだけどさ、リヨウは無理でも、もしソロなら……キリト、よかったら、うちに入ってくれないか？」

「え……?」

「ほう……」

ケイタの提案にキリトは問い返し、俺は少々驚く。案外と、この手のソロプレイヤーをこの世界でいきなりギルドに誘う奴は、あまりいない。

それはその大体が、気難しい等性格に難が有ったり、プレイスタイルが人と違う所が有る等、「訳あり」の人間だからで、この手の人間を誘うには少しばかり度胸がいるのだ。

それをやってのけたあたり、優男だと思っていたこの青年に対する印象を変える必要があるかもしれない。

キリトは一瞬俺の方を見たが、俺はあえてそれを無視する。

あくまでギルドに入るにしろ入らないにしろ、キリトが決めるべき事だ。俺が意見する所ではないだろう。

さらにケイタは言葉を続ける。

「その、僕等のレベルならホントはあの程度の狩場、楽に攻略できるはずなんだよ。けど……多分君等も気づいてると思うけどスキル構成がさ。前衛出来るのがテツオだけだから、どうしても回復がおつつかなくて、結局ジリ貧で後退してく形になっちゃうんだ。キリトが入ってくればかなり楽になるし、それに……おい、サチ、ちよつと来てくれよ」

先程向こうに行ったサチを、ケイタは再び呼び戻す。ウィングラスを持ったままサチは此方へ来て、ケイタの隣に並んだ。

ちなみに、黒猫団のメンバーの武器構成は、

長槍使い2 棍使い1 短剣使い1 盾+メイス1

というバランスの悪い物で、いまのケイタの説明の通り前衛が出来る者が盾+メイスの一人だけなので、そいつのHP回復のためにスィッチする仲間がおらず、ジリ貧になって後退し易い構成だった。

ケイタはサチの頭に手を置き、言葉を続ける。

「こいつ、メインスキルは両手長槍なんだけど、もう一人と比べるとスキルの錬度が低いから今の内に片手剣に転向させようと思うんだ。でもなかなか時間が取れない上にいまいち勝手が良く分らないみたいでさ、よかつたら、少しコーチしてあげてくれないかな？」

「なによ、人をみそつかすみたいに」

ぶうつとむくれるサチを見て、俺は思わず嘖き出す。

「くく、いきなりモンスターに近づくのがおつかねえんだろ。相変わらずだなサチ」

「へ！？あ……えと……」

「そうそう！やっぱり昔っから？」

そう問いを返して来たケイタに、俺は頷く。

「ああ。昔っからかなり臆病だな？小二くらいの時に……」

「ストロップ！それ以上言ったら私も色々しゃべるからね！？」

「っと、それは怖いな……」

やめておこう、此奴には色々知られてる事も多いし。

「へー……サチ、後で少し教えて　「おーっとつとあ！人の過去は余り探らない物だよキ　リトくうん！」」

騒いでるうちに黒猫団の連中も集まって来て、結局、その後はただの宴会になった。

ちなみに、その流れでキリトは黒猫団に入る事にしたらしい。まあキリト自身も居心地よさそうだったし。人の輪に入るいい経験にもなるだろう。

それからしばらくの間、俺はキリトやサチの様子見がてらに彼らと関わり合う事になった。

「んじゃまあ、帰るわ」

「うん……またね」

宴会も終わりへと近付き、黒猫団のメンバーが未だに歓迎と評してキリトとドタバタ騒ぎをやっている中、俺は遅くなる前にと酒場を出た。

眼の間には見送りに来たサチがいる。

「まあ、ちよくちよく様子見に来るからよ。一応俺のかわいい義弟なもんで、よろしく頼むわ」

「わかってる。私にとっても新しい仲間だもの、皆ともきつとすぐ仲良くなるよ」

「はは、もう既について感じただけだな」

「ふふ……そうだね」

後ろから聴こえて来る騒ぎ声を聞きつつ、俺とサチは互いに笑い合う。

そこでふと、俺はサチに聞きたい事が有るのを思い出した

「そう言えば……よお」

「えっ？」

サチが首を傾げるのを見ながら、俺は更に言葉を紡ぐ。

「……大丈夫か？」

「……………」

普通に聞けば質問になっていないその言葉から、サチは俺の言いたい事を察したのだろう。俺の眼を真っ直ぐに見つめ返し、答える。

「大丈夫だよ……もう、リヨウの後ろに隠れてた時の私じゃないよ？」

「どうやら、愚問だったらしい。」

彼女とて、此処まで登って来た立派な戦士の一人、あんな話をしてはいても、既に俺の知る、ただ臆病なだけの少女では無いのだ。今の問いは、むしろ無礼に当たると言う物だっただろう。

「そりゃ失礼。……けどな」

しかし、それが分かっていたながらも俺は自然と言葉を紡いでいた。それが自分の知るサチを自分の中でまだ消してしまいたくなかっただけの独りよがりなのか、もしくはご自慢の勘が働いた事によってサチの心の内を見透かしたのかは分からないが

「無理はするなよ？ま、危なくなったらいつでも駆けつけて助けてやるから、遠慮せず頼れ」

とにかく俺は、そんな柄にもない様な台詞を自然の口に出していたのである。

五十二話 狭き世の中（後書き）

はい、いかがでしたか？

何かこれ出した後の反応が凄く怖いのですが……

ま、まあ取りあえずはこんな調子で進みます。

幼馴染については……あはは。

恋愛フラグ？

では！

五十三話 最低の選択（前書き）

はい、どうもです。

今回は少々短いです。

では、どうぞ！

五十三話 最低の選択

月夜の黒猫団と初めて会ってから一ヶ月半近くがたったころのある夜。

その知らせが来た瞬間、俺は即座に転移門に向かって走り出した（鈍足だが）。

From Keita

Main サチが居なくなつた。探すのを手伝ってほしい。

メッセージで連絡を取り合い、情報を受けた所、どうもサチが黒猫団が寝泊まりしている宿屋から急に姿を消したらしい。

事情は不明ながら、とにかく既に日も落ちて危険が増す時間帯だし、ギルドメンバーリストからプレイヤー追跡機能を使つても居場所が特定できない所を見るに、迷宮区に居るのではないかと思われたためメンバーは大急ぎでそちらに向かったらしいが、キリトだけはフィールドにもマップ追跡不能の場所が有ることを理由に街に残つたらしく、人手不足になりかねないのでそちらの方を手伝ってほしいと言つ事だつた。

了解の意を返した俺は、すぐにマップ追跡を掛け、キリトのいる方へと向かう。しかし……

『ちよつ！？』

俺が追いつくより前に、キリトの光点も街中で突然消えてしまつた。

俺はとにかく大急ぎでキリトの反応が消えた場所へと向かう。

そこにあつたのは主街区の外れの水路だった。

チヨロチヨロと小さな水音が響く中、トンネルの中へと続く水路の中から、小さくキリトの声が聞こえた。

「逃げるって……何から」

『？』

聞こえたその声は何の事だか分からず俺は首を傾げる、気がつかれないように近づき、少々彼らには悪いと思いつつも聞き耳を立てる。

「この街から。黒猫団の皆やモンスターから……この世界から」

『……………』

その言葉を聞いて、俺は大体の事情が分かった気がした。多分、三年以上分かれていたとはいえ、長い時間一緒に居たせいもあるだろう。

それから、サチは話し始めた。

死ぬ事がとても怖い事。

以前からその恐怖で不眠症になり易く、ここ数カ月はあるきっかけが有り落ち着いていたものの、最近またしても、しかも今度は完全に眠れなくなった事。

そして、キリトに問うた。何故こんな事になったのか、何故ゲームから出られないのか、何故ゲームで本当に死ななければならぬのか、こんな事をした張本人に、一体どんな得が有ると言うのか、そもそもこんな事に……何か意味が有るのか。

『……………』

サチの恐怖を俺は、少しだけだが感じてはいた。

そもそも、あの臆病だったサチがこの階層まで登ってきている事実その物が、実を言えば俺にとっては意外だったのだ。

その驚きを、あの時はサチが成長したのだろうと思いきのままにして立ち去ったがしかし……どうやら、俺はあいつの事をしっかりと見ていなかったらしい。

自惚れる訳ではないが、きつとここ数ヶ月間の間の何処かに、俺なら気付ける要素はあったはずなのに……

キリトが答えを返す。

「多分、意味なんて無い……得する人間なんてのも居ないんだ。この世界は、始まった時点で大事なことが終わった後だったんだと思う」

キリトの答えは、彼なりに必死に考えた上での答えだったのだろう。不器用ではあったがその声からは彼なりの葛藤が聞き取れた。

「……君は死なないよ」

そう言つて、必死にサチの不安を和らげようとしているであろう義弟に俺は心の中で感謝する。

今、サチに必要なのは隣に居て不安を和らげ、彼女を護ってくれる存在だ。

キリトは結局未だに自身のレベルを隠したままあのギルドの中にいるが、彼奴が頼りになる存在だと言つのは、サチ自身もつつすらと感じてはいるだろう。

ならば、此処はキリトに任せの方が無難だ。レベル的に下手に介入出来ない俺がしゃしゃり出るより、このままにした方が良い。

そう思った俺は、その後、暫くしてからキリトとサチが水路から出て行き、ケイタから見つかった事を知らせるメッセージが飛んでくるまで、一切二人と接触せず、宿屋に戻ったキリト達と合流してか

らも、何も知らないふりをした。

キリトが、サチの盾剣士への転向を無理にする必要が無い事や、自分自身に前衛の負担がかかる事には特に問題が無いこと等を伝えるのを聞いてから、結局無駄足を踏ませてしまったと謝るケイタの声を背中に受けつつ、俺は自身の泊まる階層へと戻って行った。

これでいいと。そう確信しながら……

しかし、後になって振り返ってみれば、なんてことは無い。あの瞬間、俺はキリトの義兄として。もしかしたらサチの幼馴染としても、ある意味で最も残酷な選択をした。

まだ十五歳の少年に、一人一人の「命」を背負わせ……そして何より、その重みから……「サチ」と言う、自分にとっての特別な人間の「命」を背負うそのプレッシャーや責任から、(きっと無意識のうち)俺は逃げたのだ。

しようと思えば、その重みをキリトと共に背負ってやる事も出来たにもかかわらず、恐れ、眼をそむけ、都合の良い様に自分を納得させて……俺は、そんな最低な選択をした。

そしてその選択という罪は……俺では無く、キリトとサチに牙を向く事になる。

五十三話 最低の選択（後書き）

はい、いかがでしたか？

前半はほぼ原作通り。

後半は、リヨウの自己嫌悪で終わりました。

現在次話を執筆中であります。

では！

五十四話 それは唐突に（前書き）

はいどうもです。

今日は何時よりも早めの時間に投稿できました。

では、どうぞ！

五十四話 それ唐突に

あの地下水路の一件から大体一ヶ月と少し。その日は、ついに念願のギルドホームを購入できる事がほぼ確定した日だった。

黒猫団は前々から目標としていた額のコルを溜める事に成功たため、ケイタはその日の朝から、ギルドホームにうってつけな小さなブレイヤーホームを売りに出していた不動産仲介ブレイヤーのもとへギルドマスターとして交渉に出かけ、キリトやサチ達他のメンバーたちはそれを宿屋で待っていた。

サチは、少し特殊な方法で、何とか睡眠をとれるようになっていた。

夜中になるとキリトの部屋へもぐり込み、キリトの自分に対する「死なない」と言う言葉を聞く事で、何とか眠れるようになったのだ。それが何故なのか、キリトには正直な所よく分からなかったが、ただ、自分にはそうする事しか出来なかったキリトは、唯ひたすらに、毎晩同じ言葉を唱え続けていた。

始まりは、メイサーとしてキリトと共に前衛をポジションとするテツオが、こんな事を言ったからだだった。

「ケイタが帰って来るまでに、迷宮区でちょっと金を稼いで、新しい家用の家具を全部揃えちまって、あいつをびっくりさせてやるうぜ」

ホームを買うと言う事で、ギルドの共通ストレージのコル欄はすっからかんになっていたし、異を唱える者はおらず、そうしてキリト達は、始めて行く最前線から三層程下の迷宮区を訪れた。

始めてとはいっても、当然キリトだけは以前にそこを訪れた事が有

ったため、そのダンジョンの特性を把握していた。即ち、稼ぎはいい物の、トラップが多発するダンジョンである、と。

レベル的には黒猫団にとっても安全圏だったそこで、キリト達はあつという間に目標の額を稼ぎきり、街へ帰って買い物しようとして、帰路に就いた、その時だった。

「おっ！宝箱はっけーん！」

メンバーの一人、《鍵開け》等のスキルを持つ、職業性RPGでいう盗賊^{シーフ}のダガー使いが横道の奥にある部屋の宝箱を目敏く見つけたのである。

部屋は東、西、南に通路が有り、北側の壁に宝箱が置かれた正方形の部屋だった。

近づいたメンバーはその場で、これを開けるかどうかの相談を始める。と言うか、キリトが突然開ける事に反対し始めたのだ。

当然キリトの主張は此処がトラップの多いダンジョンである事を考慮した上での言葉だったのだが、レベルを隠している以上それを言ひ出す事は出来ない。

他のメンバーは少しでも稼ぎを増やしたいこの時、この宝箱を開けようと主張して譲らなかつた。

結局、多数決の結果、サチとキリトが明けない側へ、他の三人が明ける側に回り、宝箱は開けられる事となった。

かかっていた鍵をシーフのメンバーが解除し、皆が見守る中そのふたが開けられた……瞬間、

GLILLILLILLYLLYLLYLLYLLYLLY!!!

と言うけたたましい音が高音響で鳴り響き、東西と南に有った部

屋の入り口から、一斉にモンスターがなだれ込んで来た。
宝箱に設定されるトラップの中でもおよそたちの悪い部類。

音によって大量のモンスターを呼び寄せる、《アラーム・トラップ》だ。

「うわっ！」

「な、なんだこれ!？」

「うわあああああ!！」

「な、何!？」

「っ！」

一瞬パニックに陥りかけるメンバーの中で、最も復活が早かったのはキリトだ。反射的にこれを切り抜けるのは無理であると判断し、即座に叫ぶ。

「全員！クリスタルで脱出だ!！」

まだモンスター達の射程に入るには少しだけ距離が有る。直ぐに転移結晶を使い、街に跳べばギリギリだが間違いなく逃げ切れる……はずだった。

「転移！な、何でだ!？転移！転移!！」

「き、キリト！クリスタルが使えないよ!！」

「なっ!？」

「う、嘘だろ!？こんな……!！」

「うわ、く、来るなああっ!！」

畏は二重だった。

部屋全体が、結晶系アイテムを無効化する《結晶無効化空間》に設定されていたのである。

当然転移結晶がその効力を発する事は無く、脱出はモンスターをアラームの元凶である宝箱を壊し全て倒す事でしか不可能となった。しかし突然の事にメンバー全員が（程度に差はあったが）大混乱に

陥った上に、部屋を埋め尽くすほどのモンスターが押し寄せて来るのだ。
宝箱に気を払う余裕など無く、キリト達五人は絶望的な戦闘を強いられる事となった。

そして、戦闘開始から五分程が過ぎたころ……

バシャン！という、プレイヤーが死亡した事を知らせる時特有の無情な効果音が、キリトとサチの耳に、三度目の不快な刺激をもたらした。

「嫌あああああああ！！」

「くっそおおおおおおお！！」

サチの悲鳴が響き、キリトの絶叫が轟く。そこらじゅうを埋め尽くすモンスターに対し、キリトとサチは必死の抵抗を続けていた。

既に仲間達三人は絶望の表情と共にその魂を砕け散らせ、その状況にキリトは恐慌し、今までは隠していたため出さなかった上位のソードスキルの乱発する事で周りのモンスター達を次々にポリゴン片に変えていた。

せめて、せめてこの少女^{サチ}だけはと。それだけを一心に思いながら少年は必死に剣を振り続ける。

しかし、なまじ数が多すぎた。

何しろ、前後左右有りとあらゆる方向から、無数のモンスター達が迫って来るのである。対応などしきれぬ訳も無く、次第にサチの周りにモンスターが群がり、彼女を、サチのHPを飲み込み始める。

長槍使いであるサチは、本来剣士であるキリトやテツオの陰に隠

れ後ろから射程の長い突き攻撃によって攻撃を行う役目であるため、懐に入られれば殆ど抵抗する術が無い。

そして周りの埋め尽くすモンスターを相手に接近されずに戦う力など、サチに有るはずも無かった。

必死に槍を振り回しても、焼け石に水。徐々にキリトのカバーが間に合わなくなつて行き、周りから攻撃を受ける回数が増えて行く。

HPが、サチの命の残量が確実に減って行くのが、サチにもキリトにも分かった。

このままで行けば、確実に自分は死ぬのdarou。と、サチはどうしようもなくそう悟らざるを得なくなる。

それはサチにとって恐怖以外の何物でも無く、考えるだけで悲鳴を上げそうになるし、涙だつて今にも溢れ出しそうだ。

しかし、「死」が目の前に迫るこの状況の中で、サチの妙に冷静な部分は、こうも考えていた。

自分は死ぬ。ならば、キリトに伝えなくてはならない。

眼の前で、自分のために必死になつて剣を振り続ける。この、とても優しい少年に……貴方のせいではないと。

自分に生きる意志が足りなかったからこんな事になつたのだと。

SAOで生きるために必要な事。自分が見つけた答え。「生き残ると言う意思」が自分に足りなかっただけなのだ。

この少年が自分の弱さのせいで、彼自身を責めないように。

彼自身の生すらも諦めてしまわぬように。

彼の優しさで、もっとたくさんの方が救われるのだから。

ただ……「生きてほしい」と、伝えなくてはならない。

キリトの眼を真っ直ぐに見て、手を伸ばそうと右手を動かす。その時、ひときわ大きな斧型の武器を持った豚鼻のモンスターが、赤い眼を輝かせて、得物を振り上げるのが視界の端にちらりと見えた。

死ぬ

考えるまでも無く、それが分かった。自分のHPはすでに赤の危険域にまで割り込んでいる。

今、あんないかにも威力の高そうな攻撃を受ければ、自分のHPは間違いなく0になるだろう。

即ち、死ぬのだ。

諦めた途端、恐怖を感じつつも、冷静な自分が意識の中で妙に肥大する。

とたんにふと、一人の青年の顔が頭に浮かぶ。

自分がまだ何も知らなかった時に出会い。何時からかずっと、心中何処かで思い続けて来た、一人の青年の姿。

モンスターの腕に、力がこもる。

久しぶりに会えた時嬉しかった、でもこんな世界で有ってしまつた事がどこか悲しくて、けれどそれよりも同じ世界に彼がいる事で、何処か安心した。

そして……その日の夜、色々な気持ちがちや混ぜになった涙を流した。

キリトの眼が絶望に染まる。サチは、口を開く。

いずれ自分が死んでしまつたろうことは、自分でも感じていたの

に……後悔するのなら、もっとたくさん話しておけばよかっただろうか……？

不思議な物だと思う。あれだけ怖かった死が目の前に有ると言うのに、あの顔を思い浮かべているとその怖さが殆ど無い。

『ああ、やっぱり私、本当に駄目だ……』

今更になって……この世界で、絶対に生き残りたいと思えるなんて。

鉄の凶暴な輝きを持った銀閃が、仮想の空気を切り裂いた。

五十四話 それは唐突に（後書き）

世の中、そう上手くはいきません。

では！

五十五話 絶望

「美幸いいいいいいいいいいいい！！！！！！！！！！」
光が欠片となって、砕けた。

砕け散った光は、そのままポリゴンとなって消える。
ただしそれは、そこにいたサチの身体では無く、切り落とされた、
モンスターの腕で有った。

「うエあア！！！！！！」

雄叫びを上げながら突如として現れた青年が、自らの幅の広い刃
が付いた槍を振り回す。

速さは無いがしかし、それは一振りすることに、確実に二、三匹の
モンスターを吹き飛ばす。

「伏せろ！美幸い！」

「っ！」

一瞬、突然の事に呆然としサチだったが、怒鳴られた事によって
反射的にひざを曲げてしゃがみこむ。

本来ならモンスターを前にしてその場にしゃがみこむなど有り得な
い事だが、今の青年の声は問答無用でサチの身体を動かした。

「霸ああああああああ！！！！！！」

黄色いライトエフェクトと共に、青年の持つ槍が一回転で思い切
り振りきられる。

重両手槍 範囲攻撃技 《サークル》

文字通り、槍を一回転に振りまわして周りを薙ぎ払う。この状況

では非常に有効なスキルだ。まあ、そこまで上位のスキルでは無いので普通なら威力は期待できないのだが……この青年ならば話が別である。

案の定、周りに居たモンスター達は穂先や柄に当って吹き飛ばされ、サチの周りに空間が出来る。

「キリト！箱お！」

「あ、ああ！」

その硬直しながら青年はキリトへと指示を飛ばし、キリトは未だにアラームを騒々しく鳴らし続ける宝箱に向かってモンスターを掻き分け突進する。

再びモンスターがサチに肉薄して来るより速く、硬直から立ち直った青年が槍を振り回し、危うい所でモンスター達を止める。

幸い、追いつめられていたサチは壁際ギリギリの位置で戦っていたため、その青年の陰でしゃがみこむサチの身体に、モンスターの凶刃は届かない。

やがて、キリトが宝箱を破壊し、溢れるように通路から次々に現れてたモンスターの湧出^{ポツ}が止まる。

「飲め！」

「え？「早く！」は、はい！」

青年が後ろ手に突然投げて来た蒼い液体の入った瓶を危うい所で受け止めたサチは、再び怒鳴られた事でその中身を一息に飲み干す。すると、徐々にだが確実なスピードで、サチのHPが回復し始めた。回復のポジションだ。しかも回復速度から考えて、恐らくレアなものだろう。

自身のHPをゆっくりとだが一定のペースで回復し続けているのが分かる。

不思議と冷静にそんな事を確認しつつ、サチは目の前の青年を仰ぎ見る。

銀色のプレートアーマーに身を包み、重そうな鋼鉄製の槍を跨手を付けていないおかげで自由に動く手首や指先を上手く使いながら、通常の敏捷値によって腕を振る速さよりも素早く振り回す独特の戦闘法を持つ青年。

「リヨウ……」

「あん!? んだよ!?!」

自分が最後の瞬間にもう一度会いたいと願った青年……リヨウの姿が、確かにそこにはあった。

「何で……」

居るのか。

当然の疑問だ。さっきまでリヨウは此処には居なかったはずだし、偶然にしては出来過ぎている。

何よりも何故突然部屋の“中”に現れたのが疑問だ。モンスターのポップによって三つの入り口は全てふさがれていたはずなのに……

「言っただろうが! 危なくなったら……」

そこまで言っただとところで、再び切りかかって来たモンスターに仁王立ちになったままりヨウは応戦する。

薙ぎ払いで吹き飛ばし、言葉を続ける。

「何時でも助けてやるってなあ!!」

……そう言えば、ずっと昔にもこんなことが有った気がする。

あの時は、同級生の男の子達に絡まれて、学校の廊下で泣いていた時だった。

周りには六人くらいの男の子が自分を囲っていて……臆病な自分は何もされていないのに直ぐに泣きだして、気が付いたら大泣きした六人といつの間にかぼこぼこになったりようが同じ様に目の前に立って居て……

結局先に手を出したのはりようだったから先生にはりようが怒られてたけど……あの後お婆ちゃんの家でも叱られた時、りようが不貞腐れたみたいと言った言葉ははつきりと覚えてる。

『だってさっちゃん泣いてたから、助けなきゃって思ったんだもん』

ああ言った時の彼と、今目の前にいる彼の後ろ姿が、今サチの瞳の中では確かに重なって見えた。

高レベルの剣士と槍使いによる猛然とした反撃を受けたモンスター達は、あっという間にその数を減らし、ついに、その部屋には一匹のモンスターも居なくなった。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

「はっ、はっ、はっ……」

「ふ、二人とも、大丈夫？」

サチの心配そうな声が、リョウとキリトの耳に響く。

二人は肩で息をし、リョウは槍を杖にして何とか立っているものの疲労困憊。キリトに至っては床に座り込んでいるため、どちらもサチの問いに答える事すらできない。

しかし、やがて息を整えた二人は、何とか立ち上がる。

一瞬向かい合い、見つめ合ったまま黙りこむキリトと二人だったが、

やがてゆっくりとリヨウが口を開いた。

「お前等……無事だよな？」

「え？」

「あ、……ああ」

キリトとサチの眼を交互に見据えながらリヨウが問ったその言葉にキリト達は一瞬何を聞かれたのか分からず答えを濁す。

だが、小さく漏れたその言葉を聞いた瞬間、リヨウは大きいため息をつき……

「無事なんだな……死んでねえんだな……」

そう一人呟く。

その顔は安堵に満たされており、只々義弟と友人の生存を喜んでいった。

「皆……」

次に口を開いたのはサチだ。

思い出した瞬間哀しみがあふれて来たのか、その眼に涙があふれる。そして……リヨウの背に、顔を押し付けた。

「ちょっと!?!さ、サチ!?!」

「うっ……ひくっ……うああああああ!」

リヨウは驚いたようにサチに目を向けると、泣いているのが見えたのだろう。キリトの方を向いて尋ねる様な表情をする。

「ケイタは主街区に居るけど……」

その先の言葉は発する事無く、キリトは首を横に振った。

「そうか……」

途端にリヨウの表情が悲痛な物へと変わり、背後のサチはより一

層強く泣き始める。

キリトにとつても、そこまで言う事が限界だった。俯き、泣きそうになる事を必死にこらえる。

レベルを偽り、此処がどういうエリアであるかを知っているにもかかわらず、つまらぬ自尊心を通して、結果として三人を殺した。

その結果から来る自責の念は、キリトの脆い精神を締め付け、それ以上の発言も、動きすら困難な物にさせていたのだ。

結局、キリト、サチ、リョウのメンバーがその部屋を出て、ケイタに事態を報告すべく主街区へと向かい始めたのは、それから三十分後の事だった。

黒猫団が泊っていた宿が有る主街区に何とか到着し、俺とサチ、キリトは宿へと向かう。

「……………」

三人のうちの誰もが声を発しようとはせず、うつむいたまま無言になってしまっている。

それはそうだろう。ギルドメンバーを一気に三人も無くしたのだ。

むしろこの状況で明るく元気にふるまえる奴がいたならば、俺はそいつの正気を疑う。

やがて無言のまま俺達はキリト達の泊まる宿へと辿り着き、俺は一人だけ建物の外で待つ事にして、サチとキリトだけがケイタへの報告のために宿の中へと入っていった。

壁に背を預けて二人を待ちながら、俺は二人の元へと駆けつけた時の事を思い出す。

あの時、俺は最前線の迷宮区に居た。

そこから何故間に合ったのかと云つと……簡単にいえば俺とキリトが義兄弟だったからだ。

俺はキリトがああギルドに入ってから、一日の中でかなり頻繁にキリトのステータスと残りHPを確認するようにしていた。

本人は隠しているものの、キリトはああのメンバーの中で突出して高いレベルを誇るため、原則的に戦闘の中で体力が大きく減る事は殆どない。

しかしそれは逆に言うと、俺から確認できるキリトのHPが大きく減った時は、彼や彼と共に居るはずのギルドメンバー全員にとつて、かなり深刻な危機が迫っていると言つ事判断材料にもなるのだ。

その結果、キリトだけでなく、小さなころからの友人でもあるサチの事も気がかりにだった俺は、こまめにキリトのHPを確認する事で、キリトやサチに危険が迫っていないかどうかを確認し続け、何かあれば即座に駆けつける事が出来るよう構えていた訳である。

あの時も、一つの戦闘を終えてキリトの状態を確認した俺はそのHPが通常よりも明らかに早い、黒猫団の活動範囲でキリトが受けるには多すぎる量のダメージを受けているのを見て、すぐに嫌な予感を感じ取り、キリト達の所へと一気に向かった訳である。

ちなみに、その時使つたのも義兄弟設定に関する物だ。

《兄弟結晶》

同じ色だが、微妙に輝きの違う複数の結晶で、義兄弟設定をプレイヤー間で結んだ時、そのプレイヤーたちのレストレージに自動的に出現すると言つ物だ。

売却及び譲渡する事は出来ないアイテムで、片方のクリスタルの持ち主が《転移》（複数人の義兄弟の場合はそれに+対象の名前）と

ボイスコマンド起動をさせると、そのもう一方（もしくはその対象）の「目の前」に一発で転移出来ると言う優れたものである。しかも、効果を発動させるのはあくまでもコマンド起動をする本人の側のクリスタルであるため、仮に転移対象の人物が《結晶無効化空間》の中にいたとしても問題無く転移する事が出来る。何時でも援軍として駆け付ける事が出来ると言う、非常に便利なクリスタルなのだ。

ただ、今回の場合、転移すべき場所であるキリトの目の前にモンスターが居て、転移すべき座標が塞がっていたため、結果としてキリトよりもサチの近くに転移してしまっただけだ。そして転移した直後。大量のモンスターとHPを死亡寸前まで減らしたサチの姿を見た瞬間に、無我夢中で俺は走り出していた。その後はまあ、知つての通りだ。

結果的には、ギリギリでサチの命を護りきる事が出来た訳である。

俺がそんなふうには物思いにふけっていると……

「バンツ！と言う破裂する様な音と共に、サチ達が入って行った宿の扉が開き、中から人影が飛び出して来た。

俺など眼にも入らないと言った様子で転移門の方へと走り去っていくその人物の顔は、俺も良く知る人物。黒猫団のリーダーである、ケイタだった。

「待つて！ケイタツ！」

続けて開いた扉から、サチが泣きそうな声を上げて飛び出してくる。続けてキリト。

ただ、俺は瞬間的に二人の顔を確認したが、サチの眼は相変わらず

読みとることが出来ず、キリトの眼には……後悔と、強い自責の念が宿っているように見えた。

『なにが……』

答えを出すより早く、サチとキリトがケイタを追って走り出したため、俺も続く。

つて……あ、やべ、俺敏捷……。

結局、俺達三人が追いついた時にはケイタは転移門から別の階層へと跳ぶ直前だった。

喧噪のなかで何処行くのかを聴き取る事等出来るはずもなく、転移してからサチがフレンドリストで行き先を確認しようとしたが……

「無い……」

「ああ？」

「ケイタの名前が、リストから消えてる！」

半分泣き声の様に裏返った声でそう言ったサチにキリトから答えが返される。

「多分、向こうからこっちを連絡禁止指定したんだ……ギルドもリーダー権限で強制脱退させられてる」

「そ……そんな……」

これでは追跡は不可能だ、相変わらず眼に涙を溜めながらウィンドウを必死に捜査しているサチを横眼にどうすべきか考える。

しかし、あちらが本気で此方からのコンタクトを拒否していると考えると、正直な所どうにも……

「……………」

「…………キリト？」

おれは黙り込んでしまった義弟に目を向ける。顔を下に向け伏せがちになったその目線からは、何の感情も読み取る事が出来ない。

「兄貴…………頼みがある」

「…………言ってみる」

何かただならぬ気配を感じて俺は正面からキリトの方へと向き直る。

しかし、自分から頼みが有ると言っておきながら、その眼は決して俺の眼を正面から見ようとはしない。目線はうつむきがちに地面を睨んだままで固まり、まるで俺の眼を見る事その物を恐れているかのようだ。

「俺との義兄弟設定を…………破棄してほしい」

「…………っ！」

正直、その時俺が受けた衝撃は、先程サチ達の元へと駆けつけた時のそれに迫る物が有った事を認めなければならぬだろう。

その時の答えを冷静に返す事が出来たあの時の俺は、今の俺から考えても中々の胆力の持ち主だったと思う。

義兄弟設定は、いわば相手を心の底から信頼している事の証とも言つべき物だ。

それを破棄すると言つ事は…………

「き…………キリト…………何言つて」

「サチ、黙つてろ」

「でも…………っ！」

「こりゃ俺らの問題だ」

そう言つて、俺はキリトの方へと一歩前が出る。

「……本気だな？」

「……ああ」

ボソリと答えたキリトに、意識せずにならうなと呟く。と言うか、此処で冗談だなんて言おうものなら筋力値最大で殴り飛ばす所だ。

「良いだろう。勝手に何処へでも行け」

「り、リヨウ！」

「黙ってる！」

「……っ」

まだ何か言おうとするサチを一喝して黙らせ、俺はウィンドウから義兄弟設定の解除をキリトに向かって発信。受諾。

その瞬間から、俺とキリトはシステム上……そして俺達自身の心の中でも、義兄弟では無くなった。

まあ、一方的にでも破棄できる義兄弟設定を、一応俺に相談して来ただけでもまだいいか……

「暫くは、その面俺に見せんな」

「……わかった」

「……っ！」

何の動揺も、質感も無く放たれたその言葉に、俺の方が痛みを味わう。

サチは何も言えず、泣きそうな顔で立ちつくしているだけだ。

「いままでありがとう……ごめん、リヨウ兄さん」

「……」

そう言っつて転移門の中へと消えて行ったキリトを、俺はただ黙って見送る事しか出来なかった。

ただ、キリトの姿が消えた後で、俺の口から小さく言葉が漏れる。

「謝んな……馬鹿」

その後、耐えられなくなったのだからサチは大声を上げて泣いた。どうして……どうしてと、ただそれだけを呟きながら。

数日後、始まりの街の碑でケイタの死を確認し、またサチは泣いて、キリトともそれからかなりの期間連絡が取れなくなったりして、結局、月夜の黒猫団は、事実上壊滅したのだった。

五十五話 絶望（後書き）

はい、いかがでしたか？

やっちまったあああああああ！！

原作ブレイクしちゃったあああああ！！

すみません。申し訳ありません。

何と言うか……個人的に色々我慢がならなかつ、もとい、事情があります。

前話のあとがき？

そのはずだったんですけどね……

今回の話に関しては、ご意見いただけるととてもうれしいです。

では！

五十六話 いずれ訪れる日へ（前書き）

はい、どうもです。

というわけで、今回でいったん過去編は終了となります。

では、ごうげー！

五十六話 いずれ訪れる日へ

結局、キリトはアスナにケイタが自殺をしたことまでは話した。

思い出すことすら苦痛であるうその記憶を此奴がそこまで話す事が出来たのは、それだけでも評価に値する事なのだが……それだけの整理が此奴の中でも付いたと言うことなのだろうか？

「あの時、俺がレベルをみんなに隠すような真似さえしていなければ、あの罫の危険性は納得させられるはずだったんだ。だから……ケイタや、みんなを殺したのは……俺だ」

「……………」
おれもアスナも、一言も言葉を発しない。

アスナが何を考えて居るのは正直分からないが、リヨウに関しては言えば、彼はこの件に関して一切キリトを擁護するつもりもなければ、逆に責めるつもりもなかった。というか、出来ないのだ。

キリトがレベルを隠していなければ、恐らくは黒猫団の壊滅は容易く回避できただろう。それは事実であり、擁護などしようも無い間違いなくキリトの罪だ。

だが同時に、あの時それをみんなに告げることによって起こる自分への被害を恐れたキリトを責める事もリヨウには出来ないのだ。誰だって懐疑的な視線で見られる事など願い下げに決まっているし、ましてキリトは他人との繋がりに対してとびきり臆病な部分のある人間である。

それを知っていて、しかも自分にも責任が有るのだから、責めることなど出来るわけがない。

そして部屋の中に、重い沈黙が降りる……キリトは頭を垂れて、

まるで判決を待つ被告人のように押し黙ったままだ。

おそらくは、アスナがキリトを責める事は無いのだろう。

彼女は今のキリトを心から信頼しているし、キリトが優しい上に、臆病すぎる人間だと言う事も恐らくは理解している。

しかしそれを踏まえたうえで、唯の慰めの言葉では、恐らくキリトの芯までは届かない。例え今のアスナが、どれほどキリトの心と言う部分に近いとしても、それだけではだめなのだ。しかし同時に何が必要なのかも、リヨウには解らなかった。

そうして三十秒位が過ぎた頃……不意に、アスナが座っていた椅子から立ち上がり、二歩程前へと進み出て、キリトの頬を包み込んで少し上げさせたかと思うと……自分の顔をその眼の前へと持って行った。

視線が交錯する中、アスナの口が開かれる。

「わたしは死なないよ」

囁くような声だが、それはキリトの耳に、そして何よりも心に、しっかりと響いた事だろう。

続く言葉は……

「だって、わたしは……」

リヨウが想像もする事が出来なかった言葉だった。

「わたしは、君を守るほうだもん」

そう言って、アスナはその胸のなかにキリトの事をそっと包み込む。それはさながら、我が子を慰める母親の様に……

『まったく……人の眼が有るのに大胆っつーか……』

軽く呆れながら、リヨウはそんな事を考える。

前から思っではいたが、なかなかこの少女はアクティブな所が有るようだ。

『つま、これも女性特有の母性本能ってやつかねえ？』

今こんな事言うちいと別な意味になっちまいそうだが……
そんな事を思いながら、リヨウは偶然にも二人の視界に入らない位置にあったソファに腰掛け、腕を組んでニヤリと笑うのだった。

夕日が沈みゆくアルゲード、その転移門へと俺とアスナは歩いて
いた。

「んじゃまあ、またな。」

「う、うん……」

あの後、ようやくと言った様子で俺の存在に気が付いた二人は顔を真っ赤にして慌てて離れ、爆笑する俺にひとしきり冷やかされた後、エギルに報告しようとする俺を大慌てで止めて何とか阻止で、それぞれ帰宅する事となって今に至る。

「あの、今日の事」

「分かってるって、誰にも言いやしねえよあんなレアシーン」

「からかわないで!!」

真っ赤な顔で再び主張するアスナに、おれはまたしても爆笑する。アスナは拗ねたように前を向き、俺より幾分か速いスピードですたすと歩き出してしまった。

「悪かった悪かった！そんな怒りなさんな、副団長殿」

「むう……」

小走りで追い付き再び追いついてはみた物の、やはりこちらを向

く気は無い様だ。

そんな事をしている内、転移門に入れる位置まで来た。

先に進み出る気で俺は若干前へと出ながら、アスナにかろうじて聞こえる程度の音量で呟く。

「でもまあ……ありがとな。……あいつの事、よろしく頼むよ」

「え……」

「では！また会おう、騎士姫さん！」

「ちょ、リヨウ！」

最後まで聞かずにコマンドを発声。

転移する直前、アスナが驚いた顔をするのが見えたが、取りあえず無視しといた。

「帰ったぜ」

「あ、おかえり」

既に日も暮れて空が暗くなった頃、俺は我が家へつと辿り着いた。台所には何時ものように黒髪を肩まで垂らした少女が、料理を作っている。

我が家に帰りついた時、家の中に誰かがいるのと居ないので此処まで暖かさが違うのだと、この世界に来てから良く思い知らされる。

「？どうしたの？何か嬉しい事でもあった？」

「お、わかるか？」

気が付けばそんな会話をしていた。多分、無意識のうちに微笑んでいたのだろう。

「んー、まあ、飯食いながら話すさ。さてさて、今日のご飯は何で

すかーっと」

「ふふふ……今日はね、ついに新しい調味料が完成したんだよ」

「何！？まさかお前……」

「えへへ、見てのお楽しみ」

楽しそうに笑って台所へと向き直る少女……サチの背中を見ながら、俺は今日のアスナとキリトを思い出す。

キリトの前でこんな光景が見られるその日も、そう遠くない。そんな気がした。

S u b s t o r y 止められた悲劇 完

五十六話 いずれ訪れる日へ（後書き）

はい、いかがでしたか？

というわけで、今回はキリト爆発しろな回でしたw
アスナの母性に原作をよく読んで脱帽した僕がいますw

それと……もう隠しても無駄ですね。
では、今さらですが発表しちゃいます。

この小説、SAO 戦士たちの物語のメインヒロインは……サチで
す。
彼女をヒロインにしたのには少しいきさつがありまして……

ま、それはおいおい。

ご意見ご感想お待ちしております！
では！

五十七話 刃と騎士（前書き）

はい、お久しぶりです

二週間あいての投稿……遅くなり申し訳ありません！

では、どうぞ！

五十七話 刃と騎士

「なんつーか、悪意を感じる」

どうも最近、俺はコーブと関わる事が多い。この間からアスナには関わりっぱなしだし、この間もコーブ主催の《キリトVSヒースのおっさん》という妙な決闘を観たばかりだ。そして今日に至っては……

「何であのおっさんが……」

From Hirschcliff

Main 少々話がある。ギルド本部までご足労願えないかな？

反射的にNOの意思を返そうとした俺は悪くないと思う。

何たって最強ギルドの団長殿だ。俺みたいなのはぐれソロプレイヤーとは肩を並べる事は有れど接点など全く……と言っわけでは無いにしろ殆ど無い。それが何でいきなり？
はつきり言って怪し過ぎだ。

「ったく……しゃあねえか」

今日はレベル上げに勤しむつもりだったのだが、どうやら少しお預けらしい。

第五十五層 主街区 グランザム

ギルド 「血盟騎士団」本部

長つたらしい階段を門にいた案内人に連れられながら上がる。やがて、殆ど頂上の位置にある扉にたどり着き、案内人は足を止める。

「此方です。お帰りの際は……」

「ああいや、大丈夫です。お構いなく」

そう言うと案内人は一礼して去って行った。

「さてと……」

取りあえずノック。一応年上だしな。

「入りたまえ」

「おっじゃましまーす」

軽く挨拶しながら扉を開けて部屋の中へと入る。

内部は一人用としては広めの長方形の部屋で、窓が壁一面のガラス張りなおかげか、きらびやかさは無いにしろ綺麗な作りだと思えた。

むしろDDA本部の城のように、無駄に豪華であるよりは俺の好みだ。

「春以来かな？君とこうして会うのは」

そしてその窓手前。部屋ただ一つの机の奥に微笑をたたえて座す、この部屋の主。

「その節はお世話になりました……あ、ラフコフの件もアスナの提案通して下さったそうで、どうもっす」

言いつつ俺は軽く会釈する。

あの討伐戦の後、アスナに頼んだあの約束には、難しい事は有れどこの男ならばそこまで反対する事も無かるうと思つての事でもあったのだ。

まあ、しかし……

「相変わらず、アスナ君達には話してはいないのかな？」

「ええまあ、話さなきゃいけない理由も有りませんしね、むしろ面倒な説明が増えそうなので」

そう。一応この男と俺は知り合いなのだが、その事はアスナ、キリトを含め一切他人には話してはいなかった。

理由は色々あるが……まあ曲がりなりにもS A Oで最強と言われるこの男とこんな軽く話が出るのを人に知られて、色々と聞かれるのが面倒くさいと言っるのが第一だ。

「そうか……まあ、君の意志ならば私はそれを尊重しなければならぬね」

「どうもっす」

再び軽い会釈。

そして、俺と目の前の男……聖騎士ヒースクリフは一瞬沈黙する。

「改めて……久しぶりだねリョウコウ君」

「ええ、ご無沙汰してますヒースクリフ団長」

そうして、はぐれソロプレイヤーとこの世界の剣士の頂点に立つ男は対談した。

「は？休暇……っすか？」

訪ねたりヨウにヒースクリフはしっかりとした動作で頷いた。

「ああ、実は攻略担当の……特に前衛部分の担当者から案件が出ていてね」

そう言うとヒースクリフはアイテムレストレージからスクロール

(要は書類) アイテムを取り出し、机の上でリヨウの側に押し出して来た。

それを手に取り、中身を読む。

「攻略組一部プレイヤーのレベル突出による問題……ああ、そういう事か」

いちいちお堅い感じのする、面倒な文体で書かれた書類の内容は要約するところという物だ。

・攻略組内で、一部の突出し過ぎたレベルを持つプレイヤーのレベル調整をしたい。

いつかのフロアボス攻略がいい例だが、SAOと言うゲームはプレイヤーに対する戦闘経験値の割り振りに関して「パーティー内に置いて対象モンスターに対してその戦闘で与えたダメージ総量が高い程、取得経験値も多くなる」と言うシステムを採用している。

勿論、モンスターへの最後の一撃である《ラストアタック》等には結構なボーナスが付く等、例外はあるが……

そしてこのシステム、よくよく考えると意外にえげつない仕様なのだ。

なぜなら、より多くのダメージを与えたいと思うならば、より高いレベルとなるのが一番手っ取り早い。しかしそのためにはより多くの経験値が必要だ。それにはより多くのダメージを……

と、こんな具合に、放っておくとパーティー内でレベルの高いプレイヤーばかりがどんどん大量の経験値を獲得していき、逆にそれによって、レベルの低いプレイヤーは低いまま。彼らの差はどんどん開いて行ってしまう事になる。

そしてそれによるデメリットが最も如實に表れるのが、大量の経験値をプレイヤーにもたらし、ソロ・ギルド含めて多くのプレイヤー

が入り乱れて戦う、《ボスモンスター討伐戦》である。

実際リヨウは以前、自身の持つ圧倒的な攻撃力により一人で凄まじい量のダメージをボスに与えた結果、殆どそのパーティーの経験値を独占してしまい、メンバーに凄まじい目で睨まれた経験がある。

連結^{レイト}パーティー（複数のパーティーを連結して組む大規模なパーティーの事で、ボス討伐や専用クエスト等の大規模戦闘になることが前提の場合に組む事が多い）を組んで戦う《ボスモンスター討伐戦》では、以前からレベル調整は由々しき問題だったのだが、多くの人間の協力が不可欠であるため、あまり進んでは居なかった。

要はここに来て、遂に本格的にそれに乗り出したと言う事なのだろう。

「で、俺に協力のために休暇を取れって訳ですか？」

書類を読み進めるとそこには調整対象となる幾人かのプレイヤー名が書き連ねてあった

キリトや、アスナ。リヨウの名前もしっかり入っている。そして……

「団長殿にも頼むとは、下の連中も思い切りましたねえ……」

「いや、そうでもないさ。やるなら徹底的にやるべきだと言うのは、私も賛成だ」

その中にはヒースクリフの名前も入っていた。

休暇とは言っても事実上は謹慎に近いこの提案。少々団長至上主義な所のあるこのギルドの幹部がよくここに団長殿の名を連ねられたものだ。

まあ流石に、此処でコーブのメンバーを一人も入れないなどという真似をすれば提案される側の連中（主にDDA辺り）が黙って居ないだろうから、やむを得ない所もあったのだろうが。

「それで……どうだろう？ 勝手とは分かっているが、全体の為にこの提案、受けては貰えないかな？」

「そーっすねえ……」

最強ギルドたるコーブの団長殿の頼みとはいえ、流石に答えに詰まる。

そもそもレベル調整は、別にしなくてもソロであるリヨウ個人は困らないのだ。むしろ困るのは常にパーティープレイを強いられるギルド側の方であり、リヨウのような者に見れば、この提案はギルドを含む全体のレベルバランスの為に自分のレベルを犠牲にしてくれと言われているに等しい。

勿論、リヨウとてこの先のフィールド及びフロアボスを自分の力だけで討伐出来るなどと、自信過剰馬鹿のような事を思っている訳ではないから、協力する事自体には別段否定的でも無い。ただ……

「きっかけでもありやあ良いんですけどねえ……」

「ふむ……」

そう、きっかけが無いのだ。

どうせ休むなら、理由なり楽しみが欲しい所だが、今のリヨウには特に休暇を取ってまでするような長期的な目的となる事があるわけでも無いし、まして楽しみに関しては、現在最前線で繰り広げられる恋愛話を覗いている真っ最中だ。

……こら其処、おじさん臭いとか言うな。

「ふむ、そうか……まあ、考えて置いてくれたまえ」

「分かりました。……えっと今日は」

訪ねたりヨウにヒースクリフは再び頷く。

「ああ、要件はこれだけだ。呼び立てたのだからお茶の一杯でも出すべきだったな……無礼な事をしたね、許して欲しい」

「ははは、俺がそう言うお堅いのが嫌いなのを承知で何も出さなかったんでしょ？もう帰りますから。どうぞお構いなく」

そう言っけてリヨウは踵を返し、扉に向かって歩を進める。扉に手をかけた時、再び後ろから声が掛けられた。

「そういえば、君は本当に戻ってきてはくれないのかな？」

聞いたヒースクリフに対して、その質問を半ば予想していたリヨウは、ニヤリと笑って首だけで振り返り、言った。

「何度聞いても無駄ですよ。もうフレンドリストに団長の名前はありませんか」

「ふ……それは残念だね」

「すみませんね。失礼します」

その言葉を最後にリヨウは部屋から出て行った。

一人部屋に残ったヒースクリフは、微笑を崩さないまま小さく呟く。

「本当に残念だよ。君が「あれ」を持っていない事も含めてね」

長い階段を降りながら、リヨウは呟く。

「つたく。昔っからやっぱ煮ても焼いても食えねえよな。あのおっさんはよ」

五十七話 刃と騎士（後書き）

はい、いかがでしたか？

まあ今回はリヨウとヒースクリフの関係を描きたかっただけなので……特に深い意味もありません！

ご意見ご感想お待ちしております！では！

五十八話 九死一生（前書き）

はい、どうもです。

今回は噛ませ……クラディール事件です。

ま、すぐ終わりますが。

では、ごんぞー！

五十八話 九死一生

「はあ……もう段々昼飯時だなあ」

コープ本部の階段を降りつつ俺はそんな事を呟く。

結局、ヒースクリフとの会談をしているうちに、時刻は昼ごろになっていた。しかも面倒臭い相手と話してたおかげでいつもより余計に腹が減っているように感じる。

「テンテケテケテンテンテン テンテケテケテケテンテンテン

」

少し古いがテンポの良い音楽に懐かしさを覚えつつ、階段を降りきり、門番のコープメンバーに一礼してから建物をでる。

堅苦しい空気でこった身体を大きく伸ばし、周囲をなんとなしに見渡す……と。

「おっ」

3時方向、5m地点に、紅白おめでたカラーの騎士風服を纏った栗色で長い髪の少女の後ろ姿。

どうやらメニュー操作に随分と集中しているらしく、全くこちらに目を向けない。

そのまま気付かれないようにゆっくりと後ろから近付いて……

「ううらめじゃー」

「ひゃあああああああー!!」

真後ろで囁いてやると少女は面白いように飛び上がった。

「っはっはっは!!んな昼間なんだからお化けなんざでねえぞ?アスナ」

「ツ〜ツ〜ツ〜！」

爆笑しながら俺はそう言うものの、ホラーの類が大の苦手でおかつ後ろからいきなりおかしな声を掛けられたアスナは、その場にしゃがみこんで意味不明な声を上げてしまう。

「あららら、ちょいと脅かし過ぎたか？」

腕組みをして、取りあえず復活するのを待つことにする。しかし、それが間違いだった。

「り……り……」

「ん？治ったか？副団長殿」

その判断のせいで俺は……

「リヨウーーーーーッ……！」

「ぬおあああああああ！？」

暴走したアスナに、散々（保護コードが発動しない絶妙な力加減で）ボコられましたとさ。

「あつっ……ひでえ……」

結局、リヨウは散々アスナに拳を打ち込まれた後、蹴りまで貰ってやっと謝罪した。

「何もあそこまで「リヨウが悪い」おっしゃる通り」

非難を漏らそうとするも、ギロリと鬼のような眼で睨まれば、閉口せざるをえない。

機嫌の悪いアスナを相手取るのは分が悪いと判断したりヨウは、仕方なく話題を変える事にする。

「そ、そついやキリトはどうしたよ？お前今日からあいつの攻略パーティーやるんだろ？」

「む……」

そう言つとアスナは今度は拗ねたような顔になった。

不機嫌を隠そうともせず、再びメニュー画面を開きながら話し出す。

「ギルドのフォワード指揮をしてるゴドフリーって人がね、一度実力を見ておきたいから。つて言つて、キリト君の事訓練に連れ出しちゃったの。……まったく、何が「ユニークスキル使いでも使えるかどうかはまた別」よ！キリト君の実力知つて腰抜かしても知らないんだから！」

ぶう……。と文句を言い募るアスナに、俺は苦笑しながら返す。

「ははは、成る程な。確かにそりや面白くねえだろうが……ま、一応前衛の指揮官なら言い分は最もだしな。そこはたった1日。副団長殿として、あちらさんの立場も組んでやれ」

まあ彼女も分かつてはいるのだろう。少々唇を尖らせてはいるものの、小さな声で返答。

「わかつてるわ……だからこうやって待ってるんじゃない」

「そりやそうか。うん。偉いぞ。お嬢ちゃん」

「からかわないで」

なんかこのやりとりも定着してきたな。

「でも、少し別の心配もあるんだよね……」

「あ？」

再び俯き、今度は純粹に心配そうな顔でアスナは呟く。

「キリト君のパーティをさっきからずっとモニターしてるんだけど

……パーティにクラデイルがいるのよ」

「はあ！？あの油髪がか！？」

「うん……………」

なに考えてんだ……そんな事を言っている内に、アスナがウィンドウを操作し、アスナのメニューに表示されている物が、俺にも見えるようになった。

そこには、見覚えのある地形を映した地図と、その中心に四つの光点が映し出されている。

「ゴドフリーって気はいい人なんだけど、少し抜けた所もあるから……たぶん、同じギルドになったんだから仲良くしろーとか、そう言う事だと思うんだけど……………」

言いたい事は分からないでもないが、そうそう簡単にあの二人の関係が改善されるとも思えない。

いや、キリトはともかく、あのクラデイルと言う男はキリトと和解しようなどとは考えないだろう。

むしろ毒とか盛ってきそうな感じがする。

まあ、勘だが。

「んー確かに心配だが……なあ？こいつら今フィールドだが、戦闘にしちゃ全然動かなくねえか？」

「あ、これは多分小休憩だよ。もうお昼だし」

「あー、思い出したら腹減って来た……………」

アスナに、「食べてないの？」と聞かれ、「お前んとこの団長の呼び出しでな」と答える。そのままふとアスナの前に表示されるマップ画面に目を凝らすと、四つの光点の内ゴドフリーとクラデイルを示す光点がかなり近くに並んでいる事が分かった。

これだけならば、特に問題も無く俺達は無視しただろう。

クラデイルの前にあった、ゴドフリーの光点が消えさせしなけ

れば。

次の瞬間、俺は一瞬何が起きたか分からなかった。いや、突然ゴドフリーの表示が消えた事もその原因の一つではある。それは間違いない。

ただそれ以上に驚いたのは、俺の視界に確かにあったはずのアスナのメニューウィンドウが、いきなりブレておれの視界から姿を消したからである。アスナの姿と共に。

「へ？つて早っ!？」

周囲を見渡すと、既に百メートル近く遠くに点となって行くアスナの姿が見えた。向かう先に有るのは恐らく街の西門。さしずめ「彼氏の危機!」つてところか……

「つと、こうしてる場合じゃねえな」

噂をすればなんとやらとも言いが、まさか本当にクラディールはやったのだろうか？

そう思い、俺も西門の方へと向かうためそこいらの建物の屋根の上へと跳躍しつつメニューを呼び出してキリトの現在ステータスを確認する。するとそこには、HPバーの周りが普段ならば存在しないはずの緑色に点滅する枠で覆われているキリトのステータスが表示されていた。

「麻痺か!」

成程道理で全く動かない訳だ。

HPバーに対する緑色の枠は麻痺を意味しており、その効果は一部を除いて一切の行動が不可能になると言うSAOに置いてはこれ以上無いほどに恐ろしい異常状態だ。

これまでも多くの犯罪者プレイヤーが利用し、人命を奪ってきた犯罪ツインの常套手段でもある。

とにかく、急がなければならない。

キリトのHPが消滅するのが先か、俺とアスナ（と言うかアスナ）が辿り着くのが先か。

時間との勝負が始まった。

「ったくあの娘は何でこうも先行するか……ね！」

五十五層のフィールド。荒野の中を、再び地面を蹴って跳躍する。アスナの姿は、荒野の向こうへと消えてとっくに見えやしない位置まで行っている。

二人の位置から状況を確認したいが、メニューを操作する時間も惜しい。

元々、跳躍移動は大して長距離の移動に適していると言う訳ではない。

早いのはどちらかと言えば跳躍した瞬間だけで、長距離移動のために少し高くまで上がってしまうえば下降時はろくにスピードも出ない、唯の重力任せになってしまう。

まあ、それでも俺が地べたを走るよりはよっぽど早いのだが。

また、兄弟結晶も使いたいところだが今は使えない。

実はあの結晶、一度使用するとその後ピッタリ二十日間の待機時間が課せられていて、俺はあのグリーンムアイズ討伐日の数日前にキリトに呼び出されて移動が億劫だったと言う凄まじく下らない理由で使用してしまい。現在待機期間なのだ。

最近これに関して自分の浅はかさを呪う事が多い気がする。

「ああもう！頼むから間に合ってくれよ！」

頼むって誰にだ？誰かにだ。

結論から言おう。

リヨウは間に合わなかった。

あの後、リヨウはで跳躍を続けたものの、かなり遠くまで行っていたキリト達には中々追いつく事が出来ず、追いつき、丘を越えて見える位置まで来た時には全てがおわる瞬間だった。

見えたのは、何故かアスナがへたり込み、左腕を無くしたキリトとクラディールがその眼前で身体を密着させていると言う奇妙な光景。

良く見ると、クラディールの懐に入り込む様な形で身体を近づけているキリトの右腕は、その相手の腹を貫通しており、五指をそろえた手が、クラディールの背中から見えていた。

『エンブレイザーか！』

体術スキルの一つで、効果は今見えている通り、いわゆる「抜き手」と言うやつである。

比較的体術スキルの低い奴でも使える技で、殆どノーモーションで繰り出せるため、咄嗟の攻撃には向いている。

リヨウがそこまで理解した所で、クラディールはポリゴンの破砕音と共に砕け散った。

ポリゴンに圧されるように仰向けに倒れたキリトが心配になり、もう一発跳躍。キリトとアスナの間に着地する。

「無事か!？」

駆け寄ると、空を見上げていたキリトは首だけを動かしてリヨウ

の方を見る。

「兄、貴……？」

「ああ……すまねえ。間に合わなかったみてえだな」

無事な姿を見て安心したのもつかの間。リヨウは表情を曇らせる。なるべくなら、義弟や友人にはなるべく殺しをさせたくは無かった。そのため、どうしてもこうなる前につけられなかった事に罪悪感を感じずには居られない。

しかし当のキリトはと言うと、即座に首をぶんぶん横に振った。

「何で兄貴が謝るんだよ。むしろごめん。また心配かけたよな……」

「いやまあそれは毎度のことだから」

「うぐっ……」

さっきまでのシリアスな空気はなんだったんだよ……

とか何とか呟くキリトに、ようやくリヨウは笑顔をこぼす。このままだとまた無用な悲観を義弟に感じさせる事になる事に気付いたのもあるし、何よりまだ罪悪感が消えたわけではないにしろ、取りあえずは義弟が無事であったのが嬉しい。

「おっと、そうそう……」

笑いながらリヨウはこの場に居る今回一番の功労者へ礼を言っていない事に気が付く。今回ばかりはリヨウも頭を下げなければならぬだろう。

何しろ彼女がいなければ、今頃キリトはポリゴン片だっただろうし。その彼女……アスナに礼を言おうと、リヨウはキリトから目を外し振り返る。

しかしながら、栗色の長い髪を持つ少女は、自分の方を向いたりヨウと目が合ったとたんに、顔を俯かせてしまった。

「アスナ……？」

予想外の反応にリヨウは少なからず驚く。しかし直ぐに、その原因に気が付いた。

『ああ、自己責モードか』

推測だが、彼女の弱点。

やたらと自分への責任を重く感じてしまう所の暴走が、また始まったのだらうと俺は予想する。

確かにクラディールとキリトのトラブルの中心にアスナがいるのは確かだらうが……

「はぁ……」

「兄貴？」

思わずため息をついてしまう。

まったくもって不毛だ。此処からアスナがまたしても責任を感じた所で、一体何になると言うのか。

自身に責任をとめるその精神を、俺は決して否定するつもりは無い。反省は絶対に必要なことだ。しかし過剰な反省は前進する事の妨げにしかない。

『まったく……これじゃラフコフの時と同じじゃねえか……』

状況的にはあの時と極近い。

違うのは……

「キリト」

「え？」

此奴だ。

「先帰る。それとな……」

別になんかアドバイスができる訳じゃないんだが……鈍いからなあ、此奴。

「なんつーか、まあがんばれ」

「……はあ？」

「じゃな」

会話の終わり方が不完全燃焼な感じがしたが、恋愛経験等皆無の俺にこれ以上何を言えと言うのか。

知ってる人がいたら教えてくれ。10……いや、20コル出そう。

「あ、ちよ……」

「転移、コリニア」

一瞬で取り出した転移結晶に命じ、俺は今日の昼飯を食べるべく、75層へと跳んだ。

五十八話 九死一生（後書き）

はい、いかがでしたか？

クラデイルとまともにリヨウをバトらせるかどうか迷ったんですが、対して見どころにもならなそうだったし、ここでのキリトの殺人は綿作線路を崩さない雨にも必要だったので、こんな感じになりました。

ご意見ご感想心よりお待ちしております。
では！

五十九話 二人(前書き)

はい、どうもです。

テストも終わり、やっと投稿できます……今回はトラブルは少なめです。

では、ごうござい！

五十九話 二人

「砕イ！！」

突き出された蹴りが2つの首を持つ骸骨の肋骨を砕け散らせる。

足技 単発重攻撃スキル 車蹴り（くるまげり）

左足を軸にして身体を前方に一回転。その勢いと遠心力を殺さないまま右足を蹴り出すと言う技で、まあ平たく言えば「ローリングソバット」と言う奴だ。

足技の中でも有数の威力を誇る上に、打撃攻撃に高い威力補正がかかる骨系モンスターが相手であったため、破壊力も倍増。

残り六割あつた双頭の骸骨「ツヴァイ・デモンズ」はその身体とHPバーを消滅させた。

「ふう……………」

此処は第75層。その、迷宮区の間近となるフィールドの一角。徐々に夕暮れへと空がオレンジ色に移り変わっていく時間帯。

「今日は此処までにすつか……………」

本日の攻略もそろそろ終わり。後数日もすれば、目の前にある迷宮区への到達者も現れ始めるだろう。

此処まで来たのだし内部に突入しても良いのだが、ソロだといきなり致命的な罠等に掛かったら助けとなる仲間も居ないため、完全未開拓の迷宮区に一人で入るのは少々怖い。
なによりも……………」

「やっぱ強ええよな……………」

此処七十五層はインクラッド全体、百層の丁度四分の三。俗に言う、「クォーター・ポイント」と言うやつなのだが、実を言うとこれまでのインクラッドに置ける攻略の中で、こと「クォーター・ポイント」においては正直口くいな思い出が無い。

二十五層、五十層とあった二つのポイントでは、全体的に雑魚モンスの平均ステータスが高くエリア攻略だけでも時間掛けるはめになるわ、二十五層の双頭巨人型ボス相手の時は相手のやたら高い攻撃力で軍の連中の部隊が壊滅しかけてそれ以降前線に出てこなくなるわ……一番ひどかった五十層の鉄製千手観音みたいなボスの時は、ボスのやつぱり異常な攻撃力で尻漣みして勝手に転移で離脱する奴が続出。

結局、援軍が来るまでの間ヒースのおっさんと俺の殆ど二人だけで前衛を支える羽目になり、死にかける眼に遭わされたのだ。しかもそれで俺の名前なんか変に有名になるし。

「あー、嫌な事思い出しちゃった……帰ろ」

早く帰る分にはサチも文句は垂れないだろう。心配なのか知らないが、サチは俺が事前に伝えておいた時刻よりも遅く帰って来ると、すぐ怒るのだ。

「アイツは俺の母親かつー……の？」

最後の方だけ発言が疑問形になってしまった。

と言うのも、俺の耳の中で最早完全に馴染みとなった、メッセージ受信のチャイムが鳴り響いたからである。ちなみに、最近そろそろ音楽を変えようかと迷っている。

「どれどれー？つとまたですか……」

送られてきたメッセージの送り主はキリトだった。内容は……

From Kirrito

Main 話が有るので、終わったならエギルの店まで来てくれないか。

「あいつ等最近俺呼び出すのが趣味になってねえか？」

思わず、そう独り言をつぶやく。

エギルの店へは元から向かうつもりではあったのだが……

アルゲード エギルの店。

何時も通りの店に入り、何時も通り二階へ上が……ろつとした所で、不意にエギルからリヨウへと声を掛けられた。

「事情は知ってんのか？」

「ああ？何が？」

「いや……まあいい早く行ってやれ」

「？」

リヨウは推察する。

事情……とは呼び出しの原因に關係が有るのだろうか？正直、いきなり呼び出されて来ただけなので勘でしか予想出来てはいない。

「うつつす」

階段を上がり、部屋の中へと入る。中には何時も通り。揺り椅子に座ったキリトと、その肘掛けに座ったアスナがいた。

「リヨウ」

「悪かったな。また呼び出して」

キリトはばつの悪そうな顔をして苦笑する。

アスナも緊張こそしてはいない物の、少し決まりが悪そうに見えた。

「いやいや、別に良いさ。唯ここ最近まともに来て無かった狩りを、またしても早めに切り上げる事になっただけだ」

ソファに腰掛けつつもリヨウは持ち前の意地悪精神を少々発動させて、その嫌味を混ぜた愚痴をやる。ちなみに、元からもうやめるつもりではあったので、ちよっぴり嘘入りだ。と、キリトは頬を掻きながらまた一言、「すまん」とこぼした。

「まあ、愚痴は後でたっぷり聴かせてやる……それで？今回は何だ？」

前半の時点では「うへえ」とか言いながら苦虫を噛み潰したような顔をしていたキリトだったものの、後半の一文を言われた途端に顔を引き締める。

同時に、アスナも顔を引き締め、二人とも立ち上がって背筋をぴんと伸ばす。

思わず釣られてリヨウも立ち上がろうとしたが、キリトに制された。

そして……

「えーと、コホン……報告する事が有ります」

「……………」

何故か敬語になりつつ切り出したキリトに、リヨウは少し茶々を入れたくなった物の、そこは押さえる。

この話が予想通りの内容なら、黙って聞いてやるが吉だと、彼の勘が告げていたから。

「俺とアスナは……………」

一言一言噛みしめるように、或いはその意味を確かめるように、キリトは言葉を紡ぐ。

「この度」

そしてそれは。

「結婚する事となりました」

ついに、リヨウの前で現実の物となった。

「そうか……」

半年以上前に、この二人の決闘を見てから、ずっと心のどこかで不確定な勘として予想していた事。

やがてアスナの側ではそれが夢となり、それを彼は出来る限りサポートして来た。

「うん……」

それがいつたい誰の為だったのかは、リヨウ自身今でもよく分からない。

義弟に幸せと言う何かを掴んでほしかったのか、悪夢を見てうなされていた少女をどうにかしたかったのか……或いは自分の唯の娯楽と自己満足だったのか。

その答えは出ない。が、しかしリヨウは一度大きく頷く。

少なくとも、自分のやっていた事は決して悪い結果をもたらした訳ではないと、そう自身言い聞かせるように。

そしてリヨウの口からゆっくりと紡ぎ出された音は……

「……おめでとう」

リヨウ自身すら驚くほど、暖かった。

「結婚!？」

サチの大声が、自宅の空間に少し反響しながら響く。既に日も暮れ、アインクラッドも夜を迎えた午後七時ごろ。私服に着替えて夕飯を食べるために食卓に付きながら、俺はサチに今日の出来事を告げた。

「声でかいつつの。耳痛くなる」

「ご、ごめん……でもキリトが結婚って……」

「ああ。俺も此処まで来るかは微妙だと思ってたからな……」

「……………」

サチは少し心配そうな顔をする。俺とキリトの義兄弟設定破綻やギルド崩壊の件に関しては、俺達の中でもある程度の整理はついていた。とはいえ、此奴は此奴なりにキリトの事を心配していたのは俺も知っている。だが……

「安心しとけ。嫁さんもキリトも、互いの事しっかり思い合ってる。それに嫁さんはキリトと肩並べて戦えるくらい強ええんだぜ?もうあいつは……あいつ等は、自分で進んでいけるさ」

そう、心配する必要はもう無い。

彼らは歩き出したのだ。彼ら自身の、この世界での新しい道を。

「うん……そうだね」

ようやく、サチも安堵したような頬笑みを浮かべる。

此奴自身、心配しながらも俺と同じくキリトが前へ進めるように強く願っていた一人だ。キリトの結婚は、きっと俺達のあの事件にとっても大きな一つの区切りなのだろう……

「ねえ、リヨウ……？」
「んー？」

夕飯も終わり、居間でのんびりと新聞（アインクラッドの情報ギルド等が発行。各アイテムや階層の攻略情報の纏めや、探し物、探し人、伝言掲示板などが集まっており、いくつか種類が有る。平均価格500コル）を読むリヨウに、サチは縫物をしながら小さく声をかける。

この裁縫のスキルはサチの趣味の一つで、既にマスターしている。リヨウがいつも着用して浴衣の様な鎧服は、サチがリヨウの取って来た《メタリカ・レオンの皮》という、上層階モンスターの非常に加工が難しい素材から作った物で、耐久値、隠蔽、軽さ、動きやすさに非常に優れ、しかも一定威力に達しない攻撃をノーダメージで跳ね返す上に微力ながら戦闘回復の効果まであると言う凄まじい性能の逸品だ。

ちなみに、今編んでいるのはこれから寒くなる季節のためのマフラーである。

「き、キリト達って、け、結婚したんだよね？」

「ああ？その通りだが……」

リヨウは気が付いていないが、サチの顔、実は真つ赤だ。

実を言うと、夕飯を食べている間に、その意味する所にようやく気が付いたのである。

即ち、お互いが了承さえすれば、この世界では結婚が出来るのだと言う事に。

「あ、あの……リヨウ……さ？」

「なんだよ？」

「その……えと……」

「あん？」

聞きたい事が中々喉の奥に詰まって出てこない事に自分でイライラしながらも……なんとかその言葉を絞り出す！

「け……ケーキ食べる！？」

「話の脈絡が無茶苦茶なんだが……ただごと！」

少し呆れた様な顔をしたリヨウだったが、そこは甘い物好き精神、すぐに笑顔で要望の意思を返して来た。

「すぐ出すねー」と言いつつ、編み途中のマフラーをアイテム欄にしまってサチは台所へと向かう。その途中で……

「ハア……」

サチは思わず小さな溜息を吐いた。

「どうしてこうなっちゃうのかなあ……」

漫画や小説等ではしょっちゅう見るシーンだが、まさか自分がこういう悩みを持つとは……以前なら夢にも思わなかった。

『キリトのお嫁さんは、どうしたんだろ……？』

どうやって思いを伝えたのか、ぜひ聞いてみたい。

出来れば体験談付きで。

この浮遊城インクラッドで、リヨウとサチが共に暮らす日々が始まってから、既に十ヶ月以上が経とうとしている……しかしながらも、サチとリヨウ、この二人の関係性は、依然として、「唯の同居人」の域を超えていないのだった。

五十九話 二人（後書き）

はい、いかがでしたか？

なんとなく、くさいシーンが多かったような気がしますが、まあそこはあまり深くはw

さて、サチをヒロインにすえたは良いがなかなかどうして恋愛シーンというのは書き難いぞ……どうしたもんか。

まあ、地道に行きますw

ご意見ご感想、心よりお待ちしております。
ではっ！

六十話 Home (前書き)

はい、どうもです！

さて、それではSAOの魅力の一つたる日常編。
今回からどんどん進めていきましょう！

では、ごっごー！

六十話 Home

キリトとアスナがめでたくのろけ……もとい。ゴールインした事を知った日の翌日。その日から、俺は暫くの休暇に入る事にした。キリトとアスナも、この結婚を期に長期の休暇を取るらしい。差し詰め新婚生活をのんびり、と言った所か。

で、以前言っただきっかけというか。あの二人も、10%位はレベル調整の意図あって前線を離れるのだろうし、タイミングを合わせて俺も休む事にしたわけである。

「……でお前は何個目だ？そのマフィン」

「むぐ？」

「きゅる？」

俺の目線の先で、一人の少女と一匹のモンスターが同時に食べていたマフィン（モンスターはナッツ）から顔を上げ、殆ど同じ場所にマフィンとナッツのカスを付けたまま、シンクロ率100%な動きで首を傾げる。

何だこいつ等、変に可愛らしい動きしやがって。

少女の方は、亜麻色の髪の毛の左右を赤い玉の突いた髪飾りで結んだ同年代の子供たちと比較すればおおよそ可愛らしいと言えるであろう容貌の少女。

以前俺と協力して自身の使い魔モンスターを生き返らせるため奮闘した、モンスターテイマーこと、シリカだ。

ナッツに何気にながっついていいるモンスターの方は、その時救ったシリカの相棒。小型ドラゴン種、フェザーリドラのピナである。

こいつ等、昼飯を食うと言う時になって急に訪ねて来たのだ。と言うのは実は俺だけの認識で、どうもサチが昼飯に誘ったらしい。何時の間にフレンド登録していたのかと聞いたら、初めて俺が連れて来た時に既にしていたのだから言う。同じ部屋に居たはずなのに気がつかなかった……

で、今は食事を食べ終わって、デザートタイムである。

「ん、む」

「飲み込め」

「ん……（ゴクン）えっと……サチさんのマフィンって美味しくて……つい沢山食べちゃうんですすよね」

「あはは……」と苦笑しつつ返答したサチに対し、俺は眉間にシワを寄せて二つ目の質問。

ちなみにピナは相変わらず夢中でナッツにがつついている。破片が飛びそうだ。

「ってことは何か？今までも俺の知らん間に此処来て菓子食ってたって事か？」

「は、はい……」

「けしからん」

別に家に居るのは構わない。しかし、新しいケーキやなんかを、俺より先にこいつが食ったと言うのがほんの少しだが気に食わん。

「またそんな事言っ……意地が悪いよ？リョウ」

「む……」

新しいケーキを持ってきたサチに注意され、やむなく腕を組み唸る。

「はいどうぞ」

「わあ……!!」

サチが二つ目に持ってきたのは、ロールケーキだった。薄黄色のスポンジで真っ白なクリームを巻いたシンプルな物だが、やはりこの手の洋生菓子と言っるのは見た目だけでも楽しめる分、食欲をそそる物が有る。

と、シリカがケーキに手を付ける事無く、遠慮がちに此方をチラチラと伺っているのが目に入った。ったく……

「かまわんぞ、別に食っても」

そもそも許可を出すなら俺ではなくサチだ。

さっきのは半分は冗談のつもりだったのだが、本気にさせてしまったらしい。

まあそんな事を説明するより先に、許可を出されたシリカは目を輝かせながらケーキを解体に掛かったが。

「あんまりがつつくなよ」

「ふふふ……」

俺は苦笑しながら注意を飛ばし、サチも微笑みながらその様子を見つめている。

まあケーキとナッツに夢中になって一人と一匹にはまるで聴こえていないようだ。と思ったらピナはナッツを食べ終えたようだ。食後の運動のつもりなのか、ふわりと浮きあがって部屋の中をうろろし始める。やがて……

「きゅるっ!!」

「んぐ、あむ……っておい、ピナ、俺今食ってるんだけど……」

何故か俺の頭の上に乗った。

以前からなのだが、ピナは偶に俺に会つと、やたら俺の頭の上に乗りがる。

とは言えずっと乗せる訳ではない。幾ら小型とはいえ、それなりの

重さがあるので長時間やっていると首が疲れるからだ。まあ此奴の体表を覆うふわふわした羽は非常に気持ちいいので、±ゼロと言ったところ……いや、むしろプラスか。

ちなみにサチなんかは結構動物好きなので、この状況になると羨ましそうに目で俺を見る。

なお、シリカ曰く、彼女以外でピナが自分から誰かの上に乗るのは俺だけなのだそうだ。

使い魔モンスターの自由行動のパターンは本来ランダムのはずなのだが……此奴だけ他と違う高性能なAIでも宿ってるんじゃないかな？

仕方なく俺は姿勢を正して、ピナを頭に乗せたままロールケーキを食べ進める。

うむ。実にシユール。

と、先程の餌をねだる仔猫みたいな表情が嘘であったかのようになり、ロールケーキをもぐもぐとしては「んん〜」とか言って輝く様な笑顔を浮かべている女子に目が行った。

「なあ、ピナ」

「きゆる？」

何だ？と言つように首を下にして視線をやや上に向けた俺を見下ろした。ピナが返してくる。

てか言葉分かるのか？此奴。

「彼奴つて何時も飯あんな感じなのか？」

「きゆる」

多分肯定。小さく首縦に振った様に見えるし。

ちなみに言っておくが、今は一応正午である。

「あんながつつく様な食い方してたら太るよな？」

「きゆる。きゆるる」

「はあ？そうなのか？」

「きゆるる、くる、きゆ」

「ありやりや、マジか。お前も苦勞人、いや苦勞童だなあ」

「きゆるう……」

「って、何の話してるんですかつ！」

シリカが怒鳴った。珍しい。

「「ごちそうさまでした」

「きゆるる」

昼過ぎ。

ケーキを食った後シリカとサチと俺とで軽い雑談を重ねていると、シリカにメッセージが届いた。何やらどこぞのプレイヤーシヨップに用が出来たらしく、今は見送りだ。

「おう。またその内な」

「何時でも来て良いからね？」

「ありがとうございますっ！」

「きゆるっ！」

シリカは礼儀正しく。ピナは元気に返事をする。

ていうかホントにピナは唯の使い魔なのだろうか？真面目に疑問になつて来た。

「あ、そう言えばリヨウさん」

「ん？どうした？」

「キリトさんのご結婚、おめでとつございます」

「ああ、どうも……ってなんでお前が知ってんだ」

「お邪魔しました」

答えずに帰っていくシリカは、何故かしたり顔だった。

大方、リズ辺りにでも聞いたのだろう。

リズとシリカは妙な所で波長が合うようで、以前シリカから武具の事で相談を受けた時俺が紹介してから、ちよくちよくガールズトークをしているらしい。

唯俺からすると二人の会話を見ていると姉妹にしか思えなくなってくるから不思議だ。

「さ、中入る？段々寒くなってきた」

「ん、そうだな。もう十一月だしなあ……」

その日二度目の客人が現れたのは、それから二時間くらい経った頃のことである。

突然の休暇で会ったため、優先的にやる事がすぐに思い浮かばなかったリヨウは、取りあえず一日家で暇を持て余す事にしてソファに座り込んでいた。

と、唐突に玄関に付けられているはずのノック用の金具の音が家の中に鳴り響き、来訪者の訪れを告げる。

「お？」

「珍しいね、一日に二人なんて……」

「だなあ……あ、いいぞ、俺出るから」

編み物をしていた手を止めたサチを片手で制し、リヨウはソファから立ち上がる。

元々、リヨウの家は余り人目には付きにくい場所にあるため、来客

自体が珍しいのだが、どうやらその珍しさが重なる日もあるらしい。

「はいはい。どちらさまですか……」

小走りに玄関の扉へ近付き、外側に開ける。

と、丁寧な口調の凜とした美声と共に、リヨウの視界の中で《栗色の髪》が揺れた。

「はじめまして、隣に越して来た者です。何かとご迷惑おかけするかもしれませんが……が？」

続いて、《黒い服》の男が

「どうしたアス……ナ？」

いきなりの事にリヨウ自身も直ぐに反応できない。

両者ともに、たっぷり数秒間フリーズ。

「どうしたのリヨ……へ？」

不審に思ったのだろう。追いかけてきたサチも同じくフリーズ。

「あー、why?」

そうして、一番早くフリーズから回復(?)したリヨウが、やっ
と口に出た第一声は、それだった。

そう。

此処は、第二十四層。

中央の湖の南岸にある、主街区コラルの村から更に南。小さな林の中にある、《二軒》のログハウスのうちの右側。

リヨウの自宅で有り、キリトとアスナがこれから暮らす新居の……
お隣さんである。

六十話 Home (後書き)

はい、いかがでしたか？

実を言うと今回は最後のキリト & アスナ登場シーンから始めようかと思ってたんですが、少し切れ目が中途半端になってしま
いそうだったので、「じゃあ原作キャラ誰か出してお茶を濁そう」
という事になり、この展開になりました。

ちなみに候補はシリカ・リズ・クライン。

クラインは脳内会議でなぜか即座に除外されましたけどねw

リズはこの物語だとまだ出番が少ないからどうしようかと悩んだん
ですが、以前《不思議な少年》編を終えた後、「原作に近すぎない
か？」というコメが結構多かったのを思いだしまして……短い
が、じゃあちよつと鳩麦シリカを書いていみよう。という事に。
次にこういう機会があれば、今度はリズにしようと思ってます。
あれ？クラインやっぱ除外されて……)

ご意見感想お待ちしております！
では！

六十一話 料理の裏側（前書き）

はい、どうもです。

今回は少々短めです。

では、ごうござい！

六十一話 料理の裏側

「ってこたあなにか。お前らこれからウチの隣で新婚生活か？」

「ああ。今更新しい家を買っ金なんか無いし……」

「ごめんね。まさかリヨウの家が此処だなんて思って無かったから……」

リヨウの問いに、キリトは居心地悪そうに、アスナは申し訳なさそうに答えた。

事前に何処へ越すのか聞いておくか、自分の家の所在を面倒くさげらずに教えておくべきだったと、リヨウは後悔する。と言うか……

『俺はなぜキリトにすら教えて無かったんだ……？』

今更とは知りつつも、疑問に思わずには居られなかった。

「ま、いいさ。元々少ししたらお前等の家には行くつもりだったしな」

リヨウが休みを取った理由は一応は休息が主だが、キリトとアスナの新居に赴き、二人をからかうというのも勿論入っている。

新婚生活に水をささないなどと言う気の効いた常識は、リヨウの前には完全に無視されるべき常識^{ルル}である。

「なんだろう……わたし、何か自分の心配した方が良い気がしてきたよキリト君」

「アスナ、同感だ」

「何だ二人して人聞きの悪い」

口を尖らせて返すと、後ろから少し呆れ気味の、しかしどこか楽しんで居るような声が聞こえた。サチだ。

「日頃の行いのせいでしょう？わたしもキリト達が正しいと思うし」
そう言って、恐らく中身は特性の紅茶であるうティーセットと、
先程も食べたロールケーキの残りを、「余り物ですけど……」と申し
訳無さそうな顔（主にアスナに）をしてテーブルの上に置く。
アスナの顔が輝いたが、見なかった事にした。
サチが席に着いた所で、今度はアスナの方から疑問が投げられる。

「……………」

「えっと、その人は……？」

「あ、そうか……」

「ああ……」

リヨウとキリトがやっつと言った風に気が付く。

以前過去に関する話をした時に、すっかり説明した気になってしま
っていたのだ。

「えーっと、んじやまあ紹介する。前に話したギルドの元メンバー、
サチだ。一応俺の同居人」

「よ、よろしくお願いします」

ぎこちなく、ぺこりと頭を下げたサチを、リヨウは「何緊張して
んだ？」とひじで小突く。

サチからは小さな声で、「だって……」とだけ帰って来た。
続いてキリトがアスナの紹介をする。

「えっと次こっちか……こちらはKOBの副団長殿で、攻略組の戦
闘指揮責任者でもあらせられる、アスナ。俺の……妻だ」

前半のやたらと大仰な説明で、リヨウは笑いかけ、サチは苦笑し、
アスナは唇を尖らせたが、最後の台詞で、アスナは照れ臭そうに、
他二人は柔らかく笑った。

少し頬を紅く染めながらも、元々社交性の高いアスナが、ニコリと

笑って、サチには頭を下げる。

「はじめまして。お隣さんだし、仲良くしようね？サチ」

「は、はい！」

「そう思うんなら先ずはその敬語やめるサチ」

「う……」

突っ込まれた事で、サチは耳まで赤くなりながら力なく俯いてしまった。

朗らかな笑い声が響き、サチはほんのちよつとりヨウに恨めしそうな目を向けた後、はにかむような笑顔を浮かべた。

「凄い……とつても美味しいよこのケーキ！これ、サチが作ったの！？」

「へ！？あ、うん。材料とか持って来てくれたのはリョウが多いけど……」

アスナが賛辞を送っているのは、サチの作ったロールケーキの余りの美味しさに際してのことだった。

アスナ自身も菓子を作る事はちよくちよくあるが、此処までの物を作れた事は無い。

しつとりとしたスポンジの食感はシステムに規定されてるから良い問題なのは味だ。

スポンジはそれ自体に柑橘系に近い爽やかな甘みが含まれており、優しい印象を受ける食感の中にアクセントとなっている。白いクリームの方は少し濃いめで、濃厚な甘みが有るが、そのそれぞれが、互いの味を邪魔していないのだ。

独立しつつも調和するように二つの甘みが独特のハーモニーを醸し出すこのロールケーキに、アスナはサチと同じ料理スキル完全習得者として、とても深い感銘を受けた。

「このクリーム、何の素材で出来てるの？」

「えーっと、クロ口竹とアグル水と……メトウルの乳かな」

「メトウル！？インスタルじゃなくて!？」

インスタルとは、二十四層等の平野部に生息する、牛とバッファローを足して二で割った様なモンスターだ。

現実で言う牛乳に似たコクのある乳を出してくれる上に性格もおとなしいため、乳の搾取が容易で、バターや生クリームに近い料理を作りたい時に重宝する。

しかし今サチが言ったメトウルと言うのは、五十三層に生息する真っ黒な山羊にトナカイの角を付けてついでに好戦的な性格を付け足した様なモンスターだ。

確かに乳が取られる事は知られているものの、乳を取るには一度壁に向かって突進させ、岩壁に角を突きささせると言う荒技で動きを止めた後、限られた時間で取らなくてはいけない上に、インスタルと大して乳の味は変わらないと言う事で、あまりメジャーでは無い素材である。

その手間のかかるメトウルの乳を、相当量の乳系アイテムが必要なクリームに使うなど聞いたことが無い。

「メトウルの乳はね、確かに、普通に飲んでもインスタルと大して変わらないように感じるんだけど、クリームとか、バター系の食材を生成するのに使うとインスタルで作った時よりも味が濃厚になるの。しかも、ブダルガの粉とピイビスの卵で作った生地にくロ口竹とパフマの実で味付けした生地と組み合わせると、とっても良く合うんだ。」

「そっか、これはパフマの実なのね……」

パフマの実はたしか六十六層のフィールドに生える木から取れる。確かに爽やか甘さが特徴なのは知っていたが、甘さ同士で合わせて

しまつと他の素材の甘みに負けやすいため、アスナは余り多様な事は無かった。

アスナは確信する。今日の前に居る少女は、自分とはこの世界での料理に置いて経験が違う……！

「え、えと？アスナ？」

「なあ兄貴、話の内容分かるか？」

「取って来た食材の事だけならな、それ以外は意味分からん」

黙ってしまったアスナの対応に困るサチをよそに、食材には興味の無い男二人は女性二人の意味不明な会話をどうしようかと相談を始める。

まさか此処まで料理の話でアスナがヒートアップするとは、此処の二人は勿論知らなかったし、キリトも料理に真剣なアスナと言うのを実際に見るのは初めてらしく、予想していなかったため対処法が分からない。

そんな中、再びアスナが口を開いた。

「うん、決めたっ！」

「あ？」

「？」

「アスナ？」

突然椅子から立ち上がり、何かを決意したようにガッツポーズをするアスナに、三人は妙な物を見る様な視線を向ける。

「サチ、今日一日料理教えて！」

「へ！？」

いきなりの発言にサチは眼を見開く。

「いや、お前既に完全習得してんだらうが」

マスター

何を今更、と言った風に呆れ顔をするリヨウに対して、アスナは即座に首を横に振った。

「マスターただけじゃこの世界で料理スキルを極めたとは言えないのよ？リヨウ」

その先を、次はサチが引き継ぐように……

「うん、この世界の食材の味覚パラメータって言うのは、とっても複雑で奥深い物なの」

またアスナ。

「一つ一つの味は固定でも、一定の組み合わせによっては想像もつかない変化が起きたり」

サチ

「微妙な味の変化だって表現できるんだから！」

そしてまるで示し合わせたように二人で。

「この深さは完全習得^{マスター}してからこそ、本当に分かる物なの！」

「お、おう」

普段何気なく男性陣が作って貰っている食べ物には、彼女たちの地道な研究の成果が詰まっている。否応なしにそう理解せざるを得なかった。

リヨウは二人の迫力に圧されたように首を縦に振る。

実際、NPCレストランで食べる料理よりも、料理スキルの持ち主が作ったメイド品の方が美味いと言うのは定評だし、明らかなのだ。

ちなみにキリトはその正面の椅子で……

「俺、今度からはもっと感謝して醤油使おう……」

勝手にそんな事を誓っていた。

六十一話 料理の裏側（後書き）

はい、いかがでしたか？

やばい、なんか段々カオスなことになってきた……
これらの食材が再び登場するのは何時の日か？

一応、サチは料理の経験がアスナより上です。
基本的に家庭的な感じにしましたのでw

ご意見ご感想、お待ちしております！
では！

六十二話 語らう(彼女)(前書き)

はいどうも。鳩妻です。

今回はタイトル通り、女性陣メインのお話です。

では、どうぞ！

六十二話 語らう（彼女）

「じゃ、ちゃんと買って来てね？」

「キリト君。買う物忘れちゃだめだよ？」

空も夕暮れ時になった頃、そんな声が二十四層南端の森で聴こえた。

小さなログハウスの前で、玄関まで出て来たサチとアスナが、リヨウとキリトに注意を飛ばす。

結局、あの後波長が合ったサチとアスナの料理トークはとどまる所を知らず、完全に「イミワカンネー」状態になっていた男二人を話題の彼方に置き去りにしたままキッチンへと移行、アスナがサチの作った調味料に感心したり、近しい調味料でも微妙に味が違う（キリトとリヨウにはよく分からない）互いの調味料を味見して材料に付いて話し合ったりを繰り返した後、共同で相談して夕飯を作る事になった。

飯と聞いて色めき立つ男性陣であったがとところがどっこい、デザートの材料の買い出しをアスナに命じられ、現在はそのために二十四層主街区のコラルの村へと出かける所である。

「分かってら、て言うか、こんだけするからには旨いもん頼むぞ」

「一応、確認のために後でメッセ送るな」

そう言うって出かけて行った男二人を見送りつつ、二人の少女は互いに顔を見合わせて微笑む。

「よし、じゃ始めよー！」

「うんー！」

アスナとサチ。この世界でもトップクラスの實力を誇るであろう二人の料理が、始まった。

「サチ、これは？」

「え？あ、えーっと、先にそっちのスパイスで下味付けて、その後もう少し濃い目の味付けにするから……あ、そうそれ」

テキパキと互いに言葉を交わし合いながら調理は進む。

お互いの動きをみて、常に先読みをするかのように準備や下ごしらえを行い、焼いたり煮たりといった作業（まあシステムが管制するのだが）に移る。

手の動きは全くと言って良いほど止まる様子を見せず、二人の眼は、両者ともボスモンスターの動きを観察するがごとく隙が無かった。

まあ……………

「これ……レルナの実とパンプラの実と干しカルルと……何が入ってるの？」

「えーっと……ピストリネの実とディープ・スネークの骨だね」

「ディープ・スネーク!？」

《ディープ・スネーク》は、「常闇の国」とも言われる、常に薄暗く視界が悪い事で有名な二十七層のフィールドに稀に出現する身体の長い蛇型モンスターで、仮に居たとしても体表が黒い鱗に覆われているため視認するのが難しい。故に倒すのも容易ではなく、その食材は《ラゲー・ラビット》と同じくS級レア食材に規定されている。

正直、その骨を使ったスパイスなどアスナも見るのは初めてだった。

「前にリヨウが偶然って言って取って来てくれたの。肉とかは量も少なかったしもう食べちゃったけど、骨は沢山あったからスパイスにだって思ってた」

「私食べた事も無いよ……味ってどんな感じ？」

「ピリツとするけど唯辛いよりは甘辛い感じかな。それに、臭みの

ある肉にも有効なんだよ？ポンプの肉でも効果あるし」

「へえ〜〜〜……」

この様な感じで、ちよくちよく料理談義を挟みつつ、二人の料理は続くのだった。

三十五分後……

あらかたの調理は済み、後は時間のかかる煮込み料理と今リヨウ達に材料を買って来て貰っているデザートのみになったため、サチとアスナは待ち時間をテーブルの椅子に座って待つ事にする。ちなみにサチお手製クッキーとお茶付きだ。

「疲れたねー」

「うん、あんなに本気になって料理したの久しぶりかも。ありがとうね、サチ」

「ううん、私も楽しかったもん。お礼を言うのはこっちだよ」

アスナは元々社交性が高いし、共通の話題が見つかればサチの人見知りも何処へやらと消え、他愛ない話をしながら談笑は進む。しかし……

「でも知らなかったなあ……」

アスナの次の発言により、状況は一気に変わる事となる。

「リヨウが結婚してたなんて」

「ツ！？！？！？！？！？！ツ！……ツ！……ツ！……ツ！……ツ！……」

「さ、サチ！？」

アスナの地雷原に歩兵を突撃させる様な発言により、サチは飲みかけた紅茶を嘔き出す……のをギリギリでこらえ、飲みこ……もうとして出来たてのその熱さに悶絶する。

「エホツ、ケホ……アズナ、勘違いしでるよお」

「へ？」

涙目で咳き込み、少々濁った発音でサチは何とか言いたい事を絞り出す。それに対してアズナは何が？と言って視線を向け、サチは言葉を続ける。

「私とリヨウは……ケホツ……結婚はしてないの」

「え？でも同居人って……」

成程、確かに、通常男女が此処の様な田舎で同居していると聞いたら、殆ど人はそれを結婚しているからかギルドメンバーだと考えるだろう。此処に越してきてからあまり人とそう言う事を話す機会がサチにはあまりなかったため、気がつかなかった。

「あの……本当に唯の同居人なんだ。特にそれ以外に何かある訳じゃないの」

去年の年明けの日だった。黒猫団の事件があつてから本格的にモンスターが怖くなってしまいフィールドに出られなくなったため、宿屋で暮らしていたサチに、突然リヨウが『お前だけ一人で置いとくのは不安だから』と言つて、同居を提案して来たのだ。

一人で暮らす事に寂しさを抱いていたサチには断る理由など有る訳も無く、そのままリヨウが見付けたこの家に越してきて今に至る。と言つ訳だ。

「そっか。じゃあまだまだ結婚は先なんだねー」

「うん。ほんとは……え？」

ようやく自身の発言に少し気が付いたサチが前に視線を向けてみた物は、楽しそうな顔でしてやつたりと言つた顔をしたアズナだった。

「ち、違うの！今は……！」

「駄目だよ？サチ。もう聞いちゃったし、取り消し禁止」

ニコニコと光輝く笑顔で自分に告げて来るアスナに対して、サチは己の負けを悟り、ガツクリと肩を落とす。

「アスナって意外と意地悪だね……」

「あはは……リズのが移ったのかも」

アスナはこの手の話題好きの友人を思い出して、苦笑しつつも話を進める。

「ちなみに、リヨウは知ら……ないよね？」

「うん。多分気付いて無いと思う……」

サチがそう言うてから、女子二人は「……はぁ」「」と同時に溜息を付く。

全くそろいもそろって手強い相手に恋心を持ってしまったせいか、二人の間には妙な仲間意識が芽生え始めていた。

とは言え。

「そう言えば……アスナはどうしたの？」

サチはともかく、アスナは既にその手強い相手に気持ちを伝え、報われている訳である。

昨日の夜思った事を唐突に思いだしたサチは、思い切ってその旨をアスナに問うてみる事にした。

即ち、アスナの半年間の記憶をである。

「え？あ……うーん、私はきっかけが昼寝だったから……」

「昼寝？」

「うん。あのね……」

アスナの恋愛記録は、流石に相手がキリトと言うべきか。普通のそれとは少々毛色の違うものだった。

二人の出会いは、先ずキリトが昼寝していた所から始まる。それをアスナは注意したが、しかしキリトはそれに従う事は無く、それどころか、アスナにも昼寝をするように勧めたのだそうだ。

当時のアスナは悪夢による不眠症に悩まされており、一日に二、三時間しか眠れぬ日々を送っていた。しかしその時は……キリトの隣の日溜まりで眠ったその時は、本当に何の悪夢も見ること無く、久方ぶりに、ぐっすり眠れた。

その時アスナは知ったのだ。ただ脱出だけを目指して心を「殺す」道では無く、この世界の中で「生きる」と言う道を。

それまで彼女にとっては「活動」でしかなかったこの世界での日常が、「生活」に変わった瞬間。

サチはアスナに極近い経験をしていたので、アスナのその経験がキリトへの恋心へとつながる事はとても自然に理解する事が出来た。

それからの話は聞いていて楽しかった。その後直ぐに起こった事件でキリトと協力する所から始まり、キリトと連絡を取りたくて同期に知り合ったりヨウに頼ったり、メッセージをちよくちよくと送ったり、お茶に誘ってみたり、ボス攻略会議で積極的に話しかけてみたり。キリトが危ない事をしたと聞けば飛んで行って注意をしたりもしたそうだ。

とにかく、小さな努力の積み重ねをして行った。結果、半年の時を経てついにここまで辿り着いたのだ。

彼女の思いは、報われた。

「って言う感じ……かな？」

「……………」

頬を若干赤らめて話し終わったアスナの眼前に座るサチは、放心状態になっっているように見えた。全く動かず、呆けたように口が少しだけ開いている。

「さ、サチ？」

「へ！？あ、ごめん……！」

「えっと……つまらなかつたかな？」

「う、ううん！そんな事無いよ！」

サチの呆けていた理由はそこでは無い。

むしろ逆。彼女の歩んだ道が余りにも真っ直ぐで、一途で、そして何より綺麗だったから、その物語の様な話の中に完全に意識が引き込まれてしまっていたのだ。

リヨウがキリトとアスナの結婚を知った日に帰って来た時、嬉しそうにしていた気持ちも今ならば分かる。

アスナの話によれば、リヨウはアスナとキリトの中間に立ち、二人の距離を縮めるための協力を、本当によくやって居たらしい。今話を聞いた自分ですら、このハッピーエンドな物語の主役である二人を心から祝福したい気持ちでいっぱいなのだ。ずっとみて来たリヨウはさぞかし感慨深く、そして嬉しかっただろう。

サチは今、心の底からキリトとアスナの結婚を喜んでいた。

しかし同時に、サチの中で少しだけ嫉妬と言う感情が芽生える。

サチは自分の人に盲く感情を伝えられない内行的な性格を、自分から公言する訳では無いもののある程度自覚している。故に、直球な手段を次々に打つ事の出来るアスナの行動力が、少しばかり羨ましかったからだ。

というか……

『そんなに他人ひとのに気付けるなら自分のにも気づいてくれたって…』

そこである。まあ、今思っても仕方のない事なのだが。

その後、ひとしきりの祝福の言葉をサチはアスナに送った。

アスナが少し涙目になりながらそれを受け取った後、今度は彼女の方から質問が投げかけられる。

「そう言えば、サチは？」

「え？何が？」

紅茶を飲み負けていた手を止め、サチはアスナの方を見る。

するとそこには、目に興味を爛々と輝かせる、一人の女子の姿があった。

サチは瞬間的に身の危険を感じ取ったが、遅かった。

「サチがりヨウを好きになつた理由！」

「う……」

しまった。と、サチは直ぐに自分の失敗を悟る。この話はアスナの話が終わった時点で切り上げるべきだったのだ。アスナに話させた以上すぐに自分の番が回って切る事は分かっていたのに……迂闊だ。

しかし聞かれてしまった以上、此処で離さないのはフェアでは無い。サチは若干……否、多大な小恥ずかしさを覚えながらも、ゆっくと口を開いた。

サチとリヨウが初対面をしたのは五歳時、リヨウがサチの家だったアパートの隣の部屋に引っ越して来た時だ。

サチの父親はサチが三歳の頃に家から出て行っていたので、女手一人で自分を育ててくれていた母親の帰りは仕事で殆ど毎日遅かった。アパートの住人には子供を預かるほど余裕のある人はいなかったため、サチはアパートの向かい、近所でも気の良いと評判の老人夫婦のもとで老人夫婦の孫と日中を過ごしていた。そんなある日、リヨウが引越してきた。

越して来た初日に挨拶に来たリヨウの母親と、境遇が近いせいか直ぐに意気投合したサチの母親はその事をリヨウの母親にも話し、リヨウの母親が駄目もとで老人夫婦に頼んでみると、夫婦は「子供が二人増える程度対して変わらない」と大胆にもこれを受諾。結局、老人夫婦の家には老人の孫＋サチ＋リヨウ＋リヨウの姉と言う、四人の子供が預けられる事になった。

正直な所、あの頃の事は「ごちゃごちゃ」としてよく覚えていない。皆がお婆ちゃん（とはいっても年の割にに若かったが）と呼んでいた育ての母のような人と子供四人の生活。子供四人にしては、案外と静かだった様に思う。しーちゃんと呼ばれていたお婆ちゃんの孫やリヨウの姉は殆ど悪さをしなかったし、サチも基本的小おとなしい子供だったため怒られることは少なかった。

その二人に無かったやんちゃさを吸収したように暴れまわっていたのは、リヨウだ。基本的にはゲーム等をしているくせに、時々思い出したように悪戯をしたり外に出て行ったりする。

お婆ちゃんには決して甘い人間では無かったため、悪さをすれば即座に叱られるのだが、サチのおぼろげな記憶にある限り、確かりヨウは懲りずに同じような事を繰り返していたように思う。

唯、周囲に近い歳の女子二人と言う環境で育ったからか、それと

もお婆ちゃんや母親の教育の成果か、そんなリヨウでも、基本的に自分より年下の人間や女子に手を出す事はしなかった。

と言うか、むしろ女子に対しては優しくかった事が多かったと思う。帰り道で野良犬が怖いと言えば追っ払ってくれたし。下級生をいじめるのが趣味だった性格の悪い五年生帰り道で絡まれた時は、三年生だったにもかかわらず体格差を砂やら石やら噛みつきまで使って覆して撃退し、自分はボロボロになりながらも怖くて泣いていたサチ怪我一つさせずに手を引いてお婆ちゃんの家まで連れて帰ったし。転んで泣いていた時におぶわれた記憶すらある。SAOに来てからも……………

いわばサチにとって、リヨウは困った時に駆けつけてくれるヒーローのような存在だった。

そう、結局は、そこである。

ずっと自分を守り、助けてくれた幼馴染にいつの間にか抱いていた思い。それが、サチの恋心の正体だ。

ありきたりではあり、自然発生とも言うべき、そんな普遍的な理由。まだ届いてはいない。しかし……………いつかは。

「……………そっか」

全て話し終わってから、アスナはため息を漏らすようにそう呟いた。サチはと言うと、改めて話して恥ずかしくなったらしい。頬を染めて紅茶をちびちびと飲んでいる。

それを見たアスナは、自分の中で、一つの決意をする事にした。

「サチ」

「ん……………うん……………？」

ゆっくりとサチが顔を上げる。まだ頬はうつすらと朱いが、だい

ぶ落ち着いたようだ。

その顔を見ながらSAOの家が防音の良い事に、本気の声量で宣言する。

「私、応援するから！頑張ってね！？」

「うえ！？え…………あの…………」

軽くパニックを起こしたようにサチはうるたえるが、構わずアスナは続ける。

「リヨウには色々手伝ってもらったんだもん！うん！私もリヨウとサチが幸せになれるように協力する！」

実を言うと、これはキリトと結婚する事が決まった時から決めていた事だ。

《リヨウが幸せになれるように全力で努力する》

恩返しと言う訳ではない。もしもリヨウにこんな事を言えば、「柄じゃない」「いらんいらん」と突っぱねられることは確実だ。どちらかと言えばおせっかいである。それでも、アスナはリヨウを幸せにしたい。恐らくキリトもそう思っている。

だから、勝手にやるのだ。そこにリヨウの意見など考慮しないし、仮に迷惑だと言われても勝手にやる。

で、立った今その標的に、サチも入れた。

自己満足など知った事ではない。《結城明日菜／アスナは、リヨウとサチに幸せになって欲しい》これは、絶対なのだ。

ようやくアスナの言う所を理解したらしいサチは……

「うん…………ありがとう」

小さく、しかしとても嬉しそうに、頷いた。

六十二話 語らう(彼女)(後書き)

はい、いかがでしたか？

まあ、こんなところです。

ありきたりですけど……だから良いかなー？なんて、僕の主観ですけどね。

最後のアスナの強引さは、まあリヨウは普通にやってもそつ言つのを受けない人間だと彼女は知っていますのでw

ご意見感想お待ちしております！
では！

六十二話 語りつ(彼)(前書き)

はい、どうもです。

今回は……長いです。

て言うか、今夜は多分二話連投します。

では、ごんごー！

六十三話 語らう(彼)

「んーと？ハツプナってこれか？」

「ああ、デザートの香り付けに使うんだとよ」「

キリトとリヨウは、買い物……否、お使用中だった。

すっかり料理の事で意気投合してしまったアスナとサチが料理を始めた結果、半分追い出される形で足りない材料の買い出しを申しつけられたからである。

「ソンテ、ラル・カウス、レルナ、ハツプナ……これで全部か？」

「えーっと……よし、確認取れた、全部だ。帰ろうぜ兄貴」

「ふう……やっとか」

買った物をリストと照らし合わせ、ついでにメッセージで確認。用事が済んだ二人はすぐに帰路に付く……と、

「おっ、そっぴや今日はアギ鳥の串焼き屋台が出てるんだよな……」

アギ鳥と言うのはまあ、小さな鶏肉つばいの事で、その串焼き屋台が今日を出ている。此処、コラルの村では、日によって出ている屋台と出ていない屋台があるのだが、アギ鳥はその中でも結構うまい方に入るのだ。

しかし、そんな事を言ったりリヨウにキリトは少々渋い顔を向けた。

「おいおい、今から夕飯なのに食うのか？」

「む、確かにそうか……」

「腹も減ってた方が美味しくいただけけるし、アスナ達にも悪いだろ。真っ直ぐ帰ろうっ？」

「ぬう……仕方ない……」

そして……

「まあ、楽しみを我慢すんのは悪い事だしな」

「そうだな……ング、上手い物は直ぐ食うのが一番だ」

結局二人は誘惑に負けて串焼き肉を食べながら歩いていた。

結局は食い意地の張った男二人、夕飯前は食べないなどと言う、作
る側の事を最大限に考えた配慮など無理だったのである。

二人は食べながらも足は止めない。

既に辺りは薄暗く、日は小さくオレンジ色の光を放つだけとなつて
おり、早く帰りつかなければ真つ暗な林の中を通らなければならな
いのは必至だ。この二十二層のフィールドにはモンスターは出現し
ないし、別に二人ともオカルト系の話が怖い訳ではないので本来な
らそこまで急ぐ必要は無いのだが、余り遅くなってしまうと幽霊の
類よりも怖い物に怒鳴られそうな予感が二人ともあったため、内心
ほんの少し焦っているのだ。

「そっぴやよお……」

「ん？」

串焼きを食べ終わったりリヨウが、歩きながらキリトに声をかける。
同じく食べ終わり、串をアイテム欄のゴミ箱へと移動させ終わった
キリトは、リヨウの方を向き首を傾げる。

「結婚まで行ったんだ、あの約束、守る気になつたって事で良いん
だな？」

「ああ………」

去年のクリスマス。リヨウ、キリト、サチのあの事件の、一つの
転機となつた日。

その日、キリトは絶望していた。

クリスマススイブの日にのみ出現すると言う、イベントボス《背教者ニコラス》。

それを倒した者に与えられる、死者蘇生と言う夢のような効果を持つアイテムの噂を耳にしたキリトは、己の出来るはずもない罪滅ぼしのため、サチの人生をほんの少しだけでも良い。もとに戻す。その為だけに、そのアイテムを求めた。

しかし、所詮はゲームに設定されたアイテムである。その効果は、茅場晶彦の想定内の物ではない。

確かに、蘇生アイテムは存在した。名称を《還魂の聖晶石》。

効果は、《対象プレイヤーのHPがゼロになってからアバターが消滅するまでの“約十秒”の間のみ蘇生が可能になる》即ち、過去に死亡したプレイヤーに対して、素晴らしき蘇生アイテムはその効果を持たなかった。

許されることの無い自身の罪が、どうあがいても償えない。自分の行動の何もかもが無意味だったと知った時、キリトは完全に絶望した。

償えない罪は、時として何者よりも冷酷に人の心を壊すのだ。

半ば自棄になり、自殺じみた所まで思考が墜ちていたキリトをギリギリで救ったのは、サチだった。

部屋を訪ねて来た彼女にキリトが「何も聞きたくない。もう消えるからほっといてほしい」と懇願している間、サチは黙ってキリトの話の聞いていた。しかしその言葉が、「意味なんて無かったんだ……全部……無意味だったんだ……」そう言った所で、キリトの頬

をサチは大きな音と共にひっぱいた。そうして、呆けているキリトに彼が知る限り初めて怒鳴った。

目に涙を浮かべながらも、本気で怒った顔で、大声でまくし立てるサチの迫力をキリトは今でも覚えている。

『そんなことない！私はキリトにいつぱい助けてもらった！キリトと出会えて……一緒に居られてよかったって思ってる！それを……それを全部、たった一回の失敗で全部何の意味も無かったみたいに言わないで！私とキリトが出会った事に、意味が無かったなんて言わないでよ！』

『でも……結局……』

『皆を死なせた！？そんなのキリト一人の責任じゃ無いよ！キリトに頼りすぎて注意が甘くなってるってケイタはあの頃言ってたのに、それに耳を貸さなかったのは皆だもの！』

『だけどそれでも！俺にはあの時皆を救う手段が合ったはずだ！俺が妙な自己保身にさえ走っていきなきゃ、あの時皆の命は助かったんだ！もう良いんだよ……何も無いんだ俺には……何も……』

『そんなの嘘！キリトは気づいてるよ、自分にもまだ残ってる物があるって事！それを全部意味無いなんて言っつて、価値も無いなんて言っつて、キリトは自分がしたことから逃げたいだけでしょ！？それで死んで終わった事にしようなんて、そんなの絶対間違ってる！』
『そこまで言われた所で、ついにキリトもキレた。感情のリミッターが外れ、声が怒鳴り声になる。』

『じゃあどうしろって言うんだよ！？俺にこのまま、意味も無く唯生きてるだけのバカみたいな役を続けろって言うのか！？』

が……

『そうだよー！』

この一言で、その勢いは殺された。

『……………！？』

『それで合ってる。だけど一つだけ間違ってる……………意味はあるの。唯生きてるだけでも。ほんとはね、私知ってたんだ、キリトがとっても強いって』

『っ！？』

そこからは、サチは急に静かになり、ゆっくりと言葉を紡ぎ始める。

『それを知った時、とっても嬉しかった。何でキリトが私達と一緒に居るのは分からなかったけど……………でも、そのおかげで眠る時もキリトの隣なら怖くなかった。もしかしたら私が居る事キリトにとって意味があるかもしれないって考えたら、もっと嬉しかった。ずっと上が上がって来た事に後悔しかして無かったのに、それにだっ
て意味が合ったか持って思えたんだよ？』

『だけど……………俺は君を……………』

そう言ったキリトの前で、サチは小さく首を横に振る。

『それもキリトのせいじゃないよ？……………私ね、ずっと前に沢山考えて、分かった事があるんだ』

『この世界ですっと生きて行くには、どんなに仲間が強くて、装備が強くて、本人の「絶対に生き延びよう」って意思がなきゃだめだって事』

『……………』

『あの時の事は、私が死にそうになっちゃった事は、キリトでも、黒猫団の皆のせいでも無い。私自身のせいなの。むしろ、助かったのはキリトのおかげだよ。キリトがリヨウと義兄弟だったから、私は今ここに居るんだもん』

『俺は……………』

『私には、キリトの気持ちが全部分かる訳じゃない。これがきつと私の勝手な言い分なんだってことも解ってる。だけど……………だけど、お願いキリト。全部意味が無かったなんて言わないで。死んだ方が良いなんて思わないで。私は……………君に生きていてほしい』

『っ……………！』

それからの事はキリトも良く覚えていない。

唯、気が付いたらいつの間にかベッドの上で寝ていて、ぼーっとしていた所にノックの音が響き、扉を引き開けると、目の前にリヨウが居た。

『よお、起きてたか』

リヨウの第一声は、ぶっきらぼうなそれだった。

実を言うと、あの日別れて以来、キリトは頑なにリヨウとサチの事を避けていたため、数カ月もの間一度も会っていなかったのだ。

理由は自身で自身を追い詰めてしまったせいで、二人と会うのが怖かったからなのだが……………しかしそれは、この世界唯一の肉親である

リヨウに多大な心配をかける事でもある事は、キリトにも解っていた。

『あ……リヨウ、兄さん……』

思わず反射的に「兄貴」と呼びそうになったのを済んでの所でこられる。自分は自ら彼をそう呼ぶ権利を放棄したのだと言う事を、ギリギリで思い出したからだ。

『取りあえず入れる』、と言われ、逆らう事のも出来ずにリヨウを部屋の中へと招き入れる。

アイテムストレージから取り出したポットで部屋のコップに水らしきものを入れつつ、リヨウは口を開く。

『気分どうだよ？半日以上寝てたんだが？』

『え……』

此処数週間ずっと寝ていなかったのが響いたのだろう。よく見ると、部屋の窓からは夕暮れ時の光が差し込んでいる。

『まあ……おおむね良好……かな？』

『そりゃ結構。ほれ。』

『あ、どうも……』

突き出された水を手に取り、一息に飲み干す。

長時間眠っていたせいも、システムが経過時間から喉の渴きをキリトのアバターに覚えさせていた。

SAOでも、大声で叫んだり、長時間何も飲まなければ、喉は乾く。水を渡したのを最後にリヨウは何も言わなくなり、ベットと、椅子の上にそれぞれ座る二人の間に、重たい沈黙が降りる。

『……………』

『あ、あの……ん』

やがて、空気の重みに耐えきれなくなったキリトは、数回口を意

味無く開閉させた後に声を発した。リヨウの方から、刺し抜くような視線が帰って来たのを見て若干後悔したが、すぐに振り払い、続ける。

『なんだ？』

『その……ごめん、何も連絡せずに……』

『ゴメン？』

『ごめんなさいでした間違えましたすみません』

ため口だった所を意地悪くつまんで来たリヨウに、普段なら文句の一つでも言いたくなるのがキリトと言う人間のはずなのだが、今回ばかりは立場上そんな気が起きるはずも無く、慌てて訂正する。その必死な顔を見たりヨウは……ニヤリと笑った。

『そうだな、それが正しいよな？キリトくん』

『う……』

しまった。とキリトは反射的に自分が無理矢理リヨウのペースに引きずり込まれた事を悟った。こうなっては逃げられるはずもない。

『それが分かっているならば、だ。これから君がすべき事も分かるはずだよなあ？』

『な……何でしょうリヨウ殿？』

『おやおや、キリトくんは分からないとおっしゃる？それでは仕方が無い。説明しましょう。ズバリ、罰を受けてもらいまーす』

今キリトの中では、「駄目だ。止まらない」とか「コノヤロウ」とか「今朝までの雰囲気はどこに？」とか色々な考えが渦巻いていたが、そのどれもが目の前の青年に対して何の意味も持たない事もまた熟知していた。

『ば、罰とは何でしょう？』

『ほほう？知りたいかね？』

『（良いから早く言えっつーの！）』

完全に悪乗り状態である。リヨウはニヤリとした笑いを増大しつつ、キリトより高い身長により見下ろすような目線を向けてくる。段々とキリトも怖いやらムカつくやらでテンションが上がって来た。

『では……幾つか俺の言う事を聞いてもらおう』

『（よりによつてそれですか）』

と、キリトは一周して静かになった心で悟った。

実を言うと、同じような要求をキリトが受けた事がある。

まだリヨウが桐ヶ谷家に来て一年立っていなかったその冬。

その時はリヨウが大切にしていた携帯音楽プレイヤーをキリトが机から落として更に踏んで壊し、やむを得ず従う羽目になったのだ。

その時の要求は、キリトが大得意ゲームでの練習の相手。

結果から言うと、キリトは50連敗した。

生憎とその頃のキリトはまだ小学生で有り、しかも自分の得意なゲームだったこと+天性のゲーマー魂も手伝って、一度も勝てないその状況に素直に自分の力不足を認められるほど大人では無かった。負けては悔しがり、本気になっても勝てず、ムキになって挑むものの半ハメ技を使われ、勝ったと思ったら実は誘い込まれていて逆転され、やめたいと言ってもやめさせてもらえず……
終わってからその後三日間、キリトは精神的に死んでいた。

リヨウの言う事を聞くと言うのはそう言う事である。

しかも今回は複数だと言う。本当はその要求を絶対にのみたくないキリトだったが、今、主導権は完全にリヨウの物だ。多分、キリトが（精神的に）生きるか死ぬかの運命のスイッチも。

『（多分また（精神的に）死ぬなあ……俺）』

そんな事を思っている間に、リヨウは内容を告げる気になったよ
うだ。

一層皮肉気な笑みを浮かべて、口を開く……

『ひとーっ』

『（か、神よ！）』

『取りあえず、俺との義兄弟設定元に戻せや愚弟』

『……………え？』

『ほれ、早くしろ』

言っが早いが、キリトの前にリヨウとの義兄弟設定を受け入れる
かどうかの確認メッセージが表れる。

いきなりの事である上に『ほれ、はやくせい』と急かされ、迷う間
もなく手拍子で受諾。めでたくキリトとリヨウは再び義兄弟に戻っ
た。

『え、えつと、リヨウ兄？』

『おいおい、呼び方も戻すにきまってんだろっが』

『あ、うん、兄貴』

言われてから気付いたキリトは慌てて呼び方を戻すが、すぐ乗せ
られた事を悟り話題を戻そうとする。

『いや、そうじゃなくて』

『よし、ふたーっ』

『え、ちょ』

その後もキリトにしゃべる隙を与えないままリヨウの要求は続く。

『お前この先、あんまり自暴自棄になるの禁止な』

『……はいい？』

またしても意味不明。様は、自分を極端に責めるのはよせ、と言う事だろうか？

しかし……

『なあ兄貴、それ罰になつて無』

『みーっつ』

『聞く気は無いんですかそうですか』

最早諦める。リヨウがこういつた強硬な言いつけに出た時は、何を言つても無駄だ。

だてに二年以上共に月日を過ごしてはいない。仕方が無いので黙つて聞く事に……

『キリト、お前、取りあえず彼女作れ』

『ああ……つてちよつと待ったあ！！』

するわけにはいかなかった。

流石に今度は黙つて押し通されるわけにはいかない。それくらい重大問題だ。

『ああ、いや、彼女つてのは言い過ぎか……？別に男でも良いんだが』

『もつと嫌だから！そんな趣味無いから！』

『そう言う事じゃねえよ阿呆』

必死になつてリヨウの暴走発言を食い止めようとするキリトにリヨウは「何を言つてんだ……」と呆れ顔になり、直後、それまでの企むような笑い顔が嘘であつたかのように顔を引き締めた。

キリトはさらに突つ込もうとしたが、リヨウの顔が真剣そのものであつたため、諦める。

『要は、もう一回サチみたいな奴を作れつてこつた。お前にとつて

必要で、相手にとってもお前が必要。そう言う奴な』

『え……でも……』

その言葉を聞いた途端、キリトの顔が一瞬呆け、次いで沈痛な物へと変わり、俯く。

深く刻まれたあの時の記憶を、リヨウの言葉は思い出させていた。

『けど、俺は……もう……』

『だからこそだ』

下を向いていたキリトの視界に入るようにリヨウは中腰の姿勢になつてキリトに語りかける。

少だけキリトは顔を上げ、目の前にある義兄の顔と極近くで向き合う。

『……どういふ事さ？』

『あのさ、キリト。一個聞きたいんだけど……人間、生まれて来たからには良い人生送りたいと思わねえ？』

いきなりの問いに、キリトは一瞬迷う。

反射的に、自分に良い人生等歩む権利があるのか、と言う自問が生まれたが、今リヨウが聞いているのはそうではなく、どう思つか？と言う事だ。

答えとして出すには的確では無いと考え、自分の考えを答える。

『それは……そうだと思う』

『だよな？でさ、これは俺の持論なんだけど、そう言う人生を送るために必要な物の一つって、さっき言った様な奴じゃないかって思うんだよな』

『え……？』

言われた事の意味が直ぐに理解できず、呆けるキリトに、リヨウは続ける。

『自分にとってマジで必要で、相手にとっても自分が同じくらい必要な奴。互いに必要としているから、きっとそう言う奴だと、支え合いつてのが出来ると思う』

『ああ……』

その理屈は理解できなくはない。

互いに必要だから、互いを求めるから、互いが互いの支えとなる。そう言う物を文字通り、「支え合い」と言うのだろう。

『支え合いつて奴が出来りゃ、まあ、数が多いから大概の問題は乗り切れるようになる。乗り越えられる問題が多けりゃ、その分良い人生つてのは近付いて来るもんだつて、俺はそう思うんだが……どうだ？』

『多分……間違つてはいない……と思う』

段々と顔を上げたキリトの答えにリヨウは満足気に頷き、自身も腰の位置を上げながら更に言葉をつなく。

『俺はさ、お前に良い人生を歩んでほしいって思ってる。出来るだけ、楽しく自分の道を歩んでほしいんだよな』

『な、なんで……』

『何でつて事無いだろ？大事な義弟だぜ？お前は』

『……はは、なんだよ、それ……』

キリトの顔がくしゃっと歪みそうになる。ただしそれは哀しみでは無く、尊ばれ、自分を思ってくれる義兄への感謝と、単純な歓喜によつてだ。

『そう言うの、ブラコンつて言うんじゃねえの？』

『この世界唯一の肉親の心配して何がブラコンなもんかよ』

見事に返され、キリトは苦笑する事しか出来ない。

暖かく、優しいその雰囲気の中、キリトは了承しようかと一瞬考えるが、胸の中にまだ一片だけ残った迷いは、もう一つだけ、キリト

の口に問いを発させた。

『……俺に、出来るかな?』

『……出来るかどうかはお前次第だな。まあ何もすぐには言わねえよ。人生レベルでゆっくり探してればいい。それに、もし探さなくても見つかる時は自然と見付かるもんだ。別段何かを変えなくてもな』

『気の長い話だな……』

『そんなもんさ。どうする?』

強制であるはずの罰から、確認の問いが跳んでくる奇妙な状況にキリトはまたしても苦笑したが、此処まで来ると答えはおのずと決まっていた。

『……やってみるよ』

「見つかったんだろ?お前にとって必要で、相手にとってお前が必要な人はよ?」

「多分……な」

徐々に近づいてきた外周と、林の隙間からのぞく星を眺めながら、キリトはゆっくりと頷く。

「俺にとって、アスナはもうどうしたって必要な人だってことは自分でも分かっているし……アスナにとっての俺も、そうでありたいっていつも思ってる」

「ま、そこは心配する必要無いと思うがな?」

再びニヤリ、と笑ったりヨウに、キリトは訝しげな視線を向ける。

「何で兄貴に分かるんだよ?」

「あー？勘だよ勘」

「嘘つけ！」

明らかに確信してたる！とキリトは続けたが、結局、リヨウの笑みの根拠を聞きだす音は叶わなかった。

「んじゃまあ、これはお節介になるかもだが……俺も一個、結婚祝いとしてお前に権利をやるっ」

「ええ！？」

「何だその声は」

自分でも分かるほど明らかに不安げと言っか、心配そうな声を上げたキリトにリヨウは拗ねた様な声を上げたが、それも一瞬。直ぐに何時ものニヤリと企むような笑顔を浮かべ、続ける。

「そつだな……んじゃこつすつか。お前、一回だけ俺の事全力で頼っていいぞ」

「なんだそれ？」

「文字通りだ。一回だけ、お前のために出来る限りなら何でもしてやる」

自身満々そつ言っリヨウに向かって、キリトは呆れたように笑いながら返す。

「それ、兄貴らしいって言うかなんていうか……無茶苦茶言われるとか予想しないのかよ？」

「出来る限りって言ったる。ちゃんと聞いてる阿呆」

「っ……」

どうやらそつそう上手く揚げ足は取らせてくれないようだ。

仕方なく、キリトは今度はリヨウの方へと話題を振る事にした。

「そついや、兄貴はどうなんだよ？」

「ああ？」

「だから、サチとの事」

「はあ？何が？」

「……………もう良い」

「あんな近くに居るんだから気付けよな……………」と小さくぼやいたキリトは、いつその事この場で糾弾するかどうかまで思考会議を進めたが…………

「ほれっ、付いたぞ？お嬢様方がお待ちかねだ」

それを口に出すより前に、二人は家へとたどり着いてしまったのだった。

六十三話 語らう(彼)(後書き)

はい！いかがでしたか？

まあそんなわけで、赤鼻のトナカイ解決編でした。
え？強引すぎる？

すみません……許して下さい。これ以上の説得の言葉が僕のボキヤ
ブラリじゃ考えつかなかったんです。

では！

六十四話 一人(前書き)

はいーどうもです！

というわけで驚異の二話連続！

では、どうぞー！

六十四話 一人

「ん……………」

ゆっくりと、リヨウは瞼を開ける。時刻は既に深夜であり、リヨウとサチが眠る寝室にも、明かりは付いていない。

あの後、キリト、アスナの結婚祝いパーティーと称して、四人で出てきた大量の料理を飲み食いした後、キリトとアスナを返し、片付けを終え、サチは久しぶりに長話や大規模な料理を作ったせいか倒れるように眠り、リヨウもそれに続いた。

「まったく、気持ちよさそうに眠りやがって……………」

リヨウは隣に眠るサチの顔を見て、微笑みながら呟く。

黒猫団の事件後数週間、リヨウは、常にサチの隣で寝ていた。

仲間を失った哀しみもそうだが、何よりも一度死にかけると言う経験をした恐怖は、サチの心に大きな傷を負わせ、睡眠をまたしても困難にしてしまっていたのだ。

そのため、その数週間の間、リヨウはサチの隣で横になり、胸に抱き付いたまま泣きじやくるサチが泣き疲れて眠るまで、ずっとそばに居続けたのである。

「(すう…………すう…………)」

それがどうだろう？今、静かな寝息を立てるのサチには、そんな過去があったとは到底思えないほどの安らかな寝顔が浮かんでいた。その無防備な顔を見ているうち、リヨウの中に、先程の買い出しの帰りにキリトが言った一言が思い出される。

『あんな近くに居るんだから気付けよな……………』

.....

「気付いてねえ訳あるかよ……………馬鹿野郎」

はぁ。と息を吐いて、そう一言だけ呟いた。

元々は読めなかったサチの眼だが、半年以上も同居している内、自然と読めるようになっていた。

『まあ、どつちにしたってずっと……………』

その先を思い浮かべることはず、リヨウは立ち上がり、リビングへと向かう。

音を立てないように（そもそもドアの向こうにはシステムの音は届かないのだが）無縁ポットからホットティーを入れ、口に含みながら、窓から見える外周の星明かりを眺める。

夢を、見ていた。

先程までの眠りで、短くもはつきりと思いだせる夢を見ていた。

余りしょっちゅう見る夢ではないのだが、昔話をしたせいだろうか？ 久しぶりに、脳が記憶を呼び起こしたらしい。

「ふう……………」

悪夢か、良夢かと聞かれれば、一般的には悪夢に入るのだろうか？。

そんなどうでもいい事に思いを馳せつつ、リヨウはおもむろに、自身の手元に、あるアイテムを出現させる。

名称《戒めの腕輪》

名前に反して、雪のように真っ白な光沢を放つ腕輪で、普段リヨウはこの腕輪を、浴衣のおかげで誰の眼にも付かない、右腕に装着している。

それは、このアイテムがある意味でゲームバランスを壊しかねない効果を秘めているからだ。

この腕輪は装着者の経験値を、《自身がキルしたプレイヤー数×0.1%》プラスすると言うこの世界では最高峰にレアな「獲得経験値増加」の効果を持っている。

勿論、善良なプレイヤーならば何の意味も持たないだろうが、リヨウのようなプレイヤーならば話は別だ。

現時点でリヨウの経験値上昇値は5%を超えていた。それは即ち

……

「……………」

リヨウは窓の外に美しく輝き続ける星空を眺める。

『 そう？私は、こういう星空も好きだけど？ 』

「……シュテル……」

小さな咳きは、冷たい空気を切り裂く事も無く、消えて行った。

Seventh story 《二人二組》 完

六十四話 一人（後書き）

はい！いかがでしたか？

えー、初めに、嘘はついてませんよ！？

だって、一度も「リヨウは鈍感です」って明言はしてませんから！

.....

痛いーちょ、待っ！やめて！石ぶつけないで！

いや、感想欄での「鈍感具合」というのは鈍感ではないことから軽く鈍感なことまで幅広く意味がありますし、「気付けよ」と思ったのは事実ですよ。気付いてるの知りつつですけど.....

うわー！やめて！岩はやめて！

ご、ご意見ご感想心よりお待ちしております.....
ではー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5593t/>

SAO 戦士達の物語

2011年12月23日01時49分発行